Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-03

ラスキン・カレッジの1970年代における労働者の学習ー労働と生活の統合を通した尊厳の獲得ー

冨永，貴公

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2008-03-25
(Date of Publication)
2017-04-12
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4283
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004283

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

ラスキン・カレッジの1970年代における労働者の学習
—労働と生活の統合を通した尊厳の獲得—

平成19年12月

神戸大学大学院総合人間科学研究科
冨永貴公

博士論文

ラスキン・カレッジの1970年代における労働者の学習
—労働と生活の統合を通した尊厳の獲得—

平成19年12月

神戸大学大学院総合人間科学研究科
冨永貴公

目次

序章 本論の課題と方法 1
第１節 本論の目的と意義 1
第２節 先行研究の整理 4
１．英国成人教育に関わる歴史研究とラスキン・カレッジの位置 5
２．歴史記述の方法としてのオーラル・メソッドとその教育への応用 9
３．学習者の生活をめぐる社会教育研究とそこでの生活の意味 11
第３節 研究の方法と論文構成 13
１．研究方法と資料の検証 13
２．論文の構成 14

第１章 ラスキン・カレッジにおける教育と学習の乖離 16
第１節 「豊かな労働者」論における労働者階級の変化 17
１．「豊かな社会」における労働者の「ブルジョワ化」 17
２．労働の手段化におけるシニシズム 19
第２節 ラスキン・カレッジにおける教育の再編 21
１．カリキュラムの再編による教育と労働の結合 21
２．試験制度の改正による教育と生活の結合 24
第３節 豊かな労働者の学習における労働と生活の分割不可能性 26
１．労働者教育の手段化における労働と生活の統合的把握 26
２．労働と生活の分割不可能性にもとづく学習 30
３．生政治の場としてのラスキン・カレッジ 33

第２章 ヒストリー・ワークショップの発足 37
第１節 「はざま」を捉える思想としての社会史 38
１．労働運動史から労働史へ 38
２．労働史から「はざま」を捉える思想としての社会史へ 39
第２節 学習活動としてのヒストリー・ワークショップ 42
１．教育のオルタナティブとしての歴史研究 42
２．教育と研究の学習による統合 45

第３節 教育の生活化実践としてのヒストリー・ワークショップ ____ 48
１．学習者の生活にもとづく教育内容 ____ 48
２．教育方法の生活化としてのオーラル・メソッド ____ 51
３．知の再構成としての教育の生活化 ____ 53

第３章 フェミニズムとヒストリー・ワークショップの対話 ____ 55
第１節 「下からの歴史」における女性の周辺化 ____ 57
第２節 ラスキン会議における平等賃金要求 ____ 59
１．平等賃金に対する見解の対立 ____ 59
２．社会主義フェミニズムによる平等賃金要求 ____ 62
第３節 平等賃金を求める議論の特徴 ____ 67
１．階級横断的要求 ____ 67
２．「尊厳」を中心においた要求 ____ 69
第４節 ヒストリー・ワークショップに対するラスキン会議の影響 ____ 73

第４章 ラファエル・サミュエルのヒストリー・ワークショップ ____ 76
第１節 生きられた経験としての歴史と学習 ____ 77
１．労働者教育における労働者の生きられた経験 ____ 77
２．歴史を記述することの意味 ____ 80
第２節 ラファエル・サミュエルによる労働および労働者の理解 ____ 83
１．組織化以前の労働者の生活世界 ____ 83
２．労働と生活のアンサンブルの自律的創造 ____ 85
３．女性労働者の労働と生活に対する視点 ____ 88
第３節 労働者教育による労働者の解放 ____ 90
１．男女間の差異を捉える視点としてのフェミニズム ____ 90
２．学習者に対する受動性という教育者の物語り ____ 92
３．労働者の解放から開放への転換 ____ 95

第５章 労働者による労働経験の記述 ____ 98
第１節 労働者階級に関する記述 ____ 99
１．バーナード・レアニー『19 世紀のオックスフォードシャアにおける階級闘争』(1970) ____ 99

2．スタン・シップリー『ヴィクトリア中期のロンドンにおけるクラブ・ライフと社会主義』(1971) 102
3．デイビッド・ダグラス『ダラム地方における炭鉱生活』(1972) ／『ダラム地方の炭坑における会話』(1973) 105
第2節 労働過程に関する記述 110
1．フランク・マッケンナ『鉄道夫の会話事典』(1970) 110
2．ボブ・ギルディング『イースト・ロンドンにおける日雇い樽職人』(1971) 116
3．ジェニー・キッターリンガム『19 世紀イギリスの農村における少女たち』(1973) 120
第3節 労働経験の記述における生活の意義 126

第6章 労働者による生活経験の記述 127
第1節 文化に関わる記述 127
1．サリー・アレクサンダー『セント・ジャイルズ・フェア』(1970) 127
2．アラン・ホーキンス『19 世紀のオックスフォードシャアにおけるウィットサン』(1972) 131
3．ジョン・テイラー『自助から魅力的なものへ』(1972) 135
第2節 家族に関わる記述 139
1．エドガー・モヨ『マタベルランドにおけるビッグ・マザーとリトル・マザー』(1973) 139
2．デイブ・マーソン『1911 年における子どもたちのストライキ』(1973) ／ビリー・コルヴィルとデイブ・マーソン『集まれ，そしてついて来い』(1974) 142
第3節 労働者による経験の記述における生活の広がり 146

第7章 労働者の生活の記述による尊厳の獲得 148
第1節 労働者の自己に関わる歴史記述 150
1．労働と生活における自己の言説化 150
2．自己の別名としての生活 153
第2節．関係のなかにある生活 155
1．労働者をめぐる社会的諸関係 155

2．生活における他者としての女性 158
第3節　生活の記述による尊厳の獲得 160
1．ありのままの自己に関する記述 160
2．歴史記述における自己の価値 161
3．非匿名性の追及と匿名性の保持 163
第4節 尊厳の獲得を保障する無限の労働者教育 165

終章 他者に開かれた労働者教育論の展開に向けて 169
第1節 本研究課題についての考察 169
第2節 学習者の経験としての労働と生活の分割不可能性 171
第3節 教育のアポリアに対する受動性という物語り 173
第4節 尊厳の獲得のための他者への開放 177

謝辞 180

巻末資料 182

引用および参照文献・資料 206

序章　本論の課題と方法

第１節　本論の目的と意義

これまでの労働者教育論は，労働をめぐる諸問題に焦点を当ててきた．後に述べるように，そこでは生活の場についての言及は少ないか，ほとんどない．他方，女性問題，およびジェンダー問題の学習領域では，女性労働と家族を中心とする生活問題の双方が論じられてきた．

昨今，欧米でのフェミニスト教育学が紹介されているものの，学校教育，成人教育を含めた教育をめぐる議論において、労働問題についての論考は低調と言える．性別役割分業が今日的な課題に適合的でないことは明らかであり，今日求められているのは男女とも，性に縛られない生を創造するための労働と生活の双方を視点とした教育論と実践である．

ところで，労働と生活を教育の視点として導入するとは第一に，学習者の労働と生活を単に取り入れることではなく，第二に，ジェンダー視点として女性の問題を単に取り入れることでもないはずである．これら二つの「単に取り入れることではない」を踏まえた論理の展開が求められているのである．

歴史を振り返れば，1970 年代の英国においては，労働と生活の全体に関わって性別役割分業を乗り越える教育の萌芽があったと思われる．本論文は，1970 年代の英国の労働者教育に着目して，時代や社会背景に限定されながらも，未発の可能性としてのジェンダー視点を含む労働者教育論について考察することを目指す．

具体的には，本論文はラスキン・カレッジとヒストリー・ワークショップ，およびラスキン会議の関連を明らかにし，1970 年代のラスキン・カレッジにおける労働者の学習にとってのジェンダー視点の意義を検討することを目的とする．

ラスキン・カレッジ，およびヒストリー・ワークショップに関する先行研究については後述するが，それらのいずれにおいてもジェンダー視点からの検討は行われていない．そこで，本論文では上記の目的のために以下三つの課題を設定する．

1899 年に設立されたラスキン・カレッジ（Ruskin College,在オックスフォード）は，英国[1]最古の労働者のためのレジデンシャル（寄宿制）カレッジ[2]であり，英国における学

---

[1]本論文では，イングランド，ウェールズ，スコットランド，北アイルランドからなる連合王国（The United Kingdom）を指して「英国」を用い，「イギリス」はイングランドに限定

術研究の中心としてあるオックスフォード大学との連携のもとで高等教育が労働者に提供されてきたためか，リベラルな労働者教育の象徴的存在のひとつとして位置づけられている．そのラスキン・カレッジにおいて，1970年，英国初の全国女性解放会議（ラスキン会議，The Ruskin Conference）が開催され，第二波フェミニズムの起点となったことは，英国のみならず，本邦でも広く知られている．しかしながら，同会議でどのような議論が行われ，どのような論議を経てフェミニズムと結びついたのかについては明らかにされていない．そのため，本論文ではラスキン会議の内実について明らかにすることを第一の課題とする．

さらに，開催地の名をとってラスキン会議と呼ばれる同会議が，なぜラスキン・カレッジで開催されたのかも疑問である．ヒルダ・キーン(Hilda Kean) はジェンダー視点から同カレッジの男性性をめぐる伝統を解体しようと試み，ラスキン・カレッジと女性労働者の歴史的関係について整理している．とりわけ，キーンは英国における初の全国女性解放会議がまさに1970年のラスキン・カレッジで開催されたこと，そしてその起点が，1966年，当時の歴史学ディプロマのテュータであったラファエル・サミュエル(Raphael Samuel)を理論的支柱として発足したヒストリー・ワークショップ（History Workshop）にあることを指摘している[3]．ところが，この初の全国女性解放会議とヒストリー・ワークショップの関連については明らかにしていない．したがって，ラスキン・カレッジにおいて発足したヒストリー・ワークショップがどのようにラスキン会議の開催に結びついたのか，この問いに答えることが第二の課題である．

して用いるものとする．なお，引用・参照文献に関してはその限りでない．

[2]英国におけるレジデンシャル・カレッジをめぐる成人教育研究としては，ラスキン・カレッジの他に，北アイルランドのアルスターズ・ピープルズ・カレッジに関する鈴木敏正の研究がある．鈴木は，同カレッジの設立者であるトム・ラベットの経歴に着目し，それにもとづく歴史的な展開を明らかにし，とりわけ，アルスターズ・ピープルズ・カレッジによる地域づくりのための教育を地域の発展に資するものとして評価している(鈴木敏正『平和への地域づくり教育—アルスター・ピープルズ・カレッジの挑戦-』筑波書房，1995，218-46)．

また，「北のラスキン」と呼ばれるノーザン・カレッジを対象とする姉崎洋一の研究は，レジデンシャル・カレッジの存在意義をめぐる同カレッジの学長の応答を取り上げ，同カレッジが行う教育の意義について検討している（姉崎洋一「イギリス成人教育の新しい可能性（3）—ノーザンカレッジの場合—」『児童教育学科論集（愛知県立大学文学部児童教育学科)』No.26，1993.3．あるいは，同「社会的排除と高等教育継続教育の再編構造—英国ノーザン・カレッジの地域再生実践を軸に-」日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育　日本の社会教育第50集』東洋館出版，2006.）．

[3]Kean, Hilda, ‘Myths of Ruskin College’, *Studies in the Education of Adults*, Vol.28, No.2, 1996, 215-7.

そして，この課題に関わって，なぜヒストリー・ワークショップがラスキン・カレッジで発足したのか，どのような活動を展開したのかを明らかにすることが第三の課題である．1966年に発足したヒストリー・ワークショップは，1979年の全国大会を最後にラスキン・カレッジを離れ，その後は英国各地に開催場所を移した．そもそも，ラスキン・カレッジの正規のカリキュラムではないヒストリー・ワークショップにとって，13年を待たずとも全国に活動の場所を移すことは可能であったはずである．それにも関わらず，ヒストリー・ワークショップはその草創期において，なぜ同カレッジで開催されたのか，ラファエル・サミュエルが同ワークショップをラスキン・カレッジ内で発足させた背景には何があったのかについては，必ずしも明らかにされていない．

以上の課題に応えることを通じて，ジェンダー視点を労働者教育論に導入するうえでの理論的、実践的な示唆が得られると考える．広義の労働者教育は賃金労働者を対象として行われる教育活動の全てを指して用いられる．しかし，社会教育研究における労働者教育論では，特に労働者組織が行う教育活動を対象とした研究が蓄積されてきた．戦後の民主化を背景として，1950年代には企業に対峙する自主的な労働者サークルが論じられた．さらに，1960年代においては労働組合の教育活動を対象とし，社会主義理論にもとづく社会科学の学習が大衆的な広がりをもって展開され，人々の意識が階級的なそれへと高められることが期待された[4]．その後，生涯教育論の高揚のなかで注目された企業内教育[5]に対峙する方向で労働者教育の階級的性格が主張されたが[6]，やがては労働組合運動の低迷とともに研究自体が停滞した経緯がある．

---

[4]藤岡貞彦「『合理化』進行下の労働組合教育活動の分析の視角」『東京大学教育学部紀要』第11巻，1970.

[5]倉内史郎「労働（職業）と社会教育」碓井雅久編『教育学叢書第１６巻　社会教育』第一法規，1970．または，同「企業内教育」宮地誠哉・倉内史郎編『講座　現代技術と教育４職業教育』開隆堂，1975.

[6]藤岡貞彦「自己啓発と自己教育—生涯教育の方法的基礎をめぐって-」（『月刊社会教育』1972年２月号），同「自己啓発論批判覚書」（室俊司編『生涯教育の研究—成人の学習を中心に—』（日本の社会教育第１６集）東洋館出版社，1972），同「自己啓発と生涯学習」（宮原誠一編『生涯学習』東洋経済新報社，1974）.

また，山田正行も，職業能力開発に一元化した生涯学習支援システムを形成するだけでは，単に「労働者のアイデンティティを職業能力の方向に一元的に形成させることを意味し」，労働に資する自己啓発だけでなく「生活世界全体を視野におさめ，そこに根ざした自己教育の実践が求められる」としている（山田正行「自己啓発と自己教育，再論—企業内教育の現在-」『月刊社会教育』No.416，1991年12月，12）.

一方，末本誠は，ジェルピを援用して，職業訓練を労働組合組織の闘争と交渉の対象，それを組合活動の諸目的に結合させることをオルタナティブとして提起している（末本誠『生涯学習論-日本の「学習社会」—』エイデル研究所，1996，122-8）.

これらの研究の目的が階級意識の涵養であっても，職業能力の向上であっても，女性労働者を研究対象として特記しない限り，「労働者」として表された者は実は男性労働者を指していた[7]．労働者教育とは実際には，男性労働者教育として議論が展開されてきたのである．社会科学学習としての労働者教育論の展開，および階級意識の涵養にもとづく人間の解放という志向はその実，性に関わる問題を排除する傾向があった．例えば，1970 年代を中心に展開された労働組合教育活動に着目する労働者教育論において，その典型としてしばしば言及される三池炭鉱労働組合による教育活動に関する研究では，実際には多くの既婚女性，集団としての三池主婦会を学習主体としていたにも関わらず，生産点における労使の攻防とそれをめぐる学習課題のみが焦点化して取り上げられてきた[8]．このような男性労働者教育を超える価値を，ラスキン会議の起点となった労働者の学習としてのヒストリー・ワークショップの活動のなかに見出せるように思われる．

なお，英国における成人女性の学習については，19 世紀における女性の高等教育開放運動[9]，20 世紀初頭から今日に至る労働者教育協会（WEA）における女性の学習[10]が明らかにされているものの，労働者教育論におけるジェンダー視点の導入を主眼とする研究，およびラスキン・カレッジにおける女性労働者の学習についての分析は行われていない．

第２節 先行研究の整理

ヒストリー・ワークショップにおける労働者の学習におけるラスキン会議の意義を明ら

---

[7]浅倉むつ子は労働法における公私二分論について，第一に労働法が想定する「人間像」は公共圏において権利を剥奪されているがゆえに資本に従属している「男性」労働者であり，もっぱら女性が家族圏で従事し，男性が利益を得る「家事労働」は同じ労働でありながら関心を払われてこなかったこと，第二にそうした家族圏における労働は公共圏における労働に比べて価値が劣るとされ，育児，家事，介護が市場における労働パターンに規定されてきたこと，第三には女性労働を保護対象としてきたにもかかわらず，労働法は女性労働問題を周辺的，補助的なものとして扱ってきたことを指摘している（浅倉むつ子『労働法とジェンダー』勁草書房，2004，25-6）．

[8]冨永貴公「三池主婦会による家庭民主化の展開 生活の多元性に基づく労働の問い直し-」（『神戸大学発達科学部研究紀要』第 13 巻第 1 号，2005）では，具体的に三池主婦会の諸活動とそれらを通じた主婦たち独自の価値選択について，聞き取り調査によって明らかにするとともに，その独自の価値としてあった「家庭民主化」の希求が労働を単に経済的営為とするものではなく，生活の文脈に置換することによって「労働の生活化」をなすものであったことを明らかにした．

[9]香川正弘「イギリスにおける女性高等教育運動の先駆的動向」『佐賀大学教育学部　研究論文集』第 31 集，第 1 号(1)，1983.

[10]矢口悦子「イギリス労働者教育協会（WEA）における女性の学習」『東洋大学文学部紀要教育学科編』29 巻，2003.

かにするうえで手がかりとなる先行研究について，英国成人教育史研究，オーラル・メソッドにもとづく歴史学研究，学習者の生活を焦点に据える社会教育研究の三点から整理を行う．

1．英国成人教育に関わる歴史研究とラスキン・カレッジの位置

社会教育研究における英国の労働者教育への着目は歴史が古い[11]．その蓄積は制度，および施設に着目した研究と，それらが整備されるに至る歴史研究の二つに大分することができる．

後者の歴史研究は労働者教育運動に着目するものが多く，代表的なものとしては，労働者教育運動の展開を「市民性」と「階級性」の二つの流れに整理する加藤克子の研究[12]と宮坂広作の研究[13]がある．これらはいずれも英国の労働者教育運動について，大学との提携によって労働者に社会科学学習の機会を提供する労働者教育協会（WEA, Workers' Educational Association）を中心とした「市民性」の形成を目指す方向と，その方向における大学との提携を良しとせず，労働者階級の独立を旨とした中央労働者カレッジ（Central Labour College），および全国組織である NCLC（National Council of Labour Colleges）による「階級性」形成を目指す方向の二つに整理し，両者の関連と分離を歴史的に明らかにしている[14]．

---

[11]宮原誠一は，1909 年に設立された中央労働者カレッジ（Central Labour College，後の London Labour College）と比較して，本邦における労働学校の階級性の不十分さについて述べ，さらにはノッティンガム大学の成人教育センターを事例にして，英国の大学開放，高等教育機関の整備に先進例を求めた（宮原誠一『社会教育論』国土社，1990，397-420）．

[12]加藤克子「イギリス労働者教育運動史論」『エコノミア』第 42・43 号，1971．

[13]宮坂広作「イギリスにおける労働者教育運動の二つの潮流-W.E.A と独立労働者階級教育運動　」『英国成人教育史の研究Ⅱ』（宮坂広作著作集 6），明石書店，1996．

[14]WEA に関する真野典雄の研究は，1919 年における WETUG（労働組合教育委員会）の設立に伴って労働者階級，とくに労働組合員を対象とする教育活動を提供するようになったが，一方の「階級性」を求める独立労働者教育運動側に受け入れられることはなく，英国の労働者教育が階級的性格を失っていく「危機の最初のあらわれ」であったとしている（真野典雄「イギリス成人教育と W・E・A（労働者教育協会）の変容-W・E・T・U・C（労働組合教育委員会）成立への展望　」日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習』日本の社会教育第 6 集，国土社，1961）．

これに対し，宮坂広作は一連の研究を通じて，英国の労働者教育研究は，「イデオロギー分析の次元に終始すべきでない」と述べている（宮坂広作「Albert Mansbridge と初期 W.E.A」『社会教育学・図書館学研究』No.7，1983．あるいは同「ラスキン・カレッジにおける『学生反乱』の教育的意義　成人教育における「学習の自由」の問題　」『東京大学教育学部紀要』第 37 巻，1992）．

この両者の分離の発端となった学生たちのストライキが行われたのがラスキン・カレッジである．1909年，同カレッジの提供する教育がミドル・クラスの価値にもとづいたものであることを問題として，学生たちがストライキを行い，最終的にはカレッジを離れ，「階級性」にもとづく労働者教育運動を展開した．そのため，ラスキン・カレッジに関する研究は学生たちのストライキを取りあげるものが多い[15]．英国本国におけるラスキン・カレッジに関する研究もまた，同様に1909年の学生たちのストライキを取り上げるものが中心であり，「階級性」を失った「市民性」育成のための教育機関として特徴づけを行うものが多い．ブライアン・シモン（Brian Simon）はラスキン・カレッジについて，オックスフォード大学との関係，とりわけ，経済に関わる教育内容が資本主義の言い訳に過ぎず，既存の社会的な秩序に挑戦するよりもむしろ，そのなかで役割を遂行するように促すことが同カレッジの方向性であったことを問題とし，「階級性」を求める労働者教育運動が展開されたと整理している[16]．

一方で，ラスキン・カレッジの「市民性」育成を企図する具体的な教育内容については，

また，矢口悦子『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体—』（新曜社，1998）は，「リベラリズム」が「発言の自由」のような「自由」を意味すると同時に，宗教的，政治的なイデオロギーを反映するものであり，WEAのような責任団体が公教育として位置づけられることによって，リベラリズムの伝統が現実には抑圧，あるいは大学やWEAの教育活動における自主規制を引き起こしたことを指摘している．

[15]例えば，北川隆吉「『プレブス・リーグ』の成立と展開—イギリスにおける労働者教育の一段面—」（『社会労働研究』21巻1・2号，1975年1月），あるいは，その後の中央労働者カレッジの展開までを対象にする松村高夫「Central Labour College1909-1929年（上）イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合-」（『三田学会雑誌』82巻1号，1989），同「Central Labour College1909－1929年（下）－イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合—」（『三田学会雑誌』82巻3号，1989）がある．

また，英国の「階級性」形成に関わった労働者教育運動の研究として，19世紀におけるメカニックス・インスティテュート（Mechanics' Institute）運動を対象とするものもある．例えば，倉内史郎「『機械工講習所』運動の結末　イギリスの初期の成人教育運動における階級の問題について　」（日本社会教育学会編『社会教育と階層』（日本の社会教育第2集），国土社，1956），安藤悦子「イギリスにおける労働者教育運動の成立－職工学校運動とその思想的背景－」（『歴史学研究』272号，1963年1月）．

[16]Simon, Brian, 'The Struggle for Hegemony, 1920-1926', Simon, Brian(ed) *The Search for Enlightenment, The Working Class and Adult Education in the Twentieth Century*, National Institute of Adult Continuing Education, 1990, 18-9.

また，独立労働者教育運動の展開に関わるプレブス・リーグ，中央労働者カレッジ，NCLCについては，Craik, W.W., *Central Labour College, 1909-29, A Chapter in the History of Adult Working-class Education* (Lawrence & Wishart, 1964)，あるいは，Millar, J. P.M., *The Labour College Movement*(N.C.L.C. Publishing Society Ltd, 1979)といった運動の当事者による記述がある．

1950 年代から 1960 年代にかけて同時代史としての研究が行われている[17]．また，それらと少し後の時代に歴史研究としてなされた研究の間には明らかな違いが見られる．新自由主義が台頭した後，経済的状況の要請にもとづいて効率性と成人教育の結びつきが重視されたことを背景として，その財政的な課題を中心に分析した田村佳子の研究は，1980 年代のラスキン・カレッジにおける特徴的な学習の実態として，労働学ディプロマ・コース（Labour Studies Diploma Course）のカリキュラムを取り上げ，同コースが労働者の多様な学習要求に応えてきたことを評価するべきであると述べている[18]．

合衆国においてもまた，労働学ディプロマ・コースが着目され，そこでの学習の様態を分析する研究がある．アル・ナッシュ(Al Nash)は，ラスキン・カレッジと労働組合運動との緊密な関係，また，英国におけるリベラルな教育の象徴とも言えるオックスフォード大学との連携によって，同カレッジは「伝統と変化，理論と実践，個人主義と集合主義，学問的な価値と労働者階級の価値，それらの相互作用に最大の関心を払う」労働者大学として存在してきたと指摘している[19]．

ラスキン・カレッジ創立 100 周年の年に刊行された論文集，『ラスキン・カレッジ—せめぎ合う知識，異議申し立ての政治— Ruskin College, Contesting Knowledge, Dissenting Politics』(Andrew, Geoff, Hilda Kean and Jane Thompson(eds), Lawrence & Wishart, 1999)は文化的，社会的，政治的，経済的な文脈におけるラスキン・カレッジの歴史的展開を対象化して，学生たちの生活のなかにあった学習に焦点を当てようとし，以下のように述べている．

「生活の鳴門とは峻別される特定のラスキン・タイムというようなものがあるという意味で，カレッジのみに焦点をあてるのではない．むしろ，私たちが言及するカレッジにおける過去の出来事，設立意図，1909 年のストライキ，1970 年における初の全国女性

---

[17]例えば，ローナ・ヘイ「働く人々のための大學—ラスキン・カレツジのこと—」(『ニューエポック』1 巻 3 号，1949)，「ラスキン大学における労働教育」(『北海道労働経済』4 巻 11 号，1953)，ジョーン・ウォルトン「労働者に開かれた象牙の塔—オックスフォードのラスキン・カレッヂ—」(『世界の労働』5 巻 1 号，1955)，「英国労仂者教育の殿堂　60 周年迎うラスキン大学」(『月刊自由労連』4 巻 10 号，1959)，石川俊雄「イギリス労働者教育の一断面—ラスキン・カレッジの地位と役割—」(『日本労働協会雑誌』5 巻 12 号，1963)．

[18]田村佳子「英国労働者教育に関する一考察—ラスキンカレッジ（労働者のためのレジデンシャルカレッジ）の歴史と課題—」『広島平和科学』第 15 巻，1992.

[19]Nash, Al, *Ruskin College: A Challenge to Adult and Labor Education*, Cornell University, 1978, 95.

解放会議，卒業生による北アイルランドの市民権運動，または 1980 年代における炭坑夫たちへの支援はカレッジ外での政治に由来するものである．ラスキンの際立った性質を明らかにするとともに，知識と政治に関わるカレッジ内部の人々の同意が存在してないことを保証するものがまさに，外界の政治に積極的に参加する意志であったことは疑う余地もない．」[20]

すなわち，ラスキン・カレッジにおける学習は，市民性と階級性の矛盾に充ちた英国の労働者教育の伝統のなかにあって，「理論と実践」，「学問的な価値と労働者階級の価値」の相互作用のもとで，「外界の政治」に関わりながら展開されるものとして，捉えられてきたことが了解できる．

なお，「市民性」と「階級性」という伝統そのものが可変的なものであることに加えて，公教育として制度的に確立された「市民性」育成の潮流はまた，公教育であるがためのイデオロギー性によって変化してきた．このことは英国における労働者教育，および成人教育の用語の幾多の変化と差異化のなかに見て取ることができる．そもそも，「成人教育（adult education)」という用語はその歴史的経緯，つまり支配階級に占有されていた大学教育の労働者階級への拡充を求めるなかで追求されてきた従来の「非職業的教養主義的成人教育（non-vocational liberal adult education)」を指して用いられてきた．他方，「継続教育」と訳される“further education”は，1944 年の教育法によって広く義務教育後の教育全般を指すものと規定され，狭義には 16 歳から 19 歳を対象とした職業教育を

---

[20]Andrew, Geoff, Hilda Kean and Jane Thompson(eds)*Ruskin College, Contesting Knowledge, Dissenting Politics*, Lawrence & Wishart, 1999, 2.

同書で女性解放会議に言及するジェーン・トンプソン（Jane Thompson）の論考「ラスキンは生き残れるか？」では，ラスキン・カレッジで開催された全国女性解放会議が「第二波フェミニズムの歴史において，絶対的に重要なものであるにも関わらず，カレッジの正史では言及されていない」ことが指摘され，ラスキン・カレッジにおける性差別を糾弾する論調で述べられている（Thompson, Jane, ‘Can Ruskin Survive?’, Andrew, Geoff et al(eds)*op. cit.*, 1999, 136）．トンプソンは本邦において，上杉孝實・大庭宣尊・奥田実・木原義勝・北岡宏章・森繁男訳『解放を学ぶ女たち』勁草書房，1987（=Thompson, Jane, *Learning Liberation: Women's Response to Men's Education*, Croom Helm, 1983）の著者として知られ，フェミニズムの視点から成人教育における性差別を指摘する論者である．1993 年，ラスキン・カレッジに女性学コースが創設された際，同カレッジのテュータに就任し，別稿においてもまた，それ以前のラスキン・カレッジが「ワークメンズ・カレッジ」であったと批判している（Thompson, Jane, *Women, Class and Education*, Routledge, 2000, 154-74）．

なお，ラスキン・カレッジの「正史」として多くの文献が挙げるものに，Pollins, Harold, *The History of Ruskin College*(Ruskin College Library, 1984)がある．

意味する．また，1965 年のユネスコによる「生涯教育（lifelong education)」の提唱以降，国際的文脈においては“lifelong learning”が用いられてきたものの，1980 年代の英国国内の教育のあり方を指し示す用語として，“continuing education”が用いられるようになった．“continuing education”は，広義には従来の非職業的な成人教育と職業教育を包括するものとして，狭義には主に職業教育を指すものとして用いられ，さらに後者の意味合いのもとで“adult and continuing education”と並べて用いられることもある[21]．この用語の変化から，英国の成人教育における教育機会の多様化とともに「市民性」育成を目指す教育の職業的な変化を捉えることができるが[22]，そのなかでも，“adult education”は職業教育とは別の教養主義的な教育を意味する言葉として残されている．

2．歴史記述の方法としてのオーラル・メソッドとその教育への応用

ヒストリー・ワークショップに関する本邦での研究，および実践報告としては古賀秀男によるものがあり，そこでは同ワークショップの特徴として，「時代はほぼ 19 世紀後半以降 1930 年代までに定め，花形工業に属さず見捨てられてきた工業労働者，下層市民，農村労働者男女，主婦を含む女性，地方や地区または南アフリカなどの下積みの庶民・労働者に光をあて，資本主義の重圧下におかれたこれら犠牲者たちの生活・マンタリテ・運動の実態を明るみに出し，人間らしい『生存権』を求める姿を温かく描き出そうとしていること」と指摘されている[23]．さらに，古賀はヒストリー・ワークショップの方法論としてのオーラル・メソッドについて，それが歴史研究によって等閑視されてきた民衆の労働と生活，意識，運動の実態に迫りうる新しい研究方法であると述べている[24]．

---

[21]マイケル・D・スティーブンス（渡邊洋子訳）『イギリス成人教育の展開』明石書店，2000(=Stephens, Michael. D, Adult Education, Cassel l Educational Limited, 1990), 7-8.

[22]布施美穂は，1992 年に導入された継続・高等教育法（Further and Higher Education Act）がもたらす問題として，能力が細かく定義されることにより，過程よりもその目標へ過不足なく「正確に」到達することに重点が置かれること，学習への参加促進の強調により，労働力として期待されない成人は政策上学習者として軽視されてしまうこと，人間の能力を労働市場での通貨あるいは国際競争力向上のための資本とみなすパラダイムに取り込まれてしまうことを指摘する（布施美穂「現代イギリス成人教育の変質—ボケーショナリズムの問題点を中心として—」『日本社会教育学会紀要』No. 34, 1998, 85-6).

[23]古賀秀男「イギリスにおける民衆史の堀り起こし-ヒストリ・ワークショップとオーラル・ヒストリー-」『歴史評論』**375** 号，**1981** 年 **7** 月，12-13．また，古賀は「イギリスにおけるヒストリ・ワークショップの活動」（『歴史学研究』461 巻，1978 年 10 月）においても，新しい歴史研究活動として同ワークショップを紹介している．

[24]同前，15-7.

古賀の紹介を始めとして，ヒストリー・ワークショップの活動は主として歴史学によって注目され，方法論的な検討が行われているものの，教育と学習に関わった意義の探求は行われてこなかった．このことに対して，市橋秀夫は民衆文化運動という観点から捉える必要があるとし，とりわけ，その労働者教育としての性格に着目して，「ヒストリ・ワークショップの方法は，歴史というモノとの持続的な対話を通して人が学び成長することの，根本的意義と今日的可能性を私たちに示唆してやまない」と述べている[25]．すなわち，ヒストリー・ワークショップの活動について，歴史を捉える新しい方法としてのオーラル・メソッド，およびオーラル・ヒストリーの意義のみならず，そのことによる新しい教育の意義を見出そうとする視点を提示している．このことから，ヒストリー・ワークショップは歴史研究の場であるとともに，歴史教育の場としても捉えられた．しかしながら，ヒストリー・ワークショップを労働者の歴史教育として捉える先行研究は，本邦のみならず，英国においてもほとんどない．

一方，ヒストリー・ワークショップを捉える際の教育と研究を結びつける視点は，今日的な歴史学研究におけるオーラル・ヒストリーの検討のなかにも見出すことができる．英国におけるオーラル・ヒストリアンの代表的人物であるポール・トンプソン(Paul Thompson)は「教師と生徒との，世代間の，そして研究機関という象牙の塔と一般社会との壁を崩しうるもの」であり，「歴史を書く過程において，歴史を作り，歴史を経験した人々に，彼ら自身の言葉を通じて，中心的な場所を与えるもの」であると述べている[26]．すなわち，オーラル・ヒストリーにもとづく歴史研究は専門主義を脱し，その教育と研究を労働者を含めた大衆に開くものだと指摘されているのである．

さらに，オーラル・ヒストリーは歴史学研究の方法としてのみならず，新たな歴史認識を提示するものとしても捉えられている．それらに関わる研究は歴史研究における実証主義への批判としての「言語論的展開」[27]，それを踏まえて歴史を物語り（narrative）と捉える「歴史の物語論」の展開[28]を経た歴史学研究のなかに見ることができる．この新しい

---

[25]市橋秀夫「民衆史の共同作業的発見—イギリスのヒストリ・ワークショップの運動か　ら学ぶ-」『新日本文学』41巻7・8号，1986，56.

[26]ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へ オーラル・ヒストリーの世界』青木書店，2002(=Thompson, Paul, *The Voices of the Past*, 3rd edition, Oxford University Press, 2000)，20.

[27]『思想』(No.838，1994年4月）における特集「歴史学とポストモダン」に詳しい．

[28]代表的な文献として，野家啓一『物語の哲学』(岩波現代文庫，2005）がある．さらに，野家の「歴史の物語り論」に対する批判，あるいは検討として，高橋哲哉『歴史／修正主

歴史認識にもとづいて，歴史教育の再編を目指す安達一紀の研究がある[29]．また，教育の本来的な課題としての「強制の自律的な受容」，「自由であることを強制する」という人間形成のアポリアは歴史学のアポリアでもあるという小田中直樹の指摘がある[30]．すなわち，歴史を理解し，解釈し，記述することは人間観を示すことであり，記述する当人の価値選択の過程でもある．

さらには，歴史教育のみならず，学校教育全体に物語り論を適応しようとする矢野智司らの研究[31]，および成人教育の実践において，物語ることによる学習の意義を明らかにしようとする津田英二らの研究がある[32]．

歴史学研究の方法としてのオーラル・メソッドは，ポストモダニズムの洗礼を受けるなかで，記述される歴史そのものを物語り，すなわち，オーラル・ストーリーとして捉え返す歴史認識を生み，それを教育の内容，および方法として応用しようとする研究が展開されている．

3．学習者の生活をめぐる社会教育研究とそこでの生活の意味

本論文では，英国において，労働者が自身の所属集団の歴史を記述したヒストリー・ワークショップの活動を対象とするが，ひるがえって日本の戦後教育研究における生活綴り方，とりわけ社会教育研究，成人教育研究のなかで展開された生活史学習もまた，同様の課題に応えようとする実践と理論として手がかりとなるものである．那須野隆一は，勤労青年の学習活動としての生活史学習の意義について，「学校時代の教育から『解放』された『喜び』にひたっている勤労青年をふたたび教育学習の場に『つれもどす』」ため，彼らの「“胸のつかえ”」をめぐる「勤労青年教育の原点ともいうべき骨格的俯瞰図をえがくこと」，教育学習内容論における「教養主義」と教育学習形態論における「技術主義」をみなおすこと，「みずからの過去＝生いたちと現在＝生きざまと未来＝生きかたとをひとすじに結ぶ学習」のうちに，「文化の担い手としての勤労青年のエネルギー」を「引きだす」ことを指

義』（岩波書店，2001），および同『証言のポリティクス』（未来社，2004），あるいは上村忠男『歴史的理性の批判のために』（岩波書店，2002）がある．

[29]安達一紀『人が歴史とかかわる力　歴史教育を再考する』教育史料出版会，2000.

[30]小田中直樹『歴史学のアポリア　ヨーロッパ近代社会史再読』山川出版社，2002.

[31]矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界　「物語ること」の教育学』世織書房，2003.

[32]津田英二・末本誠・張明順・小林洋司「知的障害者の親による社会的排除経験の語りに基づく相互教育–神戸大学公開講座の教育的ライフストリー実践–」日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育』日本の社会教育第50集，東洋館出版社，2006.

摘した[33]．生活史学習はまずは，勤労青年が生活者，文化の担い手となり得るように彼らの生活に学習を位置づけること，教育の内容と形態とが学習者の生活から乖離している状況を是正することを目的として展開されたのである．

また，姉崎洋一は企業と国家によって占有される情報化に対抗するために，「生活・労働・学習主体として生きた多元的情報を持ち寄り，科学の光で真偽を見抜き，対話を通じてのリアルで共感にあふれた情報を生み出していく」[34]ことを課題とし，「本物の自分」像をめぐる理論的・実践的アプローチとしての情報ネットワークづくりを担う青年の生活史学習に着目している．いわば，生活史学習は学習者の生に根ざし，それをめぐる知と技能の習得，あるいは創造を目指すものとして捉えられているのである．生に根ざすものであるからこそ，生活と学習の相互の連関，那須野の言う＜学習の生活化＞と＜生活の学習化＞を「循環」[35]する理論と実践として，生活史学習は展開されたと考えることができる．

一方で，永井健夫は社会構成主義の知識観に依りながら，生活世界と認識世界の二分を超え出る知の再構成としての教育，および学習のありようを展望している[36]．このような知の再構成という学習観は，「学習の生活化」と「生活の学習化」を「循環」する生活史学習のそれと重なる．いずれも，学習者の生活を新たな知識を生みだすものとし，その創造のなかに学習を見出そうとしているのである．

これらの学習観は創造される知の源として，「生活」，および「生活」史，または「生活世界」を設定しているものの，生活史学習における「生活」が指し示す内容について検討する先行研究はほとんどなく，認識世界と峻別される「生活世界」の指す内容もまた，従

---

[33]那須野隆一「生活史学習と自己形成—勤労青年の学習活動における内容編成の原点をさぐる—」『月刊社会教育』29（9），1979.9，51-2.

[34]姉崎洋一「情報ネットワークとしての生活史学習—青年教育に即して」『月刊社会教育』33（6），1989.9，39.

[35]那須野隆一「生活史学習と生涯学習—「私史覚書」青年教育の戦後50年後半史—」『月刊社会教育』39（9），1995.9，67．さらに那須野は，その生活史学習の系統的な学習体系について，「青年たちの生活集団を形成する基盤としての《たまり場》活動から出発して」，「学習活動の各段階を経過するごとに，より高次の生活集団を形成する基盤としての《たまり場》活動に繰り返し到達する」「理論的・実践的な学習体系」，「『生いたち』学習（回顧＝見直し学習），『生きざま』学習（認識＝見渡し学習），『生きかた』学習（展望＝見通し学習）によって構成される」「生涯設計学習的な学習体系」，「歴史科学・社会科学の系統学習による回顧・認識・展望を重視する」科学的な学習体系であると述べている（64-5）．

[36]永井健夫「生涯学習における専門知と日常知をめぐる問題」鈴木眞理／梨本雄太郎『シリーズ　生涯学習社会における社会教育７　生涯学習の原理的諸問題』学文社，2003．または永井「省察的実践論の可能性」日本社会教育学会編『講座　現代社会教育の理論 III 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社，2004.

来の科学的認識が対象化してこなかったもの，という消極的な規定にとどまっている．確かに，「生活世界」，あるいは単に「生活」の指示する内容は本来，極めて多義的であり，多義的なままにしておくことの非決定性によってもたらされる曖昧さがある．しかし，この生活とは何かについて，社会教育研究があらかじめ決定しないことの積極的な意義があるようにも思われる．すなわち，学習者の生活をあるがままに引き受けることによって，生活史学習，および生活世界にもとづく知の再構成という学習が理論的，実践的に，常にその源となるものを硬直化することから免れているとも捉えられるのである．したがって，学習者の生活をめぐる社会教育研究における「生活」は学習者の経験の豊かさのあるがままのものであり，それを根拠とすることの積極的な意義に依るものである．

第３節　研究の方法と論文構成

１．研究方法と資料の検証

本論文においては一次資料の収集を行い，それらをもとにラスキン会議の内実とそれがヒストリー・ワークショップに対してもった意義を実証的に明らかにする．

英国では，ブリティッシュ・ライブラリー（The British Library，在ロンドン），ウィメンズ・ライブラリー（Women's Library，在ロンドン，ロンドン・メトロポリタン大学図書館のひとつ，元フォーセット・ライブラリー），フェミニスト・アーカイブ・サウス（Feminist Archive South，在ブリストル，トリニティ・ロード・ライブラリー内），同ノース（Feminist Archive North，リーズ大学・ブラザートン・ライブラリーのスペシャル・コレクション内）を中心に，本邦では入手が困難な文献，具体的にはラスキン・カレッジ，ヒストリー・ワークショップ，あるいはその発起人であるラファエル・サミュエルに対する学習者の評価，英国における初の全国女性解放会議に関わる一次資料，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の歴史記述に関わる史料，新聞記事，雑誌記事，ラスキン・カレッジの学校案内，同カレッジの学内誌（*The New Epoch*），未刊行の文献の収集を行なった．各章で取り上げた文献，資料については具体的に各々の冒頭で解説し，本論文において中心的に取り上げる資料については末尾に部分訳を付す．

ラスキン会議に関わる一次資料を収集したフェミニスト・アーカイブ・サウス，同ノース，ウィメンズ・ライブラリーでは，所蔵資料の多くはカタログ化されておらず，未整理のまま保管されている．両フェミニスト・アーカイブは，それぞれひとりずつの女性が膨大な資料に囲まれ，寄付金に頼りながら管理・運営されているのが実情である．

ラファエル・サミュエルを含め，数十年後にまで自らの言葉を活字にして残せる者はある程度の権力，権威のなかに，当時，身を置いていた者である．実際に，ラファエル・サミュエルはヒストリー・ワークショップにおける労働者学生による歴史記述として，本論文が第5章以降で取り上げる『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット（History Workshop Pamphlets)』(全13巻）が「政治的な抑圧」のもとにあったとして，「第一に，経費を賄うために,印刷されるのは成功者に許されたことであり,彼らは自身の手で直接，全国組織，全国的なネットワークの助けなしで売り渡らねばならなかったという事実があった」と述べている[37]．すなわち，費用を賄えるほどの販売経路を確保できる者だけが自身の学習の成果としてのパンフレットを発行することができたのである．

したがって，現在，到達しえるヒストリー・ワークショップの実際は限定されたものである．その陰には多くの労働者学生による学習があった．書き残すことのできたものの証言を手がかりにしつつも，可能な限り，歴史遡及的に，書き残しえなかった者の記憶に配慮することで，ラスキン・カレッジにおける労働者学生の学習の実際に迫る．

2．論文の構成

収集した資料をもとに,第1章では,ヒストリー・ワークショップが発足した1960年代，70年代における労働者階級を取り巻く状況の変化を述べ，学生運動による大学教育改革を背景として，ラスキン・カレッジが行なった教育の改編が，当時，同カレッジに在籍した労働者である学生たちの学習経験にどのような意味を持つものであったのかを明らかにする．具体的には，1960年代後半から労働者階級の「ミドル・クラス化」をめぐって行なわれた「豊かな労働者　(Affluent Workers)」論争の知見について整理し，それらが指摘する労働者階級の労働と生活を捉える視角から，ラスキン・カレッジが行なったカリキュラム，試験制度をめぐるシステム上の改編，それらを享受する学生たちの経験について検討する．

第2章では，ラスキン・カレッジの学生たちの生活経験にもとづきながら，労働者階級の歴史研究と労働者を対象とした教育を結合させる試みとして 1966 年に発足したヒストリー・ワークショップの設立について,「教育の生活化」という視点から整理する．教育と学習，および研究の三者の統合を企図して発足したヒストリー・ワークショップの活動理

---

[37]Samuel, Raphael(ed), *History Workshop A Collectanea 1967-1991*, History Workshop25, 1991, 69.

念における労働者中心主義，ラスキン・カレッジという労働者教育機関で行なわれたことによる学習者中心主義の政治性を考察する．

第３章では，1970 年に開催された英国における初の全国女性解放会議（ラスキン会議）を取り上げる．ラスキン会議における議論の内実を明らかにするとともに，それらとヒストリー・ワークショップの理念との対応関係について考察する．このことを通じて，同ワークショップと英国における第二波フェミニズムの初発が共有した価値，労働と生活を捉える視角と意味に関する示唆が得られると考える．

以上の検討を踏まえ，第４章では，ヒストリー・ワークショップの理論的支柱を担ったとされるラファエル・サミュエルの論考を取り上げ，その労働者階級を捉える視角を労働者教育における彼の学習者理解として整理することを通じて，彼の労働者教育の理念を考察する．サミュエルの労働者教育における学習者中心主義，労働者階級の男女の歴史，労働と生活に対する視角が，社会的な権力関係，とりわけ，ジェンダー関係に対してもっていた政治性を明らかにする．このことを通じて，ラファエル・サミュエルの労働者教育がフェミニズムと共有した価値について考察する．

第５章，および第６章では，ヒストリー・ワークショップとラスキン・カレッジにおけるサミュエルの教育を通じ，労働者たちがどのような学習を展開したのかについて，ヒストリー・ワークショップにおける学習の成果として発行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』を取り上げ，労働と生活の場での労働者学生たちの経験にもとづく彼らの歴史記述の特徴を検討する．

この検討を踏まえ，第７章ではヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の歴史記述を総括的に意義づけるとともに，その歴史記述を通じて彼らが得たものは何であったのかについて考察する．

終章では，ラスキン・カレッジにおけるヒストリー・ワークショップの展開，ラファエル・サミュエルによる労働者教育を概観し，労働者教育の実践，労働者教育論におけるジェンダー視点導入の意義と展望を示す．

第１章　ラスキン・カレッジにおける教育と学習の乖離

生活水準が向上した1960年代の英国において,伝統的な労働者階級とその文化の変化をめぐる論争が展開された．第二次世界大戦後の福祉政策における平等観，完全雇用，技術革新に伴う職業構造の変化，地域間移動の促進，教育機会の増大を背景としてもたらされた「豊かさ」によって，労働者階級の「ブルジョワ化」,「豊かな労働者（Affluent Worker)」の出現が指摘されたのである．

一方で，英国においてもっとも長い伝統を持つ労働者のためのレジデンシャル（寄宿制）カレッジとして1899年に設立され,主として労働組合運動家のために高等教育の機会を提供してきたラスキン・カレッジ（Ruskin College，在オックスフォード）は，労働者階級の変化が指摘された1960年代,財政的な問題の解決とそれにもとづく設備の充実,教育内容の再編を行った．他方，当時は高等教育機関の運営への学生の参加が要求された時代でもあった．ラスキン・カレッジに関しては，労働組合運動の経験を持つ学生たちが組織的な要求を行うことに精通しており，カレッジのスタッフたちがそのような学生たちの経歴を理解していたため，他の高等教育機関に比べて激しい運動に至らず，学生たちの要求が通ったという[1]．

本章の目的は，大学の自治，運営参加をめぐる学生たちの要求の背景にあった1960年代当時の労働者階級の変化を捉える「豊かな労働者」論の枠組みから，実際の労働者学生が経験したラスキン・カレッジにおける教育の変化を検討することである．ときの労働者階級の変化,「豊かな労働者」の出現として指摘された労働をめぐる状況の変化に対する視角から捉えると，ラスキン・カレッジの変化はどのような意味を持ったのかについて、整理，検討を行い，変化のなかにあった同カレッジに学生として在籍していた者の経験を手がかりにして，1960年代後半から70年代前半にかけてのラスキン・カレッジにおける教育と学習の実際を明らかにする．

まず,「豊かな労働者」の出現が指摘された時期のラスキン・カレッジにおける変化を扱う先行研究を検討するが，学習者による同カレッジに対する評価としては以下のものを

---

[1]Drews, Walter and Roger Fieldhouse, 'Residential Colleges and Non-Residential Settlements and Centres', Fieldhouse, Roger and Associates, *A History of Modern British Adult Education*, NIACE, 1996, 244.

取り上げ，これらを中心に，労働者階級の解体が指摘された 1960 年代，70 年代における英国の労働者教育の実際を明らかにする．

・Sealey, R, D, 'The Social Dynamics of Residential Adult Education: A Subjective View', Houlton, Bob (ed) *Rsidential Adult Education-Values, politics and problems, Paper provoked by The Fircroft College Dispute*, Society of Industrial Tutors, 1978.
・Alexander, Sally, 'Adult Learning Ruskin, 1968-70 The University of East London, 1992-', *Becoming a Women*, New York University Press, 1995.

英国の 1960 年代，ないし 70 年代は，さまざまな規制緩和による「寛容な社会」、「豊かな社会」到来への期待と失望に特徴づけられる．1960 年代の英国は「ビートルズとミニスカートを生んだ．社会生活は活気にみちていた．この時代は何よりもまず，女性解放の時代であり，少なくとも法律の上では男女の平等賃金が確立された．ピル解禁などの性の自由化が進み，同性愛に対する処罰や劇場検閲制度も廃止された.」「サセックスに代表される新しい大学が創設され，技術系のカレッジは，ポリテクニックとして再編成された．これらの新しい高等教育機関は，オックスフォードとケンブリッジを頂点とする伝統的な『学閥』支配を打ち破るものと期待された」[2]．しかしながら，それらの期待は 1970 年代，英国経済の「没落」，「イギリス病」が広く語られ，新しい大学が「オックス・ブリッジ」体制を打破できなかったことによって，失望へと転換した．その「寛容」と「豊かさ」のなかにあった労働者教育の変化と，それに対する労働者学生の経験を捉えるならば，期待と失望の間にあった、当時の英国における労働者教育、広義の労働運動，階級社会再編のありようを理解しえるものと思われる．

第 1 節　「豊かな労働者」論における労働者階級の変化

1．「豊かな社会」における労働者の「ブルジョワ化」

1960 年代の英国において，戦後の経済成長を背景とした所得の増大と生活水準の向上により，労働者階級がミドル・クラスの価値観と生活様式を身に付けて，その世界に同化していくとする労働者階級の「ブルジョワ化」仮説が登場した．

[2]見市雅俊「現代イギリスの明暗」村岡健次・川北稔編『イギリス近代史［改訂版］—宗教改革から現代まで—』ミネルヴァ書房，2003，274.

当時，多くの論者によって提唱された「ブルジョワ化」仮説は，多様な視点から，新しい社会現象として，労働者階級の生活の変化を描きだした．安定した雇用，相対的に高い賃金，持ち家の増大，レジャー活動の拡大は，伝統的な職業集団への帰属意識よりも家庭と家族を中心とするライフ・スタイルへの志向を生み出す一方で，消費への欲求を刺激し，家族の物質的な満足を求める傾向を強化した．それはまた，労働者の階級的連帯を掘り崩し，それに代わって彼らをしてミドル・クラスの生活態度と行動様式に対する同調へと向かわせ，その必然的結果として彼らの政治的態度にも変化をもたらした．つまり，労働者の「ブルジョワ化」仮説は，職業集団を基盤とした階級的連帯から，労働者階級の価値観とライフ・スタイルにおける個人主義，私生活中心主義への転換を中心的な命題としていた．

この転換を象徴的に示すのが，1950年代初頭，「伝統的」労働者階級像を構築[3]しながら，その10年後には『豊かな社会の労働者（*The Worker in an Affluent Society*）』[4]を著して「ブルジョワ化」仮説の代表的論者となったツワイク(Zweig, F)の論述である．ツワイクは「この10年，ないし20年における労働者階級の変化は著しく，量的な側面だけでは測りきれない．生活様式のみならず，階級全体の行動規範やエートスにおいても大きな変化が生じている．労働者階級のかなりの部分が，より高い生活水準，新しい価値規範と行動基準，新しい社会意識に向かっている．社会的，政治的，経済的生活に及ぼされるこのインパクトは，ほとんど予測できるものではない．それらは，私たちの眼前に広がっている新しい時代，新しい社会的地平を予見させるものである」[5]と述べた．ツワイクは，こうした新しい現象の展開を労働者階級による「ミドル・クラスの価値と生活への変動」と表現したのである[6]．

ツワイクが指摘する新しい生活様式，およびエートスとは，具体的には高い生活水準とその追求，家庭，家族を中心にする志向，そして労働意欲の増大である．とりわけ，残業の要求，交替制の受容として現れるような，生活水準を維持，向上させるための金銭に対する執着心にもとづく労働意欲の増大は，かつての伝統的労働者階級像には含まれておらず，このことは労働者階級としての一体感の喪失をもたらしたと指摘された．つまり，ツ

---

[3]F.ツワイク（大内経雄，藤本喜八，安藤瑞夫訳）『労働者—生活と心理—』ダイヤモンド社，1957(＝Zweig, F, *The British Worker*, Penguin Books, 1952）．
[4]Zweig, F, *The Worker in an Affluent Society*, Heineman Educational Books, 1961.
[5]ibid, 212.
[6]ibid, ix.

ワイクは「ブルジョワ化」仮説として，労働に対する志向としての個人主義と家族を中心に置く志向，私生活中心主義を指摘したのである．

2．労働の手段化におけるシニシズム

経済的な所得や生活水準，消費パターンの変化ばかりではなく，労働者の行動様式，価値観，願望，および社会的な人間関係における変化が包含された実証でなければ，労働者階級の変化，伝統的な労働者階級の解体を指摘することはできないはずである[7]．

ジョン・H・ゴールドソープ(John. H. Goldthorpe)，デヴィッド・ロックウッド (David Lockwood) らは，労働者階級の変化という主題に対して体系的に応答するために「ルートン調査」[8]を行った．ゴールドソープらの結論は，それまでの「ブルジョワ化」仮説に疑問を投げかけながらも，単なる反論としてではなく，労働者階級の変化をめぐる第三の解釈としての意味を持つものであった．

彼らの主要な結論は，長期的な展望，可能性としての労働者の「ブルジョワ化」，ミドル・クラスへの労働者階級の「収斂」を否定するものではなかったが，第一に，「豊かな労働者」の職業生活，ライフ・スタイル，社会，あるいは階級構造に関するイメージの三点から観察する限り，「ブルジョワ化」仮説は支持できず，ミドル・クラスへの同化説は働く人々を「消費者」として捉える傾向が強く，そうした経済的側面でのミドル・クラス化は他の局面でのブルジョワ化を自動的に導かないとするものであった．しかし，彼らは第二に，旧来の「伝統的労働者」とは異なる新しい「豊かな労働者」の出現も否定してはおらず，新しい労働者が仕事，企業，さらに労働組合，労働党に対して，私生活中心主義，個人主義

---

[7]リチャード・ホガートは，「中流階級に帰属することの本質は，一定の種類の態度，社会のなかでのそれ自身の地位と他の階級との関係に関する階級的感覚によって主として定められる態度を保持することであった．ここからその特徴-その責任感と同等のスノビズム-が生じたのである．これらの態度は，単に特定の事物を所有するとか，あるいは中産階級からいくつかの実用的な考えを導入することによって演じられるものではない」と指摘した(Hoggart, R, 'Changes in Working-Class Life', *Speaking to Each Other,* Vol. 1, 1970, 59)．

[8]1962 年から 64 年にかけて，ベッドフォードシャア，ルートン市所在の大手三企業に働く 229 人の労働者に対して行った調査にもとづいていることから，この名を以って呼ばれることとなった．その調査結果は Goldthorpe, J, H., F. D. Lockwood, and Platt, J, Bechhofer, *The Affluent Worker: Industrial Attitudes and Behaiviour* (Cambridge University Press, 1968a), Goldthorpe, J, H., et al, *The Affluent Worker: Political Attitudes and Behaiviour* (1968b), Goldthorpe, J, H., et al, *The Affluent Worker in the Class Structure* (1969) として公表された．

にもとづく「手段主義（Instrumentalism)」という価値を持っていることを指摘した[9].

とりわけ，ルートン調査ではこの第二の点，すなわち「豊かな労働者」にとっての労働の意味,「労働志向」を明らかにすることが目指された．ゴールドソープらはこの労働志向を類型化し,「豊かな労働者」の手段主義的志向について，（ｉ）この類型の場合，労働は苦役であり，より多くの経済的な報酬を「極大化する」ための手段とみなされ，このことと関わって（ii）労働者の組織，企業，労働組合，政党への関わり方は限定的，感情中立的なものであり，（iii）労働者の関心の中心は仕事や職場の外，具体的には家庭生活に求められ，（iv）労働と労働以外の生活を決然と区別するものであると説明している[10]．手段化された労働はただ経済的営為として，その外的報酬によって生活を支える営為としてのみ捉えられていると指摘したのである．

この労働者階級による労働と労働以外の生活を区別する志向について，その文化的側面を検討するリチャード･ホガード(Richard Hoggart)は，労働者階級のうちに存在する空しさとしてのシニシズム，労働における民主主義的平等や反権威主義，あるいはそれに向かう信念に対するシニシズムについて言及するなかで,「公的な側面では多くの労働者階級の人びとはなにかしようとしても妨害され，傷ついてひきこもるか，自分を甘やかすシニシズムに逃げ込むしかない」，その「一方で，家庭は重要な避難所である」と述べていた[11].

---

[9]Goldthorpe, J, H. et al, *op. cit*, 1969, 157-95. あるいは Goldthorpe, J, H., et al, *op. cit*, 1968a, 174-86.

後にこの結論に対し，地域間移動は労働者の自由な選択にもとづくものであるというよりも,いたしかたのない選択としてあったという指摘(Grieco, M, *Keeping it in the Family*, Tavistock Publication, 1987)，さらに，労働に対する手段主義は認めつつも，それを労働者階級の分裂としてではなく，階級的連帯の契機であるとする指摘（Devine, F, *Affluent Workers Revisited*, Edinburgh University Press, 1992）がなされた（この点に関しては，田中雅雄『社会変容と労働―『連合』の成立と大衆社会の成熟―』(木鐸社，1997）に詳しい)．畢竟，いずれの指摘においても労働者階級の変化そのものについては否定されておらず，その変化がかつての伝統的な労働者階級像から乖離したものであるのか，あるいは今日的な労働者階級の特徴として挙げられたものをすでに伝統的な労働者階級の内にあったものとして捉えるのかといった差異によって立場性が現出した．さらに，その労働者階級の変化を捉えるいずれの視角においても，とりわけ労働と労働以外の生活の分離は支持されており，このことから,「豊かな労働者」の特徴は労働と生活を分離するものであり，唯一両者を架橋するものとしての労働の外的報酬，すなわち賃金を第一義的に捉える労働の手段化であったと言えよう．

[10]Goldthorpe, J. H., et al, *op. cit*, 1968a, 38-42, 174-7. 手段主義的志向の他に，ホワイトカラーを担い手とする「官僚制的志向」,「伝統的労働者」の持つ「連帯主義的志向」の三つに類型化している．

[11]リチャード・ホガート（香内三郎訳）『読み書き能力の効用』晶文社，1974（＝Hoggart, Richard, *The Uses of Literacy*, 1957）216-28.

「豊かな労働者」による労働の手段化は，労働者階級のシニカルな態度であったと考えられる．この態度によって，賃金を第一義とする営為としての労働観が助長され，公的な場における「空しさ」から逃避する場所としての家庭，私生活に対する態度が形成されることによって，生活の場は社会的な諸関係とは無縁の領域として捉えられたのである．生活水準の向上を背景として，「消費者」としての労働者階級の変化を強調した「ブルジョワ化」仮説を批判的に検討したルートン調査によって，労働に対する労働者階級の態度としての手段主義，その実，労働者階級が経験するシニシズムにもとづく労働と生活の分離が指摘されたのである．

第２節　ラスキン・カレッジにおける教育の再編

１．カリキュラムの再編による教育と労働の結合

ラスキン・カレッジは，1968 年，二つの大きな変化，すなわち，アカデミックな事柄と日常的な学生生活の双方を対象とする学生とスタッフの共同委員会(Joint Working Party)の設立と，理論的な事柄を労働者の興味と関心により近づけ，実際の労働に適応させることを目的とした労働学（Ruskin College Labour Studies）ディプロマ・コースの設置を経験した[12]．とりわけ，労働学ディプロマ・コースは，オックスフォード大学やその他の組織の教育に依存する従来の状況を脱し，ラスキン・カレッジが単独で学生に提供する初のプログラムとしての意味をもっていた．

1969 年度の『学校案内（Ruskin College Oxford Prospectus)』によれば，前年までの社会科学のオックスフォード大学特別ディプロマ（Oxford University Special Diploma in Social Studies)，ラスキン・カレッジ文学コース(Ruskin College Literature Course)に加えて設置された労働学ディプロマ・コースに在籍する学生は，以下四つのグループのうち，少なくとも三つのグループから四つのテーマを，もしくは二つのグループ（B，C）からそれぞれ二つずつのテーマを選択し，２年間６タームのうち，１タームにつきひとつのテーマをテュータに付いて修める．とりわけ，そのテーマ選択に際しては，労働に関わる社会科学的な知識に偏重することなく，関連する人文科学の見識を獲得しえるような選択が求められた．

---

[12]Pollins, Harold, 'Recent Development at Ruskin College', Houlton, Bob(ed) *Residential Adult Education-Values, Policies and Problems, Papers provoked by the Fircroft College Dispute*, Society of Industrial Tutors, 1978, 70.

グループA：1．労働運動の歴史的展開，2．社会主義の展開，3．文学と社会

グループB：4．社会的，政治的理論と組織，5．労働法，6．労働社会学

グループC：7．産業経済学，8．国内経済の運営，または開発経済学，9．労働経済学，

グループD：10．英国労働組合運動，11．比較労使関係，12．労働統計の手法と情報源

さらに，同コースの学生たちは，言語表現と統計に関する基礎的な能力と知識を試験によって証明することが求められ，独自の調査にもとづく論文の提出と労使関係に関わる試験の及第によって，最終的に労働学のディプロマが獲得できるとされた[13].

その労働学ディプロマについて，アル・ナッシュ（Al Nash）は，「大学の主要なプログラムであり，労働運動と同時代の社会的，政治的，経済的状況の理解に最も関わるものであると，学生たちによって捉えられている」[14]としていた．労働学ディプロマ・コースの設置はまさに，「伝統と変化，理論と実践，個人主義と集合主義，学問的な価値と労働者階級の価値，それらの相互作用に最大の関心を払う」[15]というラスキン・カレッジの特徴を示すものであったと捉えられていたのである．とりわけ，同コース設置前のラスキン・カレッジにおける教育内容は，オックスフォード大学のプログラムに依存するものが大半であり，労働組合主義（unionism）や労働問題に関わる科目はほとんど提供されることがなく，人文科学にもとづく教養主義的な教育が主として行われていた[16]．労働学ディプロマ・コースの設置は教育内容に労働の視点を導入するという意味で，労働と教育を結合する教育内容の提供を可能にするものであった．

そもそも、ラスキン・カレッジ設立当初の英国における労働者教育の状況を見れば，労働者が高等教育を享受する機会の提供という意味において，ラスキン・カレッジはさして目新しいものではなかった．ハロルド・ポリンズ(Harold Pollins)は，同カレッジがもっていた特徴について，長期に及ぶ高等教育を寄宿制で以って提供したこと，さらには労働組合の支援を得たことに関連して,「働く人々が社会的な変化を達成できるように教育するこ

---

[13]Ruskin College, *Ruskin College Oxford Prospectus 1969-1970*, 6. および，'RUSKIN COLLEGE TWO YEAR DIPLOMA COURSE IN LABOUR STUDIES Autumn 1975', Nash, Al, *Ruskin College A Challenge to Adult and Labor Education*(Cornell University, 1978, 103) as Appendix.
[14]Nash, *op. cit*, 1978, 16.
[15]ibid, 95.
[16]ibid, 16-7.

と」を目的とし，神学や古典文学のような伝統的な大学の科目は教えられなかったと指摘している[17]．しかしながら，オックスフォード大学と連携したことによって，その教育内容のみならず，教育方法に関しても同大学のものを踏襲し，このことに対して不満を持った学生たちが1909年，プレブス・リーグ（plebs league）を結成し，カリキュラム，および「労働者階級の見解に決して触れようとしない」講師に対する批判を行った．この批判を拒否したカレッジ当局が，学生に同調していた校長を罷免したことを契機に学生たちはストライキを行い，中央労働者カレッジ（Central Labour College）を設立するに至る．この経緯から，プレブス・リーグ，中央労働者カレッジとの対比において，ラスキン・カレッジは労働者階級の独立性，自立性を旨としない「市民性」育成の労働者教育機関としての位置づけを明確にしたとされる[18]．

労働学ディプロマ・コース設置以前である1964年度のラスキン・カレッジの学校案内は「カレッジによって提供される学習カリキュラムは，大学の講義との連携によって提供される」と明記していた[19]．その実，ラスキン・カレッジの「市民性」育成の内実は，オックスフォード大学との連携によって保証されていたと捉えられるのである．

同大学との「連携」の内実が見直され，ラスキン・カレッジの独自性とでも言うべきものがカレッジ当局によって明らかにされた証左として，1967年度の学校案内を挙げることができる．1967年度の段階でコースとして存在していたのは，未だ社会科学に関するオックスフォード大学ディプロマと文学コースであったが，同年度の学校案内では，それらの紹介に続き，「カリキュラム」の項目において，「以下のパラグラフでは，カレッジが提供する教育内容について，主な科目のグループごとに一般的な用語で解説する」[20]として，同カレッジが提供する教育内容の概説を付している．そこで挙げられている主要な教育内容は，経済，政治，歴史，労使関係，社会学，統計の6領域であり，それぞれに専属のテュータを抱えていた．ラスキン・カレッジがオックスフォード大学から独立して提供する教育内容を整理して，学校案内に掲載したことは，同カレッジが象徴的にではあるにせよ，その労働者のための高等教育施設，という階級性を示したと捉えられる．

---

[17]Pollins, Harold, *The History of Ruskin College*, Ruskin College Library, 1984, 9-10.
[18]さらに，今日的には「労働運動との弱まる関係の一方で，国家とのより近い協力関係を築き，元来の目的である『市民性育成』に『個人的な発達のための教育』が取って代わった」と指摘されてもいる（Drews, Walter and Roger Fieldhouse, *op. cit*, 1996, 241-5）．
[19]Ruskin College, *Ruskin College Oxford, Prospectus & Curriculum, 1964-1965*, 4. なお，同学校案内は1965年度，66年度まで内容を変更していない．
[20]Ruskin College, *Ruskin College Oxford, Prospectus & Curriculum, 1967-1968*, 5-8.

さらに，学校案内に労働学ディプロマが初めて掲載された1969年度には，「カレッジは，成人学生の出自とニーズに見合うように，科目と方法にもとづいて設定されたコース選択を提供する」[21]との説明がなされた．このプレブス・リーグのストライキ以降，ラスキン・カレッジに対して付与された労働者の市民性育成に関わるリベラル・アーツの教育機会を提供する労働者教育施設という特徴は，後の展開においても絶対的なものとして不変的に存在してきたわけではない．1960年代におけるカリキュラムの再編は，英国におけるリベラル・アーツの象徴的存在であり，かつ，ミドル・クラスの高等教育機関として機能してきたオックスフォード大学からの自律を企図するものでもあった．個々の学生である労働者の状況に応じた教育機会の提供を通じて，ラスキン・カレッジはその階級性を示そうとしたのである．

しかしながら，1968年における変化，すなわち，意志決定部分における学生とカレッジ当局の共同と，先の労働学ディプロマ・コースの設置が相互に緊密な関係をもっていたわけではなかった．むしろ，同コースはスタッフたちのイニシアティブによって設置され，学生との事前の話し合いは限られた回数行われただけであったという[22]．ラスキン・カレッジにおける教育と労働の結合は，カレッジ当局によって始められたものであったのである．

2．試験制度の改正による教育と生活の結合

共同委員会の設立によって，カレッジ運営への学生の関与のための物質的な基盤が整えられた段階で，学生たちがまず改編の対象としたのは，スタッフやカレッジの経営陣の学生に対する権威的な態度，そして労働学ディプロマ・コースのコース選択にともなって，選択しなかったテーマについては関心があっても教育を受けられない制度であった[23]．さらに，学生たちは，労働者階級出身という彼らの教育に関わる経験を考慮しない試験制度に対する批判を行なった．ハロルド・ポリンズは，先述の労働学ディプロマ・コースにおける試験制度が学生たちの批判を受けて改正された結果について，「コースの最後に行われる3時間の試験によってのみ評価するのではなく，学生たちは，3時間の記述式に加え，

[21]Ruskin College, *Ruskin College Oxford, Prospectus, 1969-1970*, 5.
[22]Pollins, *op. cit*, 1984, 55.
[23]Pollins, *op. cit*, 1978, 74-6.

持込可の４８時間の試験など，評価方法を自由に選択しえるようになった」と述べている[24].

労働者学生たちが教育の再編に際して要求したものは，カレッジ当局の学生への処遇の改正，あるいは学生たちの関心を考慮しないコース内容の改編，さらには彼らにとって苦役となる試験制度の多様化であった．すなわち，労働者学生たちが求めたのは，カレッジ当局が改編の対象としたような、何を学ぶか，よりもむしろ，どのように学ぶかに関わった学生たちの自治であった．

スタッフと学生の共同委員会，労働学ディプロマ・コース設置後，２，３年の間に他のディプロマ，すなわち，歴史，保育，開発学のコースが設置された[25]のであるが，それらはまた，教育内容と資格付与に関わるオックスフォード大学からの自律を企図するラスキン・カレッジのスタッフたちのイニシアティブにもとづくものであった．コースごとに試験方法は異なり，必ずしも労働学ディプロマ・コースの制度を踏襲したものではなく，いずれにしても，全てのコースにおいて筆記試験という選択肢が残され，いくつかの必須のテーマについては記述試験が課されていた．

カリキュラム編成を整えた 1973 年，学生たちの主導のもとでオックスフォード大学との会合がもたれ，同大学との共同のディプロマ・コースの改編について議論されたのであるが，同大学の試験制度にもとづいて，伝統的な３時間の記述式試験を課すことは維持された．このことを背景として，1974 年，スタッフと学生の共同委員会の協議にもとづき，経済，政治，歴史，社会学のいずれかを選択する社会科学ディプロマ・コース(Social Studies Diploma Course)が設置された．共同委員会の設立以降，カリキュラムに関わる学生側の初の関与のもとで設置されたこのコースは，オックスフォード大学に依存して提供された教育内容に相当する教育内容を含みながらも，他のラスキン・カレッジ独自のディプロマと同様，より柔軟な試験制度をもつものであった[26]．これらの変化によって，オックスフォード大学の規定にもとづく試験を受験するラスキン・カレッジの学生はごくわずかとなった．

---

[24]ibid, 70.

[25]先述の三コースに加え，1970 年度には歴史学のディプロマ(Ruskin College History Diploma)，寄宿制の保育士養成コース（Residential Child Care Course），受講生の特別な関心に合わせたコース(Courses For Special Interests)(『Ruskin College Oxford Prospectus 1970-1971』7)，1971 年度において，開発学のディプロマ・コース（Ruskin College Diploma In Development Studies）（*Ruskin College Oxford Prospectus 1970-1971*, 7)が設置された．

[26]Pollins, op. cit, 1978, 71. または Pollins, *op. cit*, 1984, 55-6.

学生たちの主要な要求は，ラスキン・カレッジ当局が行った多様なコースの設置，カリキュラム編成と同様,オックスフォード大学からのラスキン･カレッジの教育の自律を求めるものであったが，それはとりわけ，カレッジ当局の改編が教育内容のみに焦点を当てたものであったことに対し，試験制度を問題とすることを通じて行われたのである．学生たちのイニシアティブのもとで試験制度が改正されたこと，試験制度の改正に学生たちのイニシアティブが必要であったことから，カレッジ当局が試験制度には関心を払わなかったことを理解できると同時に，当局による教育の改編が労働学ディプロマ・コースの設置，それに続いたカリキュラム編成による教育内容の多様化を企図するものであったのに対し，労働者学生たちによるそれは，彼らの生活，あるいはそこでの経験から乖離した教育の方法に関わって，生活と教育の結合を求めるものであったと捉えることができる．

ラスキン･カレッジにおける 1960 年代後半から 70 年代にかけての変化，つまりは労働学ディプロマ・コースを契機とする労働と教育との結合，試験制度の改編による生活と教育の結合において，それぞれのイニシアティブがスタッフ，学生によるものであり，学生たちの教育内容に対する要求はほとんどなされず[27]，学生による労働と教育の結合，例えば教育内容としての労働の重視の要求といったようなことは行われなかった.このことは，学生たちがカレッジ当局によって編成される教育内容に対しては，どのような異議もなかったと捉えることもできる．そもそも，学習者にとって，教育内容が拡大され，学習し得る内容の選択肢が充実することについては，どのような異議もありそうにない．その意味で，カレッジ当局による教育の再編と労働者学生のそれは，矛盾，対立するようなものではない．

しかしながら，カレッジ当局による教育の改編が，学習者の生活や経験を含めて行われず，逆に，学生たちの教育の改編が具体的に学ばれる教育内容を対象に据えなかったという限りで，ときのラスキン・カレッジの教育と学習が離反したものであったことを示すものであった．

第３節　豊かな労働者の学習における労働と生活の分割不可能性

１．労働者教育の手段化における労働と生活の統合的把握

ラスキン・カレッジにおける教育の再編に際し，労働と教育の結合を企図したのは当の労働者学生自身ではなく，カレッジ当局であり，学生たちはむしろ、生活と教育の結合を

[27]ibid, 79.

希求した.「豊かな労働者」研究が指摘した労働者階級の変化，すなわち，労働に関わる事柄への手段主義的態度とそれにもとづく労働と生活の分離の視点からこのことを捉えれば，ラスキン・カレッジの学生たちもまた，労働と生活を分離したうえで，労働，あるいは労働者教育を手段化する「豊かな労働者」であったと考えることもできる.

ラスキン・カレッジにおける学生としての自身の経験から，R.D.シーリー(R.D.Sealey)は同カレッジにおける教育の問題点として，教育を階級間移動の手段とする競争主義的雰囲気が学生の間にはあり，このことが勝ち組と負け組を産出することで，結果として，階級関係を強化する面を持ち合わせていると指摘していた.ラスキン・カレッジに入学した時点から，学生たちはどのようなケアを受けることもなく，フル・タイムの学習に従事するための高い程度の自律と能力が求められるとし，ラスキン・カレッジの学生を二つのグループ，すなわち，自身が何者になり，どこに向かうのか，どのような人が彼らの目的のための踏み台としてカレッジを利用しているのかをあらかじめ認識している学生と，自身がどこに向かい，何を求めているのかを理解していない学生がいるとして，とりわけ前者が学生間の競争を生み出していると述べている[28]. シーリーは，後者に対してどのようなケアも行われないことを問題点として指摘しており，彼らでさえも巻き込まれざるを得ないラスキン・カレッジにおける競争主義的な雰囲気について，以下のように述べている.

> 「ラスキンに在学中，学生の間に存在する競争主義は増大し，大学の学籍を得るための選考の段階で，それは最高潮に到達する. 入学許可によって，通常，彼らは社会的な出自から切断され，彼らが生まれ育ったコミュニティにかつてのように受け入れられることは，決してないのである.」[29]

学生にとって，ラスキン・カレッジの教育を受けることは，かつての労働と生活からの分離を意味してもいたのである. 2年間のラスキン・カレッジにおける学生生活の後，工場労働や草の根運動に戻る者，さらに高等教育機関へ進学する者があり，とりわけ，シーリーは大学へ進学した者たちについて，「『粗忽なミドル・クラス』，知的なレフトとして，彼らの出自から離れたままで，階級関係の没落を非難することのできる安定した仕事に就く」

---

[28]Sealey, R, D, 'The Social Dynamics of Residential Adult Education: A Subjective View', Houlton, Bob(ed) *op, cit*, 1978, 39-40.
[29]ibid, 40.

と述べた[30]．その一方で，ラスキン・カレッジでの生活，アカデミックな生活のどのような形態にも適応しない人びとは，敗北感を感じながら再び，もとの労働者としての生活に戻っていく．彼らが経験する困難について，シーリーは以下のように述べている．

「彼らは知識人でも労働者階級でもない何かである．彼らは辺獄にいる．私たちはしばしば，ラスキンの成功を耳にするが，失敗や不適応についてはどうだろうか．誰がそれに耳を傾け，ケアをしているだろうか．」[31]

労働者階級の人びとにとって，ラスキン・カレッジの教育を受けることは，それが成功，失敗のいずれに帰結するにしても，二度と同じ場所に戻れないことを意味したのである．ラスキン・カレッジが年に一回発行していた学生新聞においては，そもそも同カレッジが寄宿制であることによって，在学中から卒業後にかけて，結婚生活が危機にさらされると指摘し，ラスキン・カレッジに夫，もしくは妻を同伴できないのであれば，配偶者が頻繁に，かつ快適にオックスフォードを訪れることができるような設備が必要だと指摘し，以下のように述べられている．

「一般的に必要とされていることは，既婚の学生が特別な問題を抱えており，可能であればどこであっても，結婚相手の介入が促進されるべきだという認識である．

多くの人々が，彼らの妻がカレッジを訪問することによってもたらされる利益，そして彼らが週末に帰省し，学校の仲間について語れば，妻はその場所に同一化し，夫の奇妙で新しい生活から閉め出されていると感じなくてもいいのだと実感するという事実を証言している．

私たち全ては，学習の結果として，今までとは異なる人々になり，ある人は再適応の時期がトラウマティックなものではないように願うだろう．もしその経験が完全に共有しえれば，確実にそれは抑制し得るだろう．」[32]

ラスキン・カレッジにおいて高等教育を受けることは，家庭生活をも危機にさらし，そ

---

[30]ibid, 41.
[31]ibid, 42.
[32]Morgan, Muriel, 'Problems-and Dangers for Married Students', *The New Epoch (The Annual Magazine of Ruskin College)*, 1966, 28-9.

れまでの労働と生活への再適応を困難にするものであったのである.

ラスキン・カレッジが提供した高等教育を階級移動の手段とし,大学進学をめぐって展開された学生間の競争は，労働者階級内に格差を生み，勝者には階級移動を，敗者にはかつての彼ら自身の文化にさえも適応できない状況をもたらした．このことは，そこでの教育が労働者階級の労働と生活とは乖離したものであり，むしろ階級関係を強化するものとしてもあったことを示している．ラスキン・カレッジは「粗忽なミドル・クラス」を産出する場として機能し，そこでの労働者教育の手段化は，労働と生活が教育と分離したものとしてこそ捉えられたのである[33]．先に述べた労働と教育の結合が学生のイニシアティブのもとでなされなかった理由は，このように，そもそも学生たちがかつての労働のための教育を求めていなかったことによっても説明できる.

しかしながら，ラスキン・カレッジの学生たちがかつての労働と生活から分離したかたちで教育を求めたことは，一方で，労働者階級の教育と労働，および生活の三者が密接に関連していることを反証してもいる．そうであればこそ，労働者教育は階級移動の手段とされ，ラスキン・カレッジに適応できなかった者は，かつての労働と生活に戻ることさえできなかったのである.

さらに，より積極的には，この労働者教育の手段化を通じて，労働者たちは彼らのシニシズムを克服しようとしたとも捉えられる．ラスキン・カレッジにおいて提供される教育内容はいずれも，労働者学生たちにとって，それまでの労働と生活からしてみれば目新しいものであったはずである．この意味で，労働者学生たちが教育内容の改編に積極的に関与しなかったことは，どのような教育内容であっても，彼らはそこに自己の経験との関連を見出しやすかったと考えることもできる．そこでの自己の発見によって，ラスキン・カレッジの学生たちはかつての労働と生活の場におけるシニシズムを克服しようとしたと捉えることができる.「豊かな労働者」による労働の手段化が，私生活中心主義を伴って労働

---

[33]ラスキン・カレッジにおいて提供される高等教育がどのように労働者階級全体，労働運動に寄与するものなのかについては，ラスキン・カレッジ創設以来の議題であった．ラスキン・カレッジの設立意図は，その学生に「いかなる種類の党派的なプロパガンダとは画然と隔てられた純粋な教育」を提供することにあり(Ruskin College, *The Story of Ruskin College*, Oxford University Press, Revised Edition, 1968, 4-9)，1927年にラスキンに在籍したJoseph. H. Smithによれば，この「教育に対するリベラルなアプローチが，いくつかの労働者階級組織に彼らが同カレッジに対する財政的な支援を継続すべきか否かについての疑問をもたらした．それらはメンバーに対するリベラルな教育に反対していたわけではないが，トレーニングが過度にアカデミックなものになることを恐れていた」(Smith, Joseph, H, *From Plough to College*, Richard Kay, 1993, 157) .

を生活から離反せしめたのに対し，労働者教育の手段化はあくまで労働と生活を分割することなく，社会の「豊かさ」，「寛容」を享受しようとするものであったのである.

2．労働と生活の分割不可能性にもとづく学習

労働者教育の手段化がもたらした労働と生活の結合は，その内実として，労働と生活の権力関係とでも言うべきものを内包するものであった.ラスキン・カレッジを捉える先行研究では，とりわけ，オックスフォード大学との関連において提供される高等教育が，階級関係の内外で労働者にどのように資するものであるのか，ということに焦点化されてきた.この階級関係を軸にする視点は，労働者の生活，家族生活を不可視にするものであった.ヒルダ・キーン(Hilda Kean)は，レジデンシャル・カレッジであったラスキン・カレッジに在籍していた男子学生たちは，その寄宿生活における日々の掃除や洗濯，食事の担当によって，「確実に，男性の性役割は学生たちが想定しなかったようなかたちで疑問に付された」ものの，同カレッジにおける生活の知的，あるいは政治的な側面，公的な役割のみが強調され，私的な生活に関わる男子学生たちの混乱は不可視にされてきたと指摘している[34].このように考えれば，先のシーリーによる労働者教育の手段化についての指摘もまた，階級関係を軸にする視点からなされたものであった.

1968 年からの 2 年間，ラスキン・カレッジに在籍したサリー・アレクサンダー(Sally Alexander)は，まず，経済学と政治理論に関するオックスフォードのディプロマ・コースに在籍したが，それらが自分自身の問題とかけ離れていると考え，設置されたばかりの歴史学コースへと所属を代えた.アレクサンダーが在籍した当時のラスキン・カレッジは，100 人の男子学生に対し，女子学生は二人のみで，男性中心主義的であったという.「男性たちは自身の技能，労働者としての自分自身，労働組合，『やつら』である雇用主について相変わらず語り，妻子を家庭に残して学生生活を行っていた」[35]. この意味で，ラスキン・カレッジの男子学生たちは，労働のみを彼らの生活から取り出し，労働と生活を分割する「豊かな労働者」であったとも捉えられる.

さらに，アレクサンダーは「ラスキン・カレッジに入学したまさに最初の夜，立ち上がって自己紹介するように設定された場で，私は主婦で，母親ですと言ったら，男性たちが

---

[34]Kean, Hilda, 'Myths of Ruskin College', *Studies in the Education of Adult,* Vol. 28, No. 2, 1996, 214.

[35]Alexander, Sally, 'Adult Learning Ruskin, 1968-70 The University of East London, 1992-', *Becoming a Woman,* New York University Press, 1995, 249-50.

笑った」[36]と回顧している．この男子学生たちの反応は，ラスキン・カレッジにおける生活の軽視と捉えられ，彼らによる労働と生活の峻別は，労働に第一義を付する労働中心的な志向，ハンナ・アレント(Hanna Arendt)の言う「労働する動物」，すなわち，経済的な側面を重視する人間観[37]によって構築される労働と生活の「権力」関係とでも言うべきものとして，存在していたのである．

この男性中心主義的な気風，労働と生活の間に権力的な関係が存在していたなかで，2年間，学習への欲求を持続させたアレクサンダーであるが，そもそも，彼女自身，シーリーが指摘したラスキン・カレッジにおける学生の分類において，ラスキン・カレッジに適応するうえでのケアが必要な学生であった．とりわけ，性別によって，より彼女はその状況に適応するうえでの困難を経験した．アレクサンダーは，女子学生であるがための困難と配慮が必要だった自信の欠如について，以下のように述べている．

「私の存在は異例で，その状況によって2年間，沈黙させられ，引っ込み思案だった．しかし，私の内気，自己の欠如，自信の無さは，炭坑夫，電気技師，事務職といったラスキンの学生たちの典型であった．学習に対する欲求，私が存在している政治的，経済的な世界を理解することへの願望も同様に自信のないものだった．」[38]

アレクサンダーは，この新たな境遇に自身を向かわせた経緯において，シーリーが指摘したような出自の生活からの断絶を経験している．女子学生がラスキン・カレッジに入学するということは，労働者階級からの断絶のみならず，性役割との決別を意味した．サリー・アレクサンダーは，入学以前に身の回りにいた労働者階級出身の男性たちについて，以下のように述べている．

「私は本当に彼らが好きだった．私の人生に関わることがしたかった．それが何なのかは分かっていなかったし，ラスキンの学生になったのは偶然だった．私にそれを薦める人がいたのである．私は何をするのか知らなかった．インタビューを受けに行き，エッ

---

[36]Alexander, Sally, 'interview', Wander, M(ed) *Once a Feminist:Stories of a Generation*, Virago, 1990, 87.
[37]ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま学芸文庫，1994(=Arendt, Hannah, *The Human Condition*, the University of Chicago Press, 1958).
[38]Alexander, *op. cit*, 1995, 250.

セイを書き，入学した．それは打ちのめされるほどの衝撃であった．それはまさに，トラウマティックな決定で，その決定はほぼ絶望から来たものだった．私はかつていた世界を離れなければならなかった．『女の子』でいることが好きではなかったし，それは正しいことではなかった．私はそのような人びとを好きではないということではない．私は今でも彼らが好きである．」[39]

しかしながら，女性であることはそもそも，労働からの分離を示していた．ラスキン・カレッジにおける学習は，翻って女子学生をして，労働と生活を統合的に把握し，両者の権力関係を認識することを可能にした．アレクサンダーはまた，卒業後，ラスキンでの生活を振り返り，以下のように述べている．

「ラスキンは私の人生を完全に変えた．それは私が自分自身を見出すうえでの助けとなった．」
「私はたくさんのことがしたかった．本当に．また，子どもを持ちたかったし，結婚もしたかった．私は未だに，それが女性にとっての本当の問題だと思っているし，両方のことをするのは恐ろしく難しい．」[40]

確かに，1960年代後半から70年代にかけて，アレクサンダーが女性の問題を対象化し，その解決を志向するうえで，ときの女性解放運動の台頭がもった影響力を等閑視することはできない．学習という経験は，ラスキン・カレッジ内にのみ存在したのではないはずである．しかしながら，女性が自己への信頼を獲得し，労働と生活の双方における自身の要求を実現させることの困難を見出すうえで，ラスキン・カレッジがもった意義も否定しえないのではなかろうか．その困難の具体的な解決手段が，ラスキン・カレッジにおける教育内容のうちに含まれていなかったとしても，女子学生が自身を規定する社会的，歴史的な状況を理解することは，女性に与えられる労働と生活における制約を理解し，その制約のうちにありながらも，労働と生活の分割不可能性のなかで「自分自身を見出す」ことであった．その理解において，ラスキン・カレッジは重要な学習の機会となったのである．

---

[39]Alexander, *op. cit*, 1990, 85.
[40]ibid, 91.

3．生政治の場としてのラスキン・カレッジ

ラスキン・カレッジの変化は，1968 年における学生とスタッフの共同委員会の設立と労働学ディプロマ・コースの設置として現れた．スタッフの主導のもとで設置された労働学ディプロマ・コースは，いわば，学習者が経験する労働と教育の結合を意図するものであった．一方で，民主的なカレッジ運営を企図して設立された共同委員会において，ラスキン・カレッジが提供する教育内容よりはむしろ，オックスフォード大学と連携して提供されていたディプロマ・コースにおける試験制度が労働者階級出身である学習者の経験にそぐわないことを対象化した労働者学生たちの教育の改編は，1973 年を起点とする試験方法の多様化，オックスフォード大学からのラスキン・カレッジの自律に帰結した．このことは，ラスキン・カレッジが提供する教育のありようが，学習者の生活，および経験と結合したと捉えられるものであった．

これら教育と労働，教育と生活のそれぞれの結合が，ときの労働者の変化，「豊かな労働者」による労働と生活の分離に対応するものなのかについて，ラスキン・カレッジにおける教育を対象化する学習者の言説によって検討を行った結果，第一に取り上げた R.D. シーリーの評価は，とりわけ，ラスキン・カレッジ卒業後のさらなる高等教育機関進学をめぐる学生間の競争主義的雰囲気が同カレッジにはあり，その競争のなかでの敗者，あるいはそもそも同カレッジに適応できない者への配慮が欠如していることを指摘するものであった．大学への準備教育機関としてのラスキン・カレッジの手段化は，階級間移動への欲求にもとづく競争主義的雰囲気を形成し，結果的に階級関係を強化するものとしてある．しかしながら、このラスキン・カレッジにおける労働者教育の手段化とそこでの学生間の競争が生み出す結果は，ラスキン・カレッジにおける教育がその後の労働と生活を左右するという意味で，労働と生活の分かちがたい関係を示すものであった．豊かな労働者の労働の手段化，私生活中心主義がシニシズム，「豊かな社会」，「寛容な社会」における期待と失望のなかで労働と生活を分離しようとするものであったことに対し，ラスキン・カレッジの労働者学生による手段化は，同様の期待と失望を共有しながらも，教育をより自己の経験に近づけるという意味での教育から学習への展開を志向するものであり，ラスキン・カレッジにおける労働者の経験は，労働と生活を分割することなく，そこでの教育の意義を見定めるものとしてあったのである．

しかしながら，この視角における労働と生活は，両者の権力的な関係を内包するものではなかった．それを対象化し，学習を通じた自己に対する信頼の獲得によって，課題とし

てではあるが，労働と生活の両者の権力関係を含む労働と生活の分割不可能性を経験したのは，当時のラスキン・カレッジにおける生活に対する軽視を対象化しえた者であった．この意味で，「豊かな労働者」の手段主義的志向は男性労働者のものであった．彼らが労働を手段化し，私生活，家庭に避難所を求める一方で，労働を手段化することも，家庭を避難所とすることも不可能であった女性労働者が存在していたのである．男性労働者の生活と，女性労働者の生活は非対称なものであった．この非対称な関係，労働と生活の分割に抗い，両者の分割不可能性を基盤として，すでにあるそれらの権力的な関係を変化させる学習の契機が，労働の手段主義的傾向をもつ「豊かな労働者」の出現として指摘された当時のラスキン・カレッジには存在していたと考えられる．

ミシェル・フーコー(Michel Foucault)は，国民という群れ全体の繁殖や出生率・健康などの増進として働く、性的なものに焦点を当てた権力を＜生―権力＞と呼び，以下のように述べている．

「資本主義が保証されてきたのは，ただ，生産機関へと身体を管理された形で組み込むという代価を払ってのみ，そして人口現象を経済的プロセスにはめ込むという代償によってのみなのであった．しかし資本主義はそれ以上のことを要求した．資本主義にとっては，このどちらもが成長・増大することが，その強化と同時にその使用可能性と従順さとが必要だった．資本主義に必要だったのは，力と適応関係と一般に生を増大させつつも，しかもそれらの隷属化をより困難にせずにすむような，そういう権力の方法だったのである．」[41]

フーコーはこの＜生―政治＞，とりわけ，それまで私的な空間として政治から排除されてきた性的なものにおける権力の作用を明らかにすることによって，権力の働く場としての政治の射程を拡大したのである．ハンナ・アレントが指摘した「労働する動物」という人間観もまた，人間の生に対する権力の作用として捉えられうる．

そもそも，権力という語が指し示す内容は極めて多義的，競合的である．その権力の多義性を受け止めることが，その磁場を解釈し，抵抗するうえで有意義だとし，杉田敦は以

[41]ミッシェル・フーコー（渡辺守章訳）『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社，1986（=Foucault, Michel, *La Volonté de Savoir, Volume 1 de Histoire de la Sexualité*, Gallimard, 1976), 178.

下のように述べている.

「解放が（複数形のそれとしても）もはや成りたたないことを受け容れ，人々の自由な抵抗をあらかじめ予定された方向に向けるような手立ては一切ないことを認めることから出発すべきではないだろうか．個別的な抵抗がやがて一つの像を結び，さまざまな打算や妥協や力関係によって，何らかの束の間の権力空間が新たに成立するかもしれないが，それをあえて普遍的なものと呼ぶ必然性はどこにもないように思われる．そうした権力空間の内部にも必ず存在する非対称性は，すぐにまた抵抗を呼び興すことであろう.」[42]

権力の多義性はまた，権力の働く場がまた，多義的であることを示し，それに抵抗する方法もまた，多様である．フーコーも，＜生—権力＞の技術は「社会体の全てのレベルに存在し，かつ極めて多様な制度によって用いられていた」と述べていた[43]．その多様な権力に対峙する多様な抵抗のなかで形成される空間内部の不断の抵抗，全体性に抗う多元性を超え，想像力を拘束する境界への開放性[44]にもとづく抵抗として，労働と生活の境界にそれらの分割不可能性を対峙させる学習が，ラスキン・カレッジには存在したと考えられる.

当時のラスキン・カレッジにおける学習は，労働者階級の「ブルジョワ化」仮説から「豊かな労働者」の出現へと展開した労働者の変化をめぐる言説を支持するものではない．しかし，労働と生活の分割不可能性にもとづくことを通じて，再び伝統的な労働者階級意識を形成するものでもない．松村高夫は，経済決定論的，あるいは文化決定論的な階級意識形成の把握のいずれにも与することを拒否し，さらには「差別される他の集団との対比によって階級意識が形成・再生産される点」を強調して，「階級意識は生産過程に規定されて一様に形成されるのではなく，『文化』・価値にも規定され，それが発現する『場』によって多様性を、したがって抵抗と従属，連帯と差別といった諸矛盾を含みながら形成された

[42]杉田敦『権力』岩波書店，2000，102.
[43]フーコー，前出，178.
[44]杉田敦は，内部の同質性と他者性の排除をもたらす境界が今日的に流動化していると指摘し，国家からの「解放」ではなく，境界の「開放」によって，国民，結社，「個人」といった人為的な単位を選択することの意味を不断に問い続ける必要があると主張している（杉田『境界の政治学』岩波書店，2005).

のである」[45]と述べている．教育と学習の離反を確かに経験しながらも，その視点は，男女間にあった離反，権力関係，さらには労働と生活の離反，具体的には，生活に対する軽視を対象化するものではなかった．学習と離反していた教育を対象化する「場」とは異なる「場」が，ラスキン・カレッジには存在したように思われる．

ラスキン・カレッジが多様性を含みながら意識が形成される「場」として，どのように「階級意識」を形成したのかは，先の労働と生活の分割不可能性にもとづく学習の価値が男性労働者と女性労働者にどのように共有されたかを明らかにすることによって，より理解しえるものである．以下の章では，ラスキン・カレッジが提供する教育を対象化し，カリキュラム外において，労働者学生の生活と労働における経験にもとづく学習を組織化した実践としてのヒストリー・ワークショップについて，その発足経緯と活動内容，および方法の意義を検討する．

[45]松村高夫「労働者階級意識の形成」『シリーズ 世界史への問い 4 社会的統合』岩波書店，1989，243.

第2章　ヒストリー・ワークショップの発足

本章の目的は，「新しい歴史学」と称された社会史研究の英国における展開を踏まえ，ラスキン・カレッジにおけるヒストリー・ワークショップ（History Workshop）の設立について整理し，それがどのような労働者の学習を構想したのかを検討することである．

1960年代，欧米の歴史学界で台頭してきた社会史研究は，旧来の実証史学に対する反発から生じ，フランスではアナール学派，ドイツでは社会構造史，英国では労働史を特徴とした[1]．英国における社会史の展開は階級社会を背景として，労働史，民衆史，あるいは「下からの歴史」として台頭した経緯をもつ．そのなかで，労働者個人の生活世界における経験，生活に根ざした教育活動を通じ，実践的に社会史研究を行ったのがラスキン・カレッジにおけるヒストリー・ワークショップであった．同ワークショップは1966年，ラスキン・カレッジにおいて，同カレッジのテュータであったラファエル・サミュエル(Raphael Samuel)を中心に発足したものであるが，その意義の検討に先立ち，英国における社会史と労働運動史，また，労働史の関係を整理しておきたい．

ところで，序章で述べたように，ヒストリー・ワークショップの教育と学習の相に焦点をあてる先行研究はなく，とりわけ，日本での教育研究における咀嚼は十分でない．多様でありえる咀嚼の一つとして，「教育の生活化」[2]という課題に示唆するものという視点から，ヒストリー・ワークショップの活動を捉えたい．

なお，本章では資料として，ヒストリー・ワークショップの活動記録としてまとめられた『*History Workshop A Collectanea 1967-1991*』(Samuel. Raphael (ed) History Workshop25, 1991)を中心に取り上げる．

---

[1]英国における社会史の展開を概説するものとして，川北稔「社会史の方法—イギリス社会史を中心として—」（樺山紘一編『歴史学』日本評論社，1977），松村高夫「イギリスにおける社会史研究」（『講座　西洋経済史Ⅳ　経済史学の発達』同文館，1979）がある．

[2]戦後教育における「生活化」言説の社会的背景の理解として，戦前，戦後を通じた教育概念の見取り図を描いた磯田一雄は，社会的文脈が異なっていても，教育は常に「生活化」を志向してきたことを明らかにしている（磯田一雄「戦後教育における『生活化』の問題—その教育史的背景に関する覚書—」『教育研究』第14号，1969）．さらに小川太郎は，「生活と教育の結合」に際して，戦後の新教育は労働の視点を欠如してきたと批判し，「生活の現実とたたかいの教材化」の必要を主張した（小川太郎「戦後教育における『生活と教育の結合』の問題」『教育学研究』Vol. 13, No. 1, 1964）．労働を含めた生活の全体をいかように教育の対象，内容とするのかは，教育研究における古くて新しい課題である．

第１節　「はざま」を捉える思想としての社会史

１．労働運動史から労働史へ

英国における社会史研究の系譜は，労働運動史研究にその端緒を求めることができる．フランスにおける社会史研究の展開がアナール学派の形成にその多くを負い，地理学，社会学，経済史を主要な柱とする学際的，統合的なものであったこと[3]に比して，英国における展開はシドニー・ウェッブ(Sidney James Webb)とベアトリス・ウェッブ(Martha Beatrice Potter Webb)，あるいはG.D.H.コール（George Douglas Howard Cole）らの伝統的フェビアン主義に対する批判として始められた．また，英国における社会史研究はフェビアン主義的な労働者像を超え，従来の労働者をめぐる研究，具体的には労働者状態史，労働組合史，労働運動史，労働者の思想史のように，細分化され，その相互連関を問われることのなかった諸研究を批判的に統合し，統一的労働者像を描き直そうとする流れのなかに現れた．

ウェッブ夫妻は，労働者を労働組合運動によって形成された「産業民主主義」による地位向上を享受する存在，いわば体制内化した存在として記述した．これに対し，E.J.ホブズボーム（Eric John Ernest Hobsbawm）らを中心にして1960年に設立された「労働史研究協会（The Society for the Study of Labour History)」は，安川悦子によれば，資本と賃労働の等価交換のみに関心を払う労働者，労働組合運動のありようのみならず，それらが体制変革に参画するさまを描き出すことを企図していたという[4]．

この安川の指摘は，賃労働の構造と労働者意識の形成の連関を問うホブズボームの視点を中心にして，労働史研究協会を評価したものである[5]．これに対し，近藤和彦は体制変革に資する労働者の形成，労働組合主義に対する批判そのものも同協会にはあったとし，その特徴を「社会史的パースペクティブ」に求め，具体的には「労働運動の諸制度に関心を

---

[3]竹岡敬温『『アナール』学派と社会史―「新しい歴史」へ向かって―』ミネルヴァ書房，1990，248-270.

[4]安川悦子「労働運動と階級意識―イギリス労働史研究の旋回―」『思想』520号，1967，103.

[5]飯田鼎もまた，英国における労働史の中心的な人物として，ホブズボームをしばしば取り上げており（飯田「イギリス労働運動史研究の動向―ホッブズボウム「イギリス賃労働史研究」によせる―」『三田学会雑誌』62巻3号，1969)，労働史研究協会についてもまた，ウェッブ夫妻批判をその中心的な特徴として取り上げている（飯田「イギリス労働運動史研究の最近の動向―労働史研究会（The Society for the Study of Labour History）の活動について―」『三田学会雑誌』56巻8号，1963).

狭く限って，より広い社会的コンテクストおよび文化的風土の問題を排除するならば，われわれは原因を視野の外において結果だけを見ることになろう」と述べた E.P. トムソン（Edward Palmer Thompson）に注目している[6].

ホブズボームとトムソンは労働組合運動をいかように研究対象として把握するのか，といった差異はあるものの，従来の体制内化した存在としての労働者像の脱却という意味で，共通の関心をもっていた．松村高夫によれば，労働組合史から労働史，社会史への展開はトムソンやホブズボームといったマルクス主義史家と非マルクス主義史家の間の緊張を含みつつ進行したという[7]．そうであれば，マルクス主義史家内における差異は英国における社会史の展開全体のなかで，労働組合運動を相対化しつつ，労働者の労働と生活の全体を捉えることを可能にしたと思われる．

2．労働史から「はざま」を捉える思想としての社会史へ

社会史が一研究分野としての地位を明確にした事由のひとつとして，松村高夫は 1968 年のランカスター大学における社会史コース，ウォーリック大学における社会史研究所の設立を挙げている[8]．とりわけ，後者の初代所長を勤めたのが先の E.P. トムソンであり，松村は反合理主義，反啓蒙主義に関わるヨーロッパの思想の系譜のなかにトムソンを位置づけ，存在と意識，上部構造と下部構造の分離を批判し，「法則的理解ではなく，人間，個

---

[6]近藤和彦「民衆運動・生活・意識―イギリスの社会運動史研究から―」『思想』630 号，1976．ここで近藤は，安川による労働史研究協会の「レーニン的課題設定」という特徴づけは「読みこみすぎ」だと述べている（59）．

[7]松村高夫「イギリスにおける社会史研究とマルクス主義史学」『歴史学研究』532 号，1984，17．

なお，1956 年のソビエト連邦によるハンガリー侵攻に対する批判に失敗した英国共産党は，トムソンをはじめとするマルクス主義史家を失い，残留したのがホブズボームらであった．トムソンとホブズボームのいずれから社会史の特質を見出すのかは，英国共産党に対するスタンスに関わるとも捉えられる．

[8]松村高夫「イギリスにおける社会史研究」前出，1979，158．そこで松村は，英国における社会史の潮流として，経済史，政治史，文化史などに細分化された歴史像の全体史の復元，軽量経済史化に伴って非人間化しつつある歴史像の修正，「下からの歴史」による従来の歴史像への異議申し立てといった三つのベクトルをもっていたと指摘した（152-4）．

また，後に松村はウォーリック大学の社会史研究所が 1983 年からの五カ年計画として発行した『学術計画』を取り上げて，英国における労働史研究が現行の社会史的方法，すなわち生活史・風俗史研究を強調する風潮のなかで，「国家権力も含めて，権力問題を方法的に組み込むことに未だ成功していない」と批判的な指摘をしている（松村「イギリス労働史研究の社会史的傾向-ウォーリック大学社会史研究所『学術計画』紹介―」『労働史研究』創刊号，1984，29）．

人の歴史に果たした役割を再評価し，しかも偉大な政治家のような個人ではなく民衆の歴史への参加を，固定的ではなく変化する社会との弁証法的関連で解明した」と評価している[9].

また，松村はこのトムソンによる歴史認識の思想的な背景であったジャンバッティスタ・ヴィーコ（Giambattista Vico）の認識論について，英国における社会史の潮流とは別に，さらに三つの潮流を生んだとし，E.H.カー（Edward Hallett Carr）に連なる歴史的人間主義の流れ，アナール学派の系譜，そしてポスト・モダンの流れに整理している[10]．松村は，英国における社会史の展開とポスト・モダンの潮流を異なる流れとして捉えているように，英国の社会史におけるポスト・モダンな性格を認めておらず，むしろ，それにもとづく歴史認識，歴史哲学における「言語論的転回」について，歴史的事実の究明を実証的に行うことの否定につながるとして批判的である[11].

一方，川北稔は英国における社会史の展開について，瑣末な付随現象は説明しても，根本原因を提示することが少ないこと，独自の時代区分論を十分に示してはいないこと、さらには，国際関係を取り込むことの三点を超克すべき課題として指摘しているものの，社会史をとりまく環境の伝統的な特質として,「経済史と社会史のアンサンブルを求めようとしている」ことを指摘している[12]．社会史はその成立以前の英国における歴史学の特質で

---

[9]松村高夫「歴史認識論と『歴史認識問題』」『三田学会雑誌』98巻4号，2006，19-20.
[10]同前，1-22.
[11]同前，21-2，31-2.
また，松村はマルクス主義史学に代わる「言語論的転回」を英国の社会史研究のなかで提起したステッドマン・ジョーンズの「チャーチズム再考」，階級概念の否定を批判的に検討している（松村「『階級』概念は時代遅れか？—イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討—」『法学研究』77巻11号，2004.
[12]川北稔「経済史と社会史のはざま—イギリスにおける「社会史」の成立—」（『社会経済史学』59巻1号，1993.
なお，この経済と文化の「はざま」を捉える視点は，バーミンガム現代文化研究センター（the Birmingham Centre for Contemporary Cultural Studies）を中心に1960年代後半に展開された英国における文化研究，カルチュラル・スタディーズと共有するものである．文化研究であるカルチュラル・スタディーズは旧来のマルクス主義における「経済主義」に対する批判から展開されたが，草創期にはその中心的な対象に労働者階級の文化，生活を据え，必ずしも彼らの経済的営為としての労働を等閑視するものではなかった．その意味で，カルチュラル・スタディーズもまた，川北による英国における社会史の展開に対する批判の第一の点，すなわち，些末な事象を説明するものの，その根本原因を説明しえないという批判を被った．また，カルチュラル・スタディーズと歴史学研究を結びつけるうえで大きな役割を担ったE.P.トムソンによる大著,『イングランド労働者階級の形成』がカルチュラル・スタディーズの展開にかなりの程度，影響を与えたとされ，それゆえに，英国における社会史の展開について，歴史という一カテゴリーとして，カルチュラル・ス

あった政治史や経済史と、人口・家族史，都市史，庶民生活史といった，いわば文化史を複合的に捉えようとする伝統を継承したうえで展開されてきたという意味で,「はざま」を捉えるものであったというのである.

さらに，長谷川貴彦は当初，社会主義やフェミニズム，多文化主義などの影響を受けながら始められた社会史研究の発展に内在した矛盾として，分析対象の示す多様性が明らかになるにつれ,「社会変動のもたらす急激な断絶性が否定されて連続性が強調」されたこと,「社会史パラダイムのもとで量産されるミクロな実証研究が」「社会変動を説明する因果関係を構築するにあたって，社会集団・社会運動・社会的利害といった物質的利害に基礎をおく社会的カテゴリーに対する素朴な信頼」を動揺させることになったと指摘している[13]. この指摘は，川北が指摘した英国の社会史研究の超克すべき課題と同様のものであろう.

また，長谷川は松村と異なり，社会史研究の状況に対するポスト・モダニズムの影響を認め，英国の社会史が進歩主義史観やマルクス主義史観の見直しを迫る修正主義と，歴史研究の主体レベルでの主観主義的な歴史解釈に道を開き，客観的な歴史解釈の不在という歴史認識上の根本問題を突きつけていると述べている．さらに，社会を物質的で客観的な存在と捉えるアプローチそのものに疑問を提起する構築主義のなかで,「経験」にもとづいて実証的な研究を重ねる潮流として，英国の社会史研究の展開を整理している[14].

このようにみてくると，経済と文化のはざま，修正主義と構築主義のはざまを捉える英国の社会史研究の特質は「経験」に対する拘泥であると捉えられる．前項で述べた，マルクス主義史家による体制内化した労働者像からの脱却もまた，労働者個々の経験にもとづくものであったのではなかろうか．その労働者の経験を歴史研究のみならず，教育と学習

タディーズの枠内に包含されるものと捉えることも可能ではある.

しかしながら，英国におけるカルチュラル・スタディーズの展開を整理するグレアム・ターナー（Graeme Turner）はカルチュラル・スタディーズと社会史の差異について，社会史側がカルチュラル・スタディーズの理論的関心に懐疑的であったこと，社会史が唯物論的イデオロギーよりも人間中心主義に共鳴したこと，さらには,「新しい社会史は経験を重視するのでエスノグラフィー研究とは矛盾しないが，その経験主義はテクスト分析の構造主義／記号論的な発想の対極に位置していた」ことを指摘している（ターナー（溝上由紀他訳）『カルチュラルスタディーズ入門　理論と英国での発展』作品社，1999（=British Cultural Studies: An Introduction Second Edition, Routledge, 1996），232）．このことは，英国における社会史の展開における経験の重視を示すものであろう.

[13]長谷川貴彦「修正主義と構築主義の間で—イギリス社会史の現在—」『社会経済史学』70巻2号，2004，85-6.

[14]同前，86-8．なお，長谷川が具体的にそれらの「間」が顕著に現れている主題として,「階級」「ジェンダー」「都市」を取り上げている(88-94).

の相において対象化した実践として，ヒストリー・ワークショップは英国における社会史研究の展開のうちで独自性をもつものであったと考えられる．

第２節　学習活動としてのヒストリー・ワークショップ

１．教育のオルタナティブとしての歴史研究

ラスキン・カレッジ当局による階級性についての把握は，前章で述べたように，学習者である実際の労働者たちの認識と距離があった．その距離の存在を背景として，ラスキン・カレッジのテュータであったラファエル・サミュエルは同カレッジにおいて，1966年，ヒストリー・ワークショップを発足させた[15]．ヒストリー・ワークショップは当初，労働者階級の歴史，民衆史の究明といった学術的な活動であるとともに，労働者階級の男女に対する「オルタナティブな教育」の機会としてあった．サミュエルは同ワークショップの出発点について，以下のように述べている．

「成人学生に課される試験制度と侮辱への反抗として始められた．それはキャンパス内において，オルタナティブな教育実践を作り出すための試みであり，ラスキンの学生，すなわち労働運動，労働組合運動から派遣された労働者階級の男性と女性が研究に参加することを促進し，彼らが歴史を理解するうえでの独自で，不可欠の有利な立場にあることを彼らに示すことによって，彼ら自身の歴史を構築することを目的とした．」[16]

サミュエルは草創期のヒストリー・ワークショップの性格について，プレブス・リーグの結成に帰結する1909年の学生たちのストライキと同様のものであると述べ，ラスキン・カレッジ当局に対し，学生の特徴，すなわち成人労働者であることに一義的な関心を払うべ

---

[15]なお，サミュエルはヒストリー・ワークショップの名の由来について，1950年代後半に始められた「シアター・ワークショップ（Theatre Workshop）」にあるとし，同ワークショップについて，「実験的であること，大衆的であること，音楽的であること，そして，ドラマティックであることの刺激的なアマルガムであった．1967年までにシアター・ワークショップは消えてなくなっていたが，それまでの間に，『ワークショップ』という言葉を用いていた人はいなかったと思う．数年のうちに，それはカウンター・カルチュアの主導者たちの間で一般的に使われる言葉になった」と述べている（Samuel, Raphael(ed) *History Workshop A Collectanea 1967-1991*, History Workshop25, 1991,97).

[16]Samuel, Raphael. 'History Workshop, 1966-1980', Samuel(ed) *People's History and Socialist Theory*, Routledge&Kegan Paul, 1981,410.

きだと指摘した[17]．すなわち，ヒストリー・ワークショップは第一に，カレッジ当局によるカリキュラム上の形式的な「階級性」の顕示を超えて，より実質的な労働者階級の視点にもとづく労働者教育の場を創出する試みであった．

具体的に，ヒストリー・ワークショップの名を冠して行われた活動は二つの形式に分類することができる．第一には，正規のカリキュラム外で教育と研究，および学習のオルタナティブをつくろうとする試みとして始められたものである．ヒストリー・ワークショップの活動はこの形式，すなわち，非公式にカレッジ内で行なわれた学生を対象とするセミナーに端を発している．確かに，労働史，社会史，社会学の視点から，1966 年の 10 月から 11 月にかけて，「19 世紀におけるイギリスの田園地方」と題されて行なわれた第 1 回のセミナー（college seminar）は，学生たちの経験を教育と学習の中心に位置づけることを企図する内容ではなく，むしろ 19 世紀の歴史についての再評価，とりわけ，19 世紀当時の文献を再読することに焦点を当てるものであった．しかしながら，都市部ではなく田園地域について，一次資料から再評価をするという第 1 回のセミナーの志向は，活動の展開を通じて，カレッジ当局が軽視していた労働者である学生たちの経験と出自の地方に関する知識が 19 世紀，20 世紀の歴史を研究するうえで極めて重要なものであること，歴史は二次資料，あるいは三次資料に依らず，一次資料から明らかにするべきものであること，そして，その一次資料収集の際，当時の資料を保存する施設に対して，労働組合，労働運動の活動経験をもつ学生たちがアクセスするうえで優位な立場にあることが議論された[18]．

さらに，1967 年 3 月，ラスキン・カレッジの学生たちに調査，研究という考えを示すことを企図して，「チャーチストとともにある日」と題し，学内外を問わずに参加を呼びかけた第 1 回のワークショップ（national workshop）を開催した．この学外にも開かれたヒストリー・ワークショップがその第二の形式である．2 回目以降のワークショップでは学生たち自身も調査報告を行い，1969 年の第 4 回，1971 年の第 5 回ワークショップは，主に学生たちによる報告を中心に開催された[19]．

これらの展開を受け，ラスキン・カレッジが正規のカリキュラムとして提供する歴史教育においてもまた，オックスフォード大学からの自律を制度的に確立する 1960 年代，70 年代を通じて顕著な再編が見られる．当初，歴史学はオックスフォード大学ディプロマ・

---

[17]Samuel, Raphael, 'correspondence', *History Workshop Journal*, Vol. 11, 1981, 199-200.
[18]Samuel, Raphael (ed) *op. cit*, 1991, 67-8.
[19]ibid, 95-6.

コースを修了するための選択科目とされていたものの，1969年度の労働学ディプロマ・コース設置を通じ，1970 年度には歴史学ディプロマ・コース（Ruskin College History Diploma）が開設され，コース概要として，以下のように述べられていた．

「これは，大学の特別ディプロマの基準に相当するものを提供する2年間のコースである．その目的は，歴史教育や歴史調査に興味を持つ人々の関心に応えられるような，英国の歴史研究に関する基礎的なトレーニングを提供すること，個々の学生によって志される独自の性格を持つ作業を可能にし，特別の関心にもとづくトピックを検討するような学習を促すこと，そして歴史学と社会科学各々の学問領域相互の関連を確認することである．」[20]

オルタナティブな教育を求めるヒストリー・ワークショップの活動は正規のカリキュラム外にあったが，理念上ではあれ，正規のラスキン・カレッジが提供する歴史教育そのものを再編するものとなった[21]．先に述べたプレブス・リーグが，最終的にはラスキン・カレッジと袂を分かつことでストライキの決着を見せたのに比して，同ワークショップはその実質的な「階級性」の希求をカレッジ内で行ったと捉えることができる．

さらに，ヒストリー・ワークショップはラスキン・カレッジにおける教育のありように関わる変革を求めたのみならず，労働者自身による労働者階級の歴史の究明を促進した．1970 年から 1974 年にかけて，同ワークショップの学習成果として刊行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット History Workshop Pamphlets』（全13巻）の創刊号の序文では，以下のように述べられている．

「これらは労働者学生の手によるもので，集合的に，過去と現在両者の対話をもたらす

---

[20]Ruskin College, *Ruskin College Oxford, Prospectus, 1970-1971*, 7.

[21]ヒストリー・ワークショップの発起人であるラファエル・サミュエルによれば，同ワークショップは，ラスキン・カレッジ当局との関わりを良しとしないが，同カレッジそのものとは密接な関わりがあるとして，「1967 年から 1980 年の間に開催された，最初の 12 回の全国的なワークショップは同カレッジで開催され，1971 年から 1974 年の間に発行されたワークショップ・パンフレットの全ての著者はラスキンの学生であった．ヒストリー・ワークショップの初期の編集者のうち，4 人はラスキンのワークショップ・グループから選ばれ，ヒストリー・ワークショップの名で発刊した本はまた，かなりの比重でラスキンでの作業によるものであった」（Samuel, Raphael, 'Report, Stephen Yeo-or The Ruskin Election', *History Workshop Journal*, Vol. 28, 1989, 208）．

ための試みとしてある.私たちは,これらによって,この国の様々な場所で働く男女が,彼らの歴史に関わる記述を学問の世界に任せっきりにすることも,失われるがままにすることもなく,彼ら自身の手に取り戻すことを望んでいる.」[22]

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の主旨を引き継ぎ,1976年に創刊された『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル (History Workshop Journal)』では創刊号におけるその編集意図として,人々の歴史に対する関心とは裏腹に歴史に関する知識が学問的世界によって占有されている現状と,そのことによって教育と研究が乖離している状況を指摘していた[23]. さらに,教育を抑圧的なものとして経験してきた労働者階級の男女がテュータとともに,共同学習者とでも言うべき仲間意識によって,両者の間に存在する権威的な関係を克服することが目指された[24]. すなわち,ヒストリー・ワークショップはその活動を通じて,それまで不可視であった歴史における労働者階級の視点,実質的な意味での「階級性」を顕示することを目的としつつ,階級性に起因する権力関係を解体することをもまた,その目的としていたのである. したがって,ヒストリー・ワークショップの活動は第一に,労働者階級の視点にもとづく教育と研究の結合としてあったとすることができる.

2. 教育と研究の学習による統合

労働者階級の視点を顕在化させる手段としての歴史の究明において,ヒストリー・ワークショップはラスキン・カレッジにおける教育のありように対する変革を希求し,広く労働者自身が歴史を自身の手に取り戻すことのみならず,よりラディカルに歴史,過去を現在の視点で捉えることの意味に対するオルタナティブを示そうとする試みとしてもあった. ヒストリー・ワークショップ発足の際の呼びかけ文では,以下のように,同ワークショップでの学習の意義が述べられていた.

「私たちは,歴史がインスピレーションの源であり,現在を理解する手段であり,現在を捉えるにあたって,不可欠の最も有利な視点であると確信している. したがって,私

[22]*History Workshop Pamphlets* No.1,(A Glossary of Railwaymen's Talk-A Compendium of Slang Terms Old and New used by Railmen),1970, I.
[23]Editorial Collectives, 'Editorials', *History Workshop Journal*, Vol.1, 1976, 2.
[24]Samuel(ed),*op.cit*, 1991, I.

たちは，歴史を人々の共有財産とし，人々が自己と生きている社会を理解することができるようにすることが重要だと考える.」[25]

歴史をいかに把捉するのか，過去の事柄を現在に生きる労働者がいかように理解するのかに関わる立場を明示すると同時に，ヒストリー・ワークショップは労働者の学習としての側面を示した[26]．同ワークショップは労働者階級の視点，学習者の経験を中心に位置づけることによって，歴史をめぐる教育と研究，学習の三者を統合する試みとして存在していたのである．さらに言えば，その三者の統合において，学習の視点，学習者の経験の重視，換言すれば，学習者中心主義とでもいうべき特徴が最も強調されたことから，教育と研究を学習，あるいは学習者の視点で捉え返すものであったと考えられる.

ヒストリー・ワークショップにおける学習者中心主義とでもいうべき特徴については，人々によって「共有財産」とされるべき歴史，それを通じて理解される「自己と生きている社会」を考えることによって，捉えることができると思われるが，それらに関するワークショップ自体の見解のようなものは公表されていない.

そのためか，ヒストリー・ワークショップの方法論をめぐる論争がラスキン・カレッジ，ヒストリー・ワークショップ内部でも展開された．デヴィッド・セルボーン(David Selbourne)は，それまでのヒストリー・ワークショップの活動において，方法論的な検討，とりわけ，ヒストリー・ワークショップの歴史を捉える方法がどのような意味でマルクス主義的であり，どのような意味でマルクス主義的でないのかの検討が必要だと述べ，ヒストリー・ワークショップが抱える傾向として，社会史の経済史からの切り離し，「疑似経験主義」的な研究方法と理論の欠如，過去の政治的経験のセンチメンタルな理想化，過去の郷愁的な強調による緊急の現実的課題からの逃避を指摘している[27].

これらの指摘に対して，ラファエル・サミュエルはまず，方法論的な検討，その誤りを議論するよりもむしろ，文化的，政治的な実践として，ヒストリー・ワークショップを捉える方が有意義だと述べた．具体的には，同ワークショップのそれまでの展開を跡付け，

---

[25]Samuel(ed), *op. cit, 1991, 112.*

[26]ケン・ジョーンズ (Ken Jones) は，草創期のヒストリー・ワークショップについて，「学術的なものである同様に，教育的なプロジェクトであった」と述べている (Jones, Ken, Against Conformity: Raphael Samuel, *Changing English*, Vol.5, No.1, 1998, 18) .

[27]Selbourne, David, 'On the Methods of the History Workshop', History Workshop Journal, Vol.9, 1980, 150-61.

民衆史と女性史などについて，資本主義に関わるマルクス主義的分析を関連させようとしてきたのであり，同ワークショップは決して現実から逃避してはいないと反論した[28].

さらにヒストリー・ワークショップの方法論的な特徴について,「いくつかの明白な点において，歴史記述に関わるより正統派の様式から脱却したこと」にあるとして，以下の四点を挙げた.

（1）ワークショップ自体が，リサーチ・セミナーの慣例や熱意の欠如から脱却するための慎重な試みであったこと,

（2）ヒストリー・ワークショップは歴史的な実践を民主化する意味をもつこと,

（3）歴史的な中立性と「価値付随的でない」社会科学の伝統全体に抗って，真実は党派的なものであり，むしろ理念の闘いにおいては武器であると主張したこと,

（4）ヒストリー・ワークショップは歴史家たちがより現在を志向し，同時代的な現実に対する認識を形成しえる方法を提示することにより，歴史的な概念を修正するように努めてきたこと[29]

第一,第二の点がヒストリー・ワークショップ発足の契機となった教育の実質的な改編,そして第三，第四の点が歴史研究の変革に関わる特徴であると捉えることができる.

また，サミュエルはセルボーンの方法論に関わる批判，とりわけ,「疑似経験主義」的な研究方法と理論の欠如という批判に対して，それぞれ以下のように異議を唱えている.

「ヒストリー・ワークショップがこれまで分析よりも記述を重視してきた，あるいはより完全に，しばしば記述のなかで分析を具体化し，それらの間にある境界をないものにするように努めてきたというのが公正な評価である．また，私たちは記述のなかに必然的に論証が含まれることを信じ,分析的な抽象性や意図的な方法論の提示を許さなかったというのは事実である．しかし，私たちは決してその結論としての記述を求めなかったし，テキストを詳細に読めば，セルボーンのレッテル貼りは支持できない．私たちの仕事の意図は常に説明的である．たとえそれが形式上，記述的であったとしても，であ

[28]Samuel, Raphael, 'On the Methods of History Workshop: A Reply', History Workshop Journal, Vol.9, 1980, 163-6.
[29]ibid, 167-9.

る.」[30]

「今や，歴史家は過去の現実を捉えることは決してできず，手元にある資料と概念的道具の限界のうちでそれを解釈することができるのみである，というのは事実である．過去に関する私たちの知識は，文書の根本的な不完全性，すなわち，長い沈黙と広範囲におよぶ文書の不在によって，裏打ちされている．そして，それはまた，私たちがそれらに対して持っている関心事によって，決定的に形作られる．私たちが文書として保持しているものは過去ではなく，ただそのつかの間の残留物であり，私たちにひらめきを与えるもののみである.」[31]

以上のように，ヒストリー・ワークショップの方法論，およびラファエル・サミュエルの歴史を捉える視点は，現在と過去の連結を見出す政治性をもっており，また，「記述」そのものを「分析」として捉えることにより，過去の記述に介在する「現在の主観」に自覚的であった．換言すれば，ヒストリー・ワークショップの方法論は，過去に現在の価値を付随する主観としての自己の視点を明確に提示することによって，歴史における経験，生活の意義を追求したと言えよう．したがって，人々によって「共有財産」とされるべき歴史，それを通じて理解される「自己と生きている社会」そのものについては，どのような限定も行わず，学習者の発想，関心に一任することにこそ，ヒストリー・ワークショップの学習者中心主義的な性格が担保されていたのだと了解できる．

ヒストリー・ワークショップは，労働者階級の視点，学習者の経験をそれらの中心に位置づけることによって，歴史をめぐる教育と研究，および学習の三者を統合する試みとして存在していた．この学習者の視点こそが，英国の社会史研究における特質としての「はざま」を埋めるものであると思われる．

第３節　教育の生活化実践としてのヒストリー・ワークショップ

1. 学習者の生活にもとづく教育内容

ヒストリー・ワークショップがラスキン・カレッジで開催されていた 1967 年（第１回）から 1979 年（第１３回）のテーマは，極めて多岐にわたっていた．具体的には，「チャー

[30]ibid, 170.
[31]ibid, 171.

チストとともにある日」,「19 世紀のイギリスにおける教育と労働者階級」,「芸術, 詩, 科学」,「19 世紀のイギリスにおける雇用管理」,「歴史における子ども時代」,「歴史における女性」といったテーマでワークショップが開催された[32].

これら, カレッジの内外を問わず, 広く開催されたヒストリー・ワークショップにおける報告に加え, カレッジ内で行われたセミナーにおける研究報告をもとにして,『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』が刊行された. そのテーマは,『鉄道夫の会話事典』,『イースト・ロンドンにおける日雇い樽職人』,『ダラム地方における炭坑生活』,『1911 年の子どもたちのストライキ』,『19 世紀イギリスの農村における少女たち』,『マタベルランドにおけるビッグマザーとリトルマザー』などである[33]. ヒストリー・ワークショップが対象とする歴史は, それまでの歴史において, 取り上げるべき価値がないものとされてきた労働者, 農村の女性, 子ども, 移民といった民衆の生活と労働, 意識に関わるものであった. さらに, 1976 年に『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル』が刊行されて以降, 性別, 国境, 人種, 宗教, 世代, 性的志向といった軸を含む, 多様なテーマ設定のもとで民衆の歴史を明らかにしてきた[34].

このヒストリー・ワークショップの活動内容について, 松村高夫は「瑣末な事象も重要視して研究するという『誤り』を犯すことになるのではないか」述べている[35]. この指摘は, 歴史的事実とは何かといった議論に関連するものであるが, そもそも, 歴史的事実と非歴史的事実を判断する主体である歴史学, および, アカデミズムに対する批判として始められた社会史, あるいはヒストリー・ワークショップの活動は, 既存の歴史学が対象としてこなかった民衆の歴史記述を当の民衆自身が行うこと, 誰のための歴史であるのかについて問い直すことを主眼としていた. したがって, 既存の歴史学の文脈によってヒストリー・ワークショップが対象とする歴史を「瑣末な事象」と判断するその批判, すなわち, 特定の事実のみを歴史的事実とする既存の価値付けそのものを批判の対象に据えていたのである.

この意味で, ヒストリー・ワークショップが対象にする歴史, その教育内容について,

---

[32]Samuel, Raphael(ed), *op. cit*, 1991, 95-107. なお, 第 13 回大会については松村高夫による報告がある (松村「1979 年秋のヒストリー・ワークショップ大会と労働史学会に参加して」『労働運動史研究』63 号, 1980).
[33]ibid, 67.
[34]'Cumulative Index to History Workshop Journal NOS1-32', Samuel(ed), *op. cit*, 1991, 191-208.
[35]松村高夫, 前出, 1979, 196-8.

まずは，それらが誰のために価値を持つものであるのかを問う必要がある．教育と学習という個人的，かつ社会的営為のなかで捉えられる歴史は，ヒストリー・ワークショップの中心的な担い手であるラスキン・カレッジの労働者学生にとっての個人的，かつ社会的意味を把握することによって，その評価が可能になると考える．

ところで，スチュアート・ホール（Stuart Hall）はこのようなヒストリー・ワークショップの方法論におけるポピュリズム，政治的実践としての具体性の欠如について，以下のように批判している．

「まるで，単純に過去の抑圧と闘争について語ることによって，すでにそこに存在し，完全に整えられ，ただ『登場』を待ちわびているだけの社会主義の可能性を見出しえるかのようだ．」

「しかし，これまでの，とりわけ現在に至る社会主義の全ての歴史はこの単純すぎるポピュリズムを支持していない．還元論と異なるマルクス主義理論は社会主義は真の政治的実践によって成されるべきであり，単に歴史的な振り返りにおける『再発見』によってなされるのではない，という言説に関連する全てのことを問題とすべきである．」[36]

この政治的実践の欠如といった批判は，ホールのみならず，数多くの論者によってなされた．例えば，ギャビン・キッチング(Gavin Kitching)はヒストリー・ワークショップの歴史家について，以下のように述べている．

「彼らは，革命家というよりもむしろ，基本的に反抗者である．なぜなら，彼らは過去と現在における労働者階級の人々の生活に対する資本主義の影響を嘆き，攻撃するものの，どの側面で，どのように資本主義が変化され得るのかということに関して，ほとんど考えを持っていないか，全く考えないからである．」[37]

労働者階級出身である学習者の個人的な視点にもとづく歴史の究明に対する批判，すなわち政治性が欠如しているという批判における「政治性」そのものが問われねばならない

---

[36]Hall, Stuart, 'In Defense of Theory', Samuel (ed) People's History and Socialist Theory, Routledge&Kegan Paul, 1981, 384.

[37]Kitching, Gavin, *Rethinking Socialism, A Theory for a Better Practice*, Methuen, 1983, 73.

が，ヒストリー・ワークショップは上記のような個人的な視点に価値を見いださない当時の革新勢力間に批判を呼び起こすことで，その政治性を現出させたと捉えることができる．個人の価値を減ずることで成立していた政治的実践に対する批判として，ヒストリー・ワークショップは存在していたのである．

一方で，労働者階級，学習者の視点を全ての中心に置くことが当の学習者にとってどのような意味を持つものであったのか，その具体的な学習の成果について，ヒストリー・ワークショップはどのような言及もしていない．ただ自己と社会を「理解」し得ると述べるのみである．もっとも，過去を現在の視点から照射することによって，現在をより良く理解し得るとする歴史観は，ヒストリー・ワークショップの発足を待たずとも存在した．例えば，E.H.カーは「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり，現在と過去との尽きることを知らぬ対話」であると述べた[38]．

ヒストリー・ワークショップにおける労働者の学習は，個人的，且つ社会的な政治的実践として，歴史認識に関わる以下の主張に応えることによってこそ，その価値が明らかになるものと思われる．

「過去というのは内在的に，価値ある何か，私たちが従うべき何か，見いだすべき事実，尊重すべき真実，完遂すべき問題を含んでいるのではない．」[39]

2．教育方法の生活化としてのオーラル・メソッド

過去を現在の「私」，あるいは集団的に「私たち」の視点から理解することを通じて，獲得される「価値ある何か」とは教育，あるいは学習方法，研究方法としてのオーラル・メソッドの意義を捉えることによって了解できると思われる．労働組合主義を標榜したウェッブ夫妻への批判として始められた英国における社会史の展開は，E.P.トムソンにおいては労働組合に組織される以前の労働者のうちに潜在的革命性を発見することによってなされ，ヒストリー・ワークショップにおいては，未組織労働者の生々しい生活と労働の発見を労働者自身が労働者階級の人々のオーラル・ヒストリーを聞き取ることによってなされることが企図された．先述のように，ヒストリー・ワークショップは労働者学生に対する

[38]E.H.カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波新書，1962（=Carr, E.H., *What is History?*, Macmillan, 1961），40.
[39]Jenkins, Keith, *Refiguring History, New Thoughts on an Old Discipline*, Routledge, 2003, 29.

試験制度への異議申し立てとして始められたもの，すなわち，成人教育の革新を求めるものとしてあった．そのなかで採用された歴史の学習に関わるオーラル・メソッドは，新たな教育と学習の方法として捉えられていたと思われる[40]．

桜井厚は相互行為としてのオーラル・ヒストリーについて，「リアリティの構築はなによりもインタビューの場，すなわち語り手と聞き手の相互行為をとおして<いま-ここ>でおこなわれる」ものであり，「それを聞いて受け入れてくれるコミュニティがなくてはなら」ず，「インタビューの相互行為は，語り手の個人的な経験をマスター・ナラティブやモデル・ストーリーを参照・借用しながら彼／彼女のライフストリーに編成していく相互的な過程」であると述べている[41]．この相互行為としてのオーラル・ヒストリーについて，ポール・トンプソン(Paul Thompson)はまた，「教師と生徒との，世代間の，そして研究機関という象牙の塔と一般社会との壁を崩しうるもの」であり，「歴史を書く過程において，歴史を作り，歴史を経験した人々に，彼ら自身の言葉を通じて，中心的な場所を与えるもの」であると述べている[42]．オーラル・ヒストリーの語り手の声を聞き，具体的な歴史を記述する労働者学生は，その相互行為を通じて過去とともに現在を理解する．

さらに，先にあげた『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』には労働者学生の記述に先立って，その作者である学生の出自についての記述があり，さらには本文中に「私(I)」が幾度も登場し，他者が語るストーリーと著者自身の経験の関連，相同性が記述されている[43]．このヒストリー・ワークショップの教育は学生自らがその出自に照らし合わせながら，それと関連する歴史を具体的に聞き取り，誰のための歴史であるのかを理解するものであった．このことは，教育がそもそも社会的，政治的であると同時に，個人的な営為でもあることを示すものであった．

ヒストリー・ワークショップは労働者学生たちが彼らの労働と生活を記述することによって，彼ら自身が教育と歴史における主体になることをはかったのである．そのための方法論がオーラル・メソッドであった．

---

[40]英国におけるオーラル・メソッドの伝統についての検討は「特集　オーラル・ヒストリー--その意味と方法と現在-」(『歴史学研究』568 号，1987 年 6 月）を参照．
[41]桜井厚「オーラル・ヒストリーの対話性と社会性」『歴史学研究』811 号，2006，2.
[42]ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へ オーラル・ヒストリーの世界』青木書店，2002(=Thompson, Paul, *The Voices of the Past*, 3rd edition, Oxford University Press, 2000)，20.
[43]Samuel, *op. cit*, 1980, 162.

3．知の再構成としての教育の生活化

オーラル・メソッドによる相互行為としての歴史の学習という意味をもつヒストリー・ワークショップの活動は，いくつかの対話の軸をその過程のうちに含むものであった．先に述べたように，ヒストリー・ワークショップの設立はラスキン・カレッジにおける試験制度や教育そのものへの問い直しとして始められた経緯をもち，同カレッジの学生たちによるワークショップでの報告をもとに『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』を刊行した．また，継続して創刊された『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル』は，ラスキン・カレッジの学生のための教育という目的を超えて，人々が歴史を理解することを通じて自身と社会を理解することを企図していた．同ジャーナルは読後の意見を「読者からの手紙」として掲載し，紙上における意見交換の機会，すなわち，書き手と読み手の対話を保障した[44]．

この『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル』は，当初，「社会主義者の歴史家による雑誌」とされていた副題が，1981 年には「社会主義者とフェミニストの歴史家による雑誌」へと改題された．このことは，ヒストリー・ワークショップがフェミニズムとの対話をその活動の展開のなかで行ってきたことを示していよう．1970 年に開催された英国における初の全国女性解放会議は，ヒストリー・ワークショップでの議論を起点とするものであった．この会議の開催，あるいは黒人解放をめぐる集会の開催がヒストリー・ワークショップと結びついていたことから，それらのラディカルな特質とそれらが問題とする全ての抑圧が同ワークショップの価値を継承して示されたと指摘されてもいる[45]．異性間，そして異人種間の対話が，ヒストリー・ワークショップの活動のなかには存在したのである．

歴史に関わる学習と研究，および教育を旨とするヒストリー・ワークショップにとって，現在と過去の対話，個人と社会の対話は，活動の基盤となるものであったが，同ワークショップは，異性間，異人種間といった社会的位置を異にする人々の間の対話としてもあったのである．これらの対話をオーラル・メソッドにもとづいて展開することにより，ヒストリー・ワークショップの教育性は一層明らかとなり，教育を生活化する実践としての同ワークショップの特質が生まれたと考えることができる．他者の声を聞き取り，それらを

---

[44]このジャーナルについて，ラファエル・サミュエルは歴史をめぐる方法論の革新，とりわけ編集者の幅広さによってもたらされた特徴として，読者によって「学習される雑誌」であると述べている（Samuel(ed), *op. cit*, 1991, Ⅳ-Ⅴ）．

[45]Kean, Hilda, 'Myths of Ruskin College', *Studies in the Education of Adults*, Vol. 28, No. 2, 1996, 216.

理解，解釈，記述することによって，新たな歴史学の知を切り開いたと考える．

「経験」にもとづいて諸相を止揚する英国における社会史研究のなかにあって，教育と研究を学習者の経験にもとづいて変革することを旨として発足したヒストリー・ワークショップは，学問の世界に占有されてきた歴史に対し，労働者が自身の経験，あるいは所属集団の歴史を理解，解釈，記述することを通じて，専門知としての歴史の再構成をはかった．また，これまでヒストリー・ワークショップで議論されてきたオーラル・メソッドによる「下からの歴史」は，歴史を学習者の経験に引き寄せようとする試みであった．このことは同時に，歴史をめぐる知の再構成を目指して，教育と研究の生活化を企図するものであったのである．

教育の生活化実践としてのヒストリー・ワークショップの活動においてはまた，経済史と文化史の「はざま」を捉える社会史の視点から，労働を含みつつも，それを生活の全体性のもとで対象化するラスキン・カレッジの学生たちの歴史をめぐる相互行為としての学習があったように思われる．その学習と教育の内実，労働者学生にとっての歴史記述の意義に迫る前に，次章では，ヒストリー・ワークショップにおける相互行為，対話の軸のうち，その活動に大きな影響力をもった女性労働者の経験，フェミニズムとの対話について明らかにする．本章で述べたように，ヒストリー・ワークショップにおいて，性別に関わる労働者の対話があったことは確かである．しかし，その対話が実際にどのようなものであったのかは明らかでない．労働者の経験にもとづく歴史研究と教育の生活化，そのことによる知の再構成が，それだけでジェンダー視点，フェミニズムの価値の導入に帰結したとすることはできない．ヒストリー・ワークショップとフェミニズムの対話のなかに，労働と生活の分割可能性をめぐって存在した権力を超える労働者教育のありようが理解できるように思われる．

第3章 フェミニズムとヒストリー・ワークショップの対話

本章の目的は,英国における全国女性解放会議の初発であるラスキン会議を対象として,そこでの社会主義フェミニズムによる平等賃金要求の内実を明らかにすることである.

1970年2月27日,28日,3月1日の3日間,オックスフォードにあるラスキン・カレッジにおいて,英国初の全国女性解放会議が開催された.同会議はその開催地からラスキン会議(The Ruskin Conference)と呼ばれ,「英国における第二波フェミニズムの真の起点として,もっとも頻繁に想起される出来事」とされ,女性運動史を対象とする研究の多くによって言及されている[1].

例えば,スー・ブルーリー(Sue Brueley)は英国における第二波フェミニズムの台頭に至る組織的な経緯について,学生運動とニュー・レフト,そして平等賃金問題をめぐる労働運動の流れの合流を指摘している[2].一方で,マーティン・ピュー(Martin Pugh)は英国における第二波フェミニズムにとって,平和運動のグループと社会主義者,マルクス主義者のグループが人的な源になっていたと指摘している[3].英国における第二波フェミニズムの展開を担った運動体については,論者によって差異があるものの,平等賃金を求める社会主義者のグループがその源となったことは共通認識になっている.

この社会主義者のグループが中心となって開催された全国女性解放会議は,1978年の第10回大会を最後に開催されていない.その理由について,ブルーリーはラディカルなフェミニストと社会主義者による家事労働をめぐる論争,「家事に賃金を」という主張に対する議論,とりわけ,政治的レズビアニズムによる異性愛主義の糾弾によって全国的な統一行

---

[1]Bruley, Sue, *Women in Britain since 1900*, Palgrave, 1999. 149. また, Pugh, Martin, *Women and the Women's Movement in Britain 1914-1999*(Macmillan Press Ltd, 2000, 316-20), あるいはSmith, Harold, L,'The Women's Movement, Politics and Citizenship 1960s-2000'(Zweininger-Bargielowska, Ina(ed) *Women in Twentieth Century Britain*, Pearson Education Ltd, 2000, 279-81) も同様に,ラスキン会議について,第二波フェミニズムの始まりを示す事柄として言及している.

[2]Bruley, *op. cit*, 1999, 148-9.

[3]Pugh, *op. cit*, 2000, 317. 一方で,平和運動の流れは確かに女性運動の系譜にあったものの,1970年代のフェミニズムの展開に際しては忘れ去られたと指摘するものもある(白石瑞子・清水洋子訳,『魔女とミサイル イギリス女性平和運動史』,新評社,1996(=Liddington, Jill, *The Long Road to Greeham Common, Feminism and Anti-Militrism in Britain Since 1820*, Syracuse University Press, 1991)).

動が不可能になったと指摘している[4]. 1978 年における断絶は，社会主義者とラディカリストによる対立というよりはラディカリスト内での対立に端を発していたが，社会主義がフェミニズムの中心的位置にあることに対する批判自体は一貫して存在していた．バーバラ・ケイン(Barbra Caine)は，英国におけるフェミニズムの中心的な特徴をマルクス主義者，あるいは社会主義者に求めてしまうことによって，必ずしもその範疇にないもの，例えばラディカル・フェミニストやマルクス主義を解さない者，一世代前のサフラジェットたちがフェミニズムの歴史から除外されてしまうと指摘している[5]. 他方，全国会議における決議事項はローカルな活動のなかで自由に解釈されることを通じて，フェミニズムの原動力になったとも評価されており[6]，英国の女性運動史研究における全国会議の評価は極めて論争的なものである．

しかしながら，そのような全国会議の初発であるラスキン会議については，それが英国における第二波フェミニズムの起点であること，そこでは社会主義者が中心であったことは指摘されているものの，同会議においてどのような議論が行なわれたのか，とりわけその中心にあったとされる社会主義フェミニズムの平等賃金要求がどのようなものだったのかは明らかにされていない．そこで本章では，1970 年当時の一次資料をもとに，同会議における平等賃金要求そのものを明らかにする．

そのうえで，同会議で提起された平等賃金要求において，「労働」がどのように捉えられていたのかについての考察を行うこと，また，経済中心主義を克服するための「労働」の意味について仮説的に提起することを第二の目的とする．フェミニズムの視点は近代産業主義と関わって，経済的価値があるものとしての「労働」を捉えてきた．経済的な不平等配分を問うことが，女性の解放や自立を達成するうえでもった意味は大きい．しかし，その平等への希求は近代的な能力主義を問わないことにつながり，結果として能力主義を下から支える任をも負わされる場合さえあった．江原由美子は，近代産業社会における「内部システムの一部として正当な権利を主張しようとすれば，外としての女性の幻想に反してしま」い，「外にある女性としての幻想に依拠しようとすればそれは，内部システムの一部であるということに反してしまう」状況を，フェミニズムの「二重拘束状況」として指

---

[4]Bruley, *op. cit*, 1999, 151.
[5]Caine, Barbara, *English Feminism 1780-1980*, Oxford University Press, 1997, 263.
[6]Pugh, *op. cit*, 2000, 320.

摘している[7]. この状況の克服は，労働と生活をめぐる女性の能力を証明することによるのではなく，その能力の規範を検討することによってなされるものと思われる．本章では，「労働」を視点の中心において展開してきたとされている英国のフェミニズムが，その起点において，労働をめぐる平等戦略として何をどのように求めたのか，および，男性中心的，労働中心的な社会における差別に加担しない「労働」のあり方について考察を行う．

なお，ラスキン会議に関する議事録は，英国において 1970 年当時の女性運動に関わる資料を保存するフェミニスト・アーカイブ・ノース (Feminist Archives North)，同サウス (Feminist Archives South)，ウィメンズ・ライブラリー (Women's Library) のいずれにも存在せず，そもそも議事録のようなものを残そうという試みがなかったと言われている[8]. そこで，それらの施設に残されているラスキン会議に関する一次資料を手がかりに，同会議における平等賃金要求の内容を明らかにすることとした．

第 1 節　「下からの歴史」における女性の周辺化

ラスキン・カレッジのテュータであったラファエル・サミュエルは，1966 年，ヒストリー・ワークショップを発足させた．同ワークショップは，労働者教育，成人教育の場であるラスキン・カレッジを舞台に，学習者である労働者の経験，日常的な教育と学習の場に根ざして展開された．1950 年代から 70 年代の英国におけるニュー・レフトの展開を整理したリン・チュン(Lin Chun)は，ヒストリー・ワークショップについて，「『下からの歴史』を旗印に，専門家や素人を巻き込み，地域やコミュニティー，女性や労働組合のグループのオーラル・ヒストリーや記録された歴史を掘り起こし」，加えてその活動形態においては，「非セクト的傾向，大学内に限定されない活動，成人教育の企画，労働組合や労働者（たとえば炭鉱労働者）との連携，さらにまた，女性解放会議への支援といった点で，オリジナルなニュー・レフト運動を今日に伝える役割を果たした」[9]と評価している．

ヒストリー・ワークショップは「下からの歴史」に焦点を当て，その活動において，抑圧されている人々の連携を旨とするものであった．しかし，実際に同ワークショップに参加していた者が全て，1960 年代後半の段階で性差別の撤廃を課題として認識していた訳で

---

[7]江原由美子『女性解放という思想』，勁草書房，1985，56.
[8]開催場所であったラスキン・カレッジに確認.
[9]チュン・リン，渡辺雅男訳『イギリスのニュー・レフト　カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社，1999 (＝Chun, Lin, *The British New Left*, Edinburgh University Press, 1993), 287.

はない．そもそも，後に全国女性解放会議の開催に帰結する女性史に関する会合は，女性の問題，女性史に対する無関心，からかいに端を発している．同ワークショップの「下からの歴史」はその実，労働者階級の男性の歴史を意味していた．女性だけの会合の必要性を感じたことについて，シーラ・ローバトム(Shiela Rowbotham)は以下のように述べている．

「1968 年のラスキンでのヒストリー・ワークショップにおいて，ある女性がファクトリー・ガールについて報告した．労働組合の男性が立ち上がり，『組合運動は，女性がこのような恐ろしい状況を避けることができるようにするためのものだ．私たちが求めているのは，女性が家にいて，外に働きに行かなくてもいいようにすることだ』と言った．私は立ち上がり，『搾取に対して反感を覚えることは理解できるが，同時に，独立した収入を得ることは女性にとって重要なことであり，その保護しようとする姿勢は誤りだ．問題は働く女性の状況を改善することだ』と反対した．そして，これは苦笑で迎えられた．女性の会合を開催するという考えを持ったのは，まさにその反応からだったと思う．本会議の一つで立ち上がり，女性についての会合をもつつもりだと告知したら労働組合の男性全員が笑ったことを憶えている．」[10]

ヒストリー・ワークショップ，あるいはその拠点であったラスキン・カレッジ，ひいては旧左翼の中心とその周辺に据え置かれた人々との権力関係をめぐる問題を対象化するとみなされていた場に身をおいていたローバトムにとって，このような苦笑が返されることは予想さえしないことであった．英国における第二波フェミニズムは「ラスキンだったから，ではなく，ラスキンにも関わらず」[11]現れたのである．

当時，同カレッジに学生として在籍し，そのことによってラスキン会議運営の中心人物となるサリー・アレキサンダー(Sally Alexander)は，以下のように回顧している．

「シーラは大きな会議の最後で，私にとってびっくりするような瞬間になったアナウンスをした．私たちはラスキンにあるホールにいて，そのホールには演壇があったのだけ

[10]Wander, Michelene(ed), *Once a Feminist*, VIRAGO PRESS, 1990, 28-9.
[11]Kean, Hilda, 'Myth of Ruskin College', *Studies in Education of Adults*, vol. 28, No. 2 (October, 1996) 216.

れども，私たち，つまり，女性たちの集団は演壇のテーブルを囲んだ．そしてシーラはアナウンスをして，『私たちは，もし女性の歴史について研究している人がここにいればそれはいいアイディアだと考える』と言った．そうしたら大笑いが起きた．ただ大きな甲高い笑い声があっただけだった．最初は怒りを覚える代わりに当惑した．」[12]

ヒストリー・ワークショップの活動の一環として行われた女性史に関わる会合は，「アカデミックな歴史研究の場ではなく，女性解放に関わる一般的な議論が可能な場」[13]が設けられたことによって，英国初の全国女性解放会議へと発展したが，その出発点では苦笑の対象とされていたのである．

第２節　ラスキン会議における平等賃金要求

１．平等賃金に対する見解の対立

当初，100 人ほどの参加者を想定していたラスキン会議の主催者は，会議の当日には 500 人にも膨れ上がった参加者の対応に忙殺されたためか，議事録のような資料を残していない．会議の状況について，運営委員の一人であったラヤ・レヴィン(Raya Levin)は以下のように述べている．

「私たちは，恐らく 15 人か 20 人ぐらいが参加するだろう，100 人も来たら大成功だと考えていた．それならば，ラスキンで収容できるということだった．しかし，申し込みが殺到し，会議の一ヶ月か二週間前には，大きなホール，ユニオン・ホールを予約しなければならなかった．」

「そこには 500 人以上の女性がいた．私たちは本当にびっくりした．誰が話すのか？誰が結論を出すのか？参加者は様々なことを表現したがった．」「組織委員会がしたことは，いくつかの資料を準備しただけだった．」[14]

会議中では，「家庭と家族」，「精神分析と家族の役割」，「女性の非行行動」，「階級間衝突における女性」，「19 世紀のノッティンガムにおける女性」，「女性労働の背景」，「女

[12]Wander, *op. cit*, 1990, 81-2
[13]Rowbotham, Shiela, 'The Beginnings of Women's Liberation in Britain', Wander(ed), *The Body Politic*, Stagel, 1972., 96.
[14]Wander, *op. cit*, 1990, 47.

性—受動性という神話」などのトピックスで発題があり，女性が置かれている多様な問題状況が指摘された[15]．これらのトピックスについての報告が行われたこと以外，時間配分に関わるようなプログラムは立てられず，多様なトピックスに対する参加者の自由な反応に任せるかたちで会議は進行した．1970年3月2日付けの「ガーディアン（The Gurdian)」紙によれば，会議当日，混乱した状況を収めるために「司会進行役が，私たち全員は社会における私たちの状況について怒っています．しかし，どうぞ冷静になってください」と割って入った場面もあったという．

初の全国女性解放会議の熱狂的な雰囲気は，二つの側面から整理することができる．第一に，それまで連携することのなかった全国の女性グループが一堂に会することで，発題された性差別の現状のいずれもが自らの置かれている状況であり，そこからの解放を求めることに同意し，共感したゆえの熱狂であった．このことは，後に「四つの要求」として整理されるように，英国における女性運動の基本的な指針を打ち出したという意味で，全国女性解放会議が持った積極的な側面である[16]．

しかし，それらの指針をめぐる解放戦略を立てる段階でラスキン会議はいくつかの対立軸を生み，このことが熱狂的な雰囲気の第二の側面となった．雑誌「エコノミスト（The Economist)」は，ラスキン会議に参加した革命的なグループのひとつとしてマオイストのグループを取り上げ，会議における上述の熱狂的な雰囲気の二側面について以下のように報じている．

---

[15] *Socialist Women*, vol.1(発行年不明)．あるいは，Gorton, Antonia,'The Oxford Women's Liberation Conference', *Intercontinental Press*, vol.8 No.11 (March 23,1970)．

[16] 会議の成果として，例えばワンダーはその編著，*The Body Politic*(1972,2)，*Once a Feminist* (1990,242-3) において，「ラスキン・カレッジにおける第1回全国女性会議で四つの要求が採択された」とし，ボールズらもまた，英国における女性運動グループの統一的な目標とされた「四つの要求」，すなわち，平等賃金，雇用機会と教育・訓練の平等，避妊と中絶の自由，無料の24時間保育の要求がラスキン会議で採決されたとしている (Boles, Janet, K., Diane Long Hoeveler(ed), *Historical Dictionary of Feminism*, Scarecrow Press, 1996.213)．しかし，これらはラスキン会議後にも継続してグループ間の交流が深められるように設立された女性解放共同委員会（Women's Liberation Coordinating Committee ,WNCC）が，1971年のWomen's Liberation Demonstrationの際に提起し(WNCC, *An Introduction to the Women's Liberation Workshop*, 1971/72)，その内実は第3回目のスケッグスにおける全国女性解放会議において採決されたものである (Feminist Archive, Bradford, *A Chronology of the Women's Liberation Movement in Britain: Organisation Conferences, Journals and Events, with a focus on Leeds and Bradford, 1969-1979.* 1996.14)．

なお，英国における全国女性解放会議の展開については，巻末資料2を参照のこと．

「マオイストのプログラムでさえ，その場で最も温柔な主婦たちにもたいてい受け入れられた．しかし，亀裂はその優先順位においてもたらされた．革命的な部分は，よく調整され，訓練された声で，三日間の会合における『改良主義』の群れから女性たちを解き放つために介入した．彼らの主張によれば，女性に対する抑圧の根源的な理由は，資本主義システムであり，ゆえに女性解放を達成する唯一の方法は階級闘争と革命に他ならない．その会議が通常，左翼のものだったという意味で革命のレトリックはしばらく順調であった．しかし忍耐は終に爆発した．『私たちは男性の集団であることを引きずっているようだ』とあるスピーカーが発言した．『そして私たちは，それぞれが所属している英国におけるレフトが彼ら自身の偏狭な見方を糾弾するような報告をした』『私たちは革命を待ちたくない』『今，革命が必要なのだ』．」[17]

ラスキン会議は，革新勢力のうちに止まり，そこからの女性解放を求めようとする流れと，女性運動独自の展開を生み出そうとする流れの合流地点としてあった．また，主観的な見地から差別の根源を抑圧者としての男性に見る者と，それを階級社会に根ざしたものだと捉え，社会主義の実現を目指す人々の対立，さらに同年，1970 年の平等賃金法制定を背景に，平等賃金を重要なトピックとして開催されたラスキン会議においては，後者における平等賃金をめぐる対立が明らかになった．国家，資本主義社会そのもののラディカルな転換を求めるグループは，平等賃金要求に対して「改良主義」だと批判した．ラスキン会議を取材した雑誌記者は，会議におけるいくつかの対立状況について，以下のように述べている．

「その会議は基本的に二つの集団に分けられた．男性を彼女らの抑圧者だと捉え，主観から問題に迫るフェミニストたちと，女性の抑圧を階級社会に根付いたものだと捉える人々，及び社会主義社会へと革命的な変化をもたらそうとする人々である．

平等賃金要求は，国際マルクス主義者グループ全国女性部会 (The National Women's Caucus of the International Marxist Group) (IMG は，第四インターナショナルの英国セクション) と，社会主義者の女性たち (Socialist Women) (革命社会主義的な女性のジャーナル)によって，労働者階級の女性からの，絶えず変化する多大な支援を得ることが可能であり，資本主義下では実現不可能な過渡期のスローガンとして示された．

[17]'Women talking liberation', THE ECONOMIST MARCH7, 1970.

しかしながら，マオイストはこの要求を『改良主義』と見なし，フェミニストたちは『無関係だ』と捉えた.」[18]

2．社会主義フェミニズムによる平等賃金要求

ラスキン会議における平等賃金要求に関わる報告は，前述したように，二つの社会主義フェミニストのグループによって行われた．その議論の内容は，二つの資料から明らかにすることができる.

国際マルクス主義者グループ全国女性部会は「女性解放に向けた計画（A Program for Woman's Liberation)」と題し，会議に向けた準備資料を残している．同部会はその報告の冒頭で，当時の国内における女性解放に関わる取り組みが，男女同権のための全国共同運動委員会（The National Joint Action Campaign Committee for Women's Equal Rights, NJACCWER）による平等賃金要求運動と，文化に内在する性差別を糾弾する女性運動に二分化していることを指摘し，以下のように述べている.

「運動が最も深刻にこの段階で欠いていたものは，闘争を含み，それを促進するプログラムである．求められていることは，女性の闘争全体を取り巻くプログラムである．一方のＮＪＡＣＷＥＲは平等賃金の領域に自身を固執させる．そのことについては，適切な訳ではないのだが．もう一方の組織は，メディアやそれに関連する問題における性的な搾取の問題に自身を関連付ける．これらの，女性解放の二つの側面はともに全ての女性が組織し得るような，密着したプログラムとして関連付けられねばならない.」[19]

さらに 1970 年当時の女性解放が問題とすべき領域として，以下の六つを上げ，それらの内容を解説している.

（1）仕事における平等

（2）教育における平等

（3）自分のからだの管理

---

[18]Gorton, Antonia, *op. cit*, 1970, 258.

[19]Women's Caucus of International Marxist Group, *A Program For Women's Liberation Prepared For The Ruskin Weekend FEB28-MAR1 1970*, 1970, 1. 巻末資料 1-1 を参照のこと.

（4）育児という伝統的な責任から女性は自由にならなければならない

（5）法のもとの平等

（6）消費者／性的対象としての女性

優先順位の点で，経済的な問題の重視が見られるものの，とりわけ，第六の点，「消費者／性的対象としての女性」において以下のように述べ，それらが女性の「尊厳」に関わることであるとして，「性的搾取」に関わるプログラムを重要な領域だと捉えている．

「このことは資本主義における女性に対する搾取の最も重要な側面ではない（平等賃金，平等な教育，自身のからだの管理，そして育児からの自由の方がより重要である）が，それは，私たち全てに対して，日常的に仕掛けられている側面であり，他の不平等に起因する，もしくはその一部である．女性に対する搾取のこの側面は密かに進行している．したがって，資本主義的システム全体を対象化することなしに講和を成立させることは不可能である．合衆国の黒人たちが社会の粗暴な人種差別に甘んじることを拒否したとき，彼らは平等を獲得してはいなかった．しかし，体制の日常的な語彙から『ニガー』を取り除くことによって，彼ら自身の尊厳を築くための大きな前進を成した．女性解放運動も同様の基準を採用するように備えねばならない．」

「私たちもまた，成果を挙げる運動が求められる尊厳（dignity）を築くために長い道を歩むだろう．」[20]

国際マルクス主義者グループ全国女性部会は，女性労働者が被る不利益，「経済的搾取」に重点を置いて，その女性解放に向けた戦略を構想していたことは確かである．しかしながら，多様な女性問題の存在を整理するなかで「性的搾取」に関わるプログラム，とりわけ，日常的な言葉に表れる性差別の解消が女性の尊厳の獲得にとって極めて重要なものであると指摘した．つまり，経済的搾取と性的搾取それぞれが個別に対象化されて展開されていた当時の女性解放のプログラムは，女性の「尊厳（dignity）」の獲得を目指す限りにおいて関連付けられると主張したのである．最後に，女性解放の実現に向かう取り組みにおいて，同じく平等賃金要求を行った「社会主義者の女性たち（Socialist Women）」が果たすべき重要な役割，すなわち，グループ間の連携の必要性について，以下のように主張

[20]ibid, 3.

して報告を閉じている.

「この状況で存在している全てのグループをひとつの組織にまとめることは不可能かもしれないが，私たちはこれらの問題をめぐる，より統一的なキャンペーンに向けて努めねばならない．私たちは，社会主義者の女性たちに対して，運動を組織し，統一する重要な役割を果たすものと考えており，成長する運動がこの方法で社会主義者の女性たちを活用することを望んでいる.」[21]

ラスキン会議における平等賃金に関わる報告を行ったもうひとつのグループ，社会主義者の女性たち（Socialist Women）による報告「平等賃金と平等賃金法（Equal Pay and the Equal Pay Bill)」はまず，その冒頭でおおよそ 11 パーセントの女性労働者のみが，当時，平等賃金を獲得し，残りの 89 パーセントは男性労働者の六割ほどの賃金に甘んじていたとして，差別賃金の現状を 1963 年と 1968 年について比較した以下の表を掲載している.

機械工：いくつかの産業における平均時給

1963 年 4 月と 1968 年 4 月

産業	男性				女性			
	1963	ペンス	1968	ペンス	1963	ペンス	1968	ペンス
衣服と靴		78		108		50.5		67.2
鉄鋼		86		118		51		68.9
工業製品と電化製品		81		113		52.5		71.9
化学		82		115		49.2		71.9
繊維		72		101		50.3		67.2
食品，飲料とタバコ		73		102		48.9		64.9

「収入における格差は拡大している」理由として，いくつかの産業で設定されていた「女

[21] ibid, 4.

性賃金」の存在と，例えば，公務員のような，平等賃金が適用されている産業においても，女性は低賃金の職務，職階に置かれていることが指摘された[22]．この状況の打開に向けての障害として，差別賃金に関わる者，雇用主，労働組合に加え，社会的に付与される劣等感，家族的状況に規定される女性労働者自身の意識上の問題について，以下のように述べている．

「女性たちがこのことに甘んじている理由は複雑で，私はここで，単にそれらに触れることができるのみである．女性たちは彼女らの夫たちと同じくらい，もしくは夫たちよりも多く稼ぐことを恐れている．彼女らは夫たち（そして，彼女ら自身もかもしれない）にとって，彼らの経済的な優位がマスキュリニティの尺度であることを知っている．彼女らは，雇い主である男性が自分たちに対する経済的な優位を失ったときに，彼女らが男性のために行っている仕事を失うことになるのではないかと恐れている．彼女らは，自分自身の劣位性の神話を信じているのである．また，仕事に対する意識をより低めるために，彼女らにより低い賃金を与えるということが，女性にとっては副収入よりも家庭の状況（育児に時間を割かれる等）の方が重要だという価値によって，正当化されているかもしれない．」[23]

さらに報告では，平等賃金をめぐる女性運動の歴史について整理し，平等賃金要求を支える理念としての「同一労働同一賃金」と「同一価値労働同一賃金」について解説を行い，前者を採用する平等賃金法によって処遇が改善されるのは，ごく一部の女性労働者であり，「女性職」に従事する女性労働者の状況を改善するためには，ILO100 号条約に則った「同一価値労働同一賃金」原則を確立すべきだとしたうえで，賃金問題は性別職域分離，女性に対する教育機会の不均等に関わる問題を含めたかたちで検討されるべきだと主張した[24]．

このようにして求められた平等賃金は，単なる賃金上の差別を問題としたのではなかった．経済中心主義的な社会においても，価値をもつ人間としての自己の評価，あるいは育児，家事に対する正当な評価を得るためのものであるとして，以下のように述べられている．

---

[22]LIoyd, Leonora, 'Equal Pay and the Equal Pay Bill', *Socialist Women*, Vol. 2, No. 1 (Feb/Mar 1970) , 3. 巻末資料 1-2 を参照のこと．
[23]ibid, 4.
[24]ibid, 7-8.

「私たちは，経済中心主義的な社会に生きており，平等賃金をめぐる闘いにおいて，女性たちは等しい価値をもつ人間として，自分自身に対する新しい評価を得始めようとしている．彼女らの要求の限界は彼女らに多くのことを教えるだろう．経済的な領域において平等が獲得されている国―主に共産主義国家―においてさえ，女性たちは未だに家庭で搾取されている．しかし，私たちは経済的な，過度の搾取を取り除く必要がある．なぜなら，多くの女性たちが自分の家で行っていることについて，より小さな経済的貢献を『補うもの』だと考えているからである．」[25]

さらに，先に述べた女性自身が信じている劣位性の神話に関連して，平等賃金は「女性の『卑屈な』貢献を打破する」ものであり，社会的な権力関係への批判的なまなざしを獲得するために求められることだとも指摘されている[26].

このような視点から 1970 年制定の平等賃金法を検討したうえで，同法によって一部の女性の賃金が女性全体の賃金向上につながり，さらには女性が労働に対する期待を向上させ，性差別に抵抗するようになることを以下のように展望している．

（1）少数の女性たちが平等賃金を獲得することは，恐らく，同じ産業で働く他の女性たちの賃金を徐々に上昇させるだろう．そうでなくても，少なくともそれらの女性と同等のものを要求し始め，程度の差はあれ，全ての女性の賃金に影響を与えるだろう．

（2）女性たちの期待は向上するだろう．法律の適用を完全に理解していなくとも，女性労働者は益することを期待し，そうでなければなぜかを知りたがるだろう．[27]

社会主義者の女性たち（Socialist Women）は，このような平等賃金の重要性を認めない極左翼の人々は「たいてい，いい仕事，平等に支払われる仕事に従事しており，大きな仕事に対する少ない賃金という屈辱，もしくは新しい靴を買うのにさえ夫に依存している状況を認識していない」[28]と批判し，労働者階級の女性の労働と生活における経験により近い立場から，彼女ら自身の正当な評価の要求，「等しい価値をもつ人間」性の奪還と，そのことを通じた彼女らの意識改革の契機としての平等賃金要求の意味を確認して，報告を

[25]ibid, 8.
[26]ibid.
[27]ibid, 10.
[28]ibid, 11.

閉じた.

先に述べたように，ラスキン会議においてこれらの平等賃金要求に対する合意が形成された訳ではない．実際に，社会主義者の女性たちは，ラスキン会議後の機関紙において「この要求は，多くのレフトの女性たちによって改良主義，真の闘争からの逃げだと見なされた．さらなる議論が不可避であることが示された」[29]として，さらなる対話の必要を訴えた.

ラスキン会議における平等賃金要求は，その担い手が当時の女性運動の中心的な位置にあった社会主義フェミニストであったことから，他のトピックスに対して権威的であったというよりもむしろ，性差別をめぐる多様な文脈を含みこむかたちで展開された．平等賃金要求という形式は，その実，女性の「尊厳（dignity)」を奪うものを対象化するものであったと考える.

第３節　平等賃金を求める議論の特徴

１．階級横断的要求

英国の社会主義フェミニズムによる「尊厳」にもとづく平等賃金要求は，労働者階級の女性が経験する労働と生活の視点に即したものであった．しかし，シーラ・ローバトムはラスキン会議を企画した当初，労働者階級の女性たちの参加を望んでいたが，実際に彼女らの参加を得ることはできなかったと述べている[30].

英国における平等賃金要求は，フォード社の女性機械工が 1968 年６月７日，彼女らの技能に対して男性と同様の評価を実施することを求めてストライキを行ったことに端緒が求められる．このストライキを直接的な契機として設立された男女同権のための全国共同運動委員会(NJACCWER)が，後の平等賃金を求める女性労働運動を牽引した．ラスキン会議において，このNJACCWERが平等賃金を訴える報告を行わなかったことはまた，平等賃金を求める女性運動に参加していた労働者階級の女性が同会議に関心を払わなかったことを示しているかもしれない．確かに，社会主義者の女性たちとして平等賃金要求を行ったレオノラ・ロイド(Leonora LIoyd)は，NJACCWERの設立に関わった人物でもあったが，NJACCWERの代表としてではなく，社会主義者の女性たちの代表としてラスキン会議に参加している．ラスキン会議の参加者の多くがミドル・クラスの女性であり，労働者階級の女性の視点に

---

[29]*Socialist Women*, vol.2, no.2, May-Jun 1970,2.
[30]Wander, *op.cit*, 1990,35.

立った平等賃金要求もまた，ミドル・クラスの女性によってなされたのである．

そのミドル・クラスの女性たちによる社会主義フェミニズムが中心となって開催されたラスキン会議は，当初には，ヒストリー・ワークショップの活動として企画されていたことは先に述べた．ヒストリー・ワークショップにおける社会主義について，サミュエルは次のようにも述べている．

「私たちはアカデミックと非アカデミック，マルクス主義者と非マルクス主義者，学識経験者と政治的な活動をする者について，どちらか一方を選ぶべきものとして考えなかった．私たちの社会主義は，英国のスタンダードな潮流によるものではあるが，また，決定的に非セクト主義であり，私たちは強力な政治的な見解について，苦心して達成される仕事と矛盾するものとしては捉えていなかった．」[31]

「下からの歴史」を理念とするヒストリー・ワークショップは，反アカデミズム，反権威主義，非セクト主義の気運のなかでその活動を展開し，ラスキン会議の際には，同カレッジの男子学生たちが託児所にてボランティアを行った[32]．前章で述べたように，ヒストリー・ワークショップは，ミドル・クラスの視点から構成された歴史を労働者階級の視点から再構築することを企図していた．労働者階級の女性の視点に拘泥するラスキン会議における社会主義フェミニズムの平等賃金要求は，このヒストリー・ワークショップの社会主義によって生み出されたとも捉えられる．理念としてではあれ，同ワークショップは労働者階級の女性の労働と生活を捉える枠組みをもち，実際にラスキン会議以降，ヒストリー・ワークショップの対象として女性史が位置づけられたのである．女性史の発展と結びついて展開された英国における第二波フェミニズムは，ヒストリー・ワークショップの影響のもとに台頭した．シーラ・ローバトムは両者の関係について，以下のように述べている．

「草創期の女性史は，ラスキン・ワークショップが発展させた下からの歴史にその多くを負っていた．その時期には，新しいものの見方が多くの革新勢力に通じるものとして現れ，女性史は，台頭したラディカルな考え方全般に影響を受けた．これらのいくつか

---

[31]Samuel, Raphael, 'On the Methods of History Workshop: A Reply', *History Workshop Journal*, Vol. 9 (Spring, 1983), 169.
[32]Wander, *op. cit, 1990, 48.*

は，ヒストリー・ワークショップを通じて，その形態と表現を見出した．サミュエルはそれらを構造化するうえで，重要な役割を果たしたのである．」[33]

ミドル・クラスの女性たちが労働者階級の女性の視点から平等賃金要求を行うことは，当事者原理に反すると言うこともできよう．しかし，多様な主体を顕現化するヒストリー・ワークショップの社会主義，その「形態と表現」を引き受けて展開されたラスキン会議はまた，階級横断的に女性労働者にとっての平等賃金要求を言語化する場所としてあったと理解することができる．エリザベス・ウィルソン(Elizabeth Wilson)は，社会主義フェミニズムについて，「平行する組み合わせの統一体というよりも，むしろ関係性」であると述べている[34]．また，今井けいは，英国における「フェミニスト運動のもつ普遍的意義と歴史的先進性」，「女性労働運動史の特性」として，「階級差を超越した女性同士の協力関係」が「労働者階級の女性の発言力」を大きくする，すなわち，労働運動，女性運動における女性労働者の顕現を可能にしたことを指摘している[35]．ラスキン会議において，女性労働者を顕現化し，彼女らの要求を自らの要求として読み替える関係のなかで，ミドル・クラスの女性たちが自身の当事者性を顕現させるために要した理念が「尊厳」であり，このことによって階級横断的な平等賃金要求という形式が成立し得たと考えられる．

2．「尊厳」を中心においた要求

ラスキン会議当時の労働組合運動において，賃金における差別は解決されるべき課題として認識されていたものの，実際には熱心に取り組まれたわけではなく，労働組合運動とは別のかたちで平等賃金を要求する女性運動が展開された．1968 年 11 月に英国における組合運動のナショナル・センターである労働組合会議（Trade Union Congress）が開催した平等賃金に関わる会議において，同会議の代表が，平等賃金は疑いなく「発展的な段階によって達成されるのであるが，発展は長い時間を要する．もしあなたたちが改革を欲するのであれば，自分自身で行うべきだ」と参加した女性たちに告げたという[36]．また，女性

---

[33]Rowbotham, Sheila, 'Some Memories of Raphael', *New Left Review*, No. 221, Jan/Feb, 1997, 131

[34]Wilson, Elizabeth, *Only Halfway to Paradise, Women in Postwar Britain: 1945-1968*, Tavistock Publication, 1980, 206.

[35]今井けい『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』日本経済評論社，1992，388.

[36]Boston, Sarah, 'You'll Have to do it yourselves 1968-1975', *Women Workers and the Trade*

諮問委員会（Women's Advisory Committee）の1970年度の報告書においては，以下のように述べられている．

「委員会のメンバーには，低賃金と平等賃金には直接的な関連があるかもしれず，男性の賃金が適切なレベルまで向上していない低賃金の職場において，平等賃金の達成を求めることは危険であると考える者もいる．」

「男性の賃金よりもかなりの程度，女性の賃金が低くなる原因はいくつか存在している．」

(a)女性は男性よりも短時間しか働かない．平均して，フルタイムで手工業に従事する女性は，週に45と4分の3時間働く男性に比して，おおよそ38時間働く．

(b)女性たちは通常，割り増し賃金が得られる時間外労働，夜勤，週末労働を行わない．3分の2の男性が，時間外で働くが女性はたったの4分の1である．

(c)女性に対して適応されるレートは一般的にいまだ低く，レートが上昇している職場においては，手取りの額において男性のレートとの格差が拡大している．

(d)女性のボーナスとその他の収入は，女性に適応される低いレートに関連している．

(e)繊維業と被服業といった，結果によって高収入を得られる職場を除いて，男性の収入よりも女性の場合は基本給が，より多くを占めている．[37]

労働組合会議における平等賃金は，女性労働が低賃金であることの理由を男性労働に比した労働時間の短さ，働き方の違いに求めることで，平等賃金は男性労働と同じだけの量の労働力の提供に対して与えられる賃金の獲得と捉えられた．さらに，結果としての賃金格差是正のみを問題視し，なにゆえ女性労働者が時間外労働を行わないのか，女性労働になぜ低い基本レートが適応されているのかを問わない．その限りで，男性並みの賃金を女性労働者が獲得するには男性並みの労働に従事すること以外に解決策がないとする発想に親和的である．

労働組合運動から独立して平等賃金要求を行うことになる女性運動にとって，ラスキン会議は平等賃金をめぐる全国的な統一行動を可能にする基盤を提供した．ラスキン会議は

Unions, Lawrence&Wishart, 1987, 281.

[37]Trade Union Congress, *Report for 1970-71 of the TUC Women's Advisory Committee, 1970*, 8.

さらにまた，彼女らの平等賃金の要求を他の女性運動グループに訴える段階で，男性中心の労働組合運動にあった，経済的営為としての労働の捉え方を優先する社会主義者の分析を超えて，再生産と家事労働にまでその視野を拡大する契機ともなったと考えられる[38].

しかしながら，ラスキン会議以降の英国における社会主義フェミニズムは，家事労働の経済的価値をめぐる家事労働論争を展開した[39]．女性が行う家事労働を経済主義的な労働のうちに収めようとする試みは，現行の社会における労働の範囲内での家事労働の価値を明らかにするものの，家事労働を意味づける社会そのもの，労働のありよう，具体的な男女間の権力関係に対する批判的な視座を欠くことになる．人間の尊厳を述べたラスキン会議における平等賃金要求は，経済的な価値そのものに対する批判的な視座を示したと考える．

ところで，獲得することを求めたその「尊厳」とは，家事労働に対する一面的な積極的評価を引き受けるものではなかった．ラスキン会議においては，家事労働の単調さと孤独感，および，家事労働を通じた達成感の無さを経験的に述べ，家事の協同化を提案した主婦のグループによる報告[40]もあった．労働者階級の女性の労働，および生活上の経験に即した社会主義フェミニズムの平等賃金要求は，雇用労働の場における差別賃金の解消のみならず，家庭における女性の尊厳の獲得をも対象とするものであり，主婦のグループの報告に対しても開かれたものであった．資本主義的生産システムにおける家事労働の価値をめぐって英国の社会主義フェミニズムが展開した家事労働論争は,「主婦こそ解放された人間」，家事労働を「人間らしい生活」とするレトリックではなかったが，経済的側面に限定

なお，ドロレス・ハイデンによれば，そもそも「社会主義者は，男女間の平等というものは女性が産業生産に従事してはじめて達成されるものであり，それは育児と食事の準備を社会化する施設があれば可能となるであろう，と主張した．社会主義者にとって家事労働を社会化することは，女性を産業生産に従事させるという目的のための一手段にすぎなかった」（ハイデン（野口美智子・藤原典子他訳）『家事大革命　アメリカの住宅，近隣，都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房，1985（=Hayden, Dolores, *The Grand Domestic Revolution*, Cambridge: MIT Press, 1981），7）.

[39]リン・シーガルは，この論争について「女性の家内労働は，具体的に（潜在的に）説明可能な形で，労働の実際的評価に貢献しているのかどうか，そして，これはマルクス主義的分析のうちに組み入れることができるのかどうか，などが論じられた．しかし，このような経済主義的なカテゴリーは，女性が家庭で経験する疎外，単調な骨折り仕事，依存，時折の暴力などといった，他のあらゆる問題を覆い隠してしまった」（シーガル（織田元子訳）『未来は女のものか』勁草書房，1989（=Segal, Lynne (ed) *Is the Future Female ? Troubled Thoughts on Contemporory Feminism,* Virago Press, 1987），71）と述べている．

[40]Bachelli, Ann, Hazel Twort and Jan Williams, 'no title', a woman's work is never done, Moss Side Press, 1970, 5-8.

した議論ではあった．一方で，家事労働論争以前の社会主義フェミニズムは，女性が働くことに関わる抑圧に関係した要因の複雑さをたったひとつの原因に求めることも，資本やジェンダー，家父長制のような根本原因を究明することに関心を焦点化することもなく，今，ここにある多様な差別状況を解決していくうえでの実践とそのための知識を求めるものであった．それゆえにこそ，明確なひとつの傾向，英国における第二波フェミニズムの草創期における本流として存在し得たのである．

ラスキン会議における「尊厳（dignity)」の要求は，観念的な要求，あるいは形式的な権利要求でもなく，労働者階級の女性の生に根ざした誇りとでもいうべきものに関わる要求であった．ラスキン会議における社会主義フェミニズムの積極的側面は，賃金における差別を手がかりに人間の尊厳を求め，それを多様な女性解放の文脈に拡大することによって，労働そのものの意味を多様な文脈に置換して見せた点にあろう．このことによって，平等賃金，ひいては労働の場における問題を問い直しながらも，労働の視点だけに拘泥しないことをもって，経済主義を克服しようとした．確かに，実際の生活のなかで女性が行っている家事労働が記述的に，経済的な意味を持っていることは間違いない．しかし，それらの経済的な価値付けのみを問題にしたならば，すでに権力関係として存在してしまっている家事労働を含む労働に対する規範的な価値付けは変化しえない．ラスキン会議における社会主義フェミニズムは，平等賃金をめぐる女性労働の問題を中心に位置づけることをもってこそ，労働の経済的な価値を脱中心化したと換言できよう．

社会主義者の女性たち（Socialist Women）は，「経済的搾取」と「性的搾取」をいったんは二分したものの，そこにとどまらず，両者を平等賃金要求という形式で止揚する平等戦略を示した．形式上，経済的な搾取に対する反差別である平等賃金要求は，その内実において，人間の尊厳を奪う差別を対象化するものであり，家事労働についても，その「等しい価値をもつ人間」としての尊厳を奪う形式を問う視点を提示したのである．先に述べたように，レオノラ・ロイドが NJACCWER の代表としてではなく，社会主義者の女性たちの代表として平等賃金を行ったことはまた，フォード社の女性の機械工，つまりは，労働者階級の女性たちを代表しえなかったという意味で，当事者原則に抵触するものであったと捉えられるものの，NJACCWER の実践が平等賃金要求に終始してしまい，1970 年の平等賃金法制定後，運動自体が低迷したのに対し，社会主義者の女性たちが性差別を捉える枠組みの拡大をなし得たことを考えれば，当事者原則を犠牲にしてもなお，労働の場における性差別を差別賃金としてのみ，捉えることを克服しようとするものであったとも考えら

れる．ラスキン会議における労働の脱中心化は，現状としてある市場の論理によって支配される労働とその規範からの解放に向かう戦略としてあったのである．

第4節 ヒストリー・ワークショップに対するラスキン会議の影響

ヒストリー・ワークショップにおける女性史についての会合，歴史における女性の視点の必要性は，英国初の全国女性解放会議に帰結した．ヒストリー・ワークショップが標榜した「下からの歴史」，いわば歴史の周辺に据え置かれた労働者階級の人々の労働と生活の場における経験から，その中心を問う視点が，その実，女性の不在，周辺化を含むものであったことを認識して，ラスキン会議は開催されたのである．その中心にあった社会主義フェミニズム，ラスキン会議における平等賃金要求は，労働に対する賃金の不均等な配分の是正を求めるのみならず，女性をめぐる多様な問題を提示し，それらについて，尊厳を求める営為とすることで労働の脱中心化を成したと考えられる．平等賃金要求を行いながらも，労働を捉える視点はそもそも賃金のみに還元するようなものではなく，賃労働としての労働を超え，労働と生活における人間の全体性において女性の尊厳を奪還する営みとして労働を対象化した．

尊厳にもとづく労働の脱中心化，多様な主体を顕現化するための人間の尊厳に関わる要求として捉えられるラスキン会議における平等賃金要求は，経済的な均等配分と文化的な承認を止揚することで「男性並み」平等を超えるものであったと考えられる．その平等賃金要求は，単に男性労働と同じものを要求したのでもなく，身近な者としての家族との関係のなかでの個人，女性の尊厳を取り戻すことを主眼としていた．そのためにこそ，「同一労働同一賃金」ではなく，「同一価値労働同一賃金」原則の確立が緊要であった．家族賃金，能力そのものを問わないことなどの限定付きではあるが，尊厳を奪われた人間の要求として，近代産業社会における労働のあり方を批判的に捉える視座を提示したのである．

近代とそこでの労働のありようを超えるフェミニズムの戦略は，未だ課題であり続けている．金井淑子は障害者運動を「意味ある他者」として，市場における「働く人間としての平等」を超える「労働不可能性」を前提とした平等を主張している[41]．また，落合恵美子は，フェミニズムが対象としてきた「近代」が「体制に貼り付けられたレッテル」でしかないと指摘し，母性主義，近代家族を超えた「脱近代主義フェミニズム」を提起する[42]．

---

[41]金井淑子『ポストモダン・フェミニズム—差異と女性—』，勁草書房，1989，74-5.
[42]落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房，1989，236-8.

これらの戦略がどのような平等をもたらすのかは未だ具体化していないが，「二重拘束状況」の克服は，差別の顕現とそれを捉える視点の複数性に応じて様々に展開され得るはずである．そのひとつとして，ラスキン会議における平等賃金要求は労働者階級の女性の経験に即して，近代が規定した労働を中心とする生活を疑い，生活の中心から労働をずらした．社会主義者の女性たち（Socialist Women）は経済的な営為としての労働を生活の中心におく規範に対し，「等しい価値をもつ人間として」の「新しい評価」を求めた．それは労働に対する正当な経済的な評価というよりもむしろ，人間の尊厳に関わる価値にもとづくものであった．この意味で，尊厳にもとづく生活と労働のありように向けて，経済的な営為としての労働を相対化するものとしてあった．この「ずらし」のなかにこそ，人間の尊厳が成立し得ると考えられたのではなかろうか．

本章が対象とした平等賃金要求はあくまで要求の段階であり，その後の政策上の展開に対してどのように影響を与えたのか，労働を中心からずらした後に現れる生活がいかようなものであるのかは，なお明らかでない．実際に1970年代の英国における女性労働の性格の変化に対して影響を与えた要因について，アンドリュー・ローゼン(Andrews Rosen)は，女性解放運動，新規立法，高等教育を受ける女性の急増の三つに整理し，以下のように述べている．

> 「女性解放運動は，大きな主張をするばかりでなく，個別の要求も出した．個々の女性の自己決定権を重視したいという考え方が，教育差別の廃止，平等な雇用機会の保障，『同一労働同一賃金』などの要求の根底をなしていた．1970 年代には，こうした諸目的を推進する立法が行われた．」[43]

具体的に，ローゼンは女性解放運動の要求を受けて立法されたものとして，「同一労働同一賃金」原則を確立した1970年の平等賃金法，従業員の性別による差別待遇を禁じた1975年の性差別禁止法，妊娠を理由とする解雇を禁じ，女性に有給の産休，一定期間経過後の職場復帰を認めた1975年の雇用保護法を挙げている[44]．とりわけ，平等賃金法については，1975 年までは雇用主の自主的判断に委ねられ，「労働の質」を考慮に入れた「同一価値労

---

[43]アンドリュー・ローゼン（川北稔訳）『現代イギリス社会史　1950-2000』岩波書店，2005（=Rosen, Andrew, *The Transformation of British Life, 1950-2000 A Social History*, Manchester University Press, 2003), 139.
[44]同前，139-40.

働同一賃金」原則が確立したのが 1983 年のことであったことを考えれば，ラスキン会議における平等賃金要求が政策化に至るのは，会議開催後，十数年後であったことが分かる．

さらにまた，「下からの歴史」，周辺から中心へ，労働から生活へというものの，そこでの周辺，「下」に据え置かれた生活はまた，男性労働者のそれであり，女性労働者の労働と生活を周辺に据え置くものであったことに対する異議申し立てとしての「尊厳」の要求もまた，あくまで要求の段階にあった．しかし，それらについて，生にもとづく誇りの要求として言語化したラスキン会議は，尊厳の獲得に向かう確かな一歩としてあったということはできる．英国における第二波フェミニズムはここを起点として展開されたのである．新たな労働と生活における尊厳の獲得の実際は，労働と生活の場における女性の経験の周辺化を問題としたラスキン会議を支えたラスキン・カレッジ，ヒストリー・ワークショップにおける労働者男女の学習を通じて深められたように思われる．ラファエル・サミュエルは，フェミニズムが同ワークショップの「歴史叙述，そして政治的な言説を不安定なものにし，それらを快適な常識のなかで孵化させることから免れせしめた」[45]と述べていた．ヒストリー・ワークショップの活動は，フェミニズムの存在によって常に歴史を生き生きと描き出し，政治的な立場を固定することなしに，社会に存在している権力関係を対象化しえるものとなったのである．

以下の章では，そのヒストリー・ワークショップの理論的支柱を担ったラファエル・サミュエルを取り上げ，労働と生活の場において据え置かれた人々の経験を周辺から中心に移すことによって尊厳の獲得を目指す，男女に開かれた労働者教育としてのヒストリー・ワークショップの理念と実態を明らかにする．

---

[45]Samuel, Raphael, 'Editorial Introduction', Samuel (ed) *History Workshop A Collectanea 1967-1991* , History Workshop, 1991, I.

第4章 ラファエル・サミュエルによるヒストリー・ワークショップ

1966 年，ラスキン・カレッジを舞台に始められたヒストリー・ワークショップは，「下からの歴史」を旗印に，それまで不可視であった人々の歴史を掘り起こし，労働組合や女性解放運動との連携をはかった．とりわけ，1970 年に開催された英国初の全国女性解放会議（ラスキン会議）は，ヒストリー・ワークショップでの議論を起点するものであった．同ワークショップ，またはラスキン・カレッジの歴史教育の理論的支柱を担ったのが，当時，同カレッジのテュータであったラファエル・サミュエル(Raphael Samuel, 1934-1996)である．

ラファエル・サミュエルは 1934 年，ロンドンにてユダヤ人の両親のもとに生まれ，オックスフォード大学のバリロル・カレッジ在籍中，英国共産党(Communist Party of Great Britain)と，E.P.トンプソン(E. P. Thompson)，クリストファー・ヒル（Christopher Hill），エリック・ホブズボーム（Eric Hobsbawm）らによって創設された共産党歴史家グループ（the Communist Party Historian's Group）に参加した．なお，同グループは労働者階級の歴史の新境地を開いた『過去と現在(Past and Present)』誌を発刊したグループである．1956 年，サミュエルは共産党を離れ，スチュアート・ホール（Stuart Hall）らとともに，後に『ニュー・レフト・レビュー（New Left Review)』に発展する雑誌の編集を勤めた．その後，1962 年，ラスキン・カレッジのテュータに就任し，そこでヒストリー・ワークショップを発足させたのである．

本章では，ラスキン・カレッジにおいて発足したヒストリー・ワークショップの理論的支柱であったラファエル・サミュエルに着目して，その労働者の労働と生活を捉える視点を検討し，それらがいかように英国初の全国女性解放会議に連なる価値をもつものであったのかを明らかにする．

管見によれば，サミュエル自身による講義録，あるいは労働者教育をテーマとする論考は存在せず，サミュエルの労働者教育を具体的に取り扱った先行研究もない．そこで，前章で明らかにしたラスキン会議の後，ヒストリー・ワークショップでの議論の成果として刊行された『ヒストリー・ワークショップ・シリーズ（History Workshop Series)』の第一作目である『農村生活と労働者（*Village Life and Labour*)』(Samuel(ed)，Routledge &

Kegan Paul, 1975）を中心に，『炭坑夫，石切職人，塩田農夫（*Miners, Quarrymen and Saltworkers)*』(Samuel(ed)，Routledge &Kegan Paul, 1977)，『イーストエンドの暗黒社会—アーサー・ハーディングの人生における諸相—（*East End Underworld:Chapters in the Life of Arthur Harding)*』(Samuel(ed)，Routledge & Kegan Paul, 1981）におけるサミュエルの論考を取り上げ，サミュエルが女性労働者をどのように理解していたのかを考察する．

第１節　生きられた経験としての歴史と学習

１．労働者教育における労働者の生きられた経験

スチュアート・ホールはラファエル・サミュエルについて，「才能に恵まれた，本当に特筆すべき教師」だと述べ，彼が行った労働者教育に対して，以下のようにその特徴を指摘している．

「彼は，オックスフォードの居心地の悪い雰囲気において，知的に自分たちの道を見いだそうともがいている成人の労働組合活動家たちを理解するのみならず，彼らに同一化していた．より特筆すべきこととして，彼は労働者階級の学生たちが知的な作業に持ち込む，生きられた経験の深さと豊かさに対して心から敬意を払い，（彼らにその知識と経験を使ったり，話したりするように促せば）公式にオックスフォードが価値付けるような，より抽象的，且つ正式な『学習』について，それを彼らが特定の文脈に限定されたものと理解し，相対化するように促すことができることを理解した．」[1]

サミュエルは労働者教育をもって，従来のオックスフォード大学を典型とする高等教育，あるいは，成人教育のありように対するオルタナティブを示そうとしたと指摘されているのである．ラファエル・サミュエルの晩年のパートナーであったアリソン・ライト(Alison Light)もまた，階級関係に裏打ちされたオックスフォード大学とそれに対するラスキン・カレッジへのサミュエルの態度について，以下のように述べている．

「ラファエルはしばしば，オックスフォード大学が学部生としての彼，あるいはそれ以後の歴史家としての彼にいかに暖かいものであったかを口にしたが，彼が終生追い求め，

[1]Hall, Stuart, 'Raphael Samuel: 1934-96', *New Left Review*, No. 221, Jan/Feb, 1997, 123-4.

30 年以上もの間，身を投じたのは，まさにラスキン・カレッジがオックスフォード，および，高等教育において，周辺的，かつ対抗的に位置づけられていることについてであった.」[2]

サミュエルが問題にしたものは，オックスフォード大学によって象徴される学問，高等教育そのものではなく，それらにおける労働者の位置づけであった．高等教育における労働者の周辺化を問題とする際，サミュエルが実際の教育の場において強調したものは労働者の生きられた経験（lived experience）であった．スチュアート・ホールはさらに，サミュエルの労働者教育の方法について，以下のように述べている．

「彼は直接，学生たちに歴史的な一次資料に触れさせ，彼らの考えから，より広く解釈できることを記述し，発言するように促した．彼らに社会史を教える代わりに，彼ら自身に歴史的なセンスを与え，彼らを彼ら自身の生活と文化に関する社会史家，彼ら自身の一般的な思い出についての活動的な管理人にした.」[3]

ガレス・ステッドマン・ジョーンズ(Gareth Stedman Jones)もまた，「サミュエルは，全ての人々が伝えるべき重要な歴史／過去を書くようにエンパワーされれば，それによって彼ら自身の過去の歴史家になり得ると信じていた」[4]と述べている．サミュエルは，労働者教育において，理論的な事柄の教授よりもむしろ，労働者の経験にもとづく歴史の把握を優先したのである．

ヒルダ・キーン(Hilda Kean)は，労働者教育の場における学習者の経験の重視が，反権威主義，あるいは従来のアカデミニズムに対する批判としてのみならず，そもそも現実の労働者教育の場においても必要不可欠であると述べている．また，オックスフォード大学と地理的に近く，同大学の施設利用，あるいは講義の受講がラスキン・カレッジの学生たちに許可されていたため，両者は歴史的に極めて近い関係にあった一方で，両者の学生の間には社会的，かつ経済的な背景に関して大きな違いが存在してきたことを指摘し，同カレッジの高等教育に対する態度について，以下のように述べている．

---

[2]Light, Alison, 'A Biographical Note on the Text', Samuel, Raphael, *Island Stories: Unravelling Britain, Theatre of Memory, Volume II*, Verso, 1998, xxi.
[3]ibid, 124.
[4]The Independent, 11th December, 1996.

「カレッジへの入学は長期の失業，職場での怪我といった身体的障害，もしくは労働市場からの締め出しにつながるかもしれず，女性の場合は，離婚の困難，もしくは家庭内暴力からの回復がしばしば決定要因となっている．カレッジ入学という物質的な変化は，このようにしばしば感情的な激変を伴う．そのような状況において，学生たちはしばしば，世界に関する知識とそこでの自分の居場所を得るためにカレッジで時間を過ごすことを切望してきた．彼らが自分自身をどのように理解し，どのように理解されたいのか，といったことは，彼らが何者であるのかを深める意味で，重要になる．先の状況が構成してきた歴史は，オックスフォード大学によるものかもしれないが，彼ら自身が世界における自分自身の位置を理解することによって，形作られてきたものでもある．」[5]

先述のオックスフォード大学の高等教育を労働者の経験から相対化することは，学習者自身が経験するものというよりはむしろ，学習を通じた社会的，あるいは二次的な成果とでも言うべきものであった．ラファエル・サミュエルは，ラスキン・カレッジの学生によって行われた一人のテュータの解雇要求について，以下のように述べた．

「カレッジは教育施設である．それは一義的に（そして最終的な意味においても）そのテュータのためではなく，その学生のために存在している．たとえテュータが彼らに同意できない場合でも，彼らは尊敬をもって処遇される資格を有する．善悪の判断を求める問題，あるいはより深い感情が絡んだ問題があるとき，彼らはしつけられるのではなく，議論されるべきである．彼らはテュータと同等に尊重され，平等の権利を享受するべきなのである．

彼らは決して，平等な権利を享受することはできない．学生たちは来ては去るものである．教師たちはカレッジの方向付けを行い，その仕事を特徴付けながら，永遠に存在し続ける．いかなる論争においても，最もリスクを負い，最も自身にダメージを課すのは学生たちなのである．

アカデミックな自由は重要ではあるが，生徒の個人的な問題に対するケアもまた，重要である．つまり，いかなる場合においても，たとえそれが彼らの意思に反するもので

[5]Kean, Hilda, 'Public history and Raphael Samuel: a forgotten radical pedagogy?', *Public History Review*, Vol. 11, 2004, 54.

あったとしても，テュータの責務は学生たちの利益を守ることである.」[6]

学習の内容や方法のみならず，カレッジ運営においても，サミュエルが求めたのは学習者である労働者を中心におくことであった．この学習者中心主義的な，つまりは，学習者の生きられた経験を中心におく労働者教育は，先に述べたように，オックスフォード大学によって提供される高等教育の権威的な位置を相対化するという意味で，政治的なものであると指摘された．サミュエルの労働者教育における学習者中心主義的な特徴は，労働者学生たちの経験の意義の見直しを基盤として，オックスフォード大学，あるいはより広く高等教育，学問の相対化するものであった.

2．歴史を記述することの意味

ケン・ジョーンズ(Ken Jones)は，サミュエルによる労働者教育の政治性，革新性は彼の歴史を捉える視点に起因するとして，以下のように述べている.

「サミュエルは歴史記述の『対象の点（point of address)』について，プロの歴史家の巨視的観点にもとづいているものを，『歴史のアイディア』が埋め込まれている活動と実践のアンサンブル（the ensemble of activities and practices）に対する幅広い興味，関心にもとづくものに移行させることを目指した.

教育に対して，そのようなアプローチをとることは，同時代的な政策や実践を再形成する方法を提案するものではないが，関連するものである．サミュエルによれば，より広い学習の概念と人々がそれに持ち込む希望と目的のよりよい理解に達するかもしれない.」[7]

つまり，サミュエルの労働者教育は，教育そのものを革新する政治性を持つものであったと指摘しているのである．その際，歴史記述を広く人々の「活動と実践のアンサンブル」に開くことによって，学習に対する彼らの「希望と目的」が理解されることに政治性があるという．人々が自身の「活動と実践のアンサンブル」に関わる歴史記述を行うことにつ

---

[6]Samuel, Raphael, 'Why students at Ruskin are rather special', The Guardian, 23rd, October 1986.

[7]Jones, Ken, 'Against Conformity', *Changing English*, Vol.5, No.1, 1998,22-4.

いて，サミュエル自身は以下のように述べている．

「歴史がもし私たち自身を投影するための理想的なアリーナであれば，単純な同一化を示すものであるよりもむしろ，歴史は，私たち自身を対象化，且つ疑問視し，私たちが何者で，どこに由来するものなのかといった錯綜した問題に手がかりを与える手段であり得る．」[8]

歴史を通じて，人々の全体性を理解することよりもむしろ，人々の個別具体性，「私たち自身」を理解することを強調することによって，サミュエルは労働者たちの歴史教育の政治性を主張したのである．この転換に付随する政治性は，「大きな物語」から「小さな物語」への転換，とりわけ，「国民の物語」論に対峙して登場した「歴史の物語り論」をめぐる理論的な展開の視点から，捉えることができる．「歴史の物語り論」の代表的論客である野家啓一は，「歴史の物語り論」の特徴として，近代の歴史学における素朴実証主義に対する言語論的転回，形而上学的実在論に対する内在的実在論をあげ，名詞として完結した構造体を指す「歴史（history）」とその言語行為の遂行的機能をもつ動詞としての「物語り（narrative）」を区別して，以下のように述べている．

（歴史の物語り論は）「無色透明な語り手によって超越的視点から語られる『唯一の正しい歴史』といった実体論的観念を破砕するためのアンチテーゼとして提出された議論でした．それゆえ，物語り論は『自国の正史』などという陳腐な観念とは対極に立つものであり，逆に『国民の物語』といった統合的表象を解体するための批判的概念装置にほかなりません．われわれは常にすでに『物語り』のネットワークのなかに生きているのであり，必要に応じて都合のいい『物語』を勝手に選べるわけではありません．『物語り』は完結した単一の『物語』に収束するものではなく，むしろ多様な声を響かせながら増殖していく」「ポリフォニック（多声的）なものです．」[9]

この「歴史の物語り論」にはいくつかの批判が出されている．例えば，高橋哲哉は，「問

---

[8]Samuel, Raphael, The Return of History, London Review of Books, 14 June, 1990, 12 (=Samuel, *op. cit*, 1998, 222-3)
[9]野家啓一『歴史を哲学する』岩波書店，2007，31-2.

題の中心は，『国民の物語』の正当性に対する批判的判断が，『物語論』自体からはでてこない」[10]と述べた．すなわち，「唯一の正しい歴史」，「統合的表象」としての「国民の物語」を内在的実在論に依拠して批判しながらも，「国民国家」は「想像の共同体」であるとするテーゼと「歴史は物語である」とする「歴史の物語論」のテーゼをナショナリズムと「歴史修正主義」の基礎に据えようとする戦略がもたらした「記憶の抗争」というレベルにある時代に対して，物語論ではいかなる「政治性」や「倫理性」も示し得ないというのである[11]．

歴史をめぐる「大きな物語」から「小さな物語」への転向，もしくはそれらの抗争は，歴史を問うエージェントが集団であれ，個人であれ，それらは政治性から無縁であり得ない．個人は，個人的な存在でありながらもまた，集団に属する存在であることを免れ得ない．「小さな物語」が単に「小さな」ものであるだけにとどまらず，「大きな物語」に対峙し得るのは，それゆえにこそである．

末本誠は，成人教育，社会教育における個人と集団をめぐる問題を整理するなかで，それらを「再編統合」する社会教育の行方について，以下のように述べている．

> 「社会科学やマルクス主義のような『大きな物語』を説明する理論や系統立った知識を身につけさえすれば，自らのおかれた社会の矛盾や抑圧された状態に意識的になるという従来の考え方を見直し，現実のなかから事実に即したより実質的な『集団』を発見すること，つまりあらためて抑圧を受けている『集団』としての自らあるいは彼らの位置を発見し，その意味を理解したり新たに構築することが重視されているのである．」[12]

つまり，集団から離れた「個人」が後にまた，それまでの「大きな」集団とは異なるあらたな集団を構築すること，あらたな「大きな」個人の創造が求められている．

ヒストリー・ワークショップにおける労働者の歴史に関わる学習は，歴史そのものの刷

---

[10]高橋哲哉『歴史／修正主義』岩波書店，2001，81．

[11]この高橋哲哉による批判の基盤には，記憶されえぬもの，語りえぬものといった「忘却の穴」と化した歴史における他者の証言の消去という政治がある（高橋「記憶されえぬもの　語りえぬもの」『記憶のエチカ　戦争・哲学・アウシュビッツ』岩波書店，1995．

[12]末本誠「生涯学習における個人と集団をめぐる問題」鈴木眞理／梨本雄太郎編『シリーズ　生涯学習社会における社会教育７　生涯学習の原理的諸問題』学文社，2003，106．なお，ここで末本は，「小さな物語」を自ら創造するエージェンシーとしてのNPOに着目している．

新であると同時に，労働者自身による「活動と実践のアンサンブル」の歴史記述によって，彼らの「小さな物語」を紡ぎだすことを目指すものであった．

歴史を捉えるラファエル・サミュエルの視点は，「人々の全てのありよう，彼らの記憶と彼らの尊厳を掘り起こすことに全てを費やし」，彼の歴史記述は「歴史的に隠蔽されてきた人々に荘重な尊厳を付与し，具体的な成果をあげた」[13]．その「具体的な成果」に帰結するサミュエルの歴史記述は，前章で述べたように，ヒストリー・ワークショップがラスキン会議開催への起点となった．ヒストリー・ワークショップにおける女性の視点の欠如を指摘したシーラ・ローバトムもまた，英国における女性史の展開が「ヒストリー・ワークショップを通じて，その形態と表現を見出した」と述べていた[14]．その「形態と表現」は，サミュエルの「活動と実践のアンサンブル」に関する具体的な歴史記述のなかに見出されると考えられる．以下，その内容と概略を記しつつ，それらに即して，サミュエルによる歴史記述の特徴を整理する．

第２節　ラファエル・サミュエルによる労働および労働者の理解

１．組織化以前の労働者の生活世界

ラファエル・サミュエルは，ヒストリー・ワークショップの創設以降，その政治的実践として，19 世紀における労働者階級の労働と生活を対象として研究を行い，労働者階級の男女によるオーラル・ヒストリーにもとづいて歴史を叙述した．同ワークショップが『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』に引き続いて刊行した『ヒストリー・ワークショップ・シリーズ』は，同パンフレットと同様に，ワークショップにおける議論の成果として公表されたものである．同シリーズの第一作であった『農村生活と労働者』(1975) は，19 世紀の農村における民衆の労働と生活を対象とするものであり，サミュエルは「『石切り場　ラフ』: 1860-1920 年におけるヘディングトンの石切り場での生活と労働．オーラル・ヒストリーに関するエッセイ」を著している．

同書の序文において，サミュエルは，歴史はそれを書く任にあるもの，あるいは任に就こうとするものの有利な立場から著されるもの，いわば他人の生活を著すものであり，人々自身の実体験から著されることはほとんどないと述べた．とりわけ，労働組合の歴史がか

---

[13]Schwarz, Bill, 'Keeper of our shared memory', The Guardian, 10th December, 1996.
[14]Rowbotham, Sheila, 'Some Memories of Raphael Samuel', *New Left Review*, No. 221, Jan/Feb, 1997, 131.

なりの程度，労働者たちに資するものであったことは事実であるにしても，しばしば貴族的であると指摘した．その理由として，行政資料や二次的な資料を第三者の視点から読み解くことの限界，また，歴史家自身の個人的な価値観によって取り上げられるテーマが左右されてしまうこと，すなわち，ミドル･クラスの歴史家であれば大衆に同情することはあったとしても連帯を築くことは困難であること，労働者階級の歴史家であっても，彼らの関心が組織化された労働者階級に限定されてきたことを指摘した[15]．さらにサミュエルは，歴史を人々の中心的な関心事により近づかせるための試みには，質問，あるいは結果の検討の枠組み，過去を再解釈するための個人的な経験とオーラルな証拠の双方の利用において，仕事と階級関係，性役割と家族生活，大衆文化と教育といった事柄を社会的な生活における基礎的な要素であるとみなすことが必要だと主張した[16]．

そして実際に，周辺の住民から「荒くれ者（roughs)」として恐れられていた農村の人々を取り上げて，そこで暮らしている人々のオーラル・ヒストリーによって，当時の労働と生活を記述している．その記述のなかで，サミュエルは，対象とした農村の人々が恐れられた理由として，彼らの密猟，役人への激しい抵抗，および示威行動を挙げている[17]．このことについて，サミュエルは，その農村がジェントルマンなしで成長を遂げ，大学や英国国教会の影響をも拒否し，周辺の村々がミドル・クラスの価値を受け入れ，そのことが人々の生活を変化させていたのに比して，「ラフさ」によって，己れ自身を維持し得たと指摘した[18]．

このような農村に対する注目，および，序文における主張から，サミュエルの捉える労働者の労働と生活は，かつての労働組合運動のものを含めた歴史において，周辺化されていたものを対象化する試みであったことを特徴として挙げることができる．

また，サミュエルは労働組合運動そのものも，労働者の労働と生活を周辺化するものとして記述している．『ヒストリー・ワークショップ・シリーズ』の二作目である『炭坑夫、石切職人、塩田農夫』(1977) でサミュエルは，炭坑夫を対象とした論考を掲載し，労働者の労働と生活のアンサンブルを否定する存在として，労働組合を記述している．

サミュエルは，炭鉱労働者のアイデンティティがその労働形態によって，固定されてい

---

[15]Samuel (ed) *Village Life and Labour*, Routledge & Kegan Paul, 1975, xii-xvii.
[16]ibid, xviii-xix.
[17]ibid, 147-55.
[18]ibid, 155-62.

なかったと指摘し[19]，炭鉱労働の状況について，以下のように記述している．いわゆる炭鉱主のようなものは当時，存在せず，労働者個人の状況に応じた「二次的な契約（sub-contract)」[20]にもとづいて雇用されていた炭坑労働者たちは，「バーゲン・ワーク」という一時期に集中して短期間の低賃金労働者として働くことが一般的であった[21]．このような労働条件下，炭鉱労働者は「欠勤主義（absenteeism)」や職場における監督者の不在によって，自治を獲得していた[22]．19 世紀における炭鉱労働は，炭鉱の所有権が管理と結合していくにつれて，より資本制の方向へと変化していった．その後，バーゲン・ワークは労働の細分化といったより近代的なものに移行し，労働組合が二次的な契約とバーゲン・ワークの存在を帝国主義的な管理だとして敵視したことによって，炭鉱労働における資本主義的関係は成立し始めた[23]．すなわち，炭鉱労働者たちの労働のありようが多様であることを労働組合が否定することによって，労働者の職場における自治が失われていったと記述したのである．

ラファエル・サミュエルの関心は，組織化されていない，あるいは労働者による組織的な集団はそもそも存在しない当時の労働者の歴史にあったと同時に，労働者組織内部の矛盾と葛藤の歴史にもあった．

2．労働と生活のアンサンブルの自律的創造

サミュエルは，「荒くれ者」たちの労働と生活を記述した『農村生活と労働者』(1975) において，1920 年の自動車工場の参入や，レンガづくりが石切と並ぶ主要な産業となり，女性の主な職業として洗濯業が始められたこと，そして建築業の発展が労働の変化をもたらしたことを記述している[24]．このような変化のなかにあって，村の男たちは生きる糧を得る様々な能力をもっており，国税調査における「労働者（labourer)」という言葉がイメージさせるものに分類しえるものではなかったと述べている[25]．

さらにまた，サミュエルは当時，一般的だった女性労働が洗濯業の発展によって夫を扶養しえるほどのものになったことも記述している．この洗濯業に関するサミュエルの記述

---

[19]Samuel (ed) *Miners, Quarrymen and Saltworkers*, Routledge&Kegan Paul, 1977, 3-17.
[20]ibid, 32-3.
[21]ibid, 49-51.
[22]ibid, 54-6.
[23]ibid, 73-5.
[24]ibid, 163-4.
[25]ibid, 165-8.

は以下のようである．洗濯業での収入は単に夫の収入を補うものではなかった．夫がけがをした家庭の妻，夫が常に酩酊状態である家庭の妻，あるいは夫がよい仕事を見つけられない，夫が妻の仕事を手助けするのをためらわない家庭の妻，あるいは夫を亡くした女性にとって，洗濯業は唯一の自助するための手段としてあり，救貧院へ行ったり，教会の慈悲に依存したりすることなく，女性が自立しえる方法としてあったのである[26].

さらに，サミュエルは，「荒くれ者たち」の家庭経済について，以下のように記述している．人々は副収入として，豚の飼育，運送業と小売，野菜の収穫を行って，家計を調整し，また，密猟や盗みも行われた[27]．救貧院や教会の慈善にすがることを拒否した場合には，社会的，道徳的規範に抵触する結果をもたらした．

多様に運用された家庭経済に資する賃労働をめぐる状況について，サミュエルは，いくつかの個人経営企業が存在していたものの，他の人々の労働によって収入を得るといった状況はなく，労働者たちもまた，収入を得る方法が多様であり，労働組合についても業種によって異なり，とりわけ，労働は個人的な資質と家族的状況に規定されるもので，固定した労使関係のようなものが成立する余地がなかったと述べている．労働者の「活動と実践のアンサンブル」が，労働者組織によらず，地域の人々によって自律的に創造されていた様子が記述されているのである．

労働者の「活動と実践のアンサンブル」は，組織化された労働者のみを対象とする歴史の視点，あるいはその労働者組織そのもののみならず，法によっても周辺化された．アーサー・ハーディングという人物のライフ・ヒストリーを整理した『イーストエンドの暗黒社会—アーサー・ハーディングの人生における諸相—』(1981) では，ハーディングが一人称で自分の人生を物語るという形式で記述されている．資本と労働との関係における矛盾，および葛藤とは別に，法にもとづいて社会的な逸脱者として周辺化された労働者の労働と生活を明らかにしている．

1886 年生まれのハーディングは，ヴィクトリア後期のロンドン，犯罪者たちのスラム街として有名であった「ジャゴ (Jago)」で育った．サミュエルは同書の前書きにおいて，ハーディングの職業をめぐるライフ・ストーリーを通じて，組織的な犯罪とより平凡な経済的状況との関係が示されていると言い，さらに，彼と彼の家族の人生を通じて，当時のスラム街におけるその日暮らしの生活がより保障された生活へと変化していくさまが理解で

[26]ibid, 172-83.
[27]ibid, 227.

きるとも述べている．全体として，各章はスラム街の主要な側面，暗黒社会における企業，家族経営，政治，大衆文化に光を当て，暗黒社会と労働者階級の地域社会の関係，犯罪者と警察の間に成立した共犯関係，賭博の犯罪化の影響，ユダヤ人と非ユダヤ人の関係について示されるものだと述べている[28]．スラム街に生きた一個人の語りを通じて，社会的には単に「犯罪者」のレッテルを貼られ，歴史，および労働者からも周辺化された存在としてではなく，労働と生活を生きるひとりの人間としての存在が記述されているのである．

サミュエルは，階級関係の成立以前における労働者の生活世界が労働条件や労働のありように規定されるものではなく，逆に個人的な資質や家族的な状況によって労働が規定されていたことを記述した．その際，労働組合運動に参加する者のみを労働者階級として記述してきた歴史は，労働者の労働と生活を捉え損ねてきたと理解し，オーラル・ヒストリーの有効性を主張した．ラファエル・サミュエルは，遺作となった『記憶の劇場 (Theatres of Memory)』の始点について，以下のようの述べている．

> 「本書が始点とする論争的な提案は，歴史は，歴史家の予定調和でも，ポストモダニズムが主張するような歴史家の『発明品』でもない，というものである．それはむしろ，知の社会的な構成，いかなる例においても，数千の異なる手で行われる仕事であるということである．このことが真実であるならば，歴史記述をめぐる議論が指し示す方向性は，研究者個々の仕事であるべきではなく，解釈をめぐって敵対する学派のものでもない．むしろ，そこに歴史という考え方が埋め込まれている，もしくは，そこで対話的な過去と現在の関係が実行されるような，活動と実践のアンサンブル(the ensemble of activities and practices)である．」[29]

サミュエルは労働者の「活動と実践のアンサンブル」を歴史として捉えることによって，専門家が職業的に焦点を当ててきた歴史をより広い領域を対象とするものへと拡大した[30]．

---

[28]Samuel,'preface', Samuel(ed) *East End Underworld:Chapters in the life of Arthur Harding*, Routledge&Kegan Paul, 1981, vii-viii.

[29]Samuel, *Theatres of Memory, Volume 1: Past and Present in Contemporary Culture*, Verso, 1994, 8.

[30]なお，この「アンサンブル (ensemble)」という言葉の使用については，ヒストリー・ワークショップの名の由来（第２章の脚注 15 参照）に関わり，サミュエルが大衆文化，および舞台芸術に造詣が深かったことから，非同一性を通じて同一性を保っていく音楽における調和，ハーモニーのイメージを借りていると解釈することが可能かもしれない．

そのアンサンブルは労働者の労働と生活に関わるものであった．労働者の労働と生活のアンサンブルを労働者たちが自律的に創造している様を記述することで，それを脱周辺化することが，ラファエル・サミュエルの歴史研究の基盤にあったのである．

3．女性労働者の労働と生活に対する視点

サミュエルが炭鉱労働者について記述した『炭坑夫、石切職人、塩田農夫』の序文では，資本主義について，それが首尾一貫して成長したのではなく，19 世紀における発展はかなり不安定なものであったと指摘し，その発展のなかには産業間の差異だけではなく，男女間の差異があることを挙げ，以下のように述べていた．

「もう一つの主要な亀裂のライン，そして最も長続きしたものは，男女間のものである．たとえ彼らが同じ職業，同じ職場で働いていたにしても，彼らは異なる世界に属していた．例えば，製本業は男性の技術職であるが，女性たちの長時間低賃金労働でもあり，年間四，五ヶ月の雇用の季節労働として，多くの女性が従事した．」[31]

男女間の差異が最も顕著なものとして，炭鉱労働を指摘しているが，サミュエルは炭鉱労働に従事する男女間の差異を直接，記述していない．近代的な労働というかたちで確立されていなかった 19 世紀の炭鉱労働は，初発の労働者たちとその家族にとって，生きるために依存しえる唯一の収入源ではなかったと述べている．具体的にある村では，男性が炭鉱へ働きにいくと女性はレースづくり，あるいは高台にある製粉所での労働，炭鉱夫の息子たち，もしくは父親は農業に従事したという．さらに炭鉱夫とフランネルの職工が混在していた別の村では，男性が炭鉱夫になるために村を出て行けば，彼らの妻たちはフランネルを織るために家に留まったという[32]．

さらにサミュエルは，ハーディングのライフ・ヒストリーを記述した『イーストエンドの暗黒社会』においても，ハーディングと家族の関係を記述している．「結婚」と題された章では，四人の子どもの父親，妻帯者となったことで，小額の支出にさえ気を配るようになり，前科のある者をゆすることで有名なたかりに金銭を与えることを止めることにしたのであるが，そのきっかけはたかりたちに毅然と立ち向かった妻に彼らと縁を切るように

[31]Samuel(ed), *op. cit*, 1975, xi.
[32]ibid, 65.

頼まれたことであったという[33].

また，サミュエルは，農村における労働者階級の男女の生活と労働を記述した『農村生活と労働者』において，女性労働によって著しく発展した産業としての洗濯業に注目していた．夫を亡くした女性が家族や親戚の助けを借りながら自助する手段として，洗濯業があった．しかしながら，一方で，女性の多くが従事した洗濯業の特徴は，賃労働とは異なり，厳しさでも安定でもないと述べ，それは他の何よりも彼女の家族的状況に依存するものであったことにあると指摘している．例えば，娘の多い家族をもつ女性は，そうではない女性たちに比べると特に優位で，無料の運送手段をもつ女性はまた，さらに優位であった[34]．洗濯業の発展は家族の規模に規定され，とりわけ，仕事を助ける娘の年齢や数に依存したのである．

サミュエルが男性を主たる担い手とする賃労働と女性労働の比較を行い，その差異を家族的状況による拘束性の強弱とし得たのはまた，生活と労働を生きる存在として，女性労働者を捉える彼の視点を不可欠の前提としていた．ラファエル・サミュエルが記述した19世紀の労働者階級の女性は，おおむね，婚姻関係のもとで家事，育児を担い，同時に家庭外での賃労働にも従事する存在であり，その労働は家族的状況により依存するものであった．賃労働との比較を通じて説明された女性労働に関わる記述は，単に男女間の経験の差異の問題として捉えられたのではなく，男女の権力関係を捉える視点の萌芽としてあったと考えられる．19世紀の労働者の生活世界を捉える視点と，1970年代の男女関係をめぐる問題を捉える視点が同じものであると考えるのは妥当ではないだろう．しかし，1970年のラスキン会議において行われた労働をめぐる議論もまた，家族的状況を等閑視し，男性並み平等を達成しようとするものではなかった．この意味で，ときの女性運動とサミュエルの視点は相同性をもっていたと考える．

サミュエルの著作における女性労働者を捉える視点は，ラディカルに男女間の権力関係を問うものではなく，女性労働者の労働と生活のアンサンブルを記述するものであった．

---

[33]Samuel(ed), *op. cit,* 1981, 217-8. また，サミュエルがハーディングの語りとして記述したもののなかで言及されている女性労働は，ハーディングの母親によるものである．彼女はハーディングが行った自営業のいずれにおいても，何らかの形で労働を担った．いずれのハーディングの労働も，家族経営のもとでなされたものであった．

[34]Samuel(ed), *op. cit, 1975, 229.* サミュエルはこの事例として，以下のオーラルな証拠を引用している．「私たちのママは，わずかなお金，一日に2シリングのために働きに出ていた．朝八時から夜の八時まで．洗濯とアイロンかけをしに…彼女は一つか二つか洗濯かごを持っていて，その仕事を家でやった…彼女は出かけていって，仕上げのいくつかは家でやった」．

その記述を踏まえてどのような労働と生活を希求するのか，といった規範に関わる分析はなされていない．サミュエルは，ヒストリー・ワークショップの方法論をめぐる議論のなかで，王室や英国国教会，労働組合から除外されていた人々の歴史を記述することそのものが政治的，分析的であると主張していた．その主張にそって，おおむね労働者階級の男性を対象にしたとはいえ，労働者階級の労働と生活のアンサンブルを捉え，さらに男女間の経験の差異を記述した．これによって，男女間の労働をめぐる性格の違い，社会的背景の違いを超え，権力関係を捉える女性史が，ヒストリー・ワークショップに参加していた女性たちによって展開されたのである．

第３節　労働者教育による労働者の解放

１．男女間の差異を捉える視点としてのフェミニズム

性別役割分業は公的な労働の世界を男性に，私的な生活，家族の世界を女性に割り当て，前者の中心化をもって後者を周辺化，外部化する近代的なシステムである．しかしながら，両者の分断はそれほど自明ではなく，サミュエルは，近代社会，そこでの労働が不安定な状態であった 19 世紀の労働者階級の労働と生活を記述することで，それらを相対化した．すなわち，労働と生活が分かち難く結びついているものであることを自明なものとする視点を提示したと考えられる．さらに，個人的な領域とされる生活の場は，社会的な不平等を問う言説においては射程の外とみなされ，結果として，個人的な次元における権力関係の存在は問われなかった．サミュエルの記述は，そのような権力関係を捉える視点の萌芽としてあったと考えられる．

サミュエルは歴史と対峙するとき，どのような規範についても積極的に分析することなく，記述するのみである．しかし，その「記述」のなかにこそ，「分析」があるという発想をもって，労働者階級の労働と生活のアンサンブルを捉え，そこにおける男女間の経験の差異を捉える視点こそが，女性解放会議の展開の基盤につながったと考える．サミュエルにとって，女性労働者の存在を不可視にしたままで，労働者階級の労働と生活を理解することは不可能であった．サミュエルの歴史記述は，平等や人権といった観念によりながら男女間の権力関係を対象化するのではなく，具体的な女性労働者の労働と生活を記述することによって，それらを対象化するものであった．

サミュエルは性別に加え，人種に関しても革新的な視点をもっていた．ロビン・ブラックバーン(Robin Blackburn)によれば，その視点は，英国におけるコミュニストの主流であ

った英国共産党の際立った特徴である老若，男女，移民とネイティブ，肉体労働者と知的労働者の間に存在した不平等な関係の是正を求める気風のなかで培われたものである．ブラックバーンは，ラファエル・サミュエルは「現代的な社会運動の強力なサポーターであり，現代文化についての彼の仕事における家庭的な事柄の重視には，フェミニズムの強い影響が認められた．たとえ彼が，共産主義的伝統の過ぎ去った道徳的平等主義を嘆いていたにしてもである」と述べている[35].

また，サミュエルは，フェミニズム，あるいは黒人の団体を利用して名を成そうとする人々を指して，「白人男性の出世第一主義者は枚挙に暇がないけれども，何故女性政治家，あるいは黒人政治家が格別に有徳であることを期待されねばならないのか」と問うた[36]. 歴史や社会における女性の位置を明らかにすることは，実際以上に女性を評価することではなく，具体的にその労働と生活の全体を捉えることを通じて，出自や属性に還元されえない人間のありのままを承認することであった.

第7回目に当たる1973年のヒストリー・ワークショップは女性史をテーマに開催され，先に述べた1976年の『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル』発刊に際しては，進められるべき研究の対象として女性史が位置づけられた．そこでは女性史の意味について，以下のように述べられていた.

> 「仕事と家庭の分離，家庭の個人的な世界と女性との同一視，そして女性と家庭生活を周辺化するイデオロギーは全て，労働者の歴史においては見えない状態におかれ，問題化されないのが資本主義の特徴である．労働者階級とは一般に，男性労働者を意味し，一方で女性は彼らの妻，母，もしくは娘として捉えられている．家庭生活は統計上，実際の歴史的な活動の世界に対する不変の黒布として扱われる.」[37]

以上より，労働者階級の労働と生活を捉えるサミュエルの視点は，男性労働者のみならず，女性労働者も「対象の点」とし，男女間の差異を含め，人間のありのままを捉えることによって，ときのフェミニズム，すなわち，労働と生活の統合を尊厳のもとで成したラ

---

[35]Blackburn, Robin, 'Raphael Samuel: The Politics of Thick Description', *New Left Review*, No. 221, Jan/Feb, 1997, 134-5.
[36]ibid, 135.
[37]Alexander, Sally, and Anna Davin, 'Feminist History', *History Workshop Journal* (Vol. 1, 1976) 4.

スキン会議と連なる価値をもつものであったと考える．ありのままの労働者を記述することで，彼らの「等しい価値をもつ人間」としての尊厳の獲得を目指すものであった．

2．学習者に対する受動性という教育者の物語り

「ラファエル・サミュエルの枯渇することのない歴史的な想像力によって，調査を楽しみ，アーカイブや一次資料を検討し，歴史を記述することができた」と述べるサリー・アレクサンダーは，自身のラスキン・カレッジにおける学生としての経験から，言葉やテキストは学習の対象に過ぎず，現実でも歴史でもない，ただそれらを通じて，現実の権力関係を理解して初めて意味をなすものであると指摘している[38]．逆に，現実の権力関係を理解することと，それらを記述することの間は何によって架橋されるのであろうか．とりわけ，直接的に経験することのできない過去の事実を記述するうえで，それを理解するために求められるものとは，どのようなものであろうか．

第三世界フェミニズムを提起する岡真理は，当事者ではない他者が，当事者の記憶を「分有」することによって，記憶が失われることを防ごうとする．岡は，「集団的記憶，歴史の言説を構成するのは，＜出来事＞を体験することなく生き残った者たち，他者たちであるのだから」，彼らにその記憶が分有されなければ，「その＜出来事＞を生きた者たちの存在は，他者の記憶の彼方，『世界の外部』に放擲され，歴史から忘却される」と述べている[39]．そしてこの＜出来事＞の分有は，「徹底的な受動性」のもとでこそ可能であるとして，以下のように述べる．

「＜出来事＞の記憶，＜出来事＞の痕跡，それは偏在している．しかし，『それ』はつねに，人の主体的な意識が捉え損ねるどこかにある．」

「他者の呼びかけに応えることでしか，私たちは，その痕跡に触れることができない．決して，＜出来事＞の全能な記述者たり得ない証言者，＜出来事＞に対する証言の，その無能さ，徹底的な受動性」，「『私』に先だってつねに他者の声があること，この他者の声こそが，＜出来事＞の外部にいる者を―第三者を―証言者として召還するのだということ，そして，＜出来事＞の記憶を分有するという営為とは，この他者の呼びかけの

[38]Alexander, *op. cit, 1995, 249*-53.
[39]岡真理『記憶／物語』岩波書店，2000，75.

声にその無能さと受動性において応答するものにほかならないということである.」[40]

サミュエルの労働者教育は，この「徹底的な受動性」をもとに展開されたと考えられる．ポール・マーティン(Paul Martin)は，ラスキン・カレッジにおける歴史に対するアプローチの特徴について，以下のように述べている．

「100年に及ぶラスキンの歴史を述べるにあたって，歴史に関わる昨今のラスキンのアプローチを多方面で明示したラファエル・サミュエルに触れないことは不可能である．彼は自己を消去する男性で，たいてい自分自身について語ることよりもむしろ，他の人がしたことを聞いたり，話したりすることを好んだ．そのため，彼は疑いなくこの考えに顔を青ざめるだろう.」[41]

サミュエルの労働者教育は，学習者としての労働者階級の男女に対するサミュエルの受動性をもって可能となったのではなかろうか．

---

[40]同前，97-8．西欧のフェミニズムはしばしば，第三世界における女性の問題に対し，無視，あるいは後進性というレッテル貼りによって応答してきた．例えば，1975年，メキシコで開催された第1回世界女性会議において，ボリビアの鉱山労働者の妻が鉱山労働者の悲惨な労働と，その家族に及ぶ弾圧を主張した．これに対し，「もう，お国のことはじゅうぶん話したでしょう．今日は，私たち女性の問題を話し合いましょう」と遮られた（ドミティーリャ・バリオス・デ・チュンガラ，モエマ・ヴィーゼル（唐沢秀子訳）『私にも話させて　第2版』現代企画室，1996)．第三世界フェミニズムは，こうしたフェミニズムにおける西欧中心主義に対する批判から成るものである．

一方，鹿島徹は「抑圧された者たちの歴史」における彼らの「伝統」について，第一に「進歩という観点からは意味のないもの，『歴史の発展』に寄与することもなく，『伝統』として登録される必要のないものとして顧みられず，ただ打ち捨てられ滅びていったものの記憶を，哀惜の念をもってそのまま拾い集めること」，第二に「過去の抑圧・支配の痕跡を意識的に拾い集めて提示すること」によって，「現在の抑圧への抵抗を喚起する」こと，そして第三に，「実際には起こらなかったけれども，しかし起こったかもしれない出来事」を「自分の体験の次元において想定する」「感受性」，「抑圧され否定され，敗北して打ち捨てられていった過去の事象を，それがそうでありえた可能性，場合によっては正史により隠蔽されはしているけれども実際に発動されていたかもしれない潜勢力，そうしたものを生き生きとしたイメージとしてよみがえらせ，現在の自分の生においてその『反復＝取り戻し』を試みること」を指摘している（鹿島「個人と歴史を結ぶもの-『物語り的自己性』論と『伝統』概念の取り戻し-」『可能性としての歴史　越境する物語り理論』岩波書店，2006，226-30)．

[41]Martin, Paul, 'Look, see, hear: A remembrance, with approaches to contemporary public history at Ruskin', Andrews, Geoff, Hilda Kean and Jane Thompson(ed) *Ruskin College, Contesting knowledge, dissenting politics*, Lawrence & Wishart, 1999, 145.

「歴史の物語り論」にもとづく歴史教育論を構想する安達一紀は，「これまで歴史教育は，歴史学が生みだした『歴史の知』を無批判に流通させてきた」が，「そこに，『国民国家』時代の“歴史の知という狡知”とでもいうべき側面を見出すことができる．教師は，『真実』を教えているつもりで，健全な『市民』を育成しているつもりで，その実“ナショナリズムという現代の神の意志”を，着々と実現させているだけだと疑ってみる必要がある」と述べている[42]．そして，「閉ざされたテキスト」としての歴史教科書叙述の「無名性・匿名性」を指摘し，歴史教育は「歴史の知の狡知」に自覚的であるべきだとして，以下のように述べている．

「人は『物語』として世界を了解し，『物語』として自分を確認している．『物語』はつねにそれを正当化する根拠をもたない．支持する人によって支えられている．コミュニケーションによる相互承認，『物語』の共有が，その根拠の不在を代替している．コミュニケーションとは，互いに互いの『物語』を了解しあう行為である．」[43]

歴史教育のみならず，広く教育そのものを「物語的交渉」だとする毛利猛は，その交渉，安達のいうコミュニケーションについて，以下のように述べている．

「教育という物語的交渉において，物語を語るだけで聴くことのない者と物語を聴くだけで語ることのない者を，教育者と子どものいずれかに割り振ってはならない．そもそも，物語的交渉というものが，語ることのなかで聴き，聴くことのなかで語るという二重化された交渉である限り，子どもは単に聞き手であるのではなく，聴くことのなかですでに語っているはずであり，教育者はこのような子ども自身が語る物語のよき聞き手でなければならない．この面からすれば，教育とは，子どもが自分なりに物語を形成していくことへの援助である．」[44]

毛利はさらに，相互承認，交渉としての教育は，「複数の大人がそれぞれに描く『成長の物語』と，子どもが自分なりに描く『物語』とのぶつかり合いのなかで展開」しているの

---

[42]安達一紀『人が歴史とかかわる力—歴史教育を再考する-』教育史料出版会，2000，58-9.
[43]同前，171.
[44]毛利猛「教師のための物語学—教育へのナラティブ・アプローチ-」矢野智司・鳶野克己編『「物語ること」の教育学』世織書房，2003，45-6.

であり，「誰が物語るかによって若干異なる『筋立て』に折り合いがつけられていくことが大事であって，一つの物語だけが『支配的』になることは却って教育のあり方を歪めることになる」と指摘する[45]．「大きな物語」を否定するものではなく，それが生を支えてきたこと，「小さな物語」の一面的な美化がまた，生を硬直させることを踏まえ，その不断の語り直しによる教育という「多声的」な現実のその「多声性」の保障が求められているのである．

労働者が自身の経験にもとづいて過去を記述し，それと現在との連結を見出すことによって自分自身と生きている社会を理解するように促す労働者教育において，サミュエルは過去の女性労働者の労働と生活における経験を受動性において応答したのと同様に，目前に存在した学習者としての女性労働者に対しても受動の態で応答したと考える．経験されえない女性労働者の記憶をサミュエルが分有しえたのは，その受動性による応答あってこそであった．サミュエルは，この受動性によって，労働と生活のアンサンブルを奪い，労働者たちの生，あるいは歴史を硬直化させることの是正を求め，労働者学生たちの尊厳の獲得を目指したのである．

また，生の硬直化を避けることで獲得される人間の尊厳は，常に固定されることなく，常なる矛盾と連帯のもとで獲得され得るもののように思われる．サミュエルの労働者教育は，そのように，可変的に尊厳を求めるものとして存在していたのではなかろうか．

3．労働者の解放から開放への転換

本章は，1970 年にラスキン・カレッジで開催された英国初の全国女性解放会議に対して，ラファエル・サミュエルのヒストリー・ワークショップがどのような「形態と表現」を提示したのかについて明らかにすることを目的とした．サミュエルの労働者教育としてのヒストリー・ワークショップは歴史をめぐる専門主義を批判し，研究と学習，教育の統合をはかるものであり，その活動は学習者である労働者の「私」から社会を理解し，解釈，記述するものであった．その「私」とは，労働と生活の全体，アンサンブルを生きる存在であった．その「私」が歴史において，周辺化されたものであるからこそ，労働者の労働と生活を記述することは，歴史における政治性を示した．

人間をめぐる研究の物語論的視点の意義を擁護しながらも，鳶野克己は，「頷き納得することのみを目的化するとき，出来事を物語ることは，既存の意味の在庫を参照しつつ，当

[45]前出，47．

該の出来事の意味を相応の位置に落ち着かせ収まりをつけようとすることにすぎなくなる」危うさをも対象化して，その突破口を「物語の生成性と非完結性」と「物語における他者との共同性」に求める[46]．鳶野は第一に，生において遭遇する，馴染みのない不可思議なものに対して，「物語的な思考様式を駆使して」，理解可能なものへと翻訳してしまうとき，「私たちが生きることにとって『安定』とは，すでに『停滞と衰弱』の別名なのではあるまいか」と問い，以下のように述べている．

「人生全体を原理的にその都度統合しうるようなテーマを求めて生きる生き方への反省が徹底されていないところでは，いかによく練られた手の込んだ筋立てで語られるにせよ，自己の人生の物語は，生きることの意味の生成と変容へ向けて絶えず私たちの生き方を開く力としてよりも，人生の全体が腑に落ちたような気持ちにさせる意味づけのもとに私たちの生き方を閉ざす力として威をふるうことになる．」[47]

さらに鳶野は，第二に相互承認，自己と他者の物語における合意，一致を求めてしまうことによって，この「物語の生成性と非完結性」の徹底が阻害されることを指摘して，以下のように述べている．

「私たちが強く人生の物語を求めるとき，それは同時に自分の痛切な経験を共有してくれる他者を求めるときでもあった．そして他者が見出され，他者とともにある自己が見出される．両者は共同して自己の人生の物語の新たな生成に参与していく．しかし，そこに生成する物語の共同性は，物語をめぐる自他の同意や一致，曇りのない共感的相互理解のみを価値として語られる必要があるのだろうか．現に人生の物語を切実に求める発端は，これまで深く信じられていた合意や一致，共感的相互理解のあり方や筋道が崩壊したり根底から動揺したりした体験だったのである．とすれば，より揺るぎない共感的相互理解や固く手を握りあう合意をふたたびめざす方向のみならず，自己と他者とのかかわりに一貫性と安定性を求めあうなまやさしい共感的相互理解の姿勢などけっして寄せつけないような次元での『生きることの意味』をそれぞれがむすび出す方向へも

[46]鳶野克己「生の冒険としての語り-物語のもう一つの扉—」矢野智司・鳶野克己編，2003，前出，185-6.
[47]同前，197.

また，私たちが人生の物語ることにおける共同性を位置づけることが許される.」[48]

ラスキン・カレッジで開催された英国における初の全国女性解放会議，英国における第二波フェミニズムの初発は，女性労働者の労働と生活における権力関係を捉え，労働と生活の分割不可能性を尊厳のもとで統合する点を特質とするものであった．その枠組みは，ヒストリー・ワークショップ，そこでのラファエル・サミュエルによる労働者教育が実践を通じて提起したものであり，英国におけるフェミニズムの展開は，ヒストリー・ワークショップにおける労働と生活のアンサンブル，すなわち，労働者のありのままを捉える視点を基盤とするものであった．このことから，ラファエル・サミュエルの歴史をめぐる労働者教育もまた，学習者である労働者の労働と生活のアンサンブルによる尊厳の獲得を保障するものであったと考えられる.

フェミニズムにもとづく歴史研究の展開に帰結する労働者教育において，サミュエルは受動の態を示した．普遍的な「解放」を掲げることよりもむしろ，労働者の労働と生活に対する積極的な分析を拒み，人間のありのままを記述することを目指したことから，サミュエルの労働者教育は，学習者の多様な労働と生活のアンサンブルに対する「開放」であったと換言できよう．その「開放」を基盤にすることによってこそ，互いが他者である労働者の男女双方にとって，ヒストリー・ワークショップが尊厳の獲得をなし得る場になったと考える.

しかしながら，また一方で，「なまやさしい共感的相互理解の姿勢を寄せつけない」，自己と他者の物語がぶつかり合う場としてのヒストリー・ワークショップについては，ラファエル・サミュエルの受動の態に対する労働者学生たちの反応を明らかにすることによって，より理解可能なものであるように思われる．サミュエルは実際の労働者教育の場において，労働者自身が生きられた経験としての歴史を記述することを通じて，彼らに尊厳の獲得を促した．ありのままの労働者の経験としての労働と生活の分割不可能性にもとづく尊厳の獲得がどのように現れたのかを探るために，次章以降では労働者学生による生きられた歴史としての経験の理解，解釈，記述を考察する.

[48]同前，207-8.

第５章　労働者による労働経験の記述

本章では，1970 年から 1974 年にかけて，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の名前で刊行された労働者学生による歴史記述，とりわけ，労働の場における経験を主題とするものを取りあげ，その特徴を整理する．

前章で述べたように，ラファエル・サミュエルの歴史教育としてのヒストリー・ワークショップは，労働者の経験にもとづく歴史記述を通じて，彼らが自分自身とその社会を理解することを促し，そのことによって社会とそれまでの教育経験とによって奪われた労働者学生の尊厳の獲得を目指すものであった．すなわち，労働者学生が過去の労働者の歴史を記述することによって，記述の対象である隠蔽された過去に光を当てると同時に，記述する者自身にも光を当てようとするものであった．その光の当て方のなかに労働者学生の尊厳の獲得のありようが記述されているように思われる．

なお，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』（全１３巻）を所蔵する公の機関は本邦には管見の限りない．そのため，本章では英国のブリティッシュ・ライブラリー（the British Library，在ロンドン）所蔵のものを用いる．パンフレットの著者，タイトル，発行年は以下の通りである．

No. 1　フランク・マッケンナ『鉄道夫の会話事典-鉄道夫が用いる新旧俗語集』(1970)

No. 2　サリー・アレクサンダー『セント・ジャイルズ・フェア-19 世紀のオックスフォードにおける大衆文化と産業革命-』(1970)

No. 3　バーナード・レアニー『19 世紀のオックスフォードシャアにおける階級闘争-1830 年から 1835 年におけるオットムーア騒動の社会的，共同的背景』(1970)

No. 4　ボブ・ギルディング『イースト・ロンドンにおける日雇い樽職人-古いロンドン・トレードにおける労働者管理-』(1971)

No. 5　スタン・シップリー『ヴィクトリア中期のロンドンにおけるクラブ・ライフと社会主義』(1971)

No. 6　デイビッド・ダグラス『ダラム地方における炭鉱生活-ランク・アンド・ファイル運動と労働者管理-』(1972)

No. 7　ジョン・テイラー『自助から魅力的なものへ-労働者クラブ，1860-1972』(1972)

No. 8　アラン・ホーキンス『19 世紀のオックスフォードシャアにおけるウィットサン』(1972)

No. 9　デイブ・マーソン『1911 年における子どもたちのストライキ』(1973)

No. 10　デイブ・ダグラス『ダラム地方の炭坑における会話-炭坑夫の会話事典とワードリー炭鉱，　炭鉱歌とジョークの思い出』(1973)

No. 11　ジェニー・キッターリンガム『19 世紀イギリスの農村における少女たち』(1973)

No. 12　エドガー・モヨ『マタベルランドにおけるビッグ・マザーとリトル・マザー』(1973)

No. 13　ビリー・コルヴィルとデイブ・マーソン『集まれ，そしてついて来い-1911 年における子どもたちのストライキに関する演劇-』(1974)

第 1 節　労働者階級に関する記述

1. バーナード・レアニー『19 世紀のオックスフォードシャアにおける階級闘争』(1970)

パンフレットの冒頭にはラファエル・サミュエルによって，以下のようにバーナード・レアニー(Bernard Reaney)の略歴が記載されている.

「バーナード・レアニーはロンドンのアイリッシュである．彼は 1966 年にラスキンを訪れ，後にオックスフォードのコーパス・クリスティ・カレッジ（Corpus Christi College）に進学した．彼は現在，歴史学と経済学の 3 年生である．ラスキンにおける彼の最初の調査は，1872 年から 1880 年までのオックスフォード地方におけるジョゼフ・アーチ（Joseph　Arch）の組合に関するものであり，それに対してはカレッジの G.D.H コール賞が与えられた．現在の研究は当初，1968 年 11 月のヒストリー・ワークショップのために準備されたものであり，当時からこれまでの間に発展している．学校卒業後，彼は草創期のイングランドにおける資本主義に関する大衆運動についての研究を継続することと同時に，アイルランドにおける貧困生活に関する研究にも着手することを希望している.」[1]

レアニーは一次資料にもとづき，オックスフォード地方におけるエンクロージャーの過

[1]Reaney, Bernard, *The Class Struggle in 19th Century* Oxfordshire (History Workshop Pamphlet Number Three), 1970, V.

程とそれに対する地域住民の抵抗運動について明らかにしている．その構成は以下のようである．

オットムーアの７つの町（The Seven Towns of OTMOOR）
共有権（Common Rights）
エンクローザーたち（The Enclosers）
1830 年９月６日の「閉め出し」とセント・ジャイルズ・フェアにおける暴動（The 'Possessioning' of September 6, 1830 and the Riot at St. Giles's Fair）
1830 年から 1835 年の抵抗運動（Resistance Movement, 1830-1835）
抵抗の崩壊（The Break-up of Resistance）
セルビアの沼（The Serbonian Bog）

まずは，調査の対象であるオットムーアの７つの町について，それらを取り囲む原野（ムーア，moor）の特性，人口の概要が述べられ，支配階級の不在を背景とした住民の共有権として，原野の利用が部外者には制限されていたことを指摘している．この住民自治とでも言える状況にあったオットムーアが４人の支配階級，エンクローザーたち（enclosers）によって，エンクロージャーの対象となり，法整備が整えられていく 100 年の過程を跡づけている．エンクローザーたちは原野に設置する柵が次々に女性の衣服で変装した地域住民によって深夜に破壊されることに対して軍事的な制裁を加えるよう，関係当局に要請していた．そのなか，地域住民たちは 1830 年９月６日の昼間，原野において集会を開いた．レアニーはこの集会の様子を以下のように記述している．

「一般的な巻き返しがあった．一方で，以前の急襲では単に男たちの小さな集団によって行われていたが，今回は原野に 1000 人におよぶ人々が集結した．『原野全体が人々で埋め尽くされた』と，ある目撃者は証言した．女性と子どもも男性同様，巻き返しを行った．その光景を目にした農夫は彼らの『熱意』と『忍耐』について語り，『ぬかるみと深い水のなかを徒渉し，行進のなかでいかなる障害も克服することによる安気と落ち着き』を述べた．そこには，身元を確認されることの恐怖はなく，９月６日に柵を破壊した者たちは先人のように，女性の衣服で変装することも，顔を黒塗りすることもなかった．彼らは夜中ではなく，燦々とした太陽のもとで集結した．そして，ついに中隊が

原野に到着したときも，彼らは彼らの土地に踏みとどまり，柵を破壊し続け，兵士たちに参加するように誘いさえした．暴動を取り締まる法律が読み上げられ，彼らは退散するのを拒否したため，66 人が逮捕され，そこで 41 人はオックスフォード行きの輸送車に乗せられ，残りの 25 人は，召還があれば出頭することを記した誓約書を提出させられて，釈放された．」[2]

釈放されなかった人々をオックスフォードへ運ぶ輸送車はオックスフォードの祭りであるセント・ジャイルズ・フェアのなか，人々の喧噪のなかを通過せねばならず，その喧噪を利用して，原野の住民による救出劇が展開された．レアニーは次のように述べる．

「セント・ジャイルズ・フェアにおける暴動は，有名な出来事でありながらも，詳細に検討されず，一般的な見解によれば，自然発生した暴動，多かれ少なかれ，偶然に起きたものだとされてきた．その暴動は祭りの熱狂的な雰囲気に促されたことは疑いない．実際に，ロンドンのある新聞の読者投稿の欄には，『パリの革命を，さも生活であるかのように展示する』祭りの『ピープショーのキャラヴァン』の責任を追及する記事が掲載された．『人々に関する膨大な量の醜聞』によって，迅速な軍事動員が可能となった．

しかし，これは単なる暴動でも，荒々しさの自然発生でもなかった．その救出は当日，先立ってオットムーアで行われたデモのように，確実に計画されたものであった．」[3]

セント・ジャイルズ・フェアでの救出劇の後の 5 年間，1830 年から 1835 年にかけて，柵の破壊はより計画的なものとなり，抵抗運動はより強力に，かつ頻繁に，地域住民全体を巻き込んで展開された．それに対する軍事的な弾圧もまた強化された．その強力な抵抗運動を弱化させる力は支配階級の弾圧よりもむしろ，地域住民内の同一性の欠如にあったとレアニーは指摘する．とりわけ，その連帯を切り崩したのは「リスペクタブル」な農夫であった．レアニーは述べる．

「農夫のうちの数人の立場が疑わしいものであった．エンクロージャーのもとで地割りされた人々は特に曖昧な立場にあり，彼らが所有者の側に立つのか，民衆の側に立つの

[2]ibid, 36.
[3]ibid, 3.

かは，それらの双方にとっての勢力のバランスに関わる問題であった.」[4]

抵抗運動はやがて勢力を失い，エンクロージャーが完遂されるのである．レアニーはその敗北について，以下のように述べた.

「共有権という伝統がオットムーアに住まう人々の思考や生活から消失するまでには，かなりの時間を要したに違いない．しかし，エンクロージャーの発展は，その経済的基盤を除去した土地所有者や資本家に抗って，自分自身を守り抜こうとした人々のように，オットムーアの民衆は，最終的には敗北した．しかし，人々が敗北したこのオットムーアの場合，自然が復讐を成した．原野はそのエンクローザーにも，資本にも，借人にも，彼らが期待したようにはその益を与えず，維持するために要する費用のみを課した.」[5]

人々の敗北の仇を自然が討ったとするエンクロージャーの結末についての記述は，レアニーの経歴として述べられたロンドン在住のアイリッシュというナショナルなアイデンティティ，自己に関わるものであったと想像することは難しくない．連合王国のなかにあってもグレイト・ブリテンには包摂されないアイルランド人としてのアイデンティティは，その地理的な条件と厳しい自然とともに維持されてきたものである．レアニーの自己は人々が資本に対峙して，彼らの自然を守り抜こうとした痛快な歴史を記述することのなかに現れたのである.

2. スタン・シップリー『ヴィクトリア中期のロンドンにおけるクラブ・ライフと社会主義』(1971)

19 世紀における労働者クラブの活動のなかに，英国における社会主義の伝統を見出すスタン・シップリー（Stan Shipley）の略歴は以下のように述べられている.

「本パンフレットの著者であるスタン・シップリーは，北ロンドンのエンジニアである．彼は，ラスキンの学生であった４年前に調査を始め，ストラットフォード・ダイアレクティカル（Stratford Dialectical）とラディカル・クラブ(Radical Club)の研究によ

[4]ibid, 67.
[5]ibid, 72.

って，カレッジの G.D.H コール賞を受賞した．ラスキンを修めた後，大学入学の申し出を家族の理由(彼には4人の子どもがいる)と，調査を続けたかったがために断った．彼はガーネット教員養成学校で一年を過ごし，今はハベリング・テクニカル・カレッジにて教職に就いている．彼は積極的な組合活動家である.」[6]

シップリーによるパンフレットの構成は以下の通りである.

ソーホー・オブライエン派 (The Soho O'Brienites)
大都市のクラブ・ランド (Metropolitan Clubland)
普通参政権同盟 (The Manhood Suffrage League)

ソーホー・オブライエン派は，チャーチズムの担い手であったブロンテア・オブライエン (Bronterre O'Brien) の意志を引き受けて，社会民主主義連盟 (the Social Democratic Federation) の中心的な役割を担い，19 世紀半ばから，ロンドンの労働者階級による革新的な潮流のなかにあった一派である．シップリーはそのオブライエン派の活動における主要な関心事項として，以下のように述べている.

「オブライエン派は，彼ら自身の社会的，および政治的観点から，労働者階級全体を教育する機会を決して逃さないプロパガンディストであった．彼らの自己教育 (self education) への関心は，ロンドンのクラブ・メンの間では一般的ではなかったにしても，理論と階級闘争の武器としての学習の利用を緊密に結びつけることにあった.」[7]

シップリーは 1840 年代のチャーチズムと 1880 年代の社会主義の連結を見出したのがオブライエン派であると述べており[8]，同派は，選挙権の獲得にとどまらない労働のありようの変革が，労働者の自己教育によってなし得るとして活動を展開したのである.

また，シップリーはオブライエン派と他のロンドンにおいて活動していたアルチザンのクラブとの相違について，「ソーホー・オブライエン派は，イギリスのアルチザンが一般的

[6]Shipley, Stan, Club Life and Socialism in Mid-Victorian London (History Workshop Pamphlets Number Five), 1971, iii.
[7]ibid, 3.
[8]ibid, 5.

に順応主義的であると捉えられていた当時，社会的な革命主義者であった」と述べている．ソーホー・オブライエン派は，広く啓発活動を行い，労働に関わる要求を声高に叫び，資本主義の論理に抗う社会的な革命を求めた．

一方で，そのオブライエン派が啓発の対象とした 1870 年代，1880 年代に発展したロンドンにおける労働者階級のクラブについて，シップリーは以下のように述べている．

「たいていのクラブについて，コーナーストーンは日曜の夜の会合であり，政治に関わる主張を形成するうえで，これらのクラブによって担われる部分を理解するために，世俗的な雰囲気を奪回するように努めることが求められた．」[9]

「クラブは，『有益な』知識を蓄積することよりもむしろ，労働者階級の人々が彼らの主張を形成し，会話のスキルを磨くために通う場所であった．ディベートの規則は，議論のどのような主題のもとでも維持され，したがって，すべての会合が，参加者にとって，アドヴォカシーの訓練となった．」[10]

労働者階級の人々が政治的な問題に関わる主張を形成する議論のために，「すべてのクラブの特徴は，知識に対する強力な渇きであった」とする変化が見られるようになった[11]．この渇きは，世俗主義の流れと相まって，真の意味での政治的であるよりもむしろ，科学的な教養をもとめる雰囲気を 1870 年代のクラブに醸成した．すなわち，ここではあくまで会話，もしくはディベートのための知識の獲得が求められたのであり，その知識での自身の立場，主張はディベートの度に可変的なものであったのである．

確かに，世俗主義から社会主義への変化を見せるクラブも存在したが，多くのクラブでは自然科学，人文科学を中心とする科学のクラスが多く開催され，音楽や踊りといったエンターテイメントを提供することが中心的な活動であった[12]．このクラブの雰囲気を社会主義の方へ一変させたのが，1874 年に発足した普通参政権同盟であった．この同盟に対し，深く，継続的な影響，友好，政治的情熱，学識を与え，参政権のみならず，広く政治的課題，とりわけ階級社会の諸問題にまで活動の枠を拡大したのがオブライエン派であった．ロンドンにおけるクラブ・ライフに対する普通参政権同盟の影響について，シップリーは

[9]ibid, 23.
[10]ibid, 24.
[11]ibid, 26.
[12]ibid, 41-7.

以下のように述べた.

「1870 年代のロンドンに見られるのは，小さいが影響力のある労働者階級の男性のグループである．彼らはクラブと労働組合における戦略的な位置を占め，話し手として人を斡旋し，社会問題に関わる議論にともに参加し，持ち上がる政治的な問題についてはともに行動を起こした．彼らが大都市の組織のいくつかで，啓発の役割を果たし，異なる肩書きで多様に活動したのを見出す人もいるかもしれない．彼らのもう一つの基盤が男性普通参政権同盟であり，それに属した彼らの多くが 1875 年から 1881 年にかけて，あちらこちらで散見されるのである．しかし，確かに，彼らはいかなる場においても，彼らの見解を啓発する心づもりであったし，それを熱望していた．彼らのなかには，1881 年以前に，意識的な社会主義者の位置に達している者がいたのである．」[13]

シップリーは英国におけるマルクス主義の確立を 1881 年に設立された社会民主主義連盟（the Social Democratic Federation）に求める当時の一般的な見解に対し，労働者階級の人々のクラブ・ライフを基盤とする緩やかな連帯としてあった普通参政権同盟による社会主義の起こりを明らかにすることによって，労働者階級の意識に根ざした政治的表現として，英国における社会主義の展開を記述したのである．

その労働者階級の生活と意識に根ざした政治的表現を求めるシップリーの視点は，彼自身の労働組合活動家としての経験に由来するものであろう．さらにまた，彼がラスキン・カレッジ卒業後，労働者階級を対象とする教育機関における教員を志した経緯もまた，パンフレットに間接的にではあれ，書き込まれているように思われる．「知識に対する強力な渇き」にもとづいて展開された 19 世紀のクラブ・ライフは社会主義を教条的に教え込むことからは無縁であった．シップリーは社会主義が元来，人々の生活と意識に根ざした表現であることを記述したのである．

3. デイビッド・ダグラス『ダラム地方における炭鉱生活』(1972) ／『ダラム地方の炭坑における会話』(1973)

13 巻の『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』のうち，炭坑夫の労働と生活に関わる２冊を著したデイビッド・ダグラス（David Douglass）について，先に発行された

[13]ibid, 72.

パンフレットでは以下のように記載されている.

「このパンフレットの著者であるデイブ・ダグラスは，24 歳の若い炭坑夫である．しかし，彼は長い政治的な経験をもっている．彼が初めて，政治的な活動に関わりをもったのは，7 歳のときのことであった．そのとき，彼は『I.R.A と兵士たち』という町のゲームのなかで，テロリストたちの青年バンドを率いていた（多くのタインサイド（Tyneside）の炭坑夫たちのように，ジョーディ・アイリッシュ(Geordie-Irish)である)．タインサイドからヨークシャアのハットフィールドに移った後，彼は『炭坑労働者(The Mineworker)』を見つけた．それは，アルゼンチン，メキシコ，ボルビアなどの炭坑夫，とりわけ，ドンカスターの炭坑夫の間で言いはやされたランク・アンド・ファイル運動に関する新聞である．彼は，膨大な量のジョーディの歌と話の記録をもち，それらのいくつかはその新聞のなかから見出されたものである．彼のパンフレットはダラムを愛する人々すべてに届けられるべきである．しかし，その目的は感興的なものであるよりもむしろ，批判的なものであり，その出版は，炭坑夫たちが今日取り組んでいる国家規模の闘争に資するものとして進められてきた.」[14]

なお,「ジョーディ（Geordie)」は，イングランド北西のダラムの炭坑夫たちが自らを呼称して用いる言葉である．このことについて，ダグラスは以下のように述べている.

「ジョーディの炭坑夫たちの語りの性質は，応用と変化のそれである．なにゆえ北東のダラムの炭坑夫が自身を指して,『ジョーディーズ（Geordie's)』，元来，ニューキャッスルのイングランドの衛兵たちの間で，スコットランドに対峙したジョージ王の支持者を指して用いられていた言葉を用いるのか．もちろん，過去においそれと，私たち自身をロイヤリストのタイトルと関連づけたことはない．私たちはここに，言葉が温存する一方で，その意味が変化することを理解するのである.」[15]

---

[14]Douglass, David, *Pit Life in CO. DURHAM: RANK and FILE MOVEMENTS and WORKERS' CONTROL* (History Workshop Pamphlets Number Six), 1972, ii.

[15]Douglass, Dave, *Pit Talk in County Durham : A Glossary of Miners' Talk together with Memories of Wardley Colliery, Pit Songs and Piliking* (History Workshop Pamphlets Number Ten), 1973, 28.

炭鉱労働の労働過程を明らかにするデイビッド・ダグラスのパンフレット本文は，以下のように構成されている．

労働管理（Job Control）

(a) 監督（Supervision）

(b) 「マラズ」（'Marras'）

(c) カビリング（Cavilling）

(d) 日々の労働管理（Day by Day Job Control）

(e) 産出の制約（Restricting Output）

ランク・アンド・ファイル運動（RANK-AND-FILE MOVEMENT）

赤い村々（RED VILLAGES）

リーダーシップとランク・アンド・ファイル（THE LEADERSHIP AND RANK-AND-FILE）

ダグラスは，「炭鉱労働のいくつかの改善点の一つであり，炭坑夫たちがそれを維持するために闘うであろうものは，独立した労働管理である」[16]と述べ，炭坑夫としての自身の経験と先の炭坑夫たちの新聞における記述をもとに，労働管理の五つの側面における労働者の自律を記述している．具体的には，労働の拒否による監視員の排斥，採炭する現場ごとに形成された集団である「マラズ」内の連帯，労働者自身によって採炭現場の配分を行うカビリング，日々変化する労働環境の危険度によって，採炭現場ごとに行われる賃金の交渉，欠勤やさぼりによる産出量の制限を挙げている．

これらによって維持されていた労働者の労働過程における自律が解体されてきた要因について，ダグラスは以下のように述べている．

「私が記述してきたこれらの労働管理，これらのすべての自由は，全国炭鉱局（The National Coal Board）の激しい攻撃の対象となり，この 10 年以上もの間，1972 年の大規模なストライキまで，炭坑夫たちは退却し続けてきたのである．産出量の問題，炭鉱における機械化の急速な発展が，管理の増大と相まって，一連の制約を甘んじて受け入れる要因となった．」[17]

---

[16]Douglass, David, *op. cit, 1972, 1.*
[17]ibid, 44.

ダグラスは，炭鉱労働の現場の変化について，労働組合におけるリーダーシップ，具体的にはダラム地方の炭坑労働者によって結成されたダラム炭鉱夫協会（The Durham Miners Association）におけるリーダーシップの問題から捉え，ランク・アンド・ファイル運動の歴史的展開を整理している．ダグラスは，他の産業における労働者の賃金に合わせて炭坑労働者の賃金を決定する「スライディング・スケール」原則に対して，当初，疑義を唱えていたダラム炭坑夫協会が炭鉱主との共同委員会（The Joint Committee）を設立し，同委員会によって，いくつかの炭鉱の閉鎖，三交代制の導入が決議されたことから，ダラム地方における労働組合の労使協調路線が現場の炭坑労働者の関与しえないところで完成されていった経緯を述べる．とりわけ，三交代制の導入による家庭生活の変化について，ダグラスは以下のように述べている．

「三交代制の導入は，炭坑夫の家庭を脅かした．このことは極めて重要なことであった．地下，無情の穴で働く男性は皆，家庭と妻と静かな時間を過ごすことの価値を知っている．おそらく，北部の炭坑夫は上記のことを心底理解していた．」

「三交代制のもとで，炭坑夫たちは昼も夜も仕事に出掛けていくように強制される．家族に3人か4人の炭坑夫がいれば，抑圧的なシフトによって，哀れな妻は寝ることができないのである．」[18]

ダラム炭坑夫協会が炭鉱主との共同委員会において，協会員に対するどのような説明もなしに労働時間の長時間化に合意したとき，炭坑夫たちは会合を開き，ストライキを決定した．数週間におよぶ交渉の末，炭鉱主たちが労働者の自主的な管理について最大限譲歩する提案をしたために，飢えていた労働者たちは労働時間の変更を受け入れた．

また，ダグラスは炭坑夫たちの生活の場であるロッジ（The Lodge）について記述するなかで，「赤い」村，「リトル・モスクワ」と呼ばれた自身のロッジを基盤に，労働者家族の自律を守るべく活動したジョージ・ハーベイ（George Harvey）を取りあげている．ハーベイは地域に住まう炭坑夫たちがストライキを行ったとき，そのためのシフトを作成し，資金調達を図った．ストライキを行っていない炭坑夫たちはハーベイの家に食料を届け，飢えのためにストライキを中止せねばならないような状況を避けるために，ロッジ全体が組

[18]ibid, 60.

織された[19]. 生活の場を基盤にした組織力によって，炭鉱主に要求を受諾させたのである.

この生活の場を基盤とする労働者の自律とそれを組織するリーダーシップのありようを踏まえ，ダグラスは「炭鉱における闘争は三側面をもつものとなった．男たちと炭鉱主，家族であり，確かに彼らの間にある組合の専従職員は炭坑夫たちの側に立って交渉するも，十分に彼らの要求に応えるような合意は取り付けず，炭坑夫たちの望みを理解するのにかなりの時間がかかってしまう」と述べた[20]．そもそも，誰かに代弁してもらうことに対する不信が，労働に由来する自己への信頼と自立ゆえに炭坑夫たちにはあると述べ，彼の「マラズ」，もしくは彼自身から離れたところで彼のやるべきことが決定されてしまうことへの嫌悪を炭坑夫たちは共有しているとも指摘する[21]. すなわち，炭坑夫の組織においては，「すべての人がリーダーだ」と思えるようなありように対する配慮が必要だとダグラスは指摘するのである.

ダグラスはパンフレットの末尾において，再度ジョージ・ハーベイに言及し，彼がリーダーとしてではなく，同士（comrade）としてロッジの人々に慕われたことを述べ，彼がまた，1909 年のラスキン・カレッジにおける学生のストライキに参加した人物であることから，ダグラス自身のラスキン・カレッジへの入学について，以下のように述べている.

> 「私は，労働者階級の政治と労働組合主義に資するものとして発足した機関のなかで，ラスキンの要の役割は，労働者階級の闘士を『再教育する』ために，仕事と地域社会から彼らを引き離すことにあるということを見出した．それは，彼らの階級的出自から切断し，その代わりに，競争主義的な達成の言説で埋め尽くし，一般的には，彼らを組合の専従職員，もしくは労働貴族以外の何者にもなり得ないものにしてしまおうとする．さらに私は，時間は私がしたかった研究のためのものではなく，さらに私がしたかった研究は顰蹙をかうものであったことにも気づいた．『適切なコース』とは，純粋に『それらを見下し』，本当の歴史の調査と発見に乗り出すことを決めない限り，格式張ったものであった.」[22]

ダグラスは，ラスキン・カレッジを含め，ただ労働者階級に資することを掲げるだけで

[19]ibid, 75-6.
[20]ibid, 81.
[21]ibid, 82.
[22]ibid, 89.

は何も示したことにはならず，むしろ，自身の調査で発見された労働組合のように労働者階級の労働と生活の破壊に資してしまうことを指摘したのである．労働組合運動におけるランク・アンド・ファイルに対するダグラスの批判は，実際の彼自身の組合活動における経験にもとづくものであろう．ダグラスは代議制による組合運動が，ときとして一般の労働者の意識や経験から遠いものになってしまうことを記述するのと同時に，人々の意識と生活に根ざしたリーダーのもとで，緩やかに連帯する人々の様を記述した．

なお，デイビット・ダグラスによるもうひとつのパンフレットは，炭坑夫の労働と生活における炭鉱歌と炭鉱におけるジョーク，炭坑夫たち特有の言葉について，整理したものである．

第2節　労働過程に関する記述

1. フランク・マッケンナ『鉄道夫の会話事典』(1970)

フランク・マッケンナ(Frank McKenna)によるパンフレットもまた，鉄道夫の労働における彼ら特有の言葉について，整理したものであるが，実際には，タイトルに掲げられた「会話辞典」よりもむしろ，マッケンナ自身による鉄道夫としての労働と生活の場における経験の記述の方に多くのページが割かれている．マッケンナの経歴は本文の内容として記述されているためか，冒頭に彼の略歴の記載はない．

一方で，マッケンナによるパンフレットはヒストリー・ワークショップにとって，初めて公に刊行するものであったため，冒頭にはラファエル・サミュエルによる『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』全体の趣旨の説明と，マッケンナのパンフレットの制作経緯が以下のように述べられている．

「これは最初のヒストリー・ワークショップ・パンフレットである．神のみぞ知るが，この夏，秋の初め頃には三つか四つのパンフレットが公刊されるだろう．パンフレットはこの四年間，ラスキン・カレッジで開催されてきたヒストリー・ワークショップの会合にもとづいている．それらは労働者学生によって書かれたもので，全体的に過去と現在を対話可能なものとする試みを表している．私たちはそれらによって，この国の違う場所にいる労働者の男女が，それを学問の世界に任せっきりにすることも，失われるがままにすることもなく，自らの手で歴史を記述することを促されることを願っている．

フランク・マッケンナは，数年前にこの会話事典の収集を始めた．彼はそれをもって

ラスキンに入学してきた．そこで今，彼は一年生であるのだが，カレッジにおけるヒストリー・ワークショップ・グループとの議論の後，より詳細な文脈を彼の言葉に与えることを決めた．後に彼は鉄道夫の生活における自伝と回顧について，部分的に私たち自身の歴史のための証言として，部分的に歴史家をして過去の人間らしい意味の再構築をせしめるための手がかりとして追加した．彼は未だに会話事典に追加する作業を続けており，批判と提案を期待している．」[23]

フランク・マッケンナが会話事典の前に追加した自伝は，以下のように構成されている．

フットプレート生活の 20 年　イントロダクション（Twenty Years of Footplate Life Introduction）
カーライル・キングムーアにおける 1946 年から 1949 年（Carlisle Kingmoor, 1946to 1949）
ウィルスデン・ジャンクション（Willesden Junction）
クラベン・ストリート寮（The Craven Street Hostel）
ケンティシュ・タウン原動力デポ（Kentish Town Motive Power Depot）
ソマーズ・タウン寮と 1955 年のストライキ（The Somers Town Hostel and the Strike of 1955）

まず，マッケンナは鉄道労働におけるシフトと職階について，イントロダクションで概説を行ったうえで，鉄道夫としての仕事を始めたカーライルという町での経験について，記述している．そこで当初，エンジンの清掃を行っていたマッケンナは，「鉄道時間」と言われるその変則的な労働時間について，以下のように述べている．

「私が初めて『鉄道時間』に触れたのは，エンジンの清掃夫から火夫に昇進したときであった．シフト・ワークの最初の朝は，すべての人にとって，決して忘れられない思い出である．私は月曜日から金曜日まで，７時半から３時までの昼のシフトで働き，金曜日の午後 2 時，清掃責任者が私に，『明日の朝，早く来てもらいたい．火夫の仕事をや

[23]McKenna, Frank, A Glossary of Railwaymen's Talk, A Compendium of Slang Terms Old and New used by Railwaymen (History Workshop Pamphlet Number One), 1970, I.

ってもらいたい』と言った．私が『何時に来たらいいですか？』と言うと，彼は『土曜の朝の３時半だ』と答えた．多くの若者のように，金曜の夜は楽しむために外出していた．２時には起きなければならないことを知っていたので，人生で初のことに，11 時には就寝したが，そのための十分な心構えができていなかった．全員が就寝した．家族のなかには小さな子どもがたくさんいたので，夜中までにすべてが静まり返り，私は静かな深い眠りに落ちた．突然，玄関で大きな物音がして，家中が目を覚ました．誰も来訪者があるとは思っていなかったので，彼が来ていたことを忘れて眠り込んだ．誰も彼がそのような騒音を立てるとは思っていなかったが，その男は私を起こすように義務づけられ，私がそれに応えるまで玄関を立ち去ることを許されていなかった．私たちは玄関に呼び鈴を付けていなかったので，彼は木のパネルを打ち付けた．私は起きようとし，『オーケイ』と叫び，ベッドに戻った．私はしばらく横になりながら，ベッドに戻って睡眠をむさぼるべきか，それとも起きて仕事に行くべきか（デポまでの徒歩３マイルを想像した）考えていた．私は再び睡魔に襲われた．私の母親は私を起こし，お茶をいれて，私が２時に出掛けるのを見届けた．デポについたとき，朝の仕事を始めるよりも，ベッドに這って戻りたい気分だった．そこには，私に対する同情はなかった．職長は『これがお前のゴミ箱とオイルだ．お前が必要になったら，連絡する』といった．もちろん，連絡はなかった．

３時から６時の間（鉄道夫が言うところの，バース・コントロール・アワーズ）は，永遠のようだった．６時には多くの男たちが職務を離れたが，私のシフト，『殺人シフト』はさらに５時間続き，清掃を続けた．11 時まで働き，12 時に帰宅して何かを食べたら，完全に疲れ果て，ベッドに行きたかった．」[24]

その後，マッケンナは夜中に火夫の家のドアを彼らが起きるまで叩く仕事をしながら，六ヶ月後，三週間の研修を受け，監査の後，さらに六

ヶ月を経て，レギュラーの火夫となった．そのときのことについて，マッケンナは以下のように記述している．

「レギュラーの運転手と組になり，グラスゴー，リーズ，シェフィールド，マザーウェルにレギュラー走行した．数回，パースまで走らせ，どの場所もすべて，想像もしなか

[24]ibid, 3.

った経験だった．それまで見ることができるとは考えていなかった場所を見ることができたからである．」[25]

マッケンナは 1949 年にカーライルを離れ，1948 年に休暇で訪れたロンドンに住みたいという思いから，イングランド南部のウィルスデン・ジャンクションに職を移した．そこでの経験として，貨物を運送中のトンネル内で焼死寸前の経験をしたこと，職場における慣習として団体交渉が日常的に行われていたことを記述している．とりわけ，その習慣的な団体交渉の様子について，以下のように記述している．

「ウィルスデン原動力デポの談話室は，大きな納屋のような作りで，原始的な家具が備え付けられてあった．男たちが座るためのベンチと彼らが食べるための，屠殺用のようなテーブルがあり，そこで男たちはよく，だらだらとトランプをし，職長の指示を待っていた．ウィルスデンには多くのポーランド人労働者がいた．彼らは重労働に従事し，灰溜めに火を付け，店員か一般的な労働者のように振る舞っていた．彼らは英語をまったく話さなかったが，彼らにできる唯一のことがクリブ（crib）だった．クリブはウィルスデンの談話室におけるよく知られたゲームで，大金によって懐具合が変わることはないが，とても上手いゲームがよく見られた．ウィルスデンの運転手と火夫がなにゆえポーランド人労働者に負けるのかを理解するのに，２，３年がかかった．彼らが理解していなかったのは，クリブがポーランドの国民的なカード・ゲームであったことである．鉄道の談話室でトランプをするのは建前上，違法であったが，ウィルスデンの男たちは気楽で，本当の緊急事態がない限り，彼らは手持ちがなくなるか，ゲームが終わるまで，仕事を始めようとはしなかった．職長は，これが『団体交渉』であることを知っていた．彼は恐らく，自分自身がマージンを得ることを分かっていただろうが，とにかく，『３時に彼らのところにいけば，３時半までには彼らを仕事に就かせることになるだろうが，３時半に行けば遅過ぎる』と言った．それは良い雰囲気で行われ，そこでの摩擦を目にしたことがない．職長は，20 人か 30 人の男たちを談話室に座ったままで，何もせずに待たせることを期待できないことを知っており，男たちがトランプやドミノをすることは明らかであり，厳密に言えばそれは違法であるもの，それはユーモアを交えて行われ，

[25]ibid, 5.

慣習と実践によって裁許されていた.」[26]

ロンドンで働き始めた当時, 20 歳であったマッケンナは鉄道夫のための独身寮に滞在した. トラファルガー広場近くにあった寮について, マッケンナは「ウェスト・エンドの中心にあり, 若い男が住むには最高の立地であった」と述べ, カーライルから大都市, ロンドンの文化に触れ, 街の人々との交流について記述している. とりわけ, 異性との夜の外出について, 以下のように述べている.

「当時, 若い女性と外出するときには, 白襟のシャツに, きちんと筋の入ったズボン, 磨き上げられた靴を着用していることが期待されていた. このことは, 1950 年代のすべての若者の真実であったように思う. 今日, より小汚いことの方が好まれるようだが. 夜に外出することは, 細部にまで注意を払うことを求めるものであった. 夜に若い女性と外出し, いいネクタイと上着のポケットから適度に見せる白いハンカチ, もし女性が煙草を吸うのであれば十分な量の煙草によって, 可能な限りスマートに見せることで, 適切に振る舞った. 劇場に連れて行くのであれば, チョコレートの箱も必要だった. 私の世代はこのことが女性を夜, 外に連れ出すときの方法だと考えていたと思う. 私の母親が, 私に若い女性とのデートのためにめかしこんだ若い男性は, 髪が乱れることなく整え, 暗い色のネクタイを着け, 靴がよく磨き上げられていることを確認することに特別な注意を払うべきで, これらのことは, 若い女の子がよく気にかけることだと言ったのを覚えている.」[27]

1953 年, マッケンナはより給料のいいケンティシュ・タウン原動力デポに移った. 以前の職場と新しい職場の違いについて,「双方のデポともに善良な男たちがいたし, 双方ともによい労働組合運動の伝統があった. しかし, ウィレスデンには真のマルクス主義者はいなかった」として, ケンティシュ・タウンで出会った二人の男性について言及している. その二人が成した職場に対する貢献について, マッケンナは以下のように述べている.

「彼らはフットプレートに現れる有色人種に対する敵意を打開するために, ケンティシ

[26]ibid, 11.
[27]ibid, 17.

ュ・タウンにおいて，精力的な活動を展開した．私はこのことに関して，彼らに関われたことを誇りにしている．たとえ，デポにおける他の男たちに反対したのが，私たちの3人だけであったとしてもである．

このことは，ケンティシュ・タウンにおけるとても重要な決定であり，それはひとりの有色の男性が閉鎖された他のデポから移されてきた後で現れた．ケンティシュ・タウンの男たちは彼を受け入れることを拒否し，有色人種にフットプレートで働くことを許可すべきではないと主張したのである．」[28]

拒否の理由は有色人種の多くは規律に従わず，英語での意思疎通もままならないがゆえに，彼らが職場において安全に仕事ができない，というものであった．彼らは刃物で脅すなどの行為によって，有色の男性を職場から排斥した．有色の男性労働者は結局，デポを後にしたのである．

ジャマイカ人の火夫がケンティシュ・タウンに移ってくることになった際，同様に受け入れ拒否の意見があったが，マッケンナを含む三人の尽力で有色の男性の業務開始にまでこぎつけ，二，三週間後には流暢な英語と職業能力の高さによって，デポで働くことが正当であることを証明したと記述されている．

一方，1951年，マッケンナはハンプデン・クラブ（Hampden Club）と呼ばれる寮に転居した．ラディカルなクラブと特徴づけられていた同寮での経験について，とりわけ，同じ寮生であったアイルランド人男性が，友人宅を訪ねた際，誤認逮捕されたときのことを以下のように述べている．

「彼は暗闇から現れ，私服警官だと述べた二人の大きな男性に，話しかけられた．信じがたいことに，彼らは夜中彼の後をつけていたと言い，彼が『駐車してある車のドアを調べた』り，『キングス・クロス周辺の様々な寮の裏階段を昇った』ところを見たと述べた．彼はパニックになり，寮に逃げ込んだ．そこで彼は身元と素性を証明してもらいたかったが，警官は彼を玄関の階段で捕まえ，攻め，打ち付けて血を流させ，警察署に連行したのである．彼は地方裁判所に出頭し，そこで有罪判決を下され，恵まれ過ぎた鉄道夫とアイルランド移民に対する裁判官の攻撃を聴かなければならなかった．彼は職を失い，寮を去るように命じられた．すぐさま寮生たちは会合を開き，委員会が発足し，

[28]ibid, 21.

100ポンドが判決に抗議するために集まった.」

この寮生たちの抗議の結果，判決は取り消され，そのアイルランド人男性は職場復帰を果たした．また，この寮内にあった連帯をもとに1955年の初めてのストライキを敢行し，若年の未熟練労働者の処遇改善を求めたのであるが，そのストライキ終結後，マッケンナが寮に戻ったある夜のことについて，以下のように記述している．

「私は建物に入ったらすぐ，何かおかしいことに気づいた．会話のけたたましい音が食堂から響き，その部屋に入ったとき，テーブルと椅子が壁に積み上げられ，部屋の中でお互いに対峙していたのは，イングランド人，スコットランド人，ウェールズ人の敵対しあうグループであった．多くは牛乳瓶や椅子の脚，自転車の鎖，鉄のバックルがついたベルトでつくったナックル・ダスターで武装していた．ナショナリズムが台頭していた.」[29]

その後，マッケンナは寮生活を止め，フラットに移り住んだ．

マッケンナが記述したのは鉄道夫としての労働の過程であるとともに，生活の場における労働者の連帯と葛藤であった．それは苦役としてのみ特徴づけられる火夫の労働経験ではなかった．マッケンナは，昼夜もない過酷な労働を経験し，ときに命の危険にまでさらされる火夫が，生活の場で経験した同僚，家族，恋人との交流を楽しむ姿をあたたかく描き出した．このことによって，労働のみに規定されない自己のありようを記述したのである．

2. ボブ・ギルディング『イースト・ロンドンにおける日雇い樽職人』(1971)

フランク・マッケンナによるパンフレット同様，自身の樽職人としての労働過程を記述したボブ・ギルディング（Bob Gilding）の経歴に関する情報は多くない．ラファエル・サミュエルは同パンフレットの序文において，以下のように述べている．

「このパンフレットは，『19世紀のイングランドにおける労働者管理』に関する最近のヒストリー・ワークショップの会合で配布された他の資料同様，労働者管理について，

[29]ibid, 27.

観念としてではなく，ワークショップの実践として，検討するものである．ボブ・ギルディングのポプラーとロンドンのドックにおける 27 年の樽作りの権威と経験にもとづいて書かれたものである．著者はラスキンの２年生である．」[30]

マッケンナによるパンフレット同様，ラファエル・サミュエルによる著者の紹介が短いのは，本文が直接的に著者自身の経験による記述であるためと考えられる．ボブ・ギルディングのパンフレットは以下のように構成されている．

イースト・ロンドンにおける樽作り（Coopering in East London）
工房内（Inside the Workshop）
ワイン倉庫で（Down the Wine Vaults）
労働者管理（Workers' Control）
　徒弟制の管理と組合加入（Control of Apprenticeship and Entry to the Trade）
　道具と価格表（Materials and Price List）
　機械（Machinery）
　労働組合主義と「ロールアップ」（Trade Unionism and 'Roll-Ups'）

パンフレット発行当時，既に絶え行く労働であった樽作りの 19 世紀における状況について，ギルディングは「国のどのような場所にも存在した樽職人の最も多くは，ロンドンに住み，そこで働いていた．そのなかでもイースト・エンドに最も集中していた」[31]と述べ，樽職人の勤務先として，ビール工場，製糖所，港湾を挙げ，樽職人内の違い，具体的には被雇用者か，自営かという違い，さらに，「ウェット（wet）」か「ドライ（dry）」かの違いを挙げ，「前者は，かなりの程度，よりよく組織化されていた．一方，後者はたいていその仕事の『下流』に見られ，そこでは，たいていの仕事が親方もなく，徒弟経験のない人々によってなされる」[32]と説明している．

実際に，ギルディングの徒弟先であったシャウズ（Shaw'）という工房内での経験について，まず，衝撃的であったのは騒音であり，続いてそこの熱であったと述べ，それらから

[30]Gilding, Bob, The Journeymen Coopers of East London, Workers' Control in an Old London Trade (History Workshop Pamphlet Number Four), 1971, I.
[31]ibid, 4.
[32]ibid, 9-10.

の逃避の場としての煙突の角が「それらのことに監視カメラが関心を持つようになるまでは」，寒い冬，暖をとる場所であり，食事をとる場所であり，さらには職人同士の社交の場でもあり，ときに職人たちが集い，会合を開く場所ともなったことを記述している[33]．兵役と同時に徒弟期間を終えたギルディングが，兵役修了後，「ドライ」な樽作り工房であったアーチャーズ（Archer's）と，労働過程が細分化されている工房であったバートンズ（Barton's）を経験し，それらの職場における労働過程の違いと樽作りにつきものの事故の恐ろしさを記述している．

1961年，ロンドンの工房に移ったギルディングは，そこで職を得るために課された試験（trade test）について，以下のように述べている．

「この試験に対する私の最初の反応は敵意に満ちたものであった．そして，合格証なしで働くことのできる樽職人はおらず，合格証は能力の証明なしには発行されないような，閉鎖的な職場であった当時，それは不必要に尊厳を傷つけるものであり，とくにどの樽職人もトレード内の他の職人たちに知られているロンドンにおいてはそのようであったと，今でも感じている．」[34]

試験に合格し，ロンドンの港湾にて職を得たギルディングは，そこで日雇い職人としての生活を終え，契約樽職人（bond cooper）となる．契約先はワインとスピリットの倉庫であった．「退屈な仕事」と記述したそこでのギルディングの主な職務は，漏れている樽がないかを確認し，もし漏れている樽があればそれを修繕するというものであった[35]．

これらの経験を踏まえ，ギルディングは樽職人の労働の場における労働者の自律に関して，以下のように述べている．

「工場で働く樽職人はまさに本人自身の親方である．彼は細分化され，要した時間にではなく，自身の行う仕事に対して支払われる．彼は自身に割り当てられたスペース，彼の『停泊地』をもつ．招かれざる他者が彼の陣地に侵入したときにはそこに逃げ込むような．彼は自身の道具をもち，様々な形の樽はそれに見合った道具を必要とするため，

[33]ibid, 22.
[34]ibid, 28.
[35]ibid, 32.

道具のセットは50にもおよぶことがある.」

「個々の自立と同様に，樽職人は彼らが働く環境，賃金に関わる等級，日雇い労働に対する徒弟の比率，機械の導入と操作，もしくは使用される材料の種類に対する集団的な権威を常に，うまく実行した.」[36]

具体的に，労働者の自律に関わる諸相について，ギルディングは以下の四点から整理している．第一に，徒弟制と先の試験に関わって，徒弟期間終了時の通過儀礼として，以下の二つを挙げている.

「第一のものは，試験であり，それは三人の男性，すなわち，樽職人組合の担当者，親方協会のメンバーである親方の樽職人，そして（もしその徒弟がロンドン市で自由業を営みたければ）樽職人のワーシップフル・カンパニー（The Worshipful Company of Coopers）（これは樽づくり産業のギルドであり，750年以上も前から存在している）のメンバーに見られながら，完全に手で樽をつくるというものである.」

「第二の儀式は，広く活字にされている『トルッソ（Trusso)』と呼ばれるものである．これは徒弟の21歳の誕生日に行われる．徒弟は樽を高いところに上げて，それに火をつけるように言われるのだが，それに火をつけて閉じられる前に，そのなかに徒弟自身が入れられるのである.」

徒弟制にもとづく樽職人の育成によって，樽職人自身による生産物の品質水準の維持が図られたのである.

そして，第二に，樽づくりに用いられる材料の品質と値段，さらにはそれらにもとづく給料の額までもが，樽職人本人の自治の対象であったこと，第三に，樽づくりにおける機械の導入に関する労働者の自律が記述された．とりわけ，第三の機械の導入について，ギルディング自身の，「ロールアップ」と呼ばれた職場での労働者の会合の経験から，以下のように述べている.

「私がこれまで参加したなかでも最も長い『ロールアップ』は機械に関するものであった．それ二日間に及び，親方が，自分が導入を決定した機械について，機械が行った分

[36]ibid, 49.

の仕事に対して，樽職人に支払いを求めたことに端を発した．彼の主張は，機械のおかげで職人たちはより多くの樽をつくることができ，より多い収入を得ることができる，というものであった．そして彼は，職人たちに機械工に支払う賃金への貢献を求めたのである．これに対し，職人たちは，親方は向上する生産量によって機械工に支払う賃金と機械の導入のための費用をまかなうのに十分な利益を得るはずだと主張した．二日間の『議論』の後，事態は，かなりの程度，割り引いた金額を支払うことの合意によって落着した．樽職人たちは労働者が雇用されているがゆえにこのことに同意した．もし，機械を職人たち自ら動かせば，それに対する支払いは期待できなかったからである．二日間，ストライキへの言及はまったくなかった．職人たちは，彼らの納得がいくように事態は終結するとの自信があったのである．しかし，二，三年後，同じ工房で働いている間に，私の初めてのストライキ経験となるようなところにまで状況が発展した．またしても機械の問題が関わっていた．」[37]

そして最後に，樽職人の労働組合運動の歴史的な特徴として「嫉妬（jealous)」と「地域性（local)」，すなわち，どの産業に付随する樽づくりであるのかに関わって存在した樽づくり職人間の差異，あるいは，技能によって区分された職人間の階層をめぐる妬み，そして付随する産業が基盤とする地域間の差異によって，全国的な樽職人の連帯がそれほど強いものではなかったことが指摘されている．一方で，逆に，外部との分離がもたらした内部の連帯の強さにもとづく職場闘争としての「ロールアップ」の力を記述している．

ギルディングのパンフレットはその労働の流動的な特性からか，労働者階級の歴史として，これまでそれほど多くは記述されてこなかった樽職人の労働過程を記述し，そこにおける労働者による労働の管理，自律がまさにその労働の場にあったことを明らかにするものであった．その労働の場には単に労働があったのではなく，ともに働く仲間，および，親方との日常的な，人間味溢れる関係があり，それゆえにこそ，労働の場での機械化が問題とされたと捉えることができる．

3. ジェニー・キッターリンガム『19 世紀イギリスの農村における少女たち』(1973)

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』全 13 巻のうち，女性の手によるものは 2 巻のみである．そのうちのひとつであるジェニー・キッターリンガム(Jennie

[37]ibid, 73.

Kitteringham)のパンフレットは，自身の幼少期における農村での労働と19世紀における女性による農村労働を記述したものである．キッターリンガムについて，パンフレットには以下のような記述がある．

「このパンフレットは，第6回のヒストリー・ワークショップ，『歴史における子ども時代』で配られた資料をかなり拡大したものである．著者は農村地域における自身の経験を19世紀における働く少女たちのそれと比較し，家事と農村経済におけるそれらのいくつかの役割について議論している．ジェニー・キッターリンガムは1970年から1972年の間，ラスキンの学生であった．今はフル大学で勉強している．」[38]

なお，キッターリンガムのパンフレットの構成は以下の通りである．

イントロダクション：過去と現在（Introduction: Past and Present）
農作業（Farm Work）
ギャング（Gangs）
周辺の経済（Rural Industries）
道徳（Moralities）

「19世紀の基準に照らし合わせれば，私の子どもの頃は比較的に容易だった」と述べ，キッターリンガム自身の農村での児童労働と19世紀のそれとをイントロダクションでは比較している．彼女自身の労働は，「学校の休暇中か週末にだけ，私の兄弟と私は牛の乳搾りと子牛の世話を手伝うことが期待された」のに対し，19世紀の状況について，以下のように述べている．

「私は休暇が終われば学校に戻るであろうことを分かっていた．しかし，19世紀における多くの農村の子どもたちにとって，学校に通うことは地面が固すぎて働けない冬の間だけ，もしくは彼らがつくっていた手袋，レース，編み物のマーケットが低調なときに起きることであった．仕事が第一であったのである．学校に通うことができるときに

[38]Kitteringham, Jennie, *Country Girls in 19th Century England* (History Workshop Pamphlets Number Eleven), 1973, （ページ番号なし）．

は登校前と下校後の時間は働く時間に充てられた.」[39]

さらにキッターリンガムは児童労働における女児と男児の差異について，以下のように述べている.

「家庭外において，女児も男児も平等に且つ直接的に，経済的な存在としての家族の単位に参加することが求められた．しかしながら，家庭の範囲内では女性の構成員によって担われる排外的な労働の形態が存在し，それは学校教育を受けるうえでのさらなる障害ともなった.」[40]

すなわち，男児に比して女児は家庭内における「小さな母親」としての労働が課されたがために，より学校に通う機会は限定されたものであった.

また，今日と19世紀当時の農業労働における差異として，キッターリンガムは家畜に対する態度を指摘している．つまり，兎や豚などの家畜を飢えないために屠殺することを非人間的だと捉えてしまうことは産業化を経た後に現れた観念であり，19世紀においては家畜の生死は彼らの「生きていること」の一部だと捉えられていたことを記述している[41].
一方で，キッターリンガムは産業社会化，農村労働の機会化の後も変化しなかった当時の農村における労働の状況と今日の連続性について，以下のことを指摘している.

「19世紀の農村の少女のようではないが，私が農場で働いていたことの事実によって，私と友人の間には特異性がもたらされた．偶然に農村に生まれた彼女らは単純にどこで生まれたというだけで，重要なのは女の子，女性あるということであり，必ずしも辺境の地や文化に同定する必要はない．たとえ，私が住んだ場所が店や物質的な社会は数マイル離れた場所にあるのかもしれないが，それらから隔離されて今でも存在しているとしてもである．女性や女性らしさの理想が求める理想は今でもヴィクトリア期から引き継がれて，組み込まれている．それは私の人生ににじみ出ている．機械化によって，農村労働は必ずしも肉体的な力が必要なものではなくなったが，なおのこと，肉体的な強

[39]ibid, 3.
[40]ibid, 6.
[41]ibid, 8-13.

靭さは男性らしさの望ましい属性となり，『弱々しい』女性という種族にとっては禁忌となった.」[42]

すなわち，農村という特異性がありながらも，キッターリンガム自身の女性としての経験が一般的であることが指摘されたのである.

このようにキッターリンガム自身の経験との相違を整理したうえで，19 世紀当時の実際の農作業について記述している．居住地域の経済と文化に緊密に結びつき，自身と家族の維持のために行われた児童労働，女性労働について，その地域性とその労働自身の性格を指摘している．具体的にはとうもろこし，豆，じゃがいも等の畑で，とりわけ収穫時に子女の労働力が求められたとして，それらが担ったのは機械化の程度によらず，必要とされた手作業であった[43]．それら屋外での労働に加え，屋内における労働の機会があった．キッターリンガムは，屋内での労働について，以下のように述べている.

「家のなかでの労働と屋外での労働を流動的に行うものがあった．屋内で昼間，彼女らは農夫の妻たちのために働いたが，屋外での仕事で人手が必要なとき，たとえば種まきや収穫の際はおそらく一般的な労働者たちと一緒に働いた．雇用期間中，バターやチーズづくりと同様に，アイロンがけや洗濯，料理，掃除に関する指示を受けた.」[44]

屋内でのバターやチーズづくりに加え，家事の補助を担った女性たちは畑仕事を行う女性たちよりも，より尊敬のまなざしを向けられたという．キッターリンガムはその理由について，以下のように述べている.

「低賃金での長時間労働という意味では，他の農業労働者と違いはなかった．しかし，それらの違いは，彼女らが従事する仕事がいくらか肉体的なものではないこと（結果的には，男らしいものではないこと），経験と技能を必要とするものであること，そして，農夫たちと距離を保てることであった．明らかに，客間に座って一日の食事のメニューを考えることほど，肉体的に楽な仕事ではなかったのであるが，女性たちが行った他の

[42]ibid, 14.
[43]ibid, 24-30.
[44]ibid, 31.

農作業のように，がさつな弁難にあうことのない満足な地位であった．しかし，巨大な牛の群れがいる地方では，乳搾りをする労働者の集団のなかに少女と男性の姿をみることは珍しいことではなかった．」[45]

さらに，キッターリンガムは「ギャング」と呼ばれた労働者集団について記述している．1860 年頃から，広く農村地帯に存在したというギャングは極めて多様な形態をとり，麦，あるいは豆の収穫，木の皮剥がしなど，季節的なものから，一年を通じて農村地帯をめぐり，臨時的な労働を集団的に継続するものもあった．ギャングのなかには 100 人から 250 人の子どもを含むものもあり，このギャングというシステムについては当時，さまざまに批判された．これらの批判について，キッターリンガムは以下のように記述している．

「しばしばなされた訴追は，老若男女が集うことが『彼らの道徳的な原則と身持ちにとって極めて悪影響をもたらす』，『教育の妨害となる』というものであり，『小さな子どもに過度の労働とその他の労苦を強いることである』とも言われた．若年のメンバーは不可避的に年長者，すなわち『徳を失ったアイルランド人女性とイングランドの少女』による汚染に曝されるために，低俗な会話，快楽主義，下品な言葉遣いなどがギャングの特徴として指摘された．確かに，ギャングはヴィクトリアンによって定義されたような『慎み』や『道徳』の維持に努めることはなかった．そもそも，少女たちの服装はたいていの農作業ゆえに『レディーライク』であることは許されなかったのである．」[46]

また，キッターリンガムは，農作業に子どもや女性が積極的，一般的に従事しない場合，彼らは地域の地場産業のなかで仕事に就いていたとして，広範に行われていた藁加工品（straw plaiting）を取りあげている．子どもたちは三，四歳のころから藁編み教室に通い，技能を習得するように促された[47]．藁編みは学外において，家の玄関の階段や壁で行われ，主要な家庭内産業であった．女性たちはつくった藁加工品を荷車に乗せて，遠くはなれたマーケットまで売りに出かけた．キッターリンガムは，「多くの女性たちは自身の編み物を売買しに編み物市へ出かけることを好んだ．なぜなら，いったんそこに行けば彼女

[45]ibid, 33.
[46]ibid, 51.
[47]ibid, 59-64.

らは店を見て回ることができたし，さまざまな種類の物を買うことができる」[48]と記述している．

また，未婚の女性たちは藁編みに専念し，学校に通うことも，主婦になるための準備としての家事の手伝いをすることもなく，経済的な自立を勝ち取ることがあったと記述されている．その女性たちについて，当時の新聞が「道徳の欠如した女」として醜聞を流したことを指摘している[49]．

経済的に自立する女性，または，「理想的な女性らしさ」におさまらずに農作業に従事する女性に対する「不道徳」という価値づけをめぐって，キッターリンガムは女性労働と道徳の関連を考察している．とりわけ，女性労働を不道徳とする価値はミドル・クラスのヴィクトリア朝の生活に由来するものとして，それらによって，労働者階級の独自の価値とそれにもとづく生活を判断することは不当だと述べる．

「女性の農業労働者はミドル・クラスの人々にとって，禁忌であった．すなわち，彼らが彼ら自身の女性に期待していたこと，つまりは頼りなさに完全に反するものであった．しかしながら，農村労働者に支払われる賃金は低く，彼らが単独の稼ぎ手として家族を養うことは不可能であった．したがって，生き残るためには子どもと女性も働かなければならなかったのである．女性たちは家庭における孤独から，田畑という社会に出て行くことを強いられた．そしてその環境のそとで，依存的な家庭内の女性としての彼女らを行き詰まらせ，より群衆のなかにあるものへと社会化したのである．」[50]

のちにミドル・クラスの価値は，女性労働者の「不道徳」に対し，教育と宗教とによって伝播されたという．このことによって，女性の職域は限定され，その職域内において労働に従事する女性だけが「リスペクタブル」な女性と見なされるようになったと指摘する．その職域を定める道徳に反する女性労働の存在について，「社会と時代に固有の，社会全体の秩序が依って立っていた社会的，性的な差異（不平等）の受け入れられ，期待されていたパターンに対する攻撃，異議申し立てと見なされてきた」とキッターリンガムは述べる[51]．

キッターリンガムのパンフレットは不可避的にではあったにせよ，生きることの根底に

[48]ibid, 65-6.
[49]ibid, 67-8.
[50]ibid, 70-1.
[51]ibid, 75.

働くことをおく女性労働者が自身の労働と生活に由来する価値規範，道徳を労働者階級にまで適応させようとするミドル・クラスとの自立をめぐる闘争のなかにあったことを記述した．しかし，その闘争のなかにあって，「レディーライク」であることに反する「男並み」の労働のなかで，たまの遠出を楽しむ女性たちの姿も記述されていた．社会規範の強い拘束にあっても，労働と生活のなかに楽しみを見出す女性たちの姿が描かれたのである．

第3節　労働の記述における生活の意義

本章では，労働の過程そのもの，あるいは労働をめぐる労働者の組織に焦点を当てた『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生たちの記述を考察した．ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生による労働の経験に関わる記述から，その特徴として，以下の三点を指摘することができる．

第一に，彼らが記述した労働は，19世紀とそこでの価値規範としてのヴィクトリアを中心とする社会的な状況に規定されながら，既に潰えたものであり，かつ，それまでの労働者によって担われた労働を記述してきた視角の範囲外に据え置かれていたものであったことである．具体的には，鉄道夫，樽職人，農村における女性労働者であった．

第二の特徴は，労働者自身によって設立された労働者組織の内実を明らかにするなかで記述されたものが，労働者の団結であるのみならず，そこでの他者との葛藤であり，矛盾，分裂が記述されていたことであった．具体的には，労働組合内部における人種に対する偏見をめぐる葛藤，労働者間のナショナリズムにもとづく分裂，労働者組織における労働者への配慮の欠如という矛盾が記述されていた．労働者による労働者とその労働の記述は，決して単一なものではなかったのである．

そして，第三に，彼らが記述した労働は，分ちがたく彼らの生活と結びついていること，すなわちそれらの分割不可能性が記述されていたことである．労働をめぐって，労働過程，労働者階級，労働者組織を中心的なテーマとして対象化しながらも，記述されていたことは，「雄々しく」闘う労働者，あるいは，辛く苦しい労働を耐え忍ぶ者の姿のみならず，労働と生活のなかで暖かさを経験する人々の姿であった．このことは先の二つの特徴に関わって，それまでの歴史学，労働者組織内では考慮されてこなかった労働者の経験であった．労働者といえども，労働の場における経験のみが彼らの労働に関わる経験の全てではない．労働者の労働経験を生活全体のなかで記述することによって，ありのままの労働者の労働経験が記述されたのである．

第６章　労働者による生活経験の記述

本章では，労働者の生活の場をテーマとして記述されたパンフレットを取りあげ，その特徴を整理する．

前章では，労働の場での経験を主題とするパンフレットであっても，そこでの記述は，生活経験を含み，それら全体によって，労働者の経験が記述されていたことを述べた．労働と生活の分割不可能性にもとづいて，労働者のありのままが記述されていたのである．このことから，生活経験を主題とするパンフレットにおいてもまた，生活のみならず，労働経験が書き込まれているはずであるが，さらにまた，生活経験の記述のなかには，労働者にとっての生活の内容と意義が示されているように思われる．

第１節　文化に関わる記述

1. サリー・アレクサンダー『セント・ジャイルズ・フェア』(1970)

労働者文化として，オックスフォードにおける祭りを記述するパンフレットは，全 13 巻中２巻のみの女性の著者によるもののひとつである．著者であるサリー・アレクサンダー (Sally Alexander) について，ラファエル・サミュエルは以下のように述べている．

「サリー・アレクサンダーは 1968 年にラスキンに来る前までは女優であった．彼女は自身の経験を仕事に活かした．それには祭りの場に関する思いのこもった理解がチャージされている．只今現在であるかのように，そして彼女が書いているときであったかのように．調査において，図書館やアーカイブが価値のある資料を彼女に提供したにもかかわらず．彼女は最高のものをそこに見出さなかった．旅するショーメン (showmen) の家族に出会い，聞き取りを行った．」[1]

パンフレットにはアレクサンダーの略歴が以下のように記載されている．

「サリー・アレクサンダーは 27 年前，バークシャアで生まれ，農村で育った．曾々祖

[1]Alexander, Sally, *ST. GILE'S FAIR, 1830-1914, POPULAR CULTURE and the INDUSTRIAL REVOLUTION in 19th century Oxford* (History Workshop Pamphlets Number Two), 1970, III.

父はジョン・パートという旅芸人のバイオリン弾きであった．彼は葬儀や祭り，縁日で演奏するために旅して回った．家族の伝統にしたがって，彼は『オックスフォード・フェアにいく途上』，肺炎で亡くなった．サリー・アレクサンダーは数年間，劇場で働き，『ブラック・ドワァーフ(The Black Dwarf)』を創設したメンバーの一人であり，女性解放運動における活動家でもある．1968 年，彼女はラスキンに入学した．ラスキンのヒストリー・コースを修め，そこで彼女は子どものアビゲイルを育てながら，セント・ジャイルズについての調査を行った．現在，彼女はロンドン大学の３年間のヒストリー・コースを始めようとしている．」[2]

アレクサンダーのパンフレットは以下のように構成されている．

「新しい」フェア (The 'New' Fair)
フェアのマーケットとしての側面 (Market Aspects of the Fair)
人々の休日 (The Peoples Holiday)
産業革命とセント・ジャイルズ・フェア (The Industrial Revolution and St. Giles's Fair)
消え行く観点 (Dissolving View)

オックスフォードにおいては比較的，新しい祭りであったセント・ジャイルズ・フェアが，前章で取りあげたバーナード・レアニーによるパンフレットが対象としている 1830 年の労働者たちの暴動，1832 年のコレラに関する注意勧告，酒屋の出店禁止などをめぐって，市当局，および警察による管制の対象となりながらも，それらに抗い，「19 世紀後半には，オックスフォードシャアの労働者たちにとって，年に一度，開催される祭りの中心となった」と記述されている[3]．

アレクサンダーはその祭りの経済的な機能として，多くの商人が全国各地から訪れ，菓子や人形を売る店が軒を連ね，活況を呈したことを指摘している[4]．そのなかで，祭りに参加したオックスフォードの人々がどのような経験をしたのかを記述している．まず，「祭り

[2]ibid, VI.
[3]ibid, 8.
[4]ibid, 9-19.

は『12ヶ月間，離れていた恋人や友人とのランデブー』であった．子どもが他所で仕事を見つけたために離ればなれになっていた家族は，オックスフォードを訪れる日に祭りの日を選んだ」[5]．また，祭りが開催された二日間，労働者階級の人々は持ち金のすべてを使い果たすことを楽しんだ．アレクサンダーは以下のように記述している．

「セント・ジャイルズで使われる金は，二日間後にすべて消えてしまうものではなかった．小さな贈り物や特別な買い物は遠方にいる家族や恋人のためになされた．『祭りでのジョニーの別れ』という歌のなかの健気に待ち続ける青いリボンのように．若い女の子は，『海兵隊にいる恋人のためにチェーン』を買い，若い男は思いの証として金のリングを買った．これらのリングは『フェアリング　(fairings)』と呼ばれた．」[6]

人々は祭りにめかしこんで出かけ，写真館は賑わった．学校も祭りの間は閉校し，子どもたちも祭りに押し寄せた．祭りが始められる朝の4時か5時には旅芸人たちが乗った馬のレースが行われ，祭りのひとつの名物となった．祭りの最中，旅芸人たちは通りをパレードし，さらには救世軍や Y.W.C.A，屋外の説法もあった．それらについて，アレクサンダーは「その他のエンターテイメントと，宗教的に人々の堕落を指摘する声（『地獄 (fire and brimstone)』）を混ぜ合わせることを不調和として，怪訝に思う人がいる．しかし，救世軍は確かに，その場の精神に入り込んでいた」[7]と述べている．その他にも，軍隊への勧誘，芸術展，ダンスなどのブースが設置され，「『迷惑行為』と『凶器』を禁じることは可能であるが，高ぶった心を取り鎮めるのは不可能である」[8]と述べられており，とりわけ，夜になれば警察による管制が敷かれたが，しばしば警察官自身も場の誘惑に逆らえず，祭りを楽しんだ．

アレクサンダーは，このようにして行われていた祭りの歴史的な展開と産業革命の関連について記述している．具体的には，鉄道の発展によってもたらされた祭りの参加人数の増大，人気を博した当時の最新技術の展示，ろうそくに代わって電灯が導入されたことによる祭りの長時間化が指摘されている．とりわけ，電気の導入によって，旅人芸人によるショー，そこでの音楽が変化し，乗り物や映写機の登場によって，祭りの風景が大きく変

[5]ibid, 21.
[6]ibid, 22.
[7]ibid, 30-1.
[8]ibid, 33.

わったことが記述されている．このような産業革命，技術革新によってもたらされた祭りの変化について，アレクサンダーは以下のように述べた．

「祭りのショーメンは自身の自立した目的のために，社会からその技術革新を抜き出し，利用することができた．蒸気機関による乗り物の機械化，電気で動くバイオスコープは19 世紀後半，セント・ジャイルズ・フェアを活性化する役目を果たした．セント・ジャイルズ・フェアをオックスフォードシャアの労働者階級のカレンダーにおける特異な位置から引っ張りだしたのは，19 世紀における産業化ではなく，20 世紀の大衆情報化の発展であった．1920 年代までに映写は祭りから映画館に移り，農村のバスは踊り場をよりエキゾチックではないものにし，農村地帯の人口流出は逆に農村労働者の年に一度の集合としての祭りの意味を低減せしめた．祭りはある意味で，遺物となったのである．中世の遺物ではなく，ヴィクトリア期の働く人々の文化的な世界の遺物として．」[9]

遺物となったヴィクトリア期の労働者階級の生活は「ミドル・クラスの観察者の目を通じて，私たちに認識される」と述べ，祭りをめぐって，いくつかの消え去ってしまった観点を挙げている．第一に，アレクサンダーは以下のことを指摘している．

「祭りの場の最も切実な特徴のひとつは無秩序な可能性という感情である．尊厳と地位に関わる日々の機微はひしめきあう大衆のなかで失われる．豪華さは祭りの参加者がどの局面においても，たとえば，棒で高く掲げられた出店，飾りの色，大衆をその自然な警戒心を捨て去るように誘い，彼らをたらし込むための共同のブースの外に出された見所において，目にされたものであった．彼らの時間と金は，楽しむために使い果たされることを運命づけられていたのである．」[10]

祭りでは広く賭け事が行われた．アレクサンダーは「まさにセント・ジャイルズ・フェアの存在は，ミドル・クラスのマナーと道徳に対する直接的な縁切りであった」とも述べている[11]．学生の街であったことから，オックスフォードには多くの売春宿があり，酒と

[9]ibid, 52.
[10]ibid, 53.
[11]ibid, 55.

祭りの雰囲気は性的な解放区をつくり出したことも記述している．労働者階級の刹那的な解放として，アレクサンダーは以下のように述べる．

「人々がその生活の一年に一度だけ，ファンタジーと現実がひとつになるときがあった．薄汚い場所での栄華，働くなかでの自己表現，ヒエラルキーのなかでの平等，ありふれたもののなかでの素晴らしいもの，制限のなかでの自由，『それは劇場のようだった』．」

アレクサンダーのパンフレットは，非日常のなかに日常の生活を生きる労働者の姿を記述したものであった．労働者たちに非日常として経験された祭りは，完全に日常から切断されて存在したものではなかった．確かに，持ち金の全てを使い果たすことが日常的に行われることはあり得ず，祭りのなかで経験される「ファンタジー」の全ては，祭りの後には消えてなくなるものである．しかし，アレクサンダーが記述した非日常は，普段は会えない家族や恋人を思う気持ちが現れ，社会において据え置かれているのだという感覚，および，その具体的な状況から解放される場所であったという意味で，人々の日常的な意識と生活にもとづくものであった．

2. アラン・ホーキンス『19 世紀のオックスフォードシャアにおけるウィットサン』(1972)

アレクサンダーのパンフレット同様，19 世紀における労働者階級の祭りを記述したアラン・ホーキンス（Alun Howkins）について，そのパンフレットには以下のような記載がある．

「アラン・ホーキンスはバイチェスター出身であり，オックスフォードシャアの歌の収集家，かつ歌い手である．彼は 1968 年から 70 年の間，ラスキンの学生であった．今はクイーンズ・カレッジに在籍している．来年には，1890 年代におけるノーフォークの農村労働者についての研究を始める予定である．」[12]

ホーキンスによるパンフレットは，以下のように構成されている．

[12]Howkins, Alun, *Whitsun in 19th Century Oxfordshire*(History Workshop Pamphlet Number Eight), 1973, （ページ番号なし）．

古い様式（The Old Ways）

新しい精神（The New Spirit）

クラブ・デイ（Club Day）

理知的なレクリエーション（Rational Recreation）

キッチナーの軍隊（Kitchner's Army）

まず，ホーキンスはウィットサンの従来の様式を整理している．ホーキンスは以下のように述べる．

「メイ・デイやイースターのように，ウィットサンは元来，暗闇，不毛，冬の寒さの終わりを祝うものである．原始人は冬の初めに種をまき，それが長くて暗い日々の間，冷たい地面に死して横たわっているかのように考えた．そして，霜の季節が終わり，明らかに，死んだ種がよみがえり，それらの小さな緑の芽を突き出した．」[13]

このウィットサンは，ピューリタニズムから「労働をめぐる倫理のためか，ただ単純に，宗教的な祭りの『冒涜』ともいえる側面に対する敵意が流通していたがためか，禁忌なものとみなされた」[14]．禁忌の対象は祭りの場において人々がおこなったレクリエーションであった．具体的にホーキンスが記述しているのは，ウィットサンにおける飲酒，およびダンスとその競技大会，鹿狩り，人々のけんか，闘鶏，闘犬などである[15]．

世紀を経るにつれ，ウィットサンは認知されるようになる．そのなかで，三，四日続いていた祭りは一日に短縮され，地元のジェントリィや牧師による管理の対象となることによって，飲酒は厳しく取り締まられ，スポーツ大会と化した．このウィットサンの変化について，ホーキンスは以下のように述べている．

「道徳の改革の力はさまざまな方向から農村地域にも達した．エンクロージャアによって，より多くの賃労働者が生まれ，多くの農場においては規則的な労働日が設定される

[13]ibid, 1.
[14]ibid, 3.
[15]ibid, 10-9.

ことで，労働者の時間を秩序づけ，彼らから柔軟さを奪った．たいていは宗教的な団体の指示のもとにある日曜学校と学校が，経験と道徳が培われる場所としての農地と生け垣にとって代わった．一般的に権威は村の捕吏というかたちで，しばしば村に現れ始めた．農村地域における道徳改革を導入するうえでの最も重要なエージェンシーは教会と村の利益団体，それらが創設し，提供する数多くの組織とイベントであった．」[16]

さらにまた，ウィットサンの変化はそれら権威のある側から直接的にもたらされたのみならず，間接的に友愛協会（friendly societies）の発展によっても支えられた．同協会について，ホーキンスは以下のように述べている．

「農村地域における友愛協会の発展は，もうひとつの主要な影響であった．それまでウィットサンは最も直接的に重要な関心事であったものの，友愛協会がウィットサンを『収用』し，それを彼らのクラブ・デイに変えてしまった．同協会の設立を促進し，労働者の人々にある程度，自助を促すことによって，均整をとる手段としたのと同様に，それを社会的な管理のエージェントと見立てたのは，ジェントリィと牧師であったことにはほとんど疑いがない．多くの村のクラブは，実際にジェントルマンと牧師によって設立されたのである．」[17]

すなわち，社会的な統制であるとともに自助を促進するクラブの設置によって，ウィットサンは権威にとってより好ましい道徳的なものへと変化したのである．

ホーキンスは，クラブ・デイへと変化したウィットサンについて，「その存在意義である飲食はもっとも厳しく管理された」と記述している[18]．それでもなお，村にとっての特別な一日であることに変わりはなく，とりわけ，村の住民によって構成されるバンドの行進は地域の誇りと捉えられた．バンドは音楽を提供するのみならず，宗教的な色彩をもち，かつ，ボランティア活動の促進，しばしば，地域のバンドのなかに軍隊の行進が登場し，その威勢の誇示としても機能した[19]．バンドの行進の最終到着地が教会であったこと，クラブの会員たちがクラブの運営資金のために，村のジェントルマンを訪問したことなど，

[16]ibid, 20.
[17]ibid, 23.
[18]ibid, 28.
[19]ibid, 29-33.

かつてのウィットサンには見られなかった光景が生まれ，飾り付けの彩りも地味に押さえられることで，祭りの雰囲気は一変した．しかしながら，一方で，古いウィットサンの名残も確かに存在したとして，多くの出店，ダンス，けたたましい音楽，けんかはクラブ・デイに形を変えてもなお，存続したと記述されている[20]．

ホーキンスは，ウィットサンの質的な変化は「余暇は有用なものであるべきだ」とする「理知的なレクリエーション」の理念が登場してから生じたと述べる．この理念は都市部よりも農村地帯において，より受容され，とりわけ，禁酒をともなってより広く，行き渡った．ホーキンスは，以下のように記述している．

「多かれ少なかれ，あらゆる場所でより成功を収めたのは，禁酒友愛協会の設立，もしくは，すでにある友愛協会をしてクラブの祭りの際の飲酒の禁止，あるいはパブで会合を開くことを止めるように説得することによって，飲酒を止めさせるさまざまな試みであった．禁酒友愛協会は 1835 年，全国的に，地方の行政当局ごとに組織された．」[21]

実際にその禁酒友愛協会によって，ウィットサンに対し，「理知的な」オルタナティブが示された．禁酒の動きはウィットサンにて行われていたビール祭りを運動大会に代えるなどして，これまでもウィットサンのありようを変化させてきたが，禁酒を訴える人々はさらに祭りに参加させないようにするために，さまざまな代替案を提示したのである．たとえば，メソジストの団体はウィットサンの開催時期に重ねて，豪華な夕食と合間の余興を提供したり，キャンプ・ミーティング，茶話会，コンサートを開催したりした．バプティストの団体は彼らの記念集会を開催し，英国国教会も同様の会合を開き，自身の影響力を拡大しようとした．子どもたちには，遠足と日曜学校の豪華な食事を与え，彼らの祭りへの参加を阻止しようとした[22]．やがて，ウィットサンが村のクラブの解体によって，村単位の祭りから，広く地域全体の祭りとして開催されることになることによって，村独自の地域性は失われていった．

アラン・ホーキンスはそのパンフレットにおいて，地域に住まう人々の祭りとしてのウィットサンが，労働者による自助をも手段とする統制によって，馴致される過程を記述し

[20]ibid, 39-43.
[21]ibid, 45.
[22]ibid, 56-60.

た．しかし，ホーキンスはただ馴致される祭りの変化のみを跡づけたのではなかった．ミドル・クラスの管理，統制，とりわけ，飲酒に対する取り締まりのなかで，祭りが物質的に姿を変えてもなお，祭りを楽しむ人々の姿，たとえば，バンドの行進に対する人々の誇らしい気持ち，けたたましい音に合わせて踊る人々があったことも記述した．統制されても，なお残る人々の生活が描かれているのである．

3. ジョン・テイラー『自助から魅力的なものへ』(1972)

ジョン・テイラー（John Taylor）のパンフレットは，前章で取りあげたスタン・シップリーによるパンフレット同様，労働者クラブを対象とするものである．シップリーによる労働者クラブが世俗主義的な風潮を超えて政治化する存在であったのに対し，テイラーのそれは，クラブにおいて労働者たちが興じるエンターテイメントを中心に対象化するものである．テイラーの略歴として，以下のような記述がある．

「40歳であるジョン・テイラーは，1970年から1971年にかけて，クラブとインスティチュート・ユニオンの奨学生としてラスキンに在籍した．彼は労働生活の大半を建築業に費やし、とくに塗装業者，ときには土台をつくる労働者として働いた．彼は生涯，クラブマンである．」[23]

テイラーのパンフレットの構成は以下の通りである．

はじめに：多大な庇護（In the Beginning: High Patronage）
解放（Emancipation）
自助とエンターテイメント（Self Help and Entertainment）
政治の勃興（The Rise of Politics）
エンターテイメントのヘゲモニー（Hegemony of Entertainment）
ショー・ビジネスと戦後復帰（Show Business and The Post War Revival）
クラブ世代（Club Generation）

[23]Taylor, John, *From Self-Help to Glamour*：the Working Man's Club, 1860-1972(History Workshop Pamphlet Number Seven), 1972, （ページ番号なし）.

テイラーはまず，労働者クラブ運動の起こりとして，1862年におけるクラブとインスティチュート・ユニオンの発足経緯を跡づける．「『酩酊状態なしに』，労働者が会話，商売，精神的な向上をはかるためのクラブとインスティチュートの設立を支援すること」とする同ユニオンの設立意図が共感を集め，「地主や資本家（しばしば彼らの「レディー」なる人物），牧師，慈善家が自身の地域に設立，運営することによって，その精神を実行に移そうとした」[24]．ユニオンは労働者の自助を掲げていたが，その活動が「ジェントル」な人々の庇護のもとにあることについて，「『文化的な』人々の『精錬された』力」は，「彼らが良きことのために実行する力」であると述べた[25]．

1867年までには，クラブは広くその存在を知られるようになったが，短命なものが少なくなかった．最も深刻な問題として対象化されたのは飲酒であり，クラブとインスティチュート・ユニオンは「ビールそのものは，もしそれが適量であれば，受け入れることができる．本当の敵はパブだ」として，クラブ会員のパブへの出入りを戒めた[26]．もうひとつの問題は資金繰りであった．1865年，鉄鋼業における労働者たちのストライキは労使間の良好ではない関係を明るみに出し，階級意識の芽生えとともに，クラブに資金援助することも，されることも積極的にはなされない風潮を生みだした．そのなか，それまでの階級外の資金援助に依存するクラブの運営に反抗し，新たな革新的な組織としてのクラブを発足させる動きが現れ，1880年代にはそのような労働者階級による資金面を含めた自助にもとづくクラブの存在が確かな潮流を形成した[27]．このようなクラブ運動の展開について，テイラーは以下のように述べている．

「その草創期において，クラブ運動に参加していた人々のうち，多くは陰の立役者としての匿名性を帯びている．しかし，そのような目立たない特徴こそが，運動の発展を支える原動力であった．いかなる闘争もなしに設立されたクラブはなく，どのクラブも，その初期の段階で試練を経験していた．そして，それを実行に移したのが，それらの人々，個々のクラブの委員会と熱心な活動家だったのである．」[28]

---

[24]ibid, 1-5.
[25]ibid, 9.
[26]ibid, 14-6.
[27]ibid, 16-25.
[28]ibid, 26.

自助を完遂する組織としてのクラブはその活動を通じて，エンターテイメントとしての労働者文化を築いた．具体的にテイラーは，クラブ・コンサート，歌のコンテスト，模擬裁判「裁判官と陪審員のクラス（Judge and July Class)」，演劇をあげている．とりわけ，演劇については，流行のメロドラマに加え，アイルランドの農民に対する立ち退きをテーマにするなど，政治的な状況を反映した内容のものもあった[29]．さらにまた，時事の政治的な問題に関わるディベートも開催された[30]．

1870 年代，80 年代を通じて，クラブは政治性を増し，クラブ内における政治に関わる議論のみならず，具体的な行動を示すようになる．このようなクラブの変化について，テイラーは以下のように述べている．

「疑いなく，新しく見出されたクラブの自立があった．労働者がそれらを運営し始めたとき，それ自身がすでに政治的な活動を刺激するものであった．これらは自治，自己表現，高まりゆく階級意識という意味で，真の労働者クラブであった．ヴィクトリア期の基盤となった組織，たとえば，英国国教会，王制とトーリー党に対して，最も急進的なクラブは労使間の戦争に照らし合わせ，強力な攻撃を加えた．クラブの政治的な活動の範囲は単なるスローガンの羅列に終始しなかった．政治教育がその後，求められ，一般的にたいていのクラブが，時事の論争的なトピックに関する詳細なレクチャーを開催し，話し手とテーマの双方が熱心な議論のもとにおかれた．」[31]

クラブにおける政治の勃興はそれが強ければ強いほど，クラブの自立が失われ，19 世紀の後半には，「党の手先（the party machine)」になっていったとテイラーは指摘する．

「1890 年代までには，クラブマンは単なる党のワゴンにつながれた駄馬だと見なされた．もはやクラブは政治的な活動の先陣に見られることはなく，それらは荷車を引き，選挙時の勧誘というルーティンの作業のなかで，戸別訪問する手足となった．もはやクラブのホールは知的な議論の喧々とした場ではなくなった．質問に熱っぽく答えれば，すぐさま貪るように展開されていた議論は判を押したように，党に同意する手先となっ

[29]ibid, 38.
[30]ibid, 42-3.
[31]ibid, 45.

た.」[32]

一方で，19 世紀の後半までに，自立的な政治性を失ったクラブは「生活の様式，労働者階級の文化の一部」となった．レクチャーの代わりに，エンターテイメントの要求が未だかつてないほど増大した．その要求に答え，パフォーマーをクラブに呼び，多様なエンターテイメントを提供することが，クラブの中心的な活動となった[33]．クラブには家族連れの姿が増え，著名なプロのパフォーマーが出演するときは，支払ってでもクラブに彼らを観にくる労働者階級の人々で溢れた．テイラーは，この状況下でクラブが直面した政治的な問題は，クラブに出演するパフォーマーが長時間労働であるにも関わらず，低賃金であることの労働問題であったと指摘している[34]．

テイラー自身が 1962 年に発足させた労働者クラブは，19 世紀のそれと異なり，完全に当初からエンターテイメントのためのものであったと述べる．そこでテイラーは，実際にショー・ビジネスを労働の場とする人々への聞き取りから，彼らと観客である労働者階級の人々の交流を記述し，それらが戦後の復興のなかで規模を拡大し，労働者の文化の一部として定着したことを述べている．

社会の変化に従って，移り変わる労働者階級の人々の生活のなかにあった労働者クラブの存在について，テイラーは以下のように述べる．

「1870 年代，80 年代に開花したクラブ文化を構成する要素が，再び組み入れられることは決してないが，労働者のそれぞれの世代が，それぞれのクラブの性格を生みだしてきた．そして，現在の世代が最後となる理由は何もないのである.」[35]

テイラーが記述した労働者クラブは「自助から魅力的なもの」，すなわちエンターテイメントとして継続して存在し続けてきたものであった．確かに，その存続のなかで，資金援助を行うミドル・クラスとの関係，および，労働党との関係から，政治性を得たり，失ったりした経緯があった．しかし，テイラーは，労働者クラブが一貫して，どのようなかたちであれ，労働者階級の人々の生活に根ざしながら，彼らの求めるところに応じてきた組

[32]ibid, 56.
[33]ibid, 57-63.
[34]ibid, 69-70.
[35]ibid, 94.

織であることを記述したのである.

第２節　家族に関わる記述

1. エドガー・モヨ『マタベルランドにおけるビッグ・マザーとリトル・マザー』(1973)

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』全13巻中，唯一，イングランドを対象としないパンフレットの作者であるエドガー・モヨ（Edgar Moyo）について，以下のようにその略歴が記載されている.

「このパンフレットの作者であるエドガー・モヨは，塗装業の熟練労働者である．彼はブラワヨ，ワンキー，シャバニ炭鉱，そして，イングランドに来てからはハダスフィールドで働いている．彼は９人兄弟の長男で，ローデシアの国営農場，定時制の学校で成長した．1970 年からの２年間，彼はラスキンの学生であった．今はエセックス大学に在籍している.」[36]

モヨによるパンフレットの構成は，以下のようになされている.

イントロダクション（Introduction）
ズールーランドの北（North from Zululand）
「ビッグ・マザー」と「リトル・マザー」（'Big mother' and 'Little' mother）
家族の崩壊で起きること（What happens in family breakdown）
子どものころ（Childhood）
西洋文化の衝撃（The impact of western culture）

南アフリカ出身のモヨは最初に，パンフレットで記述される「マザー」，あるいは「ブラザー」,「シスター」が血縁を指すのではなく，むしろ，社会的な機能を指したものであり，この点に対して，白人入植者たちは十分な配慮を払ってこなかったと指摘する[37].

パンフレットが対象とするマタベルランド（Matabeleland）の地理的条件，すなわち，

---

[36] Moyo, Edgar, *Big Mother and LittleMother in Matebeland* (History Workshop Pamphlet Number Twelve), 1973, (ページ番号なし).
[37] ibid, 2-3.

南アフリカ共和国のズールー（Zulu）の北部に位置することを述べ，そこに住まう人々が元来，定住地を持たない流浪の民であることから，「新しい考え方に極めて受動的な態度を示す」と指摘する[38]．さらに，白人による入植前，そこでは女性たちが経済的な資源のほとんどを管理していたこと，一夫多妻制が経済的な意義をもっていたことが述べられ，それら，従来のマタベルランドにおける人々の生活と労働が，白人の入植がともなったキリスト教にもとづく道徳，あるいは，彼らによる，男性を家長とすることにもとづく土地管理によって，崩壊させられたことを指摘している[39]．

モヨは，白人によって変化させられる前のマタベルランドにおける「マザー」の指示する内容について，以下のように述べている．

> 「必ずしも，子どもを産んだ者を意味しない．西洋の意味のマザーに，彼女の姉妹のすべてを加えたものが，『マザー』という言葉の意味するところである．役割と地位によって，どのマザーかを示す語尾がつけられる．したがって，マザーの姉妹はすべてマザーなのである．どの家族においても，長女が『ママーオムダラ』というタイトルが与えられ，翻訳すれば『ビッグ・マザー』である．彼女は自身の子どもの世話をすることのみならず，妹たちの子ども，娘の子どもも世話する責任がある．このタイトルは，一夫多妻の結婚における一番目の妻にも与えられる．」[40]

そして，ビッグ・マザー以外の女性，すなわち，ビッグ・マザーの妹たち，ビッグ・マザー以外の父親の妻たち，あるいは近所の女性でさえもが，リトル・マザーと呼ばれ，彼女らはいずれも，ビッグ・マザーの死後，新しいビッグ・マザーになる可能性がある．

したがって，このような血縁に依らず，一般的に地域全体にまで拡大しえる家族の形態のなかでは，たとえ家族が崩壊したときであっても，子どもが孤児になることは起こりえないのである．また，モヨは西洋社会における家族の制度と比較して，マタベルランドにおいては，孤児に対する福祉制度は不必要であり，私生児も社会的には存在しえないと指摘している[41]．確かに，都市化と工業化の結果，都市部に住む母親は結婚相手の男性と二人で居住する事態も生じているが，その母親がビッグ・マザーやリトル・マザーとのつな

---

[38]ibid, 4.
[39]ibid, 6-11.
[40]ibid, 14.
[41]ibid, 22-3.

がりを絶やさない限りは，家族の制度のなかに組み入れられることが可能である．

この家族をめぐるシステムのなかで，子どもは地域のなかで育てられる．とりわけ，モヨはそのなかでの男児と女児の遊びの違いについて，記述している．男児は戦争のための訓練，住居を建てるための技術の習得，狩猟が遊びのなかに組み込まれ，一方，女児の遊びはビッグ・マザーを手伝って，家事や乳幼児の世話をすることのなかに見出された[42]．また，隣近所の緊密な関係のなかで，子どもたちは近隣の家や彼らの食事の場に自由に出入りすることが許されていた[43]．

このような地域全体を抱え込んだ家族システムは，マタベルランドに1892年，巨大な工業都市が建設されたことを契機に，大きく変化を遂げた．モヨはこの変化について，以下のように記述している．

「今日，工業化と都市化によって，伝統的な家族生活は破壊され，新たな『ビッグ』マザーのありようが昨今の状況に適応するかたちで現出している．都市部のよりよい学校のために，もしそれが桁違いでなければ，よりよい住居のために，都市に住む姉妹が，彼女の姉妹の子どもたちすべての『ビッグ』マザーの役割を引き受ける．彼女は子どもたちが学校を卒業し，仕事に就くことができなければ，この役割を失う．子どもたちは農村に送り返され，穀物を育てる世話をし，そこで他の『ビッグ』マザーに受け入れられて，彼らの先の『ビッグ』マザーは『リトル』マザーの地位に戻るのである．」[44]

経済的な側面のみならず，宗教的な側面からも，マタベルランドの家族システム，とりわけ，夫を亡くした寡婦が夫の兄弟と再婚することに対する宗教的な攻撃は，貧しい母子家庭を生みだした．しかし，一方で，そもそもの貧しさから抜け出す手段として，西洋文化の受容を選択する向きもあった．モヨは以下のように述べている．

「貧しさを逃れるというマタベルにおける欲求と，このことは西洋の基準を受け入れることによってなし得るという信念ゆえに，彼ら自身とその家族を『原始的な』マタベルの生活スタイルから峻別しようとことさらに努める人々によって，社会的なゆがみが生

[42]ibid, 30-2.
[43]ibid, 35.
[44]ibid, 44.

じたのである．しかし，『ビッグ』マザーという仕組みは，この残酷な躍進を生き抜き，家庭経済と農作業の管理における女性の支配的な位置も残っている．」[45]

エドガー・モヨのパンフレットは，植民地化によってもたらされた家族，および生活における経済的，価値規範的な変化を記述した．植民地化という政治的，経済的，社会的な変動が，人々の生活を確かに変えたことが歴史と自己の経験のなかから明らかにされた．しかしながら，モヨはまた，その変化のなかにあってもなお，従来の家族，生活がかたちを変えながら，観念としてではあれ，存続してきたことを明らかにした．

2. デイブ・マーソン『1911 年における子どもたちのストライキ』(1973) ／ビリー・コルヴィルとデイブ・マーソン『集まれ，そしてついて来い』(1974)

子どもたちによるストライキとそれを取り囲む家庭の状況，社会的背景を明らかにすることを通じて，1911 年当時の労働者階級の子どもたちの生活に焦点を当てるパンフレットの著者，デイブ・マーソン(Dave Marson)について，パンフレットには以下のような記載がある．

「このパンフレットにおいて，デイブ・マーソンが示したように，1911 年の子どもたちのストライキは，1911 年の長い，暑い夏における労働者たちの大規模な激動の一部である．争議についてはしばしば記述されてきたが，学校のストライキはデイブ・マーソンが初めて発見したものである．彼自身の出自である人々，フルの港湾労働者についての歴史を調べているときに，偶然に出会った．彼は国中のストライキを調べ上げ，それらを学校と地域の文脈に置き換えた．彼が記述した学校の状況は，消え失せたわけでは決してない．同様に，抵抗を組織化することの困難もまた，無くなってはいない．著者は港湾労働者であり，1970 年から 72 年の間，ラスキンに在籍していた．」[46]

マーソンのパンフレットは，以下のように構成されている．

---

[45]ibid, 51.

[46]Marson, Dave, *Children's Strikes in 1911* (History Workshop Pamphlets Number Nine), 1973, (ページ番号なし) .

分割と規則（Divide and Rule）

「集まれ，そしてついて来い」（'Fall in and Follow Me'）

狡猾なクラス（The Truant Class）

争議（The Industrial Unrest）

裸足の自由（Freedom in Bare Feet）

マーソンはまず，ストライキ前の子どもたちの学校における状況について，自分の子どもの頃を振り返りながら，以下のように述べた．

「子どもたちが教師に逆らったとき，彼らは一緒に立ち上がることはなかった．彼らの一人が吊るし上げられたとき，彼らは彼を支援することもなかった．私が学校に通っていたとき，私たちは決して，ひとつの集団として動くことはなかった．個人個人は外に走り出し，彼らの両親，とくに母親を連れて戻った．『お父さんをつれてくるぞ』と言って教師を脅すものもいた．その間，クラスは後ろに控え，良くある言い争いを見守り，たいていは教師の人間性の欠如について，陰口を叩いた．私たちはこの状況をエンターテイメントとして見ていたと思う．」[47]

1911 年の 9 月 13 日，12 人の年長の児童がストライキをおこし，その日の午後の授業の時間には，近隣の学校にもそのことが伝わっていた．子どもたちのストライキは，彼らに先立って，9 月 5 日からストライキを行っていた父親たちの模倣だと捉えられた．マーソンは，その子どもたちのストライキにおいて，最も一般的な要求が授業時間の短縮と教師が子どもたちを打ち付けるときにつかう杖の廃絶であったと指摘している[48]．子どもたちのこのストライキ崩しを担ったのは，まずは教師たちであった．実際に，教師が現れるだけで，杖による体罰と悪い成績をつけられることを恐れてストライキから抜け出した子どもたちもいた[49]．一方で，ストライキを抜ける子どもたちに対して，攻撃を加えるストライキに留まった子どもたちの存在が散見された[50]．さらに，教師よりも強力にストライキ崩しを担ったのは，子どもたちの母親であった．マーソンは次のように述べている．

---

[47]ibid, 2-3.
[48]ibid, 9.
[49]ibid, 12-3.
[50]ibid, 14.

「彼女らは,ストライキ初日の終わりに，子どもたちが帰宅した際にプレシャーをかけるだけではなく，より積極的な介入をおこなった．翌日には子どもたちを強制的に学校に連れ戻し，学校の門前に張られたピケットをよじ上りもした.」[51]

「1911年において，ストライキに参加した子どもたちはたいてい，公立学校の子どもたちで，工業都市の貧しい，抑圧された地域の出身であった」ことから，世論は子どもたちが十分な親のしつけを受けていないこと，家庭や地域の貧しさをストライキの原因に見立てた[52]．確かに，彼らの貧しさが原因であることをマーソンも否定していない．しかしながら，マーソンは，貧しく，靴も履かず，いつも裸足で髪を切ることも稀な子どもたちに対する教師の差別的な態度をその原因としている．当時の教師の態度について，マーソンは当時の労働者階級の子どもたちに対する態度として，当時，子どもとして学校に通った人々の聞き取りから，以下のように記述している．

「学校は朝，検査によって始められた．これは通常，運動場で行われた．子どもたちはクラスごとに集まり，教師はゆっくりと，検査するための子どもたちの列にそって歩いた．子どもたちは指の爪を検査されるために，手を広げて起立していた．通常、教師は子どもたちの手を叩くことで，彼らに手を裏返させるサインとした．しばらくして，子どもたちはそれを自動的に行うようになった．これらの検査では，子どもたちは頭を垂れ，向きを変えて，頭と首を教師に見せるようにした．ある少年の首が汚く，顔しか洗っていない証拠として，『波のマーク』が見つかれば，教師は彼を列の外に出し，彼を『寄生虫』と呼び，洗い直すように家に帰らせた．

教師は子どもたちをまるで，動物かなにか，もしくは売り出し中の家具であるかのように検査した．子どもたちが学校に行ったとき，朝はこのような扱いで始まり，学校が終わるまで続くのである.」[53]

授業中もまた，授業の内容が理解できないがために集中できず，近くの子どもと話し始

[51]ibid, 17-8.
[52]ibid, 23.
[53]ibid, 26.

めてしまう子どもに対して，教師は手に持っているものが何であれ，子どもにそれを投げつけたとマーソンは記述している．さらに，運動会の日には，野球や水泳のための適切な道具を用意できない子どもたちは，それに参加することができなかった[54]．これらの待遇を問題として，子どもたちはストライキを行ったと指摘している．

子どもたちのそのような感情に，それに反抗するために直接的に形を示したのは，1911年，全国各地で巻き起こった争議であったとマーソンは述べている．海員と消防士に端を発したストライキは，鉄道夫や運送業で働く労働者全般にまで拡大した．このことを背景として展開された子どもたちのストライキは，とりわけ，「争議によって最もかく乱された場所で行われた」[55]．

マーソンは労働者階級の子どもたちが，学校生活のなかで経験する処遇のなかで卑屈にならず，豊かな想像力を生活のなかで保持していたことについて，以下のように述べている．

「教室を離れ，歓喜に浸る子どもたちはさまざまな方法で自分を表現し始めた．『ストリート・シアター』でもあれば，工場の門，あるいは街角のアジテータのやり方で，少年たちの群れを方向付けるのに十分なほど，彼らを浮き立たせる自由という純然たる感情でもあった．新聞のコラムニストにとって，彼らは『常軌を逸した者』，『怠惰な階級』，『貧しい地区出身の子どもたち』であった，この態度によって，どのようにリスペクタブルな階級が彼らを捉えていたかが理解できる．国中で，子どもたちが独自性と自立を示しだしたのである．ストライキはすべてが暴力的なものではなかった．ハートルポールでは，少年たちは砂浜を歩き，ピクニックをし，晩夏の素晴らしい天候を享受した．他のところでも，水泳に出かけたり，ただ座って，いつも通りの会話に花を咲かせたりした．兵隊の真似事をしてパレードをする者もいたし，愛国心溢れる歌を歌う者もいた．ノーザンプトンでは，ストライキ中の子どもたちは，ブラックベリー狩りに出かけた．しかしより重要なことに，彼らは言葉を曲に乗せて，自分たち自身の歌に興じた．これらの子どもたちは，彼らの息詰まるような学校経験にも関わらず，彼らの精神が灰色一色の教室に埋め尽くされてはいないことを示した．彼らはまだ，色彩豊かな絵の具のよ

[54]ibid, 27.
[55]ibid, 32.

うなアイディアを生み出す想像力を保持していたのである.」[56]

マーソンは貧しい労働者階級の子どもたちが，学校で経験する被抑圧，それに抗ってはじめたストライキのなかで経験した子どもたちの間の分裂と葛藤を記述した．しかしながら，マーソンはまた，子どもたちが豊かな想像力を失わず，学校ではない生活の場に温存させていた豊かな力をストライキのなかで発揮していた姿を描きだしもした．大人たちが抑えようとしても，抑えきれない子どもたちの意識と生活が確かにあることを記述したのである.

なお，歴史資料として，子どもたちの経験を記述するものは少ない．マーソンは，パンフレットの末尾で，具体的に，どのように子どもたちがストライキを組織したのか，数時間の自由を求めることによって，実際に彼らは何をしたかったのか，センセーションを求めただけなのかなど、明らかではないことが多いと指摘する[57]．マーソンによるもう一冊のパンフレットは，その明らかでないことを彼自身の想像力で補い，劇作家である共著者の力を借りて，子どもたちのストライキを戯曲として再構成したものである.

第３節　労働者による経験の記述における生活の広がり

本章では，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の生活に関わる記述を検討した．それらの記述から了解しえることは，以下の四点に整理できる.

第一に，労働に関わる記述のなかでも見出されたものとしての労働と生活の分割不可能性が，生活経験に関わる記述のなかにも見て取ることができるということである．労働者が自己に関わって，労働，および生活を記述する際，いずれかを分割して取り出し，記述することは，自己，ありのままの労働者に関わる歴史記述である限り，不可能なことであった．祭りの場における労働者としてのショーメンたち，労働者クラブにおいてエンターテイメントを提供する労働者たちのみならず，植民地化による家族の変化にともなう労働の変化，日々の労働経験と関連づけられた祭りという非日常性の感覚，出自の家庭が属する階級によって，子どもにもたらされる教師の偏見に満ちたまなざし等，生活経験のなかにあった労働が記述されていた.

第二には，労働の記述における第二の点と同様，生活の記述においてもまた，確かに他

[56]ibid, 34-5.
[57]ibid, 33.

者が書き込まれていることである．とりわけ，生活の場における他者は，具体的に，家族，父親，母親，あるいは恋人であった．彼らとの思いやり，あるいは利害に満ちた関係，またはときに敵意を含む関係は，自己と他者の関係として，生活の記述にとって不可欠なものであった．第一の特徴と関わって，労働者の労働と生活における他者との関係を記述する際，その関係の両義性の一方のみを記述することは，ありのままではないことを意味した．思いやり，あるいは連帯のみを強調して，他者との関係を記述することは，ありのままの自己を承認することにはなり得ないのである．

第三に，記述される労働者の生活は，非日常的な事柄も含み込むということである．具体的に，本章で取りあげたパンフレットでは，セント・ジャイルズ・フェアとウィットサンというふたつの祭りが記述されていた．それらは，ファンタジーと現実がひとつになるという，非日常的な経験であるからこそ，意義を持つものであった．しかしながら，夢としてではなく，確かな現実とひとつになるからこそ，ファンタジーにも意義があったという限りで，非日常的な祭りもまた，労働者の日常と関連づけられた生活のなかに存在するものであった．

そして，第四に，労働者学生たちによって記述された生活は，経済的、社会的な変化，および抑圧のなかで，かたちの変化を余儀なくされながらも存在し続ける強さ、とでもいいうる特徴をもつものであった．形式を失ってもなお，観念としてではあれ，人々のなかに生き続け，時宜を得て，またかたちをとるものとして，生活は記述されたのである．

このように考えれば，生活という言葉は，労働と生活というときの，場所に規定された，すなわち，労働の場ではない，地域や家庭を場として営まれる狭義の生活と，それら両者の分割不可能性にもとづいて，場所や時間，形にさえも規定され得ない広義の生活とが存在していると捉えられる．この広義の生活は，祭りや家庭といった具体的な場に限定されるものではなく，自己として表されるものに等しい．労働者学生の生活に関わる歴史記述のなかには，経験される生活のみならず，具体的にはかたちを取らない生活もまた，記述されていたのである．

この点を含め，次章では，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生の記述について，先のラファエル・サミュエルによる労働者教育としてのヒストリー・ワークショップの意義と関連づけながら，総括的に検討する．

第７章　労働者の生活の記述による尊厳の獲得

本章の目的は，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生たちの歴史記述を総括し，そこでの労働経験，および生活経験の記述を通じて，労働者たちが獲得した尊厳の内実を明らかにすることである．

第４章では，労働者に関するラファエル・サミュエル（Raphael Samuel）の歴史記述から，彼の労働者教育が労働者の労働と生活のアンサンブル，つまりは労働者のありのままの経験に対して，受動的に応答することにより，労働者の男女双方の尊厳を保障するものであったことを明らかにした．そのサミュエルの労働者教育の場における労働者学生の応答として，第５章では，労働に関わる労働者学生の記述を整理，検討し，労働の場における経験のみならず，生活の場における経験を含めて記述することで，労働者が自己のありのままを記述するものであったことを明らかにした．さらに，第６章で取りあげた生活経験に関わる労働者学生の記述では，労働の場と対比して捉えられる狭義の生活を超えて，労働と生活を統合する広義の生活が記述されている特徴を捉えることができる．

これらの歴史記述による尊厳の獲得の内実に迫る前に，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット（History Workshop Pamphlets)』（全１３巻）の概要を確認し，これまでに行われてきた同パンフレットに対する「学問的」評価を整理しておきたい．

同パンフレットは，ラスキン・カレッジにおける非公式のセミナー，学内外を問わずに開催されたワークショップにおける報告のために，ラスキン・カレッジの学生である労働者たちが準備したものに彼らが改めて加筆，修正を行い，活字にしたものである．ヒストリー・ワークショップの活動は，ラスキン・カレッジの正規のカリキュラム外で行なわれたものであるため，同ワークショップで報告された研究は，ひとつのパンフレットを除き，それぞれの労働者学生が所属していたコース修了のための要件を満たすものとは認められず，学生たちは休暇を利用し，あるいは卒業後に継続して調査，執筆を行ない，パンフレットを刊行した[1]．

学生たちの努力と熱意とによって刊行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレ

[1]Samuel, Raphael(ed), *History Workshop A Collectanea 1967-1991*, History Workshop25, 1991, 67-8. なお，コースの修了要件としての卒業論文であったのはパンフレットの第２巻，サリー・アレクサンダーによるもののみである．

ット』について，ラファエル・サミュエルは，歴史をそれが由来する人々の手に返す，過去の隠された歴史を救い出す，さらには，私費を投入し，その販売経路をも学生たち自身で確保せねばならなかったという意味で，「執筆者たちは，パンフレットの出版を政治的実践として捉えた」と述べていた[2]．750 部ないしは 2000 部が印刷され，最終的には投入した私費をまかなえるほどの売り上げをあげた．

学生たちによる政治的実践としての『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』については，極めて論争的な「学問的」評価があった．例えば，レックス・C・ラッセル（Rex. C. Russell）は第 11 巻のパンフレットについて，「女性と子どもが担った労働の便利なカタログ」と述べ，その評価はあくまで多様な労働の羅列としてであった[3]．しかしながら，一方で，ジェームズ・D・ヤング（James. D. Young）は，同じく第 11 巻のパンフレットを中心とするヒストリー・ワークショップの歴史記述について，「男性と女性を異なる社会的なカテゴリーに据え置いたままで」，「労働者階級の社会生活における女性の役割の真の意義に迫ることは不可能である」ことを示したと述べた[4]．

さらに，より全般的に『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生の歴史記述の意義を検討したリチャード・プライス(Richard Price)は，「ラスキン・カレッジから現れた仕事のうち，最も価値のあるもののひとつは，労働者階級の歴史における暗黒部，無視されてきた部分に忠実な光を当てたもの」であり，「労働者階級出身の学生としての人生経験と彼らの歴史家としての仕事の間の首尾よい融合の結果」[5]と述べながらも，「重要な問題や特徴とさして重要ではないそれらを分別することに対して，消極的であるようだ」と指摘している[6]．一方で，ハロルド・ローゼン(Harold Rosen)は，同パンフレットの刊行から学ばれるべき事柄として，「緻密な研究が行われていない状況において，最も的確な労働者は，精力的に自身の組織の成立と維持に参画する者であり，さらに彼らのなかでも，最も的確なのは，その過程で，社会とその変革についての理論を構築するこ

---

[2]ibid, 69.

[3]Russell, C. Rex, 'Village Life and Labour', *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, No. 32, 1976, 45.

[4]Young, D. James, 'The Problems and Progress of the Social History of the British Working Classes 1880-1914', *Labor History*, Vol. 18, No. 2, 1977, 265.

[5]Price, Richard, ' The Making of Working-Class History', *Victorian Studies*, XX, No. 1, 1976, 70.

[6]ibid, 73.

とに向き合い，尽力する者であると提起したい」と述べた[7].

他方，このヒストリー・ワークショップとそこでの学習の成果である同パンフレットについて，本邦では概ね，新たな歴史研究の方法として注目するに留まった．近藤和彦は，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』について，「オーラル・メソッドを採用しつつ，伝統的な歴史記述において顧られることが少なく文書史料も乏しい児童や農村婦人の生活と労働にもメスを入れた社会史の新領域を拓く興味深いものが多い」[8]と述べた．本邦における『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』についての大々的な評価，および，紹介はこの近藤和彦によるもの以外にない．

同パンフレットは，これまで顧みられることのなかった歴史を新たな方法で明らかにするものとしては，一致した評価が与えられたものの，明らかにされた歴史的な事実そのものの価値については評価が分かれた．これらの「学問的」評価を踏まえ，本章では，まずはそれら，歴史研究としての同パンフレットに対する「学問的」な評価から離れ，労働者学生の尊厳の獲得を目指す教育と，労働者のありのままの生活を記述することによる労働者の学習としての意義を検討し，その意義から逆に，「学問的」な評価を再評価する．労働と生活の分割不可能性とそこでの男女間の経験の差異に関わり，労働者学生が尊厳を獲得した内実について，彼ら自身の記述にもとづきながら検討を行なう．

第1節　労働者の自己に関わる歴史記述

1．労働と生活における自己の言説化

ラスキン・カレッジの学生ではなかったものの，ヒストリー・ワークショップの草創期から深く関わり，同ワークショップにおける女性史の展開に尽力したシーラ・ローバトム(Sheila Rowbotham)は，ラファエル・サミュエルに論文指導を受けた経験がある．ローバトムは，そこで経験した教育に対するサミュエルの態度について，以下のように述べている．

> 「多くの，自信のない学生たちに見せる優しさでもって，ラファエルは全ての章を読みコメントを付した.」

---

[7]Rosen, Harold, *Language and Class: A Critical Look at the theories of Basil Bernstein*, Falling Wall Press, 1972, 9.
[8]古賀秀男「イギリスにおけるヒストリ・ワークショップの活動」『歴史学研究』461巻，1978年10月，29.

「私は，ラファエルの教師としての素晴らしい才能に期せずして触れた．それは，発見したことが重要な啓示であると感じさせるものであった．彼が示す関心は，自身の轍を残すに当たっての自信となるものであった．」[9]

ここでローバトムが述べている「自身の轍」は，ローバトムの場合が学術論文であったことから，その学問的な価値について指していることは確かである．しかしながら，「自信のない学生たちに見せる優しさ」はとりわけ，労働者階級出身で，高等教育経験がないラスキン・カレッジの学生たちにとって，より自己の存在そのものに関わる価値，その意味での「自身の轍」を発見する機会となった．

サミュエルについて，「人々に自身の歴史を記述させることに並々ならぬ情熱」をもつ「英国一，年老いたティーンエイジャー」と評する，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』第８巻の筆者でもあるアラン・ホーキンス(Alun Howkins)は，彼自身の経験から，サミュエルがラスキン・カレッジに入学した労働者階級の学生に出身地を尋ね，その場所をほめたたえることによって，しばしば自身の出自である労働者の文化を恥じ，そこからの逃避としてオックスフォードに来る彼らに対して，彼ら自身の状況を受け入れ，誇りとするように促すことがあったと述べている[10]．

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』において記述されているものは全て，筆者の自己，あるいはその経験に根ざしたものである．しかし，自己を記述する様式，すなわち，記述された歴史的事柄と自己，および経験との関連には，パンフレットによって差異がある．例えば，パンフレットの第１巻は，鉄道夫であった筆者がラスキン・カレッジ入学前から記録していた鉄道夫たちの俗語を事典として整理するとともに，自身の鉄道夫としての経験を思い起こして叙述したものである．第４巻もまた，筆者自身の 27 年間の日雇い樽職人としての経験を時系列で記述したものである．

さらに，炭坑夫の生活をテーマにした第６巻と，彼らのジョーク，歌，服装，語彙を整理した第 10 巻の筆者であり，当時，24 歳の炭坑夫でありながら７歳から政治活動の経験をもつデイビッド・ダグラス (David Douglass) のパンフレットの目的について，ラファエル・サミュエルは，その前文で以下のように述べていた．

---

[9]Rowbotham, Shiela, 'Some Memories of Raphael', *New Left Review*, No. 221, JAN/FEB, 1997, 130.

[10]The Scotsman, 26th December, 1996.

「彼のパンフレットは，全てのダラム地方を愛する人に届けられるべきではある．しかし，その目的は感興的なものというよりも，より政治的なものであり，その出版は，今日，炭坑夫たちが参加している全国規模の闘争に資するものとしてなされた．」[11]

とりわけ，そこでの主張は，組合運動，その闘争時におけるリーダーシップ，および，組合専従職員のありようを批判するものであった．

これら，直接的に筆者自身の経験にもとづいて歴史を記述したものがある一方で，より間接的に，自身の経験を記述するパンフレットもある．例えば，労働者クラブの歴史的展開，すなわち，当初は，ミドル・クラスが啓蒙的な意図を以て与える寄付金を頼りに運営されていたクラブが，より自助，自制する組織へ，さらにはエンターテイメントを提供する施設へと今日的に変化してきた過程を跡づけるパンフレット第７巻は，自身がクラブの活動家であるジョン・テイラー（John Taylor）によって書かれたものである．そのため，今日的なクラブとの比較の段階で，同パンフレットには彼自身の経験が記述されている．

また，サリー・アレクサンダー(Sally Alexander)がオックスフォード地方における祭りであるセント・ジャイルズ・フェアを対象にして，その歴史的な展開を跡づけるなかで，祭りの場における人々の風俗と産業革命の祭りへの影響を明らかにした第２巻のパンフレットの前文において，サミュエルは筆者の経歴について，以下のように述べていた．

「サリー・アレクサンダーは，1968 年にラスキンに来る前までは女優であった．彼女は自身の経験を仕事に活かした．それには，祭りの場に関する思いのこもった理解が込められている．只今現在であるかのように，そして彼女が書いているときであったかのように．」[12]

直接的，あるいは間接的のいずれか，さらにはそれらの濃淡に関して，労働者学生による歴史記述には違いがある．しかし，いずれにしても，そこで記述されたのは労働者学生

---

[11]'Forward', Douglass, David, *Pit Life in CO. DURHAM: RANK and FILE MOVEMENTS and WORKERS' CONTROL* (History Workshop Pamphlets Number Six), 1972, ii.

[12]'Forward', Alexander, Sally, *ST. GILE'S FAIR, 1830-1914, POPULAR CULTURE and the INDUSTRIAL REVOLUTION in 19th century Oxford* (History Workshop Pamphlets Number Two), 1970, iii.

自身の自己，および経験であった．それは，「歴史」と言われてきたもの，そのための場としての「学問」，さらには，それらの多くに意味を与えてきたミドル・クラスの価値からして，無意味だとされてきたものであった．

2．自己の別名としての生活

実際に，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』には，労働者学生たちの労働経験と生活経験に関わる自己が記述されていた．すなわち，労働者学生たちの自己とは，彼らの労働と生活であったと換言できる．

労働者学生たちの歴史記述において，彼らが「労働者」学生であったことから想像されるように，多く記述されていたのは彼らの労働経験であった．しかし，第５章で述べたように，彼らの労働経験に関わる記述は，労働のみに焦点を当てることなく，生活との分割不可能性にもとづいて，ありのままの労働者を描き出すものであった．例えば，先に挙げたパンフレットの第１巻では，未婚の男性労働者のための寮における彼らの連帯について，同じ寮に居住していたアイルランド移民の労働者が偏見にもとづく容疑をかけられ，逮捕され，失業し，退寮するように申し渡された際，容疑が事実無根であり，そのことを法廷で証言するための会合を他の寮生たちが組織し，被害者が職場に復帰したエピソードが記述されていた[13]．また，第３巻のパンフレットにおいては，オックスフォード地方におけるエンクロージャアへの農夫たちの抵抗，具体的には，農地を囲い込むために作られるフェンスを監視の手薄な夜間に破壊することが，直接的な利害関係のない農夫以外の地域住民，とりわけ，地域の酒屋とそれを営む家族らの助けによって，成立していたことが記述されていた[14]．さらに，同じくオックスフォード地方における住民たちの祭りの馴致，とりわけ，教会，あるいは禁酒を推進する団体との拮抗関係を跡づけるパンフレットの第８巻では，地域に住まう労働者たちが，祭りそのもの，そこでの地元のバンドの演奏とその教会までの行進の過程に対する誇りを共有していたと指摘していた[15]．労働はまさに，それを営む者の生活にとけ込んで存在するものとして記述されたのである．

一方，生活経験に関わる労働者学生たちの記述においては，第６章で述べたように，労働と対比される狭義の生活のみならず，労働とその生活を包括する広義の生活が記述され

---

[13]McKenna, Frank, *op. cit,* 1970, 24-5.
[14]Reaney, Bernard, *The Class Struggle in 19th Century* Oxfordshire (History Workshop Pamphlet Number Three), 1970, 58-9.
[15]Howkins, Alun, *op. cit*, 1973, 30-4.

ていた．労働経験を主題とする歴史記述において，生活経験と併せて記述されていたことからしても，自己に関わる『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の歴史記述は，労働者学生による広義の生活に関わる記述であり，この広義の生活は自己の別名であると捉えられる．

「生活」は，しばしば私的領域を指して用いられ，その意味で，個別具体的な性格をもつ．しかしながら，一方で，明確には定義し得ない多元性，および，多義性を内に含むという意味で，極めて匿名性を帯びたものでもある．例えば，英語の‘life’は，成長，あるいは機能的な活動に足る能力，生きているもの，生きている時間，個人の営為，活力等，日本語の「生活」に加え，「生命」，「人生」といった時間的，空間的，身体的な広がりを内にもつ言葉である．また一方で，日本語の「生活」という語も，生きながらえること，あるいは，世の中で暮らしていくこと，そのてだてを指し，同様に多義的なものである[16]．

このような「生活」，および，「生」の多義性に関わり，ジョルジョ・アガンベン(Giorgio Aganben)は，古代ギリシア語における「ゾーエー」と「ビオス」について，以下のように説明している．

> 「ギリシア人は，われわれが生 vita と言っているものを表現するのに，唯一の用語をもっていたわけではない．彼らは，意味的にも形態的にも互いにはっきりと異なる二つの用語を用いていた．一方は『ゾーエー zōē』であり，これは，生あるもののいっさい（動物，人間，神々）に共通の，生きている，というたんなる事実を表現していた．他方の『ビオス bios』は，これこれの個体や集団に固有の，生の形式ないし生き方を意味していた．」[17]

この「ゾーエー」と「ビオス」は，「生活」，および‘life’の多義性を分節化したものとして捉えることができよう．アガンベンは，強制収容所としての「アウシュビッツ」を現代社会における「生」のありようの典型として捉え，「剥き出しの生」として，「ビオス」を「ゾーエー」の支配の対象とすることが奪う人間の生の形式を説明しようとする．

このアガンベンの思考については，多方面から批判されている．とりわけ，アウシュビ

---

[16]『広辞苑　第５版』．なお，「自己」については「われ．おのれ．自分．その人自身」であると説明されている．

[17]ジョルジョ・アガンベン(高桑和巳訳)『人権の彼方に―政治哲学ノート―』以文社，2000(=Aganben, Giorgio, Mezzi Senza Fine, Bollati Boringhieri editore, 1996)，11.

ッツを今日的な政治的状況の典型として持ち出すことに対する違和，すなわち，細見和之によって呈された「私たちの日常的世界を批判的に見据える眼差しはやはり，強制収容所を批判する眼差しとは別の次元に設定されねばならないのではないか」といった疑問がある[18]．細見の違和感は，アガンベンの生を見据える眼差しが，まさに「ゾーエー」と「ビオス」とを分類し，後者を前者の支配の対象とみなすことに端を発しているように思われる．つまり，生活していることが生きていることに規定されていることは確かだとしても，生き死にに関わる人間の生と，個人の生の営み方とは区別して考えられるべきだということである．

日常的世界における生が，「ゾーエー」までをも剥き出しにする強制収容所とは別次元にあるとしても，それ自体ですでに多義的な「ビオス」という生の形式を通じて，今日的な権力の布置を理解し得るはずである．この理解にあたって，細見はまた，「一般論の次元で思弁を繰り広げることではなく」，「一つひとつの証言にたいして『語られていないことに耳を傾ける』という行為を具体的に遂行する」ことこそが重要だと指摘している[19]．一個の個体に確かに経験されているにも関わらず，明確に名指し得ないという匿名性をもつ，日常的世界の「生活」，「生の形式」は，非匿名の個人の語りによって明らかになるものである．

この限りで，生活とは，自己という言葉で表されるものと近似している．自己もまた，固有の個人の語りのなかで現出しえるものであろう．したがって，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生たちの自己の言説化とは，彼らが直接的、間接的に経験した労働と狭義の生活，すなわち，「ビオス」としての広義の生活，生の形式を明らかにするものであったのである．その記述を通じて，ヒストリー・ワークショップの労働者学生たちは，生の形式に関与する権力，および社会のありようとそこでの自己を理解し，尊厳の獲得を目指したのである．

第2節．関係のなかにある生活

1．労働者をめぐる社会的諸関係

ラスキン・カレッジの卒業生であり，後に労働党の副首相になるジョン・プレスコット

[18]細見和之『言葉と記憶』岩波書店，2005，202．また，市野川容孝も同様の批判をしている（市野川「法／権利の救出　ベンヤミン再読」『現代思想』Vol,34-7，2006年6月）．
[19]同前，212．

(John Prescott) は，ラファエル・サミュエルとのラスキン・カレッジでの関係について，以下のように述べている．

「彼は私が決してしないと思っていたことをさせた．エッセイを書く（それは私にとって，十分，困難だったのであるが）のみならず，何かを指摘するために，詩という表現方法を用いさせた．それまで，詩は彼らのものであり，私たちのものであるとは考えていなかった．

彼は，労働者は据え置かれているのだというメッセージを送る社会において，成人学生が内にもつ劣等感に対して，絶大な理解を示した．学生たちの内心を理解したのみならず，それを紐解き，さらにそれを記述された言語的な議論に方向付けたのである．彼の優越をひけらかすようなことはなかった．そのチュートリアルにおいて，彼は講師であると同程度，学生としてあった．彼は人々から学び，人々は彼から学んだ．彼は，他の人の経験に魅せられていたのである．」[20]

学生たちは，教師であったラファエル・サミュエルとの相互関係を通じて，彼ら自身の劣等感を克服したのであるが，プレスコットによれば，サミュエルは労働者学生たちの劣等感を彼ら自身が理解するにあたって，自己を記述することで他者との議論に開かれたものにすることを促した．学生たちは，歴史的な諸関係のなかにあった生の形式について，他者に理解可能なかたちで記述することによって，自身の劣等感，彼らを「据え置く」社会を理解し，それらを克服しようとしたのである．

「翻訳としての正義」を主張する大川正彦は，正義を求める権利を関係のなかで創造し得るものとして，以下のように述べている．

「人々はすでに＜あいだ＞のなかにある．生を営むうえにおいて，その＜あいだ＞からは逃れようにも逃れることはできない．そのような＜あいだ＞のただなかにあるとはいえ，どこからが自分（あるいは自分の・・・）と言えるもので，どこからが他人（あるいは他人の・・・）といえるものなのかは，まるっきり決まってないわけではない．＜あいだ＞のなかで，相互に依存しつつも，その＜あいだ＞のありかたを定義し，つまり自分（あるいは，自分の・・・）と他人（あるいは，他人の・・・）の境界を定め，そ

[20]Prescott, John, 'Genuine love for others', The Guardian, 11th December, 1996.

して定め直す．そのときに，権利という語彙を使う．使って，<あいだ>のありようの変更，変革，刷新を求めざるをえない．」[21]

このように考えれば，社会的諸関係のなかにある生の形式に関わった労働者学生たちの歴史記述は，自己と他者の「境界を定め，定め直す」ための，「権利」の行使であったと捉えられる．

具体的に，その歴史的な社会的諸関係の一つは，労働者の労働組合，労働運動との関係である．例えば，日雇い樽職人の労働における労働者管理を記述した第４巻のパンフレットでは，職を得るための試験と徒弟制度のありように対し，それらがいかように未組織の若年労働者の誇りを傷つけるものであったか，それらにいかように労働者たちが対処したかが述べられている[22]．また，先に挙げた第６巻の炭坑夫の生活を取り上げたパンフレットでは，組合運動におけるリーダーシップ，専従職員に対する批判が記述され[23]，第１巻のパンフレットでは，労働者たちの連帯が職場にではなく，生活の場，具体的には，未婚の労働者のための寮を単位に存在していたことが叙述されていた[24]．

さらに，パンフレットでは，労働者の国家との関係も記述されている．その例としては，第12巻の，南アフリカからの移民であるエドガー・モヨ（Edgar Moyo）によって執筆されたものがある．そこは，自身の出身地である南アフリカにおける家族制度が英国による植民地化によって，どのように変化したのかが記述されている．

また，そこでは，植民地化に伴った英国国教会の倫理的な影響も記述されているのであるが，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における歴史記述のなかで，必ず言及されているといいうるのは，教会，宗教団体と労働者との関係である．例えば，アラン・ホーキンスによるパンフレット第８巻では，労働者たちの祭事に対し，そこでの飲酒を問題とし，メソジスト，英国国教会によって提唱された「理知的なレクリエーション」としてのスポーツによる馴致が記述されている[25]．

---

[21]大川正彦『正義』岩波書店，1999，86-7.

[22]Gilding, Bob, *The Journeymen Coopers of East London, Workers' Control in an Old London Trade* (History Workshop Pamphlet Number Four), 1971, 28, 49-57.

[23]Douglass, David, op.cit, 1972, 81-5.

[24]McKenna, Frank, *A Glossary of Railwaymen's Talk, A Compendium of Slang Terms Old and New used by Railwaymen* (History Workshop Pamphlet Number One), 1970, 23-7.

[25]Howkins, Alun, *Whitsun in 19th Century Oxfordshire* (History Workshop Pamphlet Number Eight), 1973, 56-8.

また，宗教団体，もしくは国家との関係を含め，とりわけ，労働をめぐるミドル・クラスと労働者の関係を叙述したパンフレットとして，第3巻がある．そこでは，オックスフォード地方における原野のエンクロージャアをめぐる階級闘争が記述されており，とりわけ，熾烈に抵抗した当時の労働者たちの運動における労働者間の分裂，具体的には，「リスペクタブル」な農夫と貧しい農夫の間にあった価値観の違いに端を発する抵抗運動の減退によって，ミドル・クラスに土地を奪われていく労働者の姿が記述されている．

対労働組合，あるいは労働運動，対国家，対宗教団体，対ミドル・クラス，さらには，対労働者といった労働者の社会的諸関係を記述する『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』は，それらとの関係なしで，自律的に存在していた労働者階級を叙述するよりもむしろ，ときにそれらに対峙し，ときにそれらに与しながら存在した労働者，すなわち，それらとの「共生的」な関係のなかにあった労働者の生の形式を記述したのである．

ジョン・プレスコットは，ラファエル・サミュエルの労働者教育に対する態度を以下のように述べている．

> 「ラスキンの創設者は，『労働組合運動から風船を取り除き，それに砂を詰めることによって，それらが革命の役に立たない風船ではなく，安定をもたらす砂袋になること』を求めていた．ラファエルは決してそのように考えなかった．革命を暖かいもので，痛々しいものではないように示した．彼は，労働運動，本当の人々，真の労働者の心と魂を代弁したのである」[26]

ヒストリー・ワークショップの労働者たちが記述した社会的諸関係の「共生」的な性格は，労働組合運動による革命に寄与するものとしてよりもむしろ，労働者の経験に根ざして，ありのままの彼らの姿に関わるものであり，社会的諸関係における対峙のみを強調することが埋没させてしまう労働者の生の形式をすくい出すものとしてあったのである．

2．生活における他者としての女性

他者との「共生的」な関係にある生の形式を記述した『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』は，全13巻中，2巻を除いては男性労働者によって執筆された．彼らによって書かれたパンフレットのいずれにおいても，女性の存在が記述されていることは確か

[26]Prescott, John, *op. cit*, 1996.

である．しかしながら，それらは，今日的な視点からすれば，かなり限定されたものであった．例えば，夜間，共に外出する際には礼儀正しく振る舞うべき未婚女性として[27]，夫の仕事に理解を示す従順な妻として[28]，男性だけの集団に徐々に顕現し始めることによって，その集団の政治性を軟化せしめる存在として[29]，あるいは，争議のなかでの炭坑夫の逮捕に対し，暴力的に抗議した存在として[30]，女性が記述されていた．これらの記述は，あくまで男性労働者の生の形式を捉える眼差しからなされたものであることは疑い得ず，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における「自己」の重視を左証してもいる．同パンフレットにおける男性労働者の記述における女性は，男性労働者の生の形式に関わる記述の外延，すなわち，彼らが経験し得ない他者として存在していたのである．

確かに，労働と生活の統合的把握，労働と生活の場における女性の記述をもって，記述した彼らが今日的なジェンダー視点を踏まえた生の形式を希求していたとすることはできない．しかしながら，男性労働者の生の記述において，女性が確かに存在していたこと自体の価値は，認められるべきである．子どもがストライキに参加することを阻止する，あるいはストライキ崩しの一躍を担った母親として，女性を記述する[31]パンフレットの第 9 巻にもとづく戯曲である第 13 巻では，貧しい暮らしのなかで，夫の暴力に耐え，息子の将来に期待を託す母親が，娘に結婚しないことを約束させる一幕がある[32]．南アフリカの母親のありようについて記述した第 12 巻のパンフレットにおいては，性別によって明確に区分された子どもたちの遊びの内容について，それらが性別による生活と労働における男女の差異を踏まえたものであったこと，とりわけ，女児の遊びが後に母親になるにふさわしい内容を重視していたことが記述されている[33]．これらのことは，ヒストリー・ワークショップにおいて，男性労働者自身が男女間の経験の差異を捉えていたこと，そして，他者である女性もまた，彼女ら自身の生の形式をもつ存在であると理解していたことを示して

---

[27]McKenna, Frank, *op. cit*, 1970, 16-7.
[28]Gilding, Bob, *op. cit*, 1971, 66.
[29]Taylor, John, *From Self-Help to Glamour* (History Workshop Pamphlet Number Seven)., 1972, 62.
[30]Douglass, David, *op. cit*, 1972, 70-1.
[31]Marson, Dave, *Children's Strikes in 1911* (History Workshop Pamphlets Number Nine), 1973, 18-9, 31,
[32]Colville, Billy and Dave Marson, *Fall in and Follow Me, A play about the Children's Strike of 1911*(History Workshop Pamphlets Number Thirteen), 1973, 12-7.
[33]Moyo, Edgar, *Big Mother and LittleMother in Matebeland* (History Workshop Pamphlet Number Twelve), 1973, 30-4.

いる．女性の経験，および彼女らとの関係を切り捨てて，男性労働者が自身の生の形式を記述することも可能であったはずである．しかし，ヒストリー・ワークショップにおける男性労働者の生の形式の記述は，女性の存在を排除せず，固有の生の形式をもつ彼女らとの関係のなかで，自身の生が営まれていることの認識にもとづいていた．

一方で，女性労働者の生の形式を記述したパンフレットにおいては，ヴィクトリア期の価値規範によって，社会的な秩序に抗うものとみなされながらも，自律に関わる当然のこととして，幼児期から成人するまでの農村地域における女性労働が記述されていた[34]．作者のジェニー・キッターリンガム（Jennie Kitteringham）は，社会的な規範に抗って，当時，広範に存在した女性労働について，「社会と時代に固有の，社会全体の秩序が依って立っていた社会的，性的な差異（不平等）の，受け入れられ，期待されていたパターンに対する攻撃，異議申し立てと見なされてきた」と述べている[35]．

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の多くが，労働を男性に，生活を女性に割り当てる規範について，それをありのままに記述していたことは確かである．実際に，広範に存在した女性労働に関わる記述を主たるテーマとして取り上げたパンフレットは，先のキッターリンガムによるもの，1巻のみである．

しかしながら，男女間の経験の差異についての認識がまさに，経験主義的に『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の記述のなかにあることを考えれば，「経験していないことは記述し得ない」という限界がありながらも，生の形式が経験を異にする他者の存在を排除せず，それらとの関係のなかに存在していたことを記述したものとして，同パンフレットの価値は理解され得るように思われるのである．

第3節．生活の記述による尊厳の獲得

1．ありのままの自己に関する記述

ジョン・プレスコットは，労働者自身が歴史的な生活と労働における自己について，他者との対話に開かれたかたちで記述することによって，彼ら自身が自らの「劣等感」の所在を確認し，それを克服し得ると述べていた．まずは，生の形式をありのままに記述することそのものが，「劣等感」の克服，つまりは，尊厳の獲得へと連なるものであった．あり

---

[34]Kitteringham, Jennie, *Country Girls in 19th Century England* (History Workshop Pamphlets Number Eleven), 1973.
[35]ibid, 75.

のままの自己が,記述するべき価値をもつものとは想像さえしていなかった労働者学生は,自身の生の形式の記述可能性を認識することによって，尊厳を獲得したのである.

さらに，自身の生の形式として，自己に固執しないことによる尊厳の獲得もあった．前項で検討したように，労働者学生たちが記述した生の形式は，他者との関係のなかに存在していたものであり，プレスコットの言う「劣等感」もまた，それを他者に開くことで理解され．克服されるものであった．パンフレットの第５巻において，スタン・シップリー（Stan Shipley）は，労働者たちの社会主義が知識を求める労働者クラブに端を発し，当初，世俗的な科学的知識の追求を行なっていたクラブが政治的志向を増すなかで組織された団体の影響によって，労働者に拡大していった経緯を明らかにした．シップリーは，とりわけ，労働者による社会主義の由来がミドル・クラスにないこと，それらが労働者によって，自律的に展開されるなかで，様々な労働者の興味，関心に配慮し，女性の市民権を求める運動と連帯したことがあったとも述べていた[36]．労働者にとっての尊厳は，生活と労働の場における自己と他者との関係のなかで獲得されたのである．他者との関係のなかで奪われた尊厳はまた，他者との関係のなかで獲得され得るものであるように思われる.

ありのままの労働者，労働者の生の形式として，他者とともにあることを記述しただけでは，先にも述べたように，男女間の非対称な関係を問題として認識したことにはならない．しかし，生の形式の記述のなかに，確かに他者が書き込まれていたことによって，その記述は他者の尊厳を奪うものではなかったと考えることができる．確かに，労働者学生たちの歴史記述においては，男女間の経験の差異が多く記述されていたが，その差異の是非を主張することはなかった．しかし，歴史における女性の存在が不可視であった 1970 年代当時，歴史のなかに確かに女性が存在していたことを記述したことは，他者の尊厳をも求めようとするものであったと考えられるのである．このことから，他者とともにある自身の生の形式の記述可能性を認識することによって，獲得された労働者学生たちの尊厳はまた，他者の尊厳を奪わないことをも条件としていたと考える.

２．歴史記述における自己の価値

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生たちの歴史記述に対し，それらの歴史的な価値に関わる疑問が付されることが多い．先に述べたように，「重

[36]Shipley, Stan, *Club Life and Socialism in Mid-Victorian London* (History Workshop Pamphlets Number Five), 1971, 46-7, 54-5.

要な問題や特徴と，さして重要ではないそれらを分別することに対して，消極的」であると批評されていた．この批評は，歴史と自己，その労働と生活の関連を問うものである．すなわち，歴史は自己にとって，自身を代弁するものなのか，単なる投影の対象に過ぎないのか，歴史はどのように自己による変更可能性をもつものなのか，といった歴史認識に関わる問いである．

この問いについては，「重要」なものとそうでないものとの境界を捉える眼差しが，学問としての歴史に内在的なものであることによって，その限界を指摘されるべきである．ヒストリー・ワークショップはそもそも，学問の世界における「歴史」と呼ばれていたものに対する批判から始まり，研究と教育を学習者の経験にもとづいて，統合しようとする活動であった．したがって，旧来の学問の場における眼差しから，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生たちの歴史記述を捉えることは困難である．

1911年における子どもたちのストライキを取り上げたパンフレットの第9巻は，当時の新聞記事における子どもたちのストライキに関わる記録を整理し，貧しい労働者階級の子どもたちの教育経験，とりわけ，教師たちの彼らに対する差別的な待遇が，その尊厳を奪うものであったこと，具体的には，当時，貧しい労働者階級の子どものみを対象に，教師によって衛生検査が行なわれていたことを挙げ，それに対する反抗として，子どもたちが独自性と自立を示すためのストライキを行なったことを記述した．著者のデイビッド・マーソン（David Marson）は，そのパンフレットの末尾において，「子どもたちは，息詰まるような学校経験にも関わらず，彼らの精神が灰色一色の教室に埋め尽くされてはいないことを示した．彼らはまだ，色彩豊かな絵の具のようなアイディアを生み出す想像力を保持していたのである」と述べた[37]．

労働者たちの尊厳を奪う教育のありようは，まさに，ヒストリー・ワークショップが活動を開始する際に問題としたものであった．労働者教育のありように対する異議申し立てとして始められたヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の歴史記述はまた，「色彩豊かな絵の具のようなアイディアを生み出す想像力」にもとづく，生の形式の記述であったと捉えられる．この想像力に対し，「学問的」評価を下す眼差しは，自己の経験の言説化としての歴史，そこでの「記憶の聖なる次元」[38]，あるいはより政治的に「イマジナリ

---

[37]Marson, Dave, *op. cit*, 1973, 35.

[38]細見和之は，「現在と未来のための記憶という観点からはおよそ意味をなさない」，「どのような『教訓』もそこから引き出すことは不可能」な細部について，それにもかかわらず，

ーな領域」[39]を掴み損ねている.

そもそも，何を歴史として承認するか，といった歴史認識に関わる議論において，どのような定説も存在しているわけではない．それが，「記憶の聖なる次元」のように個人の印象を重視するものであれ，「イマジナリーな領域」のように個人の生のありように対する権力の侵蝕を非難するものであれ，歴史のもつ意味は個人と集団の閾をさまよう．このような歴史認識をめぐる論争的な状況は，ヒストリー・ワークショップが発足した1960年代後半から今日まで継続しており，このことに対して，教育，学習の成果としての全13巻のパンフレットは，個と集団の閾にとどまりながら，歴史的事実とは，生活と労働における自己，および自己としての労働と生活，すなわち，生の形式の記述であることを具体的に提示し，記述した労働者学生たちに尊厳をもたらすものであった.

3．非匿名性の追及と匿名性の保持

「学問」的評価に抗い，労働と生活を自己のもとで連結させ，他者とともにある生の形式に関わる歴史記述を企図した『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』は，当時の「歴史」によって等閑視されてきた労働者の生活と労働の場における経験の匿名性を解消するものであった．ヒストリー・ワークショップは，それまでの労働者に関わる歴史が，労働組合，労働運動に労働者の全てを代表させ，労働者個々，労働者の自己を匿名化してきたことを批判し，労働者の生の形式の非匿名性，個別具体性を明らかにする歴史記述を行なった．つまりは，労働者の生の形式についての非匿名性の追及を成したと換言しえる.

しかしながら，一方では，従来の「学問」としての歴史による，生の形式をめぐる個別具体性の消去，その意味での生の形式の匿名性までをも批判したわけではなかった．そもそも，生活と労働の場における自己は，歴史記述の対象として，その個別具体性をすべか

「これは大事な証言だという印象が，聞く者，観る者には抑えがたく湧いてくる」ことの理由について，「記憶の聖なる次元」，あるいは「現在の観点から都合よく過去を表象することをぼくらに禁じる，記憶の形而上学的な次元」が否定しがたく存在しているからだと述べている（細見，前出，132-3).

[39]ドゥルシラ・コーネル(石岡良治他訳)『自由のハートで』状況出版，2001（=Cornell, Drucilla, *At the Heart of Freedom*, Princeton University Press, 1998).「イマジナリーな領域という理念の核心部には，私たち自身を性化された存在（sexed being)，感性と理性を働かせる存在として想像する自由があ」り，「この領域がなければ，私たちは生の栄光を分かち合うことができない」(6) と述べ，さらに，「心（heart）の問題について深く思い悩んでいる性化された生き物としての私たちが，自ら誰であるかを判定し，表象することが許される心的・道徳空間なのである」(8) と言う.

らく明かし尽くすことができないものであるという意味で，さらなる匿名性を生み出し得るものである．さらに，彼らもまた，歴史記述という形式のもとで，私的領域としての生活をより広い文脈において理解し，記述しようとした限りで，従来の歴史を捉える眼差しがもつ抽象化，および，一般化を支持する結果になった．実際に，ヒストリー・ワークショップの理論的支柱を担ったラファエル・サミュエルは，学問としての歴史そのものを否定することはなかった．ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生たちの歴史記述は，生活と労働における自己の追及でありながらも，あくまで歴史記述，過去の労働者の生活と労働の場における経験を記述したものであることによって，先の「記憶の聖なる次元」を含む，生の形式の匿名性を保持したのである．

この，一面，匿名性を保持しつつ，他面で個別具体性，非匿名性を追及するかたちで不可視なものを顕現させる歴史記述こそが，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の形式であった．この形式によってこそ，労働者学生たちは尊厳を獲得し得たように思われる．生の形式をめぐる匿名性を克服しつつも，記述しない，語らないことで匿名性を保持することによって，守られる尊厳が存在し得る．歴史的な記述を行なうことは，非匿名化されるべき生と，匿名化されるべき生を定める自己を現出させる選択行為に他ならないのであるから，問われるべきは，歴史記述における匿名化と非匿名化の境を決定する自己の眼差しである．

そもそも，生の形式を自己の名のもとに記述することが，どこまで可能であるのか，という問いが成立し得る．記述しないこと，記述し得ないこと，あるいは，記述するべきでないことというかたちで，生の形式の記述が自己に関わっている限りで，制限されることは想像に難くない．このことは，生活と労働の場における経験を自己のもとで記述することそれ自身が，限界をもつことを示している．ヒストリー・ワークショップにおいて，「自己」として名指されないものは記述され得ないのである．

しかしながら，自己の全てを記述し尽くすことが，尊厳を得るために不可欠な条件ではないはずである．語ることで奪われる尊厳の可能性を否定することはできず，過去に縛られることなく，自由に現在を志向する積極的なヒストリー・ワークショップの歴史，自己の記述は，脅迫的に過去を語り尽くさねばならない，あるいは，全ての証言を意味あるものになさねばならないといった記述とは異なる．その限りで，記述する内容は記述する自己に一任されている．

何を語り，何を語らないかの選択は，過去をめぐる証言がトラウマティックなものであ

る場合には，いっそう困難なものになり得る．「心身の動揺を伴い，再トラウマ化を誘発するような過去の生き直し」としての「行動化」と，「過去を想起するさいにぶつかる『抵抗』」の克服を目指しながらも，反復強迫の発現を有用なものにするものとしての「徹底操作」といった精神分析の概念を用いて，記憶の言説化によるトラウマティックな過去の「徹底操作」の獲得における「行動化」について，高橋哲哉は「徹底操作のためには，『破壊的な』再トラウマ化を避けるという条件のもとで，すなわち語り手の安全に配慮した『特定の領域内』で，トラウマ的過去に直面し，行動化するというプロセスを省くわけにはいかない」と述べている[40]．高橋がここで述べる具体的なトラウマ的過去とは，ナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅収容所における経験であり，生そのものと生の形式の関連に関わって述べたように，その経験の個別具体性を一般化することは容易ではない．しかしながら，ラスキン・カレッジの労働者学生たちが共有していたそれまでの教育経験によってもたらされた劣等感，入学後に経験したそれまでの生活からの断絶，さらにはラスキン・カレッジ，あるいは学問としての歴史から排除されてきた自己は，「徹底操作」を求めるものであったと捉えることができる．

『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における労働者学生の歴史記述は，ヒストリー・ワークショップにおいて，生活と労働の場における経験についての自己の言語化不可能性を担保とし，他者とともにある自己にもとづく記憶の「行動化」として捉えることができる．そのことによって，「徹底操作」，いわば，尊厳を獲得する学習と成り得たのである．

第4節　尊厳の獲得を保障する無限の労働者教育

本章は，1966年，ラスキン・カレッジで発足したヒストリー・ワークショップが，1970年から1974年にかけて，労働者学生による学習の成果として刊行した『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における歴史記述を対象に，それらが，労働者学生自身にとって，どのように尊厳をもたらすものであったのかを明らかにした．

労働者を対象とする従来の歴史が明らかにしてこなかった労働者の生活，および，労働に着目し，それらを労働者学生の自己との関連のもとで記述された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』は，歴史研究の眼差しからは，些末な事象をも取り上げること

[40]高橋哲哉「トラウマと歴史　アブラハム・ボンバの沈黙について」『証言のポリティクス』未来社，2004，60．

によって，歴史的事実の把握から逃避しているともみなされた．そのような批判の基盤にある「歴史的事実」に対峙するものとしてあった同パンフレットは，まずは，歴史を記述する労働者学生個々が，直接的，間接的に，歴史記述に値する自己を発見するものとしてあった．労働者によって経験される生活と労働について，自己にもとづいて明らかにするという意味で，同パンフレットの歴史記述の内容は，自己の別名としての生活，生の形式を記述するものであった．

その生の形式の内実は，労働組合，英国国教会，ミドル・クラス，国家との，ときに対峙し，ときに与する関係，すなわち，「共生的」な関係のなかにあったのであり，さらに，それら社会的諸関係における「共生的」性格は，自己と他者としての女性との関係のなかにも書き込まれていた．男性労働者による『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』においては，他者としての女性を排除せず，彼女らの経験とそれとの差異，および，彼女らとともにある自己の生の形式が記述されていた．すなわち，自己の生の形式として記述されながらも，自己がどこまでも徹底されたのではなく，固有の生の形式をもつ他者とともにある生が記述されたのである．

この労働者学生による歴史記述が，いかように彼らの尊厳の獲得を促すものであったのかについて，まずは，他者とともにある自己の生の形式について，他者との対話が可能なかたちで記述することそのものが，彼らの尊厳の獲得に帰結するものであったことを述べた．ラスキン・カレッジに入学する労働者学生は，『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』の歴史記述を通じて，社会によって据え置かれているのだという意識を言語化し，それを他者に開くことによって，他者との関係のなかで尊厳を獲得したのである．他者との関係のなかで奪われた尊厳はまた，他者との関係のうちで獲得されるものである．

さらに，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の記述が，それまでの歴史的な事実を把捉する眼差しに対するオルタナティブとしてあったことによる尊厳の獲得も存在した．歴史という学問領域において，ありのままの自己の生の形式が示す価値を認識することによって，労働者学生は自身の尊厳を獲得したと考えられる[41]．

---

[41]矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界　「物語ること」の教育学』世織書房，2003．同書は，物語る存在として人間を捉え，その物語る行為によって人間が形成されることを捉える教育学研究のありようを提示している．なかでも，編者である鳶野克己は，自己を物語ることによって，「生きることの意味の生成と変容へ向けて絶えず私たちの生き方を開く力」が獲得されると述べている（鳶野「生の冒険としての語り−物語のもう一つの扉—」矢野・鳶野編，前出，2003，197）．

確かに，自己の生の形式が完全な記述可能性をもたないことも事実である．歴史記述，とりわけ，自己に関わる記述は，自己を記述する，すなわち，自己を非匿名化しようとする限りにおいて，記述しない，記述できない，あるいは記述すべきでない自己を生み出しもする．その記述は，非匿名化しながら，一方で，匿名化する過程となりえる．しかしながら，この記述可能性と不可能性の境界を定める眼差しが，生活と労働をめぐる自己に一任されていることによって，尊厳の獲得が保障されているように思われる．

そしてその眼差しは常なる刷新を求めるものである．トラウマ的過去の「行動化」と「徹底操作」について述べるなかで，高橋哲哉はまた，「徹底操作はトラウマ的な過去の完全な克服を保証しない」，「トラウマ的過去の『清算』や『克服』や『全面的支配』といった観念は幻想にすぎない」，「トラウマ的過去の回帰は完全には制御不可能なのだが，それが回帰するかぎり，徹底操作の努力で対抗しなければならないのである」[42]とも述べている．尊厳の獲得も，常に完全なものでなく，刷新を要するものであると考えられる．

記述する，あるいは語るという全ての行為に対し，何らかの価値あるものを証立てることが求められるような，言語論と証言論を結合させる強迫的な論理はあまりにも息苦しい．記述すること，語ることは，より自由な思考であるとすることが可能なはずであり，記述しないこと，語らないこともまた，自由な思考を保障するために承認されるべきである．ハンナ・アーレント（Hanna Arendt）は，思考の活動様式を以下のように説明する．

> 「敵対する二つの力はともに起源が限定されない．過去の力は無限の過去から，未来の力は無限の未来から到来する．二つの力の始まりは不可知である．とはいえ，二つの力が衝突する点をともに末端とする．逆に，対角線の力は敵対する力の衝突をその始点とするため，その起源は限定されている．しかし，対角線の力は起源が限定されない二つの力の合成作用から生じるゆえ，その終点は無限となる．」[43]

過去と未来の間にある現在の思考は無限である．価値のないものと見なされてきた労働者の生活と労働の場における自己が，ヒストリー・ワークショップにおいては，紛れもなく，現在を形作っているものであることに気づかれ，ありのままの自己の生の形式を自由

---

[42]高橋，前出，2004，61，62.

[43]ハンナ・アーレント『過去と未来の間—政治思想への８試論』みすず書房，1994(=Arendt, Hannah, *Between Past and Future, Eight Exercises in Political Thought*, New and Enlarged Edition, Viking Press, 1968)，12-3.

に記述すること，自由に記述しないことで，先に述べた息苦しさを逃れることこそが，据え置かれた人々が尊厳を獲得する一つの方途であったように思われる．ありのままの自己を記述しないこともまた，ありのままの自己のうちにあったのである．

尊厳とは何かを問うとき，証言することの拒否によって，尊厳を保障することの価値は捨象されるべきではない．証言することによって，外皮を奪われ，剥き出しにされる生活と労働の場における自己を想定することは，確固として揺らがない個の形式，生の形式に捕われたものでもある．それらを語りながら，語り得ないことを自己のうちに保持したままで獲得される尊厳のありようを，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の歴史記述は示した．

終章　他者に開かれた労働者教育論の展開に向けて

本章では，序章で挙げた本論文の三つの課題，すなわち，ラスキン会議における議論の内実，ラスキン会議とヒストリー・ワークショップの関連，および，ヒストリー・ワークショップとラスキン・カレッジの関連に対して，本論文がどのように応えたのかを考察し，さらに，ヒストリー・ワークショップの1970年代の展開から得られるジェンダー視点を導入した労働者教育論への示唆を検討する．

第1節　本研究課題についての考察

本論が対象とした1970年代におけるラスキン・カレッジ（Ruskin College）における労働者の学習としてのヒストリー・ワークショップ(History Workshop)は，あくまで，同カレッジにおける正課のカリキュラム外で行われ，むしろ，正課の教育に対する批判として始められた経緯をもつものであった．1966年，学内の労働者学生を対象にしたセミナーに端を発したヒストリー・ワークショップの活動は，ラスキン・カレッジにおける1979年の全国大会を最後に同カレッジから英国全土に舞台を移して展開され，今日においては，1976年に発刊された『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル（History Workshop Journal)』の発行を主たる活動内容としている．ヒストリー・ワークショップの活動の形態における変化について，「叙述と歴史という象牙の塔」へと還るものだと批判されながらも，ラファエル・サミュエル(Raphael Samuel)を理論的支柱として展開された同ワークショップの草創期にあった理念と情熱へと常に立ち返るように，歴史家自身の心がけが求められてもいる[1]．

本論文のための英国における調査は，第3章のための英国初の全国女性解放会議(ラスキン会議，the Ruskin Conference)の一次資料収集から始め，そのなかで，ヒストリー・ワークショップ，ラファエル・サミュエル，英国における社会史，オーラル・ヒストリーに関わる調査へと展開した．

なお，前章までの各章の初出は以下の通りである．

---

[1]Russell, Dave, 'Middle Eight, Raphael Samuel, History Workshop and the value of democratic scholarship', *Popular Music*, Vol.16, Issue 2, 1997.

第１章　ラスキン・カレッジにおける教育と学習の乖離

「ラスキン・カレッジのカリキュラムおよび試験制度への学生の関与—1960 年代の Affluent Workers 論への対抗的価値—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第 14 巻第２号, 2007.

第３章　フェミニズムとヒストリー・ワークショップの対話

「英国における第二波フェミニズムの起点—ラスキン会議における男女平等賃金をめぐって-」『女性学』(日本女性学会学会誌) Vol. 14, 2007.

第４章　ラファエル・サミュエルによる労働者教育としての歴史

「ラスキン・カレッジにおける 1970 年代のヒストリー・ワークショップ-ラファエル・サミュエルによる男女に開かれた労働者教育の視点—」『日本社会教育学会紀要』No. 43, 2007.

また，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の学習の成果として発行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット(History Workshop Pamphlets)』(全 13 巻) を手がかりに，ヒストリー・ワークショップにおける労働者の歴史記述の特徴と意義を明らかにした第５章，第６章，および第７章の調査に際して，財団法人東海ジェンダー研究所から個人研究助成を受けた.

これらの調査結果をもとにした本論文では，序章で述べたように，三つの課題を設定した．それらに対し，本論文は以下のような結論を得た.

第一の課題であるラスキン会議，英国初の全国女性解放会議における議論の内実については，同会議が開催された 1970 年に平等賃金法が議会を通過したことから，同法の意義と問題点を中心として，労働の場における性差別を問題としながらも，家庭を中心とする生活の場における問題とともに，それらを尊厳のもとで統合する議論が展開されていたことを明らかにした．ラスキン会議では，英国各地で個別に行われていた女性運動団体が集結し，立つ位置の違いゆえに統一した見解のようなものが発表されたわけではなかったが，同会議は女性が自身の尊厳を求める運動を展開するうえでの第一歩としてあった.

その会議の開催に結びついていたとされるヒストリー・ワークショップについて，同会議との関連の内実を明らかにすることが第二の課題であった．確かに，1969 年秋のヒストリー・ワークショプの会合における女性史に対する軽視を理由のひとつとして，開催され

たラスキン会議ではあったが，同ワークショップが掲げた「下からの歴史」という理念，および労働経験のみならず，生活の場における経験に関わった歴史記述を通じて，ありのままの自己を承認していくことの意義に依拠して，ラスキン会議は開催された．ラスキン会議とヒストリー・ワークショップの関連には積極的な側面があったのである．

そして，最後の課題は，このヒストリー・ワークショップがなぜラスキン・カレッジで開催されたのか，というものであった．ヒストリー・ワークショップは，そもそも，労働者のためにあったはずのラスキン・カレッジが，労働者学生の経験に十分配慮せず，彼らが経験する労働と生活を分割し，さらに，彼らの教育経験に即してみれば，かなりの苦役となりうる試験を課していたことに対する批判として始められた．ヒストリー・ワークショップは，労働者学生たちの労働と生活の場における彼らの経験の全体にもとづく「教育のオルタナティブ」を展開することによって，労働者の尊厳の獲得を目指すものであった．

以下では，上記の課題に対する考察を通じて明らかになったことにもとづいて，ラスキン・カレッジの 1970 年代における労働者の学習が示した労働者教育論におけるジェンダー視点の導入についての意義を述べる．

第２節　学習者の経験としての労働と生活の分割不可能性

本論文が対象としたラスキン・カレッジの 1970 年代は，「豊かな労働者」論争における伝統的労働者階級文化の解体，革新勢力の衰退，労働者の「ミドル・クラス化」といった言説が英国社会に溢れ，「豊かさ」と「寛容」の気風が醸成した私生活中心主義がまた，家族を分節不可能な最低限の単位とするエートスを生み，実際の労働の意味に関わらず，結果として，労働と生活の峻別が指摘された時代であった．

この状況に対して，第１章で述べたように，ラスキン・カレッジにおける教育の再編，すなわち，学生たちの労働経験，および労働組合，労働運動の価値に教育の内容と方法をより近づけるべく設置した労働学ディプロマ・コースの設置は，当時のカレッジ当局が主導して行なったものであり，学生側の意見を反映したものでは必ずしもなかった．むしろ，学生たちが主導したのは単位認定のための試験制度の改編であった．学生たちは，ラスキン・カレッジで提供される教育内容に労働の視点を導入することに異論はなかったものの，彼らの生活経験，および，教育経験に考慮した教育のありように異議を唱えていた．ときの労働者階級の変化への対抗的価値として，ラスキン・カレッジ当局，あるいは，労働組合運動が企図した労働に関わる専門的知識をもった労働者の育成は，実際にラスキン・カ

レッジの学習者たちが教育として求めていたものとは異なっていたのである.

学生たちが経験している労働は，それのみを取り出して教育，あるいは学習の対象とし得るようなものではなく，生活との間に分割不可能性を帯びて存在するものであった．この労働と生活の分割不可能性をめぐって，当時のラスキン・カレッジ当局と労働者学生の認識，つまりは，教育と学習が乖離していたのである．ラスキン・カレッジの労働者学生たちの認識は，労働と生活の分割不可能性にもとづく教育の希求というかたちで，「豊かな労働者」論における労働と生活の峻別に対し，対抗的価値を示した.

第2章で述べたように，ヒストリー・ワークショップは，労働者教育と歴史研究を労働者の視点から改編するための試みであった．同ワークショップの活動は，経験を捉える英国における社会史の展開のなかから生まれたものであると同時に，当時のラスキン・カレッジにおける教育と学習の乖離，すなわち，労働者学生の教育に対する要求や経験に対する配慮の欠如を問題とするものであった．ラスキン・カレッジ当局が対象化しない労働者学生たちの経験，すなわち，労働と生活の分割不可能性にもとづいて，教育のオルタナティブを示すこととともに，歴史における知の再構成をはかることが目指されたのである.

この理念を受け，実際のヒストリー・ワークショップの活動では，労働者学生たち自身の経験にもとづく歴史が記述され，その記述に当たっては，文書史料の発見，読解に加え，オーラル・メソッドの採用が促進された．労働者学生自身の経験のなかから調査の対象を選択することに加え，その多くが文書として残されていない歴史であったことと，オーラルな証拠を提供できる施設や人々にアクセスするうえで，労働者学生たちが優位な立場にあったことに依拠した研究方法の採用は，ヒストリー・ワークショップにおける労働者学生の学習を彼らの生活，および経験により近づけるものであった．労働者の経験を中心に置くという理念は，具体的な学習の内容と方法においても一貫されたのである.

これらヒストリー・ワークショップの活動理念，内容，および方法を通じて，同ワークショップは，カレッジ当局が配慮しなかった労働者学生たちの労働と生活の場における経験，すなわち，労働と生活の分割不可能性をすくい上げたのである.

これまでのラスキン・カレッジに関わる研究は，20 世紀冒頭における学生たちのストライキに着目し，その階級性の喪失を明らかにするものか，あるいは，1960 年代後半における労働学ディプロマ・コースの設立を労働と教育の結合として意義づけ，労働者の経験に即した教育機会を提供する寄宿制カレッジとしての側面に着目するものであった．学生たちのストライキ，および，労働学ディプロマ・コースの設立そのものの意義は否定される

べきものではない．しかしながら，学習者の経験を中心にすることによって明らかになった労働と生活の分割不可能性にもとづく生活と教育の結合，あるいは，ヒストリー・ワークショップの活動の価値は，ラスキン・カレッジのみならず，英国における寄宿制カレッジを対象とする従来の研究の視角からは不可視なものであった．従前の研究では，フォーマルな形態で存在するカリキュラムにもとづく教育活動，および，市民性と階級性の相克のみをラスキン・カレッジにおける労働者学生たちの学習と捉えることによって，ヒストリー・ワークショップの教育，および，学習の意義を十分に明らかにしてこなかったのである．

ヒストリー・ワークショップの活動は，教育と研究の中心に学習，学習者の経験を位置づけ，労働者の労働と生活の分割不可能性に視点を当てることによって，それまでの歴史や教育をめぐる知の再構成を行うものとしての意義をもつものであった．このことによって，労働者教育における学習者が労働者であることをもって，労働に関わる経験のみを教育内容とすることが，学習者の学習要求と常に一致するとは限らないことが示されたと考える．学習者たちが求めたものは，労働経験よりもむしろ，労働経験と密接に結びついている彼らの教育経験，および生活経験に対する配慮であった．つまり，学習者の生活全体，労働と生活の分割不可能性を捉える労働者教育のありようであったといえよう．

ジェンダー視点を踏まえた労働者教育論を考える際，労働者が経験する労働と生活の分割不可能性は等閑視できない．労働を男性に，生活を女性に配分する性別役割分業規範のもとで，男女は労働と生活を異なるかたちで経験している．だとすれば，労働の場における経験のみを取りあげて，労働者教育を展開することは自ずと男性労働者教育に帰結する．しかしながら，男性労働者もまた，労働経験のみならず，生活経験をもつ存在である．一方で，女性労働者は男性労働者の労働経験のみを取りあげる労働者教育から排除されてしまう．しかし，労働と生活の場を男女は「共生的」に経験している．ジェンダー視点を導入した労働者教育論は，まずは学習者が経験している労働と生活の分割不可能性を基盤として，男性労働者の生活経験，女性労働者の経験に考慮することで始められるものであるように思われる．このことによって，労働者教育論における「労働者」の内実を，単なる賃労働者から，働き，生きる男女へと拡大し得ると考える．

第３節　教育のアポリアに対する受動性という物語り

ヒストリー・ワークショップは、労働者の経験に根ざした労働と生活の分割不可能性を

対抗的価値として，ときの高等教育に存在していた階級関係の打開，および「下からの歴史」の究明を目指した．しかしながら，労働と生活の分割不可能性，および，その不可能性を生きる存在についての検討が不十分であった．その不十分さゆえに，市民，および労働者階級，あるいは「下」は，実際には男性労働者を指していたのである．

ヒストリー・ワークショップのこの点を問題とし，是正を求める動きは，女性労働者の視点からそれまでの歴史を捉え直そうとすることによって現れた．第3章で述べたように，英国初の全国女性解放会議であるラスキン会議の開催に帰結するこの動きは，ヒストリー・ワークショップの理念を継承しつつ，そこでの女性の視点の不在を問題としていた．教育，あるいは研究をより労働者階級の視点に近づけること，そのことによる知の再構成を企図して始められたヒストリー・ワークショップの活動が，男性労働者中心，男性労働者が経験する生活の視点からのみ展開されていたことに対する異議申し立てとして，ラスキン会議は開催された．ラスキン会議の開催を通じて，ヒストリー・ワークショップが理念として企図していたものがまた，女性労働者の視点からすれば，労働と生活を峻別するものとしてあることが発見されたのである．

ラスキン会議の運営側の予想を遥かに上回る参加者を得て開催されたラスキン会議では，さまざまな見解をもつ女性たちの間で対立があった．同会議が開催された1970年は平等賃金法が議会を通過した年に当たり，平等賃金をめぐる議論が激しく行われた．その議論の末に一定の結論が得られたわけではなかったが，平等賃金をめぐる報告をおこなった社会主義フェミニストのグループは，女性が経験する労働と生活の場双方における性差別の状況を人間の尊厳（dignity）のもとで統合的に理解したうえで，平等賃金要求を行った．ラスキン会議では，労働を単に経済的営為，外的報酬としての賃金を得る手段とみなしたのではなく，また，生活の場における性差別を等閑視することもなく，それらの全体を捉え，差別是正の要求を尊厳の獲得として行なうことによって，労働の意味を捉え直す議論が展開されたのである．

確かに，ラスキン会議の開催は，先に述べたように，ヒストリー・ワークショップが依拠した労働者の経験における労働と分割不可能な「生活」が，実際には，男性労働者のものであり，「下からの歴史」におけるその「下」がまた，階級社会で据え置かれた労働者階級の男性を意味するものであることによっていた．しかしながら，労働と生活の分割不可能性を尊厳のもとで要求することは，理念としてのヒストリー・ワークショップから導きだされたものであったことも確かであったと考える．

第4章で述べたように，このラスキン会議における労働と生活を捉える視点は，ヒストリー・ワークショップの発起人であるラファエル・サミュエルの労働者階級を歴史的に捉える視点と重なるものであった．サミュエルは，歴史をめぐる研究と教育における学習者の生きられた経験の意義を強調し，労働者学生たちが自身の生きている社会とそこでの自分自身を理解することによって，彼らが尊厳を獲得するような歴史学習の組織化を目指した．

サミュエルは資本による階級関係の規定を相対化し，性別にもとづく分業のありようを歴史化するなかで，労働と生活の双方を担う労働者階級の男女を具体的に記述した．このことは，それまでのミドル・クラスを中心とする歴史，あるいは組織化された労働者のみの歴史，いわゆる労働組合運動史に対する批判を含意していた．労働者を捉えるサミュエルの視点は，労働者が経験する労働と生活のアンサンブルをありのままに理解し，記述することによって，労働者の生を断片化することを否定し，労働者が自律的に生を営む存在であることを示すものであった．

この視点はサミュエルの実際の労働者教育の視点としてもあった．組織化された経験よりもむしろ，個人的な経験にもとづく労働と生活を記述するように促すサミュエルの歴史教育は，学習者中心主義の特徴をもち，学習者のあらゆる経験に対する受動的な態度をもって展開された．この歴史記述としての労働者教育は，労働者の普遍的な解放を掲げるよりもむしろ，ありのままの労働者の経験に教育者自らを開くことによって，労働者学生たち自身がありのままの自己を承認し，彼らの尊厳の獲得を目指すものであった．

教育者を「共同探求者」，あるいは「共同学習者」とすることだけで，教育の場における教育者と学習者の権威的な関係が解消されるとするのはあまりに楽観的過ぎる．そのような言説は，規範は示しても，自律を強制するという教育のアポリアを打開する方途を示すことはない．そのようであればこそ，一時的ではあれ，とり得る具体的な方途は学習者の経験に対する受動性であるように思われる．政治的実践としての具体性の欠如を指摘されもしたラファエル・サミュエルの歴史記述が，積極的な分析よりもむしろ記述を重視することによって，労働者のありのままの経験に焦点を置くことの根幹には，サミュエルの労働者たちの経験に対する受動性があった．サミュエルの受動性は消極的なものではなく，労働者学生たちの尊厳の獲得を目指すヒストリー・ワークショップの教育者の物語りとしてあった．受動性というサミュエルの「物語り」は，労働者学生たちの尊厳の獲得を目指し，彼らに自己を物語ることを促すものであった．

ジェンダー視点，フェミニズムを取り入れた教育学として，欧米を中心に議論されているフェミニスト教育学が，昨今，本邦にも紹介されている[2]．そのフェミニスト教育学の枠組みに対し，パウロ・フレイレ（Paulo Freire）の『被抑圧者の教育学』は大きな影響力をもったと言われる[3]．フレイレの教育学の拡充としてのフェミニスト教育学の意義について，キャサリン・ワイラー（Kathleen Weiler）は，第一に，フレイレが触れていない「教師自身の人種，ジェンダー，そして彼らが置かれた歴史的文脈と社会制度の中で教師として享受するさまざまな権力」，教師の権威について再考すること，第二に，フレイレが経験への問いが帰結する知と真理をあらかじめ設定していたのに対し，普遍的，超越的な知と真理を否定すること，このことに関わって，第三には，有色人女性，ポストモダン・フェミニスト，同性愛者によって指摘されたアイデンティティ形成の複雑さを受け，個人的な経験における差異に配慮すること，以上三点を指摘している[4]．フェミニスト教育学は，教育の権威，および普遍的な知の否定，学習者間の差異への配慮を特徴として展開されている．

ジェンダー視点を導入する教育学研究は，男女間の差異を取りあげるだけでは十分でな

---

[2]成人教育研究の分野で，欧米のフェミニスト教育学に着目し，それを検討している入江直子は，同教育学による示唆として，（1）「学習者としての女性」の主体化を課題とするならば，社会的な権力構造のなかで育ってきた「女性としての」経験を自ら意味づける「女性の学習ニーズ」という認識が求められること，（2）学習者間そして教師・学習者間の平等な関係を展望しようとするならば，個々人の中の，そして個々人の間の複合的な抑圧状況における力関係を認識できる視点の形成が求められること，（3）教師の立場にある者が学習者との具体的な状況における自らの権力と権威を自覚して学習プロセスに関わることで，学習者が力関係を認識し変革する経験をつくり出す具体的なプロセスを展望することができること，に整理している（入江直子「フェミニズム教育学」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために　欧米の成人教育理論　生涯学習の理論と方法』世界思想社，2004，84）．

[3]ブラック・フェミニストとして，フェミニズムにおける白人中心主義を批判したベル・フックスは，教育実践としてのフェミニズムを論じた著作，『とびこえよ，その囲いを　自由の実践としてのフェミニズム教育』（里見実監訳，新水社，2006．＝hooks, bell, *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*, Routledge, 1994）において，「フレイレの著作や思想と，フェミニズム教育学の著作との間にはっきりと一線を画すようなフェミニズム思想家とはちがって，わたしにとっては，こうしたふたつの体験は重なり合うものだった．わたしはフェミニズム教育学に深く関わっていたから，まるでタペストリーを織るみたいに，フレイレの著作から糸を手繰り，それを，物書きとしてまた教師としてのわたしの書くものが体現していると信じていたフェミニズム教育学の縦糸に織り込んでいった」（63）と述べている．

[4]Weiler, Kathleen（沓澤清美訳）「パウロ・フレイレと『差異』のフェミニスト教育学」『日米女性ジャーナル』No. 27, 2000（＝Weiler, Kathleen, 'Freire and a Feminist Pedagogy of Difference', *Harvard Education Review*, Vol. 61, no. 4, November, 1991），115-26.

いだろう．確かに，学習者の自己は多様である．しかし，普遍的な知を否定し，学習者間の差異を強調することによって，ともすれば，これまでのフェミニズム，女性学の知の蓄積を否定することもあり得，フェミニスト教育学が問題とする教育者の権威，「歴史的文脈と社会制度の中で教師として享受するさまざまな権力」をどのように問題とし得るのかについての疑問が残る．

ジェンダー視点を導入した労働者教育は，ラファエル・サミュエルがヒストリー・ワークショップで示したような，労働と生活の分割不可能性に根ざし，そこでの学習者の多様なありように対する教育者の受動性をもとにして展開されるように思われる．さらに，この受動性を教育者の「物語り」にとどめず，学習者間の関係，そして，学習される対象と学習者の関係を捉える視点へと拡大することによって，それらの関係の多様性を奪うものを対象化することが可能になると考える．

第４節　尊厳の獲得のための他者への開放

サミュエルの歴史教育としてのヒストリー・ワークショップのなかで，労働者学生たちは，第５章で検討した労働の場を主題とする記述，および，第６章で取りあげた生活の場，具体的には文化，および家族に関わる記述を自己の物語りとして行った．彼らの物語りは，彼ら自身の経験を直接的、あるいは，間接的に記述したものであり，労働と生活の分割不可能性にもとづき，他者とともにある自己の記述を特徴としていた．

それらの歴史記述を労働者による尊厳の獲得との関連で考察した第７章で述べたように，ヒストリー・ワークショップが，まずは労働者の労働と生活を分割することなく，自己の生の形式を記述することによって，ありのままの自己の意義についての認識を促すものであった．労働者学生たちは，自己のありのままを他者に理解可能なかたちで記述し得ることそのものによって，尊厳を獲得したと考える．

さらに，その自己の記述によって，歴史をめぐる知の再構成を成し得るものであることの認識がまた，彼らに尊厳をもたらしもした．記述可能であることそのものに加え，記述された労働者の経験がまた，歴史の知を刷新するものであったことによる尊厳の獲得があったように思われる．

総じて，ヒストリー・ワークショップにおける歴史記述を通じた尊厳の獲得は，開かないことの決定も含めた自己の他者への「開放」によってなされたものであった．他者との関係のなかで奪われた尊厳は他者との関係のなかで回復されるものであった．学習者の経

験を中心とし，彼らの自己を記述するヒストリー・ワークショップの活動は，自己のみに拘泥するのではなく，他者を排除せず，他者とともにあること，さらには，自己によって捉えられる他者という意味での限界はありながらも，他者の経験をも記述することによって，他者の尊厳を保障するものでもあったと考える．実際に，男性労働者による歴史記述であっても，ともに歴史に不可視にされてきた存在として，他者としての女性の存在，および，彼女らの経験と彼らのそれとの差異が確かに書き込まれていた．

「大きな物語」にもとづいて，労働者の解放を謳う労働者教育は，ともすれば，他者とともにある「小さな物語」を捨象し，集団内部の同一性を求めるあまりに，他者性の顕現をおさえてしまう．ヒストリー・ワークショップの活動は，自己の経験を強調しながらも，他者とともにあること，他者と自己の差異を承認し，それらとの開かれた対話のなかで展開された．この対話は，先に述べたラファエル・サミュエルの受動性に依るところが大きい．サミュエルにとっての他者である労働者階級の人々，彼らの労働と生活に対する受動的な態度によって，ヒストリー・ワークショップは，教育者と学習者の関係のみならず，学習者間の関係，男女間の関係，さらには過去と現在の関係のなかで，他者に自己を開く労働者教育になったと考えられる．

確かに，ラスキン会議の開催は，ヒストリー・ワークショップにおける女性の経験，および，女性の歴史に対する軽視に端を発した．しかしながら，その軽視を認識するためには，同ワークショップの理念，すなわち，労働者が他者とともにある自己のありのままを受容し，他者の尊厳とともに自己の尊厳を獲得していくための，他者への自己の開放を理解することが必要であったと思われる．その理念と現実の違いを埋める努力が，ラスキン会議の開催とその後のヒストリー・ワークショップとフェミニズムとの対話，および，ラスキン会議後に発行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』における他者としての女性の記述を可能にしたと考える．

ヒストリー・ワークショップとラスキン会議，およびフェミニズムとの対話のなかに，ジェンダー視点を導入した労働者教育論の展開の手がかりが見出される．もちろん，ジェンダー視点，およびフェミニズムの価値を導入した労働者教育の展開は，層としての労働者を捉える階級の視点，あるいは，層としての女性を捉える視点を軽視して成立するものではない．労働者，および女性の内にある差異にのみ焦点を当てる労働者教育論，および，今日的なフェミニスト教育学の展開は，ともすれば，多様性の強調から，層としての問題を等閑視しがちである．また，一方で，層としての女性労働者の問題を強調する労働者教

育は，性にもとづく新たな「階級」意識の涵養を目指す可能性もある．性と階級，および，同一性と多様性を対象化する労働者教育には，自律と強制に加えて，複数のアポリアがある．

ジェンダー視点を取り入れた労働者教育の展開は，自己の他者への開放を基盤とすることで可能になるように思われる．その学習の具体的なありようを明らかにしていくことを今後の課題として，ヒストリー・ワークショップ後のラスキン・カレッジにおける労働者学生たちの学習を含めた英国労働者教育の展開に取り組んでいきたい．

(他者とともにある自己の記述としての)**謝辞**

自己の生の形式を記述することを通じて，労働者学生たちは尊厳を獲得した．彼らの歴史記述のなかには，確かに自己と他者が書き込まれていた．彼らの歴史記述を記述した本論文においても，私自身の自己が間接的にではあれ，書き込まれている．とすれば，このように，取り立てて私の自己を記述する必要もないはずであるが，本論文における自己と，対象とした1970年代の労働者学生たちの間には，労働者学生たちが記述した対象と彼らの自己との間にある距離以上の隔たりがある．さらに，自己の記述が間接的である場合には，本論文でも略歴のような情報を手がかりとしたように，解釈を要する．本論文に書き込んだ私の他者とともにある自己の記述をより直接的にして，謝辞を述べたい．

学部入学から10年に渡り，ご指導を仰いだ朴木佳緒留先生に，誰よりも先に，謝辞を述べたい．大学に入学してまもなく受講した先生の講義がきっかけで，ジェンダー研究に関心をもち，それから，気づけば10年もお世話になった．経験のない男子学生が，ジェンダー視点，ジェンダー問題を理解することは難しく，私自身のなかに性差別に抵触する価値が一切ないとは到底断言し得ない．であるからこそ，ジェンダー視点を受け入れる男性の学習のありように迫りたかった．この10年間の思索はすべて，そのモチーフによっている．

拙い文章で先生を困惑させ続けてきたことについて，まずは陳謝したい．読んでいただいた拙稿に書き込んである「意味不明」の文字と，歴史を捉えるうえでは冷静さが必要であり，過去を現在の視点から裁断すべきではないとの戒めがなければ，さらには，思いばかりが先行して，言葉になりきれていない言葉を先生に「日本語」へと「翻訳」していただくことができなければ，私の自己は他者に開かれることなく，「意味不明」なままであり続けたに違いない．本論文は，先生との対話の産物である．心よりの感謝を表したい．

卒業論文から，修士論文，本論文に渡って，朴木先生と同様に長い間，ご指導を頂いた松岡広路先生にも感謝を述べたい．先生には，学問の厳しさ，矛盾と葛藤のなかにあっても，飽くことなく真理を追究していくことの社会的意義とロマンを教えていただいた．先生の人と関わるセンスからも，多くのことを学んだ．

修士論文から引き続き，本論文の審査を賜った末本誠先生にも，感謝を述べたい．とりわけ，本論文の文献調査に際しては，いつも，かならず，先生の労働者教育に関わる研究が先達としてあることに気づかされた．「大きな物語」を超えるような，「小さな物語」の

大きな価値を先生から学んだ.

同じく，本論文の審査を頂いた宗像惠先生，金野美奈子先生にも謝辞を述べたい．宗像先生からは，フェミニズム，ジェンダー視点に男性もまた，自己を開放し得ること，人々が営む生活が多様であることを教えていただいた．金野先生には，抽象によらず，具体のなかから，現実を理解，解釈，論述していくことの必要を教えていただいた.

より「私的」に，進学を認め，最後の最後まで応援してくれた両親には，言葉にならない感謝を捧げたい．この 10 年，幾重にも経験した自己の変化は，二人との物理的な距離に加えて，精神的な距離を生みもした．それでもなお，受け入れ続けてくれた両親には，感謝以上の言葉で応えたいが，うまく見つからない．ありがとう.

また，神戸の「家族」である平井文昭氏と平井文氏には，その支援に感謝したい．お二人には，生きること，生活すること，家族のありようが極めて多様であること，血がつながらない家族があることを教えていただいた．お二人が想像している以上に，本論文はお二人の助けに依っている．今後ともよろしくお願いします.

Finally, I should thank Philip Gross. I think that it would have been impossible for me to understand what being with another means. Reaching the conclusion of this paper would not have been possible without having met you. My strange English abstract and my English itself were made beautiful thanks to you. You have been a stranger for me since the beginning of our time in matters of language, culture, personal values and past experiences. I have to admit that you are good at dealing with the difficulties of both something linguistic and something non-linguistic. Thank you and I hope my history with you as my significant other will go on.

自己に関わる記述は，常に，記述し得ない自己を生みだしもする．ここでお名前を挙げなかった方々，英国調査時に訪れたアーカイブ，図書館の方々，ともに励んだ院生室の皆さんにも，謝辞を述べたい．私とともにある全ての他者に.

冨永貴公

引用および参照文献・資料

安達一紀『人が歴史とかかわる力—歴史教育を再考する-』教育史料出版会，2000.

アガンベン，ジョルジョ（高桑和巳訳）『人権の彼方に一政治哲学ノートー』以文社，2000(=Aganben, Giorgio, *Mezzi Senza Fine*, Bollati Boringhieri editore, 1996).

Alexander, Sally, *ST. GILE'S FAIR, 1830-1914, POPULAR CULTURE and the INDUSTRIAL REVOLUTION in 19th century Oxford* (History Workshop Pamphlets Number Two), 1970.

——— 'Adult Learning Ruskin, 1968-70 The University of East London, 1992-', *Becoming a Women*, New York University Press, 1995.

Alexander, Sally, and Anna Davin, 'Feminist History', *History Workshop Journal*, Vol. 1, 1976.

安藤悦子「イギリスにおける労働者教育運動の成立-職工学校運動とその思想的背景-」『歴史学研究』272 号，1963 年 1 月.

姉崎洋一「情報ネットワークとしての生活史学習-青年教育に即して」『月刊社会教育』33 (6)，1989. 9.

——— 「イギリス成人教育の新しい可能性（3）-ノーザンカレッジの場合-」『児童教育学科論集（愛知県立大学文学部児童教育学科)』，No. 26，1993. 3.

——— 「社会的排除と高等教育継続教育の再編構造-英国ノーザン・カレッジの地域再生実践を軸に-」日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育　日本の社会教育第 50 集』東洋館出版，2006.

Andrew, Geoff, Hilda Kean and Jane Thompson(eds), *Ruskin College, Contesting Knowledge, Dissenting Politics*, Lawrence & Wishart, 1999.

アレント，ハンナ(志水速雄訳)『人間の条件』ちくま学芸文庫，1994(=Arendt, Hannah, *The Human Condition*, the University of Chicago Press, 1958).

——— 『過去と未来の間—政治思想への 8 試論』みすず書房，1994(=Arendt, Hannah, *Between Past and Future, Eight Exercises in Political Thought*, New and Enlarged Edition, Viking Press, 1968).

浅倉むつ子『労働法とジェンダー』勁草書房, 2004.

Bachelli, Ann, Hazel Twort and Jan Williams, 'no title', *a woman's work is never done*, Moss Side Press, 1970.

Blackburn, Robin, 'Raphael Samuel: The Politics of Thick Description', *New Left Review*, No. 221, Jan/Feb, 1997.

Boles, Janet, K., Diane Long Hoeveler(ed), *Historical Dictionary of Feminism*, Scarecrow Press, 1996.

Boston, Sarah, *Women Workers and the Trade Unions*, Lawrence&Wishart, 1987.

Bruley, Sue, *Women in Britain since 1900*, Palgrave, 1999.

Caine, Barbara, *English Feminism 1780-1980*, Oxford University Press, 1997.

カー, E.H. (清水幾太郎訳)『歴史とは何か』岩波新書, 1962 (=Carr, E.H., *What is History?* Macmillan, 1961).

Colville, Billy and Dave Marson, *Fall in and Follow Me, A play about the Children's Strike of 1911*(History Workshop Pamphlets Number Thirteen), 1973.

コーネル, ドゥルシラ(石岡良治他訳)『自由のハートで』状況出版, 2001 (=Cornell, Drucilla, *At the Heart of Freedom*, Princeton University Press, 1998).

Craik, W.W., *Central Labour College, 1909-29, A Chapter in the History of Adult Working-class Education*, Lawrence & Wishart, 1964.

チュン, リン (渡辺雅男訳)『イギリスのニュー・レフト　カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社, 1999 (=Chun, Lin, *The British New Left*, Edinburgh University Press, 1993).

Devine, F, *Affluent Workers Revisited*, Edinburgh University Press, 1992.

チュンガラ, ドミティーリャ・バリオス・デ, モエマ・ヴィーゼル (唐沢秀子訳)『私にも話させて　第2版』現代企画室, 1996.

Douglass, David, *Pit Life in CO. DURHAM: RANK and FILE MOVEMENTS and WORKERS' CONTROL* (History Workshop Pamphlets Number Six), 1972.

Douglass, Dave, *Pit Talk in County Durham : A Glossary of Miners' Talk together with Memories of Wardley Colliery, Pit Songs and Piliking*(History Workshop Pamphlets Number Ten), 1973.

Drews, Walter and Roger Fieldhouse, 'Residential Colleges and Non-residential

Settlements and Centres', Filedhouse, Roger and Associatates, *A History of Modern British Adult Education*, NIACE, 1996.

Editorial Collectives, 'Editorials', *History Workshop Journal*, Vol.1, 1976.

江原由美子『女性解放という思想』勁草書房, 1985.

Feminist Archive, Bradford, *A Chronology of the Women's Liberation Movement in Britain: Organisation Conferences, Journals and Events, with a focus on Leeds and Bradford, 1969-1979*. 1996.

藤岡貞彦「『合理化』進行下の労働組合教育活動の分析の視角」『東京大学教育学部紀要』第11巻, 1970.

――― 「自己啓発と自己教育-生涯教育の方法的基礎をめぐって-」『月刊社会教育』1972年2月号.

――― 「自己啓発論批判覚書」室俊司編『生涯教育の研究-成人の学習を中心に- 日本の社会教育第16集』東洋館出版社, 1972.

――― 「自己啓発と生涯学習」宮原誠一編『生涯学習』東洋経済新報社, 1974.

フーコー, ミッシェル (渡辺守章訳)『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社, 1986 (=Foucault, Michel, *La Volonté de Savoir, Volume 1 de Histoire de la Sexualité*, Gallimard, 1976).

布施美穂「現代イギリス成人教育の変質-ボケーショナリズムの問題点を中心として-」『日本社会教育学会紀要』No.34, 1998.

Gilding, Bob, *The Journeymen Coopers of East London, Workers' Control in an Old London Trade*(History Workshop Pamphlet Number Four), 1971.

Goldthorpe, J.H., F.D.Lockwood, and Platt.J.Bechhofer, *The Affluent Worker: Industrial Attitudes and Behaiviour*, Cambridge University Press, 1968,

――― , *The Affluent Worker: Political Attitudes and Behaiviour*, 1968.

――― , *The Affluent Worker in the Class Structure*, 1969.

Gorton, Antonia, 'The Oxford Women's Liberation Conference', *Intercontinental Press*, vol.8 No.11, March 23, 1970.

Grieco, M, *Keeping it in the Family*, Tavistock Publication, 1987.

長谷川貴彦「修正主義と構築主義の間で-イギリス社会史の現在-」『社会経済史学』70巻2号, 2004.

Hall, Stuart, 'In Defense of Theory', Raphael Samuel(ed), *People's History and Socialist Theory*, Routledge&Kegan Paul, 1981.

———, 'Raphael Samuel: 1934-96', *New Left Review*, No.221, Jan/Feb, 1997.

ハイデン, ドロレス (野口美智子・藤原典子他訳)『家事大革命　アメリカの住宅, 近隣, 都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房, 1985 (=Hayden, Dolores, *The Grand Domestic Revolution*, Cambridge: MIT Press, 1981).

ヘイ, ローナ「働く人々のための大學-ラスキン・カレツジのこと-」『ニューエポック』1巻3号, 1949.

ホガート, リチャード(香内三郎訳)『読み書き能力の効用晶文社, 1974(=Hoggart, Richard, *The Uses of Literacy*, 1957).

———, 'Changes in Working-Class Life', *Speaking to Each Other*, Vol.1, 1970.

フックス, ベル (里見実監訳)『とびこえよ, その囲いを　自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社, 2006 (=hooks, bell, *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*, Routledge, 1994)

細見和之『言葉と記憶』岩波書店, 2005.

Howkins, Alun, *Whitsun in 19th Century Oxfordshire* (History Workshop Pamphlet Number Eight), 1973.

市橋秀夫「民衆史の共同作業的発見-イギリスのヒストリ・ワークショップの運動から学ぶ-」『新日本文学』41巻7・8号, 1986.

飯田鼎「イギリス労働運動史研究の最近の動向-労働史研究会 (The Society for the Study of Labour History) の活動について-」『三田学会雑誌』56巻8号, 1963.

———「イギリス労働運動史研究の動向-ホッブズボウム『イギリス賃労働史研究』によせる-」『三田学会雑誌』62巻3号, 1969.

今井けい『イギリス女性運動史-フェミニズムと女性労働運動の結合-』日本経済評論社, 1992.

入江直子「フェミニズム教育学」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために　欧米の成人教育理論　生涯学習の理論と方法』世界思想社, 2004.

磯田一雄「戦後教育における『生活化』の問題-その教育史的背景に関する覚書-」『教育研究』第14号, 1969.

石川俊雄「イギリス労働者教育の一断面-ラスキン・カレッジの地位と役割-」『日本労働協

会雑誌』5巻12号，1963.

Jenkins, Keith, *Refiguring History, New Thoughts on an Old Discipline*, Routledge, 2003.

Jones, Ken, 'Against Conformity: Raphael Samuel', *Changing English*, Vol. 5, No. 1, 1998.

香川正弘「イギリスにおける女性高等教育運動の先駆的動向」『佐賀大学教育学部 研究論文集』第31集，第1号（Ⅰ），1983.

金井淑子『ポストモダン・フェミニズム-差異と女性-』，勁草書房，1989.

鹿島徹『可能性としての歴史　越境する物語り理論』岩波書店，2006.

近藤和彦「民衆運動・生活・意識-イギリスの社会運動史研究から-」『思想』630号，1976.

加藤克子「イギリス労働者教育運動史論」『エコノミア』第42・43号，1971.

川北稔「社会史の方法-イギリス 社会史を中心として-」樺山紘一編『歴史学』日本評論社，1977.

――― 「経済史と社会史のはざま-イギリスにおける『社会史』の成立-」『社会経済史学』59巻1号，1993.

Kean, Hilda, 'Myth of Ruskin College', *Studies in Education of Adults*, Vol. 28, No. 2, October 1996.

――― , 'Public history and Raphael Samuel: a forgotten radical pedagogy?', *Public History* Review, Vol. 11, 2004.

北川隆吉「『プレブス・リーグ』の成立と展開-イギリスにおける労働者教育の一段面-」『社会労働研究』21巻1・2号，1975年1月.

Kitching, Gavin, *Rethinking Socialism, A Theory for a Better Practice*, Methuen, 1983.

Kitteringham, Jennie, *Country Girls in 19th Century England* (History Workshop Pamphlets Number Eleven), 1973.

古賀秀男「イギリスにおけるヒストリ・ワークショップの活動」『歴史学研究』461巻，1978.

――― 「イギリスにおける民衆史の堀り起こし-ヒストリ・ワークショップとオーラル・ヒストリー-」『歴史評論』**375**号，**1981**年**7**月.

倉内史郎「『機械工講習所』運動の結末-イギリスの初期の成人教育運動における階級の問題について-」日本社会教育学会編『社会教育と階層　日本の社会教育第2集』国土社，1956.

――― 「労働（職業）と社会教育」碓井雅久編『教育学叢書第16巻　社会教育』第

一法規，1970.

――― 「企業内教育」宮地誠哉・倉内史郎編『講座　現代技術と教育４　職業教育』開隆堂，1975.

草光俊雄「歴史工房での徒弟時代　親方ラファエル・サミュエル」義江彰夫・山内昌之・本村凌二編『歴史の対位法』東京大学出版会，1998.

リディングトン，リン（白石瑞子・清水洋子訳）『魔女とミサイル イギリス女性平和運動史』，新評社，1996(=Liddington, Jill, *The Long Road to Greeham Common, Feminism and Anti-Militrism in Britain Since 1820*, Syracuse University Press, 1991).

Light, Alison, 'A Biographical Note on the Text', Samuel, Raphael, *Island Stories: Unravelling Britain, Theatre of Memory, Volume II*, Verso, 1998.

小田中直樹『歴史学のアポリア　ヨーロッパ近代社会史再読』山川出版社，2002.

LIoyd, Leonora, 'Equal Pay and the Equal Pay Bill', *Socialist Women*, Vol. 2, No. 1, Feb/Mar 1970.

真野典雄「イギリス成人教育と W・E・A（労働者教育協会）の変容-W・E・T・U・C（労働組合教育委員会）成立への展望-」日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習　日本の社会教育第６集』国土社，1961.

Marson, Dave, *Children's Strikes in 1911* (History Workshop Pamphlets Number Nine), 1973.

Martin, Paul, 'Look, see, hear: A remembrance, with approaches to contemporary public history at Ruskin', Andrews, Geoff, Hilda Kean and Jane Thompson (eds), *Ruskin College, Contesting knowledge, dissenting politics*, Lawrence&Wishart, 1999.

松村高夫「イギリスにおける社会史研究」角山栄・速水融編『講座　西洋経済史Ⅳ　経済史学の発達』同文館，1979.

――― 「イギリスにおける社会史研究とマルクス主義史学」『歴史学研究』532 号，1984.

――― 「イギリス労働史研究の社会史的傾向-ウォーリック大学社会史研究所『学術計画』紹介-」『労働史研究』創刊号，1984.

――― 「Central Labour College1909-1929 年（上）-イギリスにおける労働者コレッジ運動と労働組合-」『三田学会雑誌』82 巻 1 号，1989.

――― 「Central Labour College1909-1929 年（下）-イギリスにおける労働者コレッ

ジ運動と労働組合-」『三田学会雑誌』82巻3号，1989.

――― 「労働者階級意識の形成」『シリーズ 世界史への問い4 社会的統合』岩波書店，1989.

――― 「『階級』概念は時代遅れか？-イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討-」『法学研究』77巻11号，2004.

――― 「歴史認識論と『歴史認識問題』」『三田学会雑誌』98巻4号，2006.

McKenna, Frank, *A Glossary of Railwaymen's Talk, A Compendium of Slang Terms Old and New used by Railwaymen*(History Workshop Pamphlet Number One), 1970.

見市雅俊「現代イギリスの明暗」村岡健次・川北稔編『イギリス近代史［改訂版］-宗教改革から現代まで-』ミネルヴァ書房，2003.

Millar, J. P.M., *The Labour College Movement*, N.C.L.C. Publishing Society Ltd, 1979.

宮原誠一『社会教育論』国土社，1990.

宮坂広作「Albert Mansbridge と初期W.E.A」『社会教育学・図書館学研究』第8号，1983.

――― 「ラスキン・カレッジにおける『学生反乱』の教育的意義-成人教育における『学習の自由』の問題-」『東京大学教育学部紀要』第37巻，1992.

――― 「イギリスにおける労働者教育運動の二つの潮流-W.E.A と独立労働者階級教育運動-」『英国成人教育史の研究Ⅱ』(宮坂広作著作集6)，明石書店，1996.

Morgan, Muriel, 'Problems-and Dangers for Married Students', *The New Epoch (The Annual Magazine of Ruskin College)*, 1966.

毛利猛「教師のための物語学-教育へのナラティブ・アプローチ-」矢野智司・鳶野克己編『「物語ること」の教育学』世織書房，2003.

Moyo, Edgar, *Big Mother and Little Mother in Matebeland* (History Workshop Pamphlet Number Twelve) , 1973.

Nash, Al, *Ruskin College: A Challenge to Adult and Labor Education*, Cornell University, 1978.

永井健夫「生涯学習における専門知と日常知をめぐる問題」鈴木眞理／梨本雄太郎編『シリーズ　生涯学習社会における社会教育7　生涯学習の原理的諸問題』学文社，2003.

――― 「省察的実践論の可能性」日本社会教育学会編『講座　現代社会教育の理論 III 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社，2004.

那須野隆一「生活史学習と自己形成-勤労青年の学習活動における内容編成の原点をさぐる-」『月刊社会教育』29 (9), 1979.9.

――― 「生活史学習と生涯学習-『私史覚書』青年教育の戦後50年後半史-」『月刊社会教育』39 (9), 1995.9.

野家啓一『歴史を哲学する』岩波書店, 2007.

落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房, 1989.

小川太郎「戦後教育における『生活と教育の結合』の問題」『教育学研究』Vol.13, No.1, 1964.

岡真理『記憶／物語』岩波書店, 2000.

大川正彦『正義』岩波書店, 1999.

Pollins, Harold, 'Recent Development at Ruskin College', Houlton, Bob(ed), *Residential Adult Education-Values, Policies and Problems, Papers provoked by the Fircroft College Dispute*, Society of Industrial Tutors, 1978.

――― , The History of Ruskin College, Ruskin College Library, 1984.

Prescott, John, 'Genuine love for others', The Guardian, 11th December, 1996.

Price, Richard, ' The Making of Working-Class History', *Victorian Studies*, XX, No.1, 1976.

Pugh, Martin, *Women and the Women's Movement in Britain 1914-1999*, Macmillan Press Ltd, 2000.

Reaney, Bernard, *The Class Struggle in 19th Century* Oxfordshire (History Workshop Pamphlet Number Three) , 1970.

ローゼン, アンドリュー (川北稔訳)『現代イギリス社会史 1950-2000』岩波書店, 2005 (=Rosen, Andrew, *The Transformation of British Life, 1950-2000 A Social History*, Manchester University Press, 2003)

Rosen, Harold, *Language and Class: A Critical Look at the theories of Basil Bernstein*, Falling Wall Press, 1972.

Rowbotham, Shiela, 'The Beginnings of Women's Liberation in Britain', Wander(ed), *The Body Politic*, Stage1, 1972.

――― , 'Some Memories of Raphael', *New Left Review*, No.221, Jan/Feb, 1997.

Ruskin College, *Ruskin College Oxford, Prospectus&Curriculum, 1964-1965.*

――― , *Ruskin College Oxford, Prospectus&Curriculum, 1967-1968.*

———, *The Story of Ruskin College*, Oxford University Press, Revised Edition, 1968.

———, *Ruskin College Oxford Prospectus 1969-1970.*

———, *Ruskin College Oxford Prospectus 1970-1971.*

Russel, Rex.C., 'Village Life and Labour', *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, No.32, 1976.

Russell, Dave, 'Middle Eight, Raphael Samuel, History Workshop and the value of democratic scholarship', *Popular Music*, Vol.16, Issue 2, 1997.

桜井厚「オーラル・ヒストリーの対話性と社会性」『歴史学研究』811 号, 2006.

Samuel, Raphael (ed), *Village Life and Labour*, Routledge&Kegan Paul, 1975.

——— (ed), *Miners, Quarrymen and Saltworkers*, Routledge&Kegan Paul, 1977.

——— (ed), *East End Underworld:Chapters in the life of Arthur Harding*, Routledge & Kegan Paul, 1981.

———, 'History Workshop, 1966-1980', Samuel, Raphael(ed), *People's History and Socialist Theory*, Routledge&Kegan Paul, 1981.

———, 'correspondence', *History Workshop Journal*, Vol.11, 1981.

———, 'On the Methods of History Workshop: A Reply', *History Workshop Journal*, Vol.9, Spring, 1983.

———, 'Why students at Ruskin are rather special', The Guardian, 23rd, October 1986.

———, 'Report, Stephen Yeo-or The Ruskin Election', *History Workshop Journal*, Vol.28, 1989.

———, 'The Return of History', *London Review of Books*, 14 June, 1990.

——— (ed), *History Workshop A Collectanea 1967-1991*, History Workshop25, 1991.

———, *Theatres of Memory, Volume 1: Past and Present in Contemporary Culture*, Verso, 1994.

Schwarz, Bill, 'Keeper of our shared memory', The Guardian, 10th December, 1996.

Sealey, R, D, 'The Social Dynamics of Residential Adult Education: A Subjective View', Houlton, Bob(ed), *Residential Adult Education Values, Policies and Problems, Papers provoked by the Fircroft College Dispute*, Society of

Industrial Tutors, 1978.

シーガル，リン編（織田元子訳）『未来は女のものか』勁草書房，1989(=Segal, Lynne(ed) *Is the Future Female ? Troubled Thoughts on Contemporory Feminism,* Virago Press, 1987).

Selbourne, David, 'On the Methods of the History Workshop', *History Workshop Journal*, Vol. 9, 1980.

Shipley, Stan, *Club Life and Socialism in Mid-Victorian London*(History Workshop Pamphlets Number Five), 1971.

Simon, Brian, 'The Struggle for Hegemony, 1920-1926', Simon, Brian(ed) *The Search for Enlightenment, The Working Class and Adult Education in the Twentieth Century*, National Institute of Adult Continuing Education, 1990.

Smith, Harold, L, 'The Women's Movement, Politics and Citizenship 1960s-2000', Zweininger-Bargielowska, Ina(ed) *Women in Twentieth Century Britain*, Pearson Education Ltd, 2000.

Smith, Joseph, H, *From Plough to College*, Richard Kay, 1993.

スティーブンス，マイケル・D（渡邊洋子訳）『イギリス成人教育の展開』明石書店，2000(=Stephens, Michael. D, Adult Education, Cassel l Educational Limited, 1990)

末本誠『生涯学習論-日本の「学習社会」-』エイデル研究所，1996.

――― 「生涯学習における個人と集団をめぐる問題」鈴木眞理／梨本雄太郎編『シリーズ　生涯学習社会における社会教育７　生涯学習の原理的諸問題』学文社，2003.

杉田敦『権力』岩波書店，2000.

――― 『境界の政治学』岩波書店，2005.

鈴木敏正『平和への地域づくり教育-アルスター・ピープルズ・カレッジの挑戦-』筑波書房，1995.

竹岡敬温『『アナール』学派と社会史-「新しい歴史」へ向かって-』ミネルヴァ書房，1990.

高橋哲哉「記憶されえぬもの　語りえぬもの」『記憶のエチカ　戦争・哲学・アウシュビッツ』岩波書店，1995.

――― 『歴史／修正主義』岩波書店，2001.

――― 「トラウマと歴史　アブラハム・ボンバの沈黙について」『証言のポリティクス』未来社，2004.

田村佳子「英国労働者教育に関する一考察-ラスキンカレッジ（労働者のためのレジデンシャルカレッジ）の歴史と課題-」『広島平和科学』第15巻，1992.

田中雅雄『社会変容と労働-『連合』の成立と大衆社会の成熟-』木鐸社，1997.

Taylor, John, *From Self-Help to Glamour* (History Workshop Pamphlet Number Seven), 1972.

トンプソン，J（上杉孝實・大庭宣尊・奥田実・木原義勝・北岡宏章・森繁男訳）『解放を学ぶ女たち』勁草書房，1987（=Thompson, Jane, *Learning Liberation : Women's Response to Men's Education*, Croom Helm, 1983).

Thompson, Jane, 'Can Ruskin Survive ?', Andrew, Geoff, Kean Hilda and Jane Thompson (eds) *Ruskin College, Contesting Knowledge, Dissenting Politics*, Lawrence & Wishart, 1999.

――― , *Women, Class and Education*, Routledge, 2000.

トンプソン，ポール（酒井順子訳）『記憶から歴史へ　オーラル・ヒストリーの世界』青木書店，2002(=Thompson, Paul, *The Voices of the Past*, 3rd edition, Oxford University Press, 2000)

鳶野克己「生の冒険としての語り-物語のもう一つの扉-」矢野智司・鳶野克己編『「物語ること」の教育学』世織書房，2003.

冨永貴公「三池主婦会による家庭民主化の展開-生活の多元性に基づく労働の問い直し-」『神戸大学発達科学部研究紀要』第13巻第1号，2005.

Trade Union Congress, *Report for 1970-71 of the TUC Women's Advisory Committee*, 1970.

Wander, Michelene(ed), *The Body Politic*, Stage1, 1972.

――― , *Once a Feminist*, VIRAGO PRESS. 1990.

Weiler, Kathleen（沓澤清美訳）「パウロ・フレイレと『差異』のフェミニスト教育学」『日米女性ジャーナル』No.27, 2000（=Weiler, Kathleen, 'Freire and a Feminist Pedagogy of Difference', *Harvard Education Review*, Vol.61, no.4, November, 1991）.

Wilson, Elizabeth, *Only Halfway to Paradise, Women in Postwar Britain: 1945-1968*, Tavistock Publication, 1980.

ウォルトン，ジョーン「労働者に開かれた象牙の塔—オックスフォードのラスキン・カレッヂ—」『世界の労働』5巻1号，1955.

Women's Caucus of International Marxist Group, *A Program For Women's Liberation Prepared For The Ruskin Weekend FEB28-MAR1 1970*, 1970.

Women's Liberation Co-ordinating Committee, *An Introduction to the Women's Liberation Workshop*, 1971/72.

矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界　「物語ること」の教育学』世織書房，2003.

山田正行「自己啓発と自己教育，再論-企業内教育の現在-」『月刊社会教育』No. 416，1991年12月.

安川悦子「労働運動と階級意識-イギリス労働史研究の旋回-」『思想』520号，1967.

矢口悦子「イギリス労働者教育協会（WEA）における女性の学習」『東洋大学文学部紀要教育学科篇』第29巻，2003.

———『イギリス成人教育の思想と制度-背景としてのリベラリズムと責任団体-』新曜社，1998.

Young, James, D., 'The Problems and Progress of the Social History of the British Working Classes 1880-1914', *Labor History*, Vol. 18, No. 2, 1977.

ツワイク，F（大内経雄，藤本喜八，安藤 瑞夫訳）『労働者—生活と心理—』ダイヤモンド社，1957（=Zweig, F, The British Worker, Penguin Books, 1952）

Zweig, F, *The Worker in an Affluent Society*, Heineman Educational Books, 1961.